

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第506集

の だ いち  
**野田 I 遺跡発掘調査報告書**

地域道路整備事業才の羽々地区関連遺跡発掘調査

2007

県南広域振興局北上総合支局土木部

(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター



# 野田 I 遺跡発掘調査報告書

地域道路整備事業才の羽々地区関連遺跡発掘調査



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、地域道路整備事業才の羽々地区に関連して平成18年度に発掘調査された野田Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では平安時代の集落跡であることが明らかとなり、北上盆地中流域の当該期の実態を解明する上で貴重な資料になることと思われまます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局北上総合支局土木部、北上市教育委員会、北上市埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年11月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 武田 牧 雄



## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県北上市二子町才の羽々61番地1ほかに所在する野田Ⅰ遺跡において、平成18年度に実施した発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、地域道路整備事業才の羽々地区に伴う緊急事前調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、県南広域振興局北上総合支局土木部の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡登録台帳に記載される遺跡番号・遺跡略号は次のとおりである。  
ME56-2213・NDⅠ-06
- 4 発掘調査期間、発掘調査面積、野外調査担当者、室内整理期間、室内整理担当者は次のとおりである。  
発掘調査期間：平成18年10月16日～12月12日／発掘調査面積：955㎡  
野外調査担当者：北村忠昭・溜浩二郎・高橋聡子  
室内整理期間：平成18年11月16日～12月15日、室内整理担当者：北村忠昭
- 5 本書の執筆は、第Ⅰ章第Ⅰ項を県南広域振興局北上総合支局土木部が、それ以外を北村忠昭が担当し、編集は北村が行った。
- 6 遺構写真は北村・溜・高橋が、遺物写真は岩間和幸が撮影した。
- 7 本書で用いる方位は世界測地系による座標北を示す。レベル高は海拔である。
- 8 出土遺物の鑑定・分析・保存処理は次の機関に委託した（敬称略）。放射性炭素年代測定結果の報告は附編に収録している。  
鉄製品の保存処理：岩手県立博物館  
放射性炭素年代測定：株式会社 加速器分析研究所
- 9 野外調査、室内整理にあたり県南広域振興局北上総合支局土木部、北上市教育委員会、北上市埋蔵文化財センター、北上市役所、北上警察署、近隣住民の方々の御理解と御協力をいただいた。
- 10 発掘調査や整理・報告書の作成は以下の方々に御教示・御協力をいただいた。（順不同、敬称略）  
沼山源喜治、赤沼英男（岩手県立博物館）、稲野祐介・小田島知世・杉本良・大渡賢一・君島武史・太田代一彦・小原一成（北上市埋蔵文化財センター）
- 11 本報告書では、国土地理院発行「北上 1：50,000」、「北上 1：25,000」、「口内 1：25,000」地形図を使用した。
- 12 土層注記及び出土土器の色調の記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』2002年度版に準拠した。
- 13 本遺跡の出土遺物、記録類は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。
- 14 本報告書発行以前に平成18年度発掘調査報告書等で調査成果を公表したが、本報告書を正とする。



# 目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地・環境	2
1	地理的環境	2
(1)	遺跡の位置と立地	2
(2)	遺跡周辺の地形と地質	2
(3)	基本層序	5
2	歴史的環境	6
III	野外調査と室内整理	13
1	野外調査	13
(1)	発掘調査の方法	13
(2)	調査経過	15
2	室内整理	16
(1)	整理作業の方法	16
(2)	作業経過	18
IV	検出遺構と出土遺物	26
1	平安時代以前の遺構と遺物	26
(1)	土坑	26
(2)	遺構外出土遺物	28
2	平安時代の遺構と遺物	29
(1)	竪穴住居跡	29
(2)	土坑	42
(3)	溝跡	46
(4)	焼土遺構	47
(5)	不明遺構	49
(6)	遺構外出土遺物	50
3	平安時代以降の遺構と遺物	57
(1)	掘立柱建物跡	57
(2)	土坑	58
(3)	溝跡	61
(4)	柱穴状土坑	74
(5)	遺構外出土遺物	77
V	ま と め	93
1	遺物	93



(1) 分類	93
(2) 組成と特徴	93
(3) 年代	95
2 遺構	95
(1) 平安時代以前	95
(2) 平安時代	95
(3) 平安時代以降	99
3 総括	99
附編 野田 I 遺跡の自然科学分析	102
放射性炭素年代測定	102
報告書抄録	153

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	1	第27図 SX001	49
第2図 調査区と周辺の地形	3	第28図 遺構内出土遺物 (平安:土器1)	51
第3図 地形分類図	4	第29図 遺構内出土遺物 (平安:土器2)	52
第4図 基本層序	5	第30図 遺構内出土遺物 (平安:土器3)	53
第5図 周辺の遺跡 (1)	7	第31図 遺構内出土遺物 (平安:土器4)	54
第6図 周辺の遺跡 (2)	8	第32図 遺構内出土遺物 (平安:石器・鉄器)	55
第7図 グリッド配置図	14	第33図 遺構外出土遺物 (平安)	56
第8図 遺構配置図 (全体)	19	第34図 SB001	59・60
第9図 遺構配置図 (01区~02区)	20	第35図 SK008・SK009	61
第10図 遺構配置図 (0203区~A区)	21	第36図 SD002	62
第11図 遺構配置図 (A区~C区)	22	第37図 SD003	63
第12図 遺構配置図 (C区)	23	第38図 SD004	64
第13図 遺構配置図 (C区~C2D区)	24	第39図 SD005~SD007	67・68
第14図 遺構配置図 (D区)	25	第40図 SD008	69
第15図 SK001~SK003	27	第41図 SD009~SD013	72
第16図 遺構外出土遺物 (平安以前)	29	第42図 SD014	73
第17図 SI001	30	第43図 柱穴状土坑	75
第18図 SI002・SI003	33	第44図 遺構内出土遺物 (平安以降)	76
第19図 SI004	36	第45図 遺構外出土遺物 (平安以降)	77
第20図 SI005 (1)	39	第46図 土師器坏分類図	93
第21図 SI005 (2)	40	第47図 土師器甕分類図	93
第22図 SI005 (3)	41	第48図 集成図	96
第23図 SK004	43	第49図 10世紀代の土師器坏	97
第24図 SK005~SK007	44	第50図 平安時代の遺構配置	98
第25図 SD001	47	第51図 非内黒土師器坏法量分布図 (1)	99
第26図 SF001・SF002	48	第52図 非内黒土師器坏法量分布図 (2)	100



## 表 目 次

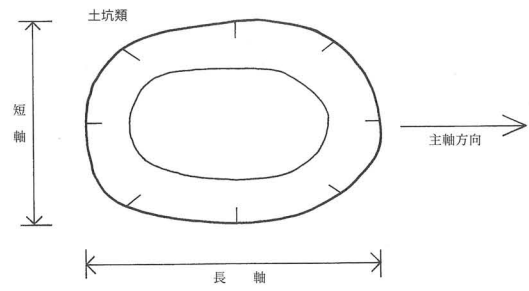
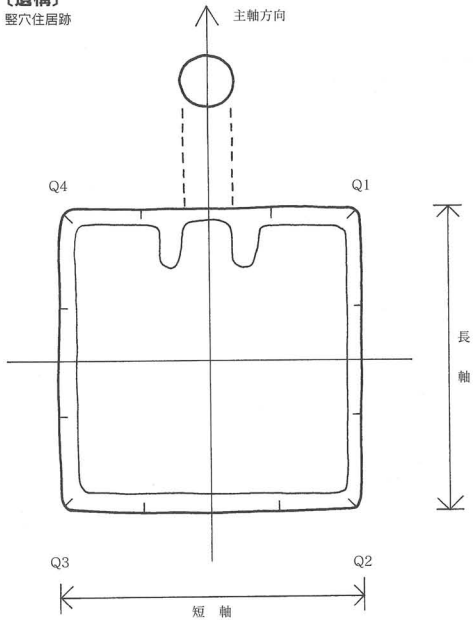
第1表	周辺の遺跡(1)~(4)	9~12	第6表	縄文土器観察表	90
第2表	遺構名対応表	15	第7表	陶磁器類観察表	90
第3表	層名対応表	17	第8表	石器・石製品観察表	91
第4表	柱穴状土坑一覧	79	第9表	鉄器観察表	91
第5表	土師器・須恵器観察表(1)~(5)	80~89	第10表	土製品・焼成粘土塊観察表	92

## 写真図版目次

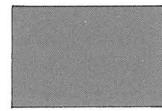
写真図版1	空撮(1)	112	写真図版22	SK008・SK009・SD002	133
写真図版2	空撮(2)	113	写真図版23	SD002~SD004(1)	134
写真図版3	現況	114	写真図版24	SD004(2)~SD006	135
写真図版4	層序	115	写真図版25	SD007~SD009	136
写真図版5	SK001~SK003	116	写真図版26	SD010~SD012	137
写真図版6	SI001(1)	117	写真図版27	SD013・SD014・柱穴状土坑(1)	138
写真図版7	SI001(2)	118	写真図版28	柱穴状土坑(2)	139
写真図版8	SI002	119	写真図版29	柱穴状土坑(3)	140
写真図版9	SI003	120	写真図版30	出土土器(1)	141
写真図版10	SI004(1)	121	写真図版31	出土土器(2)	142
写真図版11	SI004(2)	122	写真図版32	出土土器(3)	143
写真図版12	SI005(1)	123	写真図版33	出土土器(4)	144
写真図版13	SI005(2)	124	写真図版34	出土土器(5)	145
写真図版14	SI005(3)	125	写真図版35	出土土器(6)	146
写真図版15	SK004	126	写真図版36	出土土器(7)	147
写真図版16	SK005~SK007	127	写真図版37	出土土器(8)・土製品・焼成粘土塊	148
写真図版17	SD001・SX001	128	写真図版38	出土鉄製品(1)	149
写真図版18	SF001・SF002	129	写真図版39	出土鉄製品(2)	150
写真図版19	SB001(1)	130	写真図版40	出土陶磁器	151
写真図版20	SB001(2)	131	写真図版41	出土石器・石製品	152
写真図版21	SB001(3)	132			

〈凡例〉

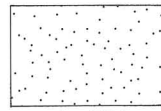
〔遺構〕  
竪穴住居跡



〔使用トーン〕



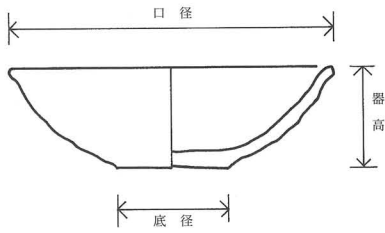
現地性焼土



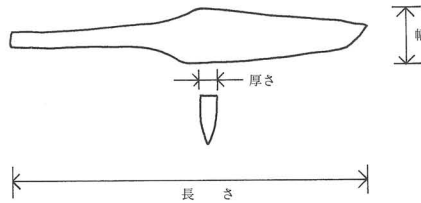
ブロック焼土

〔遺物〕

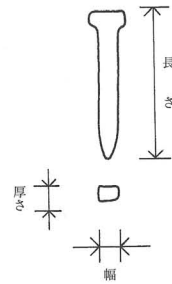
土器類



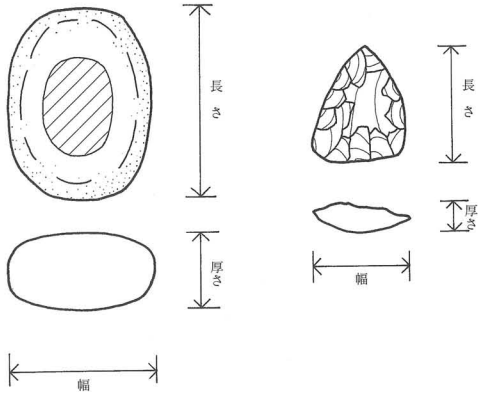
刀子類



釘



石器類



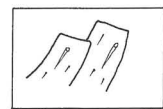
〔表現方法・使用トーン〕



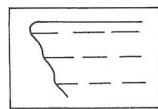
ミガキ



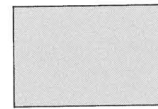
ヘラナデ



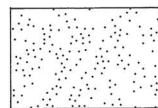
ヘラケズリ



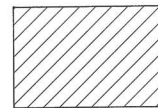
回転ナデ



黒色処理



スス状の付着物



使用面(石器類)

## I 調査に至る経過

野田 I 遺跡は、地域道路整備事業である主要地方道北上東和線才の羽々地区の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなった。

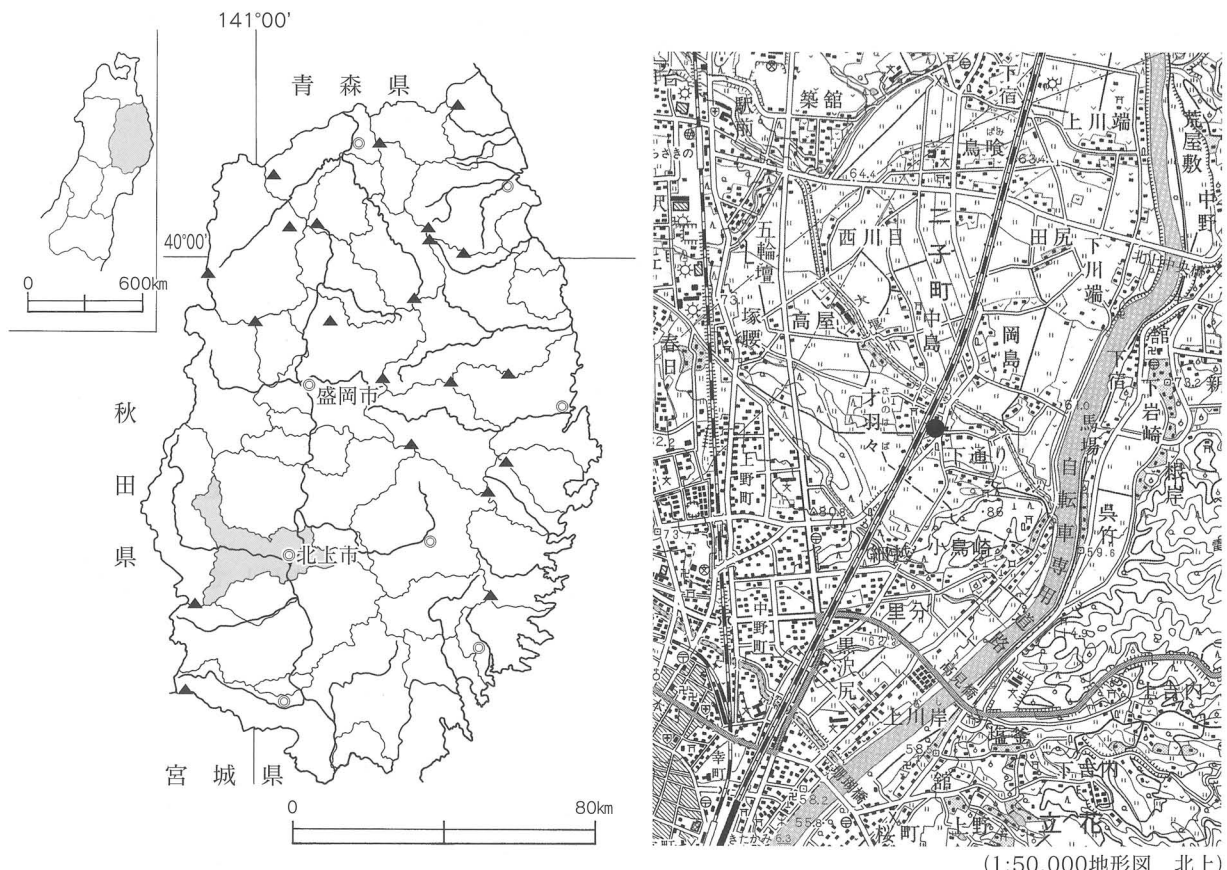
主要地方道北上東和線は北上市を起点に北上川を縦断し、花巻市（旧東和町）に至る幹線道路である。事業対象区間である「才の羽々地区」については人家連担部でありながら幅員狭小、急カーブとなっているほか、周辺には二子小学校など公共施設があるが歩道が未整備な状況であり安全で円滑な交通に支障をきたしていることから、これらを解消し、安全で円滑な交通を確保するため事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては、北上地方振興局土木部（現在の県南広域振興局北上総合支局土木部）から平成18年3月2日付北地土第299号「主要地方道北上東和線才の羽々地区道路改良工事における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年3月15日に試掘調査を実施し、工事に着手するには野田 I 遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年3月16日付教生第1769号「主要地方道北上東和線才の羽々地区道路改良工事における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年10月13日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約し、発掘調査を実施することとなった。

（県南広域振興局北上総合支局土木部）





## Ⅱ 遺跡の立地・環境

### 1 地理的環境

#### (1) 遺跡の位置と立地

野田Ⅰ遺跡の所在する北上市は、西の奥羽山脈と東の北上山地との間を南流する北上川が形成した北上盆地の中程に位置し、北は花巻市、南は胆沢郡金ヶ崎町、東は奥州市（江刺区）・花巻市、西は和賀郡西和賀町と接している。現在の北上市は平成3年4月に旧北上市、和賀町、江釣子村の3市町村が合併し、面積437.55㎡、人口83,000人余の盛岡市に次ぐ人口規模を有する都市として誕生したが、平成の大合併を迎えた現在は人口93,528人（平成19年1月末現在）の盛岡市、奥州市、一関市、花巻市に次ぐ都市となっている。北上市は地理的条件に恵まれ、古くから交通の要衝であった。近世以降、奥州街道の宿場町としての役割を果たすとともに、南北に流れる北上川船運の最大の商港として繁栄してきた。現在でも国道4号と国道107号が交差し、東北本線（明治23年開通）、北上線（大正13年開通）、東北新幹線（昭和57年開業）、東北縦貫自動車道（昭和52年開通）、東北横断道秋田線（平成9年開通）等の交通網が次々と整備され、太平洋側と日本海側、北と南を結ぶ物流の中継地点として重要な役割を担っている。

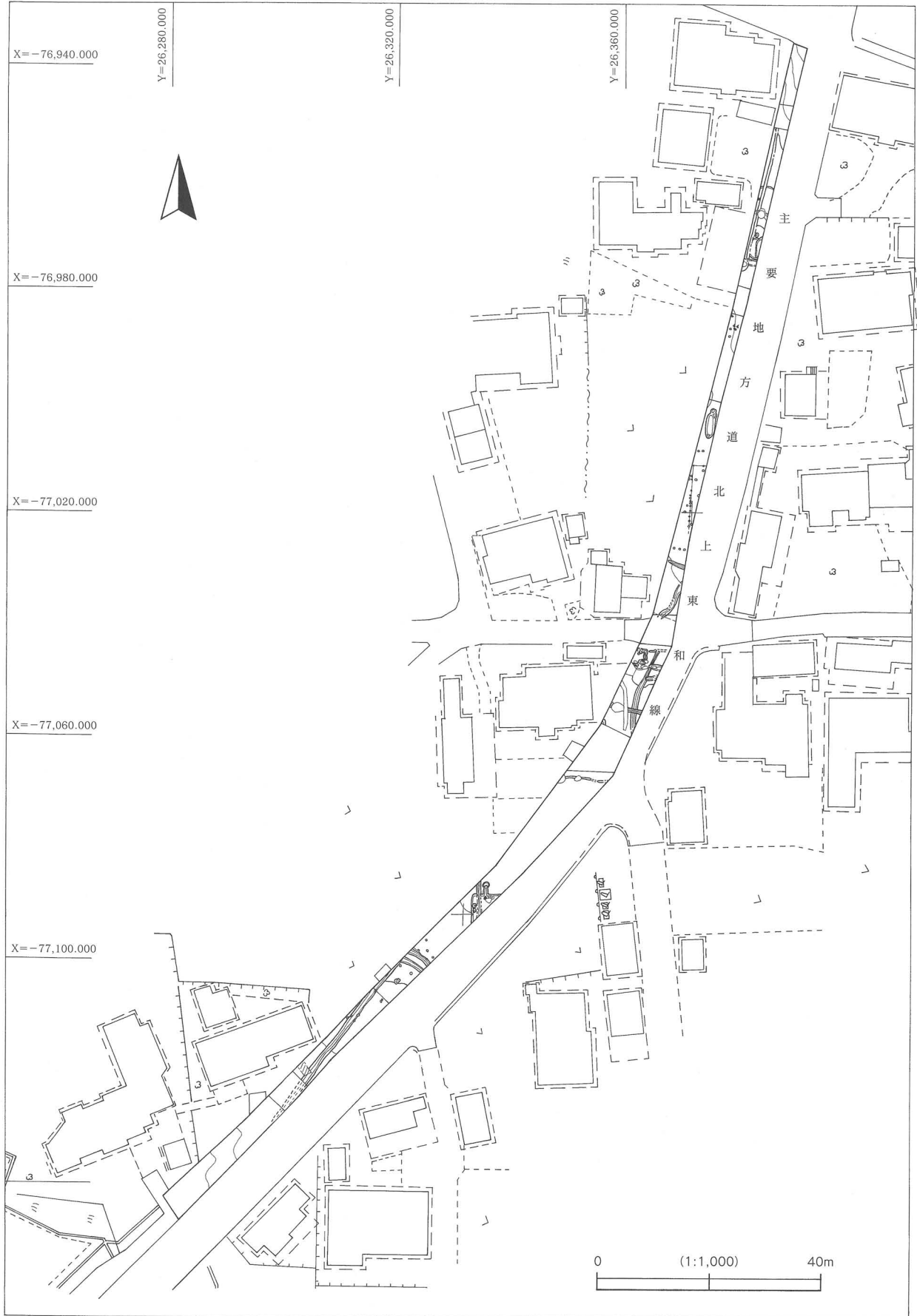
野田Ⅰ遺跡はJR東北本線北上駅の北東約3kmに位置し、北上市二子町地内に所在している。国土院発行の2万5千分の1地形図「口内」NJ-54-14-13-1（一関13号-1）、同5万分の1地形図「北上」NJ-54-14-13（一関13号）の図幅に含まれ、北緯39度18分16～23秒、東経141度8分16～21秒に位置する（第1図）。

調査区は北上川支流の大堰川右岸に形成された自然堤防上に立地する。東西約110m、南北約210m、幅2～7mの細長い調査区で面積は955㎡である。現況は主に水田・畑地・宅地であり、標高は62～63mである（第2図）。

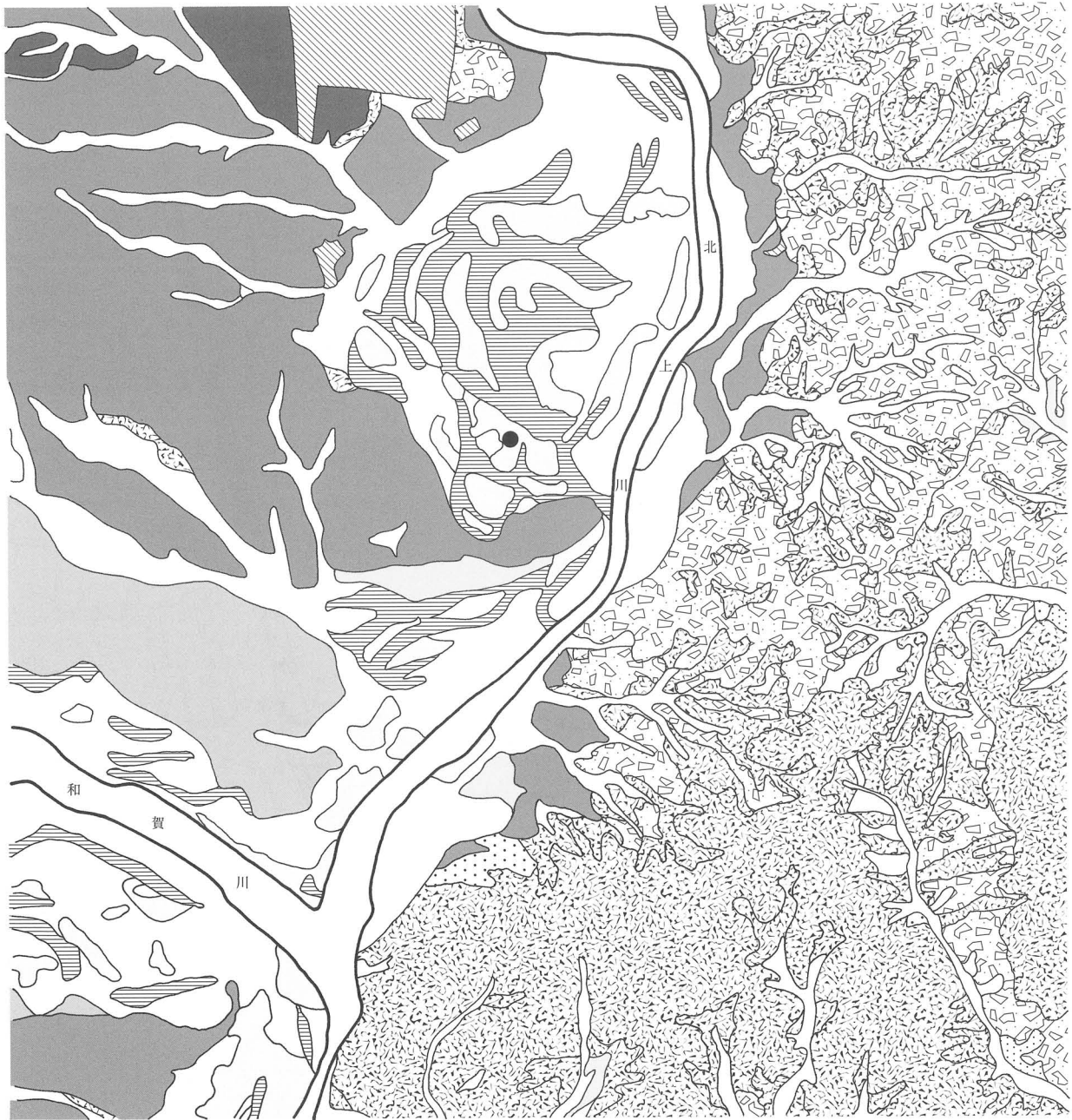
#### (2) 遺跡周辺の地形と地質

北上川は県北部の岩手町御堂観音境内にその源を発し、延長243km、流域面積10,720㎢、支流数216を数える、東北地方最大の一級河川であり、北上川の西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾に注いでいる。この流域は盛岡市北部の四十四田峡谷と一関市狐禅寺峡谷を境にして上・中・下流に分けられ、北上市周辺は中流域の下部、北上盆地にあたる。北上盆地は北上川とその支流が形成している様々な扇状地や段丘によって構成され、東西は奥羽山脈から北上山地に及び、南北90kmにも及ぶ帯状の盆地である。北上川右岸には新第三紀層の砂岩・凝灰岩を基盤とする台地、扇状地の末端に侵食崖を形成している。

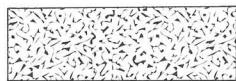
北上川中流域の地形は背後に控える山地構造の違いによって対照的な様相を呈している。新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、北上川に注ぐ多くの支流を持ち、それぞれに多量の土砂を供給し、北上川右岸に大小の段丘や扇状地、河岸平野、起伏量の小さい丘陵地が複雑に入り組む扇状地状の広い平坦面を作り出している。これらの平坦面の大部分は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって開析され段丘化したものである。これに対して、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵部縁辺部に小規模な段丘と沖積



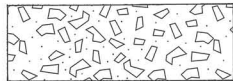
第2図 調査区と周辺の地形



●野田 I 遺跡



山地



丘陵地



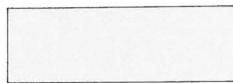
高位段丘



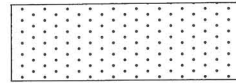
中位段丘



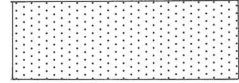
低位段丘



沖積段丘



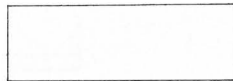
扇状地



崖錐性扇状地



谷底平野及び氾濫平野



自然堤防



旧河道



人工改變地

第3図 地形分類図



地が認められるにすぎない。

北上川流域の第四系及び地形の研究を行っている中川久夫らは、中流域の段丘を上部から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類している（中川ほか 1963）。

野田 I 遺跡の所在する二子地区は北上市の北東、北上川の右岸に位置し、東を北上川、三方が村崎野段丘をはじめとする中位段丘に囲まれた北上川沿いに発達した谷底平野にあたる。二子地区付近の谷底平野面は現在の北上川の流路によって挟られており、現河床との比高差は約3mと段化している。二子地区はその地形に北上川の旧流路の痕跡を残し、北上川によって形成された自然堤防を多く残す。この自然堤防上には多くの遺跡が分布し、本遺跡もこのような自然堤防（東西で最大700m、南北で最大600mの範囲）上に立地している（第3図）。

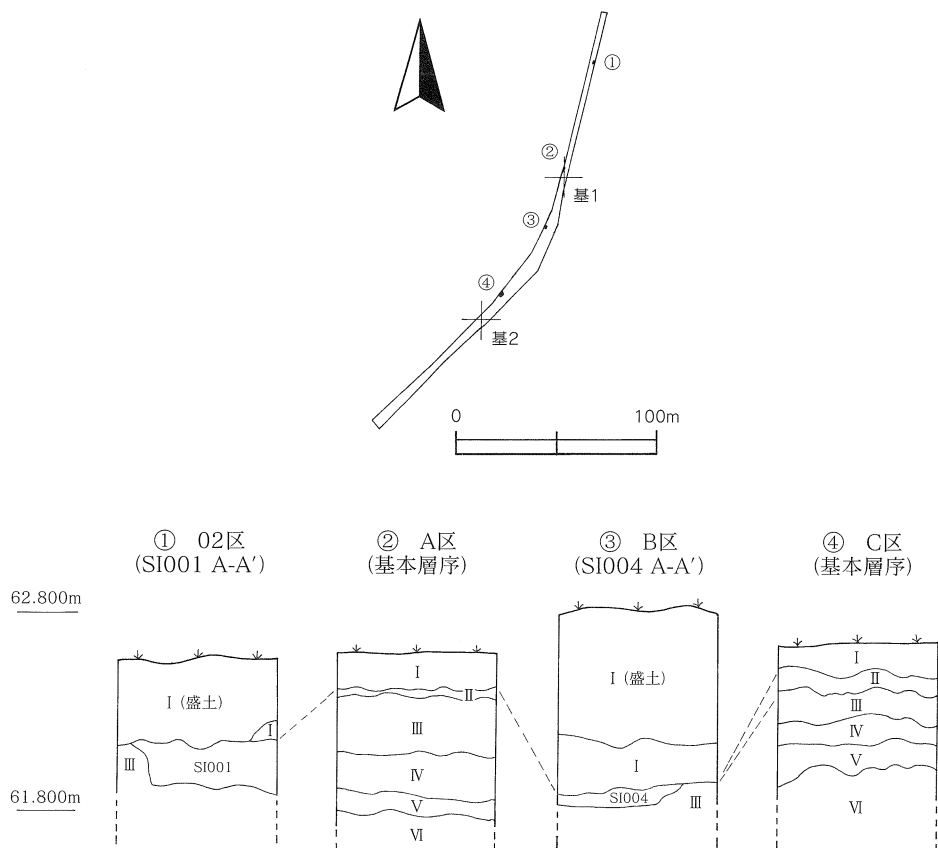
(3) 基本層序 (第4図、写真図版4)

ⅢE9cグリッド西壁とVD5fグリッド北西壁を基本層序とした。それぞれの区域で層厚が異なるため、遺構の集中している02区とB区も加えた。各層は以下のとおりである。

I層 盛土～表土層。層厚30～80cm。調査区全体としては北側ほど厚く堆積している傾向が見られるが、特に02区北側やB区北側で厚く堆積している。

Ⅱ層 10YR2/1.5黒色～黒褐色土。粘性・しまり中。層厚0～15cm。焼土遺構（03区）が本層上面で検出されている。平安時代の土師器から江戸時代以降の陶磁器など時期幅のある遺物が出土している。本来は複数の文化層を包含していると考えられるが、全体的に層厚がなく、各時代の検出面を捉えるのは困難であった。

Ⅲ層 10YR3/3暗褐色土。しまり有。層厚20～30cm。遺構検出面である。全体的にⅡ層の堆積が



第4図 基本層序

薄いため、本層が縄文時代～近世までの遺構の検出面となっている。泥質の堆積土で、乾燥すると非常に固くなる。水はけが非常に悪く、降雨があると多くの調査区が水没する状況である。

Ⅳ層 10YR4.5/4褐色～にぶい黄褐色土。しまり有。層厚10cm以上。褐色土とにぶい黄褐色土が鹿の子状になっている。Ⅲ層と同様泥質である。本層では遺構は検出されていない。本層より下層は「地山」と呼称されている。

Ⅴ層 10YR3.5/4暗褐色～褐色土。しまり有。層厚10cm以上。Ⅳ層とⅥ層の間層のやや暗い部分である。フレッシュな面は褐色を呈すが、時間が経つと暗褐色を呈する。遺構・遺物ともに確認されていない。本層も泥質である。

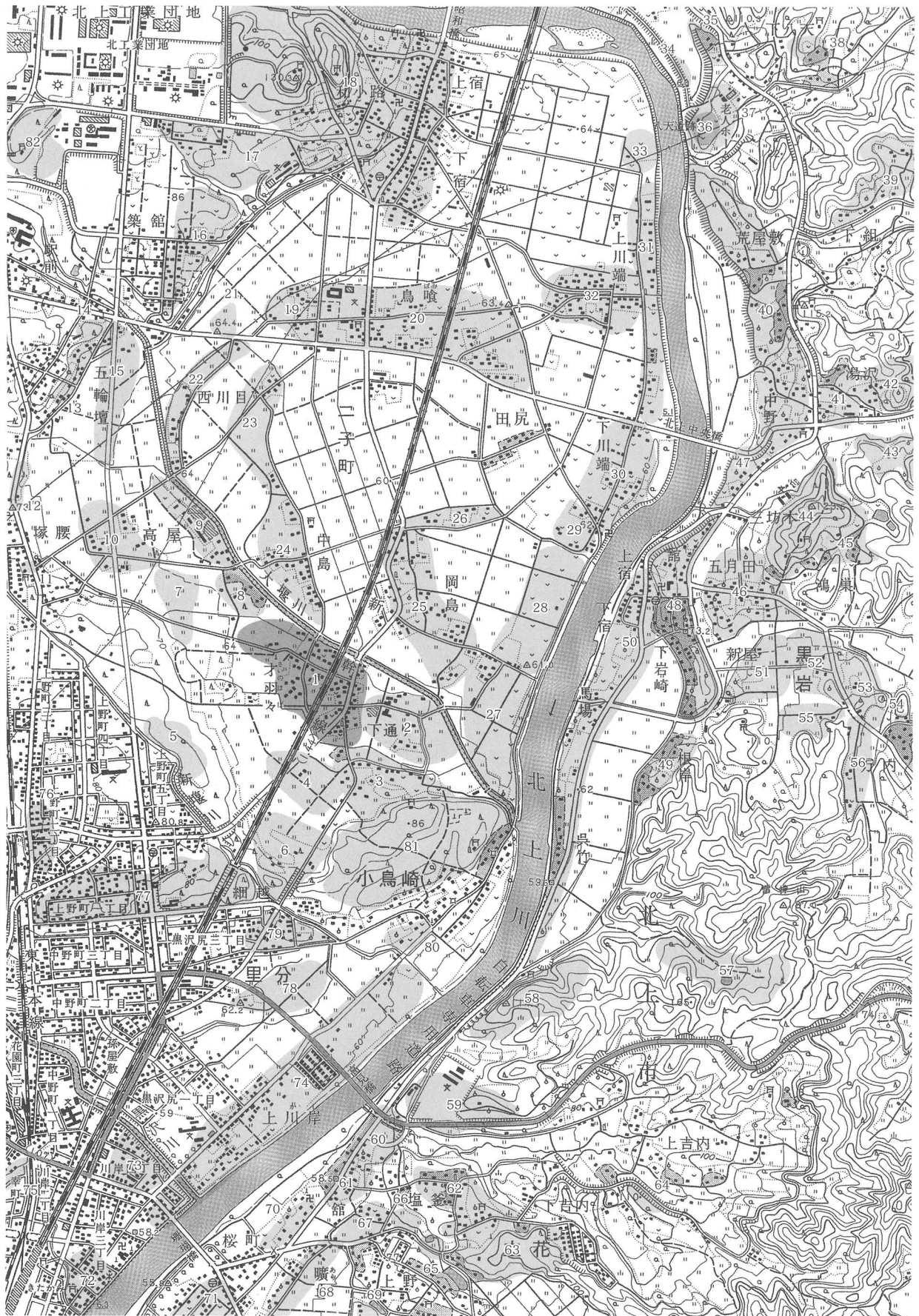
Ⅵ層 10YR4/4褐色土。層厚不明。Ⅲ層～Ⅴ層と比較すると粘性は無いが、しまりはある。遺構・遺物ともに確認されていない。

## 2 歴史的環境

北上市では東北新幹線、東北縦貫自動車道、東北横断道秋田線、工業団地建設等に伴って、緊急発掘調査が数多く行われている。現在のところ、北上市に所在する遺跡は岩手県教育委員会が作成した『岩手県遺跡情報検索システム（花巻・北上地方振興局管内）』によると498箇所（平成17年3月現在）が登録されている。時代別では旧石器時代が11箇所、縄文時代が239箇所、弥生時代が3箇所、古墳時代が3箇所、奈良・平安時代が153箇所、古代が19箇所、中世が55箇所、近世が8箇所等である。本遺跡が所在する二子地区は33箇所が登録され、奈良・平安時代の遺跡がほとんどで、縄文時代～古墳時代の遺跡が希薄である。

二子地区の縄文時代～古墳時代の遺跡として登録され、発掘調査によって縄文時代の遺物が出土した遺跡は、本遺跡のほか、中居俵Ⅱ遺跡（第5図3）、二子城跡坊館遺跡・二子城跡白鳥館遺跡（第5図18）が挙げられる。本遺跡は昭和51年に岩手県教育委員会によって発掘調査が行われており、縄文時代晩期の土器片、石器が出土している。また、中居俵Ⅱ遺跡は平成11年に当センターが発掘調査を実施しており、縄文時代前期～晩期の土器片、石器が出土しているが、両者とも遺構外からの出土であった。二子城跡坊館遺跡（第5図18）は昭和52年に北上市教育委員会によって発掘調査が行われ、土坑から縄文時代早期の土器や石器が、二子城跡白鳥館遺跡（第5図18）は平成3年の分布調査の際に縄文時代早期の土器や石器が出土している。いずれの遺跡からも居住域は検出されておらず、縄文時代の集落遺跡の状況は不明である。その一方で周辺では八天遺跡（第5図37）、臥牛遺跡、九年橋遺跡（第6図121）が所在し、西側の台地上にも多くの遺跡が所在している。

一方、奈良・平安時代の遺跡数は増加する傾向にあり、発掘調査を行った遺跡のほとんどがこの時期に比定される。本遺跡に隣接する野田Ⅱ遺跡（第5図8）では平安時代（9世紀中葉～後半）の竪穴住居跡が1棟、中居俵Ⅱ遺跡では平安時代（9世紀後半）の竪穴住居跡が6棟検出された。北上市教育委員会が昭和41年から2次にわたって調査を行った秋子沢遺跡（第5図17）では平安時代の竪穴住居跡が16棟検出された。平成15年に当センターが発掘調査を行った西川目遺跡（第5図23）や堰向Ⅱ遺跡（第5図22）からは二遺跡合わせて50棟を超える平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）の竪穴住居跡が検出されたほか、廂付建物跡や総柱式建物跡、硯や緑釉陶器等の貴重で希少な遺構や遺物が確認され、当該期の一般的な集落とは異なった大規模な集落であったことが判明している。このように9世紀代の様相は徐々に解明されつつあるが、今回の調査の中心となる10世紀代の様相はいまだに不明であり、調査事例が増加することで社会的な様相を捉えていくことが重要と考えられる。



(1:25,000地形図「口内」に加筆)

第5図 周辺の遺跡(1)





(1:50,000地形図「北上」に加筆)

第6図 周辺の遺跡(2)

第1表 周辺の遺跡(1)

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	所在地
1	ME56-2213	野田Ⅰ	集落跡	弥生・縄文・平安	二子町
2	ME56-2249	中居俵Ⅲ	散布地	古代	二子町字野田
3	ME56-2267	中居俵Ⅱ	集落跡	縄文・平安	二子町字山岸
4	ME56-2254	中居俵Ⅰ	散布地		二子町
5	ME56-2148	上野	散布地		二子町
6	ME66-0204	蟹沢	散布地	縄文、平安	二子町蟹沢
7	ME56-1189	高屋Ⅱ	散布地	古代	二子町字野田
8	ME56-1280	野田Ⅱ	集落跡	縄文、平安	二子町字野田
9	ME56-1138	明神Ⅱ	散布地	古代	二子町
10	ME56-1155	高屋Ⅰ	散布地	古代	二子町字高屋
11	ME56-1161	二子一里塚	一里塚	近世	二子町字高屋
12	ME56-1142	明神Ⅰ	散布地	古代	二子町字明神
13	ME56-0184	南田Ⅱ	散布地	縄文	二子町字南田
14	ME56-0165	五輪壇	墳墓	中世	二子町字南田
15	ME56-0195	南田Ⅰ	集落跡	縄文、平安	二子町字南田
16	ME56-0220	築館	散布地	平安	二子町築館
17	ME46-2283	秋子沢	集落跡	平安	二子町秋子沢
18	ME46-2214	二子城	城館跡、散布地	中世、縄文	二子町
19	ME56-0254	鳥喰Ⅱ	散布地	古代	二子町字鳥喰
20	ME56-0259	鳥喰Ⅰ	集落跡	古代	二子町字鳥喰
21	ME56-0251	堰向Ⅰ	散布地	縄文・古代	二子町字堰向端
22	ME56-0189	堰向Ⅱ	集落跡	平安、縄文、近世	二子町字堰向
23	ME56-1101	西川目	集落跡	平安、縄文、近世	二子町字鳥喰
24	ME56-1263	中島	散布地	古代	二子町字中島
25	ME56-1289	岡島	散布地	古代	二子町字岡島
26	ME56-1340	相野野	散布地	古代	二子町字野田
27	ME56-2343	千刈	集落跡	平安	二子町字千刈
28	ME56-1385	中村	集落跡	平安	二子町字中村
29	ME56-1329	尻引	集落跡	平安	二子町下川端
30	ME56-1338	下川端	集落跡	平安	二子町下川端
31	ME56-0349	上川端Ⅰ	散布地	平安	二子町字上川端
32	ME56-0346	上川端Ⅱ	散布地	古代	二子町字上川端
33	ME46-2389	上川端塚群	墳墓	中世	二子町字上川端
34	ME47-2051	八天北	散布地	平安	更木34地割
35	ME47-2032	羽久保館	城館跡	中世	更木34地割
36	ME47-2072	下欠野館	城館跡	中世	更木34地割
37	ME47-2062	八天	集落跡	縄文	更木34地割
38	ME47-2036	天王館	城館跡	中世	更木字八天
39	ME57-0008	沢目	散布地	縄文	黒沢尻町字平沢
40	ME57-0055	三坊木	散布地	平安、縄文	黒岩、平沢荒屋敷
41	ME57-0097	湯沢Ⅰ	散布地	古代	湯沢7地割
42	ME57-0190	湯沢館	散布地・城館跡	縄文・中世	湯沢7地割
43	ME57-1120	神行田	散布地	縄文	黒岩
44	ME57-1056	鴻巣Ⅰ	散布地	縄文、平安	黒岩7地割
45	ME57-1058	鴻巣Ⅱ	散布地	古代	黒岩8地割

2 歴史的環境

第1表 周辺の遺跡(2)

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	所在地
46	ME57-1083	白山廃寺	寺院跡	平安	黒岩7・15地割
47	ME57-1023	三坊木館	城館跡・散布地	中世、縄文	黒岩17地割
48	ME57-2011	黒岩城(岩崎塞・元館?)	散布地・城館跡	縄文・中世、平安	黒岩13・14・18・19地割
49	ME57-2071	根岸	散布地	縄文	黒岩12地割
50	ME56-1388	黒岩宿	集落跡	縄文・弥生・平安	黒岩18~20、23、24地割
51	ME57-2013	菅田	集落跡	縄文・古代	黒岩14地割
52	ME57-2028	四十九里I	散布地	縄文・平安	黒岩9地割
53	ME57-2029	四十九里II	散布地	縄文	黒岩3地割
54	ME57-2104	万内	散布地	縄文	黒岩3地割
55	ME57-2047	四十九里III	散布地・墳墓	縄文、中世	黒岩10地割
56	ME57-2058	大平沢	散布地	縄文	黒岩10地割
57	ME67-0054	法勝坊	社寺跡	中世、近世	黒岩11地割
58	ME66-0364	岩溪	散布地	縄文	立花2地割
59	ME66-1300	横町	集落跡	縄文、奈良、平安、中世	立花1地割
60	ME66-1228	館IV	散布地	縄文	立花3地割
61	ME66-1237	館II	散布地	縄文	立花3・4地割
62	ME66-1351	塩釜	散布地	縄文	立花22地割
63	ME66-1373	高館	散布地・城館跡	縄文・中世	立花21地割
64	ME66-1359	橋内七ツ森	塚	中世	立花25地割
65	ME66-1370	館V	集落跡	縄文	黒沢尻町字立花
66	ME66-1269	立花小学校下	散布地	縄文	黒沢尻町字立花
67	ME66-1228	館III	散布地	縄文	黒沢尻町字立花
68	ME66-1284	館I	散布地	縄文	立花5・9地割
69	ME66-2227	沢野	散布地	縄文	黒沢尻町字立花
70	ME66-1263	立花館(館)	城館跡	平安	黒沢尻町字立花
71	ME66-2128	立花南	集落跡	平安、奈良、縄文	立花10地割
72	ME66-1185	川岸(黒沢尻柵、安倍館)	城館跡	平安、中世、近世	川岸3丁目
73	ME66-1147	方八丁館	散布地	平安	川岸、黒沢尻町字里分第14地割
74	ME66-1222	牡丹畑	集落跡	縄文・平安・弥生	里分6・12地割
75	ME66-1141	和野	集落跡	縄文	幸町
76	ME56-2183	黒沢尻上野町住宅	集落跡	平安	上野町
77	ME66-0125	梨子山	散布地	縄文	里分2地割、上野町1丁目
78	ME66-0264	幅下	集落跡	縄文、弥生、平安	里分4地割62番 他
79	ME66-0234	細越	狩り場	縄文	黒沢尻4丁目
80	ME66-0238	小鳥崎	散布地	縄文	黒沢尻町字小鳥崎
81	ME56-2380	小鳥崎館(館山)	城館跡	中世	黒沢尻町字小鳥崎
82	ME46-2183	伊勢	散布地	近世	飯豊町字村崎野
83	ME46-2000	中大堰川	狩り場、散布地	縄文、平安	村崎野19地割
84	ME55-0068	芦萱	集落跡	縄文・平安	新平4地割
85	ME55-1115	横堰I	集落跡	縄文・奈良・平安	滑田20地割
86	ME55-1155	横堰II	集落跡	平安	滑田20地割
87	ME55-1159	鳩岡崎高台	集落跡	縄文・平安	鳩岡崎3地割
88	ME55-1243	鳩岡崎上の台	集落跡・城館跡	縄文・平安	鳩岡崎1地割
89	ME55-1382	藤沢	集落跡	奈良・平安・縄文・弥生	藤沢15~18地割、流通センター
90	ME55-1186	鳩岡崎下通	散布地	平安	鳩岡崎2地割

第1表 周辺の遺跡(3)

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	所在地
91	ME55-1293	鳩岡崎三館	散布地・城館跡	平安・中世	鳩岡崎2地割
92	ME55-2206	野崎Ⅰ	集落跡	平安	鳩岡崎1地割
93	ME55-2248	野崎Ⅱ	散布地	平安	鳩岡崎1地割
94	ME55-2340	清水端	散布地	奈良・平安	北鬼柳7地割
95	ME55-2362	曾山Ⅰ	集落跡	平安	北鬼柳5地割
96	ME55-2374	曾山Ⅱ	集落跡	平安	北鬼柳5地割
97	ME56-2021	藤沢窯跡群	窯跡	平安	黒沢尻町字2-81周辺
98	ME66-0007	常盤台	集落跡	平安	常盤台2・3・4丁目
99	ME66-0121	黒沢尻北高グラウンド	集落跡	平安	常盤台
100	ME55-2389	蒲谷地Ⅰ	散布地		町分2地割
101	ME66-0013	蒲谷地Ⅱ	散布地	縄文・奈良～平安	町分4地割
102	ME55-2131	田代(田代主殿屋敷)	集落跡	中世	上江釣子10地割
103	ME55-2046	江釣子和野	集落跡	奈良	滑田10地割
104	ME65-0009	江釣子城	城館跡	中世	上江釣子16、17地割
105	ME55-2193	喜左エ門田	散布地	平安	上江釣子16地割
106	ME65-0045	江釣子宿	集落跡	平安、奈良	下江釣子16地割
107	ME65-0048	江釣子館	城館跡	中世	下江釣子16地割
108	ME65-0152	塚	集落跡	奈良・平安	上江釣子18地割
109	ME65-0151	五条丸館	城館跡	中世	下江釣子16地割
110	ME65-0169	本宿	集落跡	縄文、弥生、奈良、平安	上江釣子19地割
111	ME65-0155	本宿羽場	集落跡	奈良・平安	上江釣子19地割
112	ME65-0166	五条丸Ⅱ	散布地	奈良、縄文	上江釣子20地割
113	ME65-0172	五条丸Ⅰ	散布地	奈良	上江釣子20地割
114	ME65-0185	五条丸古墳群	古墳群	古墳・奈良	上江釣子20地割
115	ME65-0290	猫谷地古墳群	古墳群	古墳・奈良	上江釣子20地割
116	ME65-0294	八幡古墳群	古墳群	古墳・奈良	北鬼柳21地割
117	ME65-1205	八幡	集落跡・散布地	奈良・平安・縄文	北鬼柳21・22地割
118	ME65-0278	高橋	集落跡	平安	北鬼柳19地割
119	ME65-1301	鳥海柳	集落跡	奈良・平安	北鬼柳22地割
120	ME65-1328	大曲西	散布地	平安	鍛冶町2丁目
121	ME66-1080	九年橋	集落跡	縄文	九年橋3丁目
122	ME65-1074	里小屋	散布地	平安	岩崎里小屋
123	ME65-2055	六軒	散布地	縄文、弥生、平安	鬼柳町上鬼柳2・3地割
124	ME75-0117	柳上	集落跡	平安、縄文	鬼柳町上鬼柳3～5地割
125	ME65-2195	柳上館	城館跡	中世	鬼柳町上鬼柳3地割
126	ME75-0220	鹿島館(羽場館)	城館跡	中世	鬼柳町上鬼柳5地割
127	ME74-1194	南部領伊達領境塚	藩境塚	近世	
128	ME75-1001	三十人町Ⅰ	集落跡	平安	相去町字三十人町
129	ME75-0151	下成沢Ⅰ	散布地、藩境塚	平安、近世、縄文	相去町下成沢
130	ME75-0182	下成沢Ⅱ	散布地	旧石器、縄文、平安	相去町下成沢
131	ME75-0188	高前田	集落跡	平安	相去町中成沢
132	ME75-1100	葛西壇	集落跡	平安	相去町葛西壇
133	ME75-0256	卯ノ木	散布地	縄文、平安	鬼柳町下鬼柳17地割
134	ME75-0373	滝ノ沢	集落跡	縄文、平安	鬼柳町下鬼柳14～16地割、 相去町滝ノ沢、大堤西1丁目、 大堤北1・2丁目



2 歴史的環境

第1表 周辺の遺跡(4)

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	所在地
135	ME76-0080	大堤東	散布地	平安、縄文	大堤東一丁目
136	ME76-0092	南館	墳墓、散布地	縄文、近世、平安	大堤東2丁目
137	ME76-0055	白鬚館	城館跡	中世	鬼柳町字白鬚
138	ME76-0066	鬼柳西裏	集落跡・経塚	平安、縄文、中世、近世	鬼柳町町分
139	ME76-0096	西野	散布地	平安	相去町西野
140	ME75-1057	比久尼沢	集落跡	縄文、平安	相去町比久尼沢
141	ME75-1175	高前壇Ⅰ	集落跡	平安	相去町字高前壇
142	ME75-1278	高前壇Ⅱ	集落跡	平安、縄文	相去町高前壇
143	ME75-1322	大堤	集落跡	平安、縄文	相去町旧館沢
144	ME75-1346	蒼前森	集落跡	平安	相去町蒼前森
145	ME75-2156	上大谷地	集落跡	平安	相去町中大谷地
146	ME85-0125	土井	集落跡	平安、縄文	相去町土井
147	ME85-0188	前稗沢	集落跡	平安	相去町前稗沢
148	ME75-2302	平林Ⅰ	集落跡	平安	相去町平林
149	ME75-2324	平林Ⅱ	散布地	平安	相去町字平林
150	ME76-1053	松ノ木	散布地	平安	相去町松ノ木
151	ME76-1071	小糠沢	散布地	縄文、平安	相去町小糠沢
152	ME76-2003	八木畑	散布地	平安	相去町十二ノ木
153	ME75-2370	相去城(鶴野館)	城館跡	中世	相去町字山根
154	ME85-0340	山根梨ノ木	集落跡	平安	相去町字山根
155	ME85-0363	岩ノ目館	城館跡	中世	相去町岩ノ目
156	ME85-1229	和田尻	散布地	縄文	相去町和田尻
157	ME85-1229	和田前	散布地	縄文	相去町和田前
158	ME86-0076	馬場崎	散布地	平安	稲瀬町馬場崎
159	ME86-0015	中谷起	散布地	縄文	稲瀬字金附
160	ME86-0069	境	散布地	平安	稲瀬町地藏堂
161	ME86-0172	俵岩	散布地	縄文、平安	稲瀬町大谷地
162	ME76-2058	金附	散布地	縄文、弥生、平安	稲瀬町金附
163	ME76-2192	相田	散布地	縄文	稲瀬町前田
164	ME76-2160	前田	散布地	縄文	稲瀬町前田
165	ME86-0242	樺山	集落跡	縄文	稲瀬町水越
166	ME76-2177	上台	集落跡	平安	稲瀬町上台
167	ME76-2154	安楽寺	散布地	縄文・弥生・平安	稲瀬町上台
168	ME76-2296	下門岡ひじり塚	塚跡	中世	稲瀬町水越
169	ME76-2295	聖沢道	散布地	縄文	稲瀬町水越
170	ME76-2285	聖沢山	経塚	古代末～中世	稲瀬町水越
171	ME76-2110	斉羽場館	散布地・城館跡	縄文・旧石器・中世	稲瀬町下門岡
172	ME76-1153	岩脇	散布地、墳墓	縄文、旧石器、弥生、平安、近世	稲瀬町岩脇
173	ME76-1117	男山	散布地	縄文	稲瀬町岩脇
174	ME76-0272	西谷	散布地	平安	稲瀬町字内門岡
175	ME76-0277	国見山廃寺	寺院跡	平安	稲瀬町字内門岡、上台、岩脇、田合田
176	ME76-1332	曾館(僧館)	城館跡	中世	稲瀬町字内門岡
177	ME76-1350	阿弥陀堂	散布地	縄文	稲瀬町字内門岡
178	ME76-1328	八王子森館	散布地・城館跡	弥生・中世	稲瀬町字内門岡

### Ⅲ 野外調査と室内整理

#### 1 野外調査

##### (1) 発掘調査の方法

**グリッドの設定** (第7図) 本調査区は主要地方道北上東和線(以下県道と表記)沿いに細長い調査区で、調査区全体を網羅するようにグリッドを設定した。調査座標原点は $X=-76,900.000$ 、 $Y=26,200.000$ である。この座標原点を起点として、一辺40mの大グリッドに区割りし、さらに大グリッドを一辺4mの小グリッドに10分割している。大グリッドは東西方向にアルファベットの大文字を用いて、東にA・B・C・…、南北方向にはローマ数字を用いて、南にI・II・III・…、とし、これらを組み合わせてIA、IIBと表示した。また、小グリッドは、東西方向にはアルファベットの小文字を用いて、a・b・c・…・j、南北方向には算用数字を用いて、1・2・3・…・10とし、これらを組み合わせて1a、2bと表示した。実際のグリッドは大小グリッドの組み合わせにより、IA1aといった表示とし、グリッド杭の名称はグリッド北西隅に与えた。また、いくつかの遺構図にはこれらのグリッドが表記できないものがあり、表記用として、小グリッドを4分割にして、①(北西)、②(南西)、③(北東)、④(南東)を小グリッドの後ろに付記している。

**試掘・表土掘削・遺構検出** 本来ならば、試掘を行って、調査区全体の層序を確認した後に表土掘削を行うべきであるが、調査日数が少なく、本調査に先行して行われた試掘の結果、遺構密度が薄いとの結果が出ていたため、作業効率を優先して最初から重機による表土除去と人力による表土除去を並行して行った。重機による表土除去が終了した箇所は安全を確保しながら鋤簾を使用して人力による検出作業を行った。

**遺構の命名** 遺構名称は検出順・遺構種別ごとに○号竪穴住居跡、○号溝としたが、報告書掲載時には略号と三桁の数字を用いて遺構名(第2表)とした。使用した略号は次のとおりである。

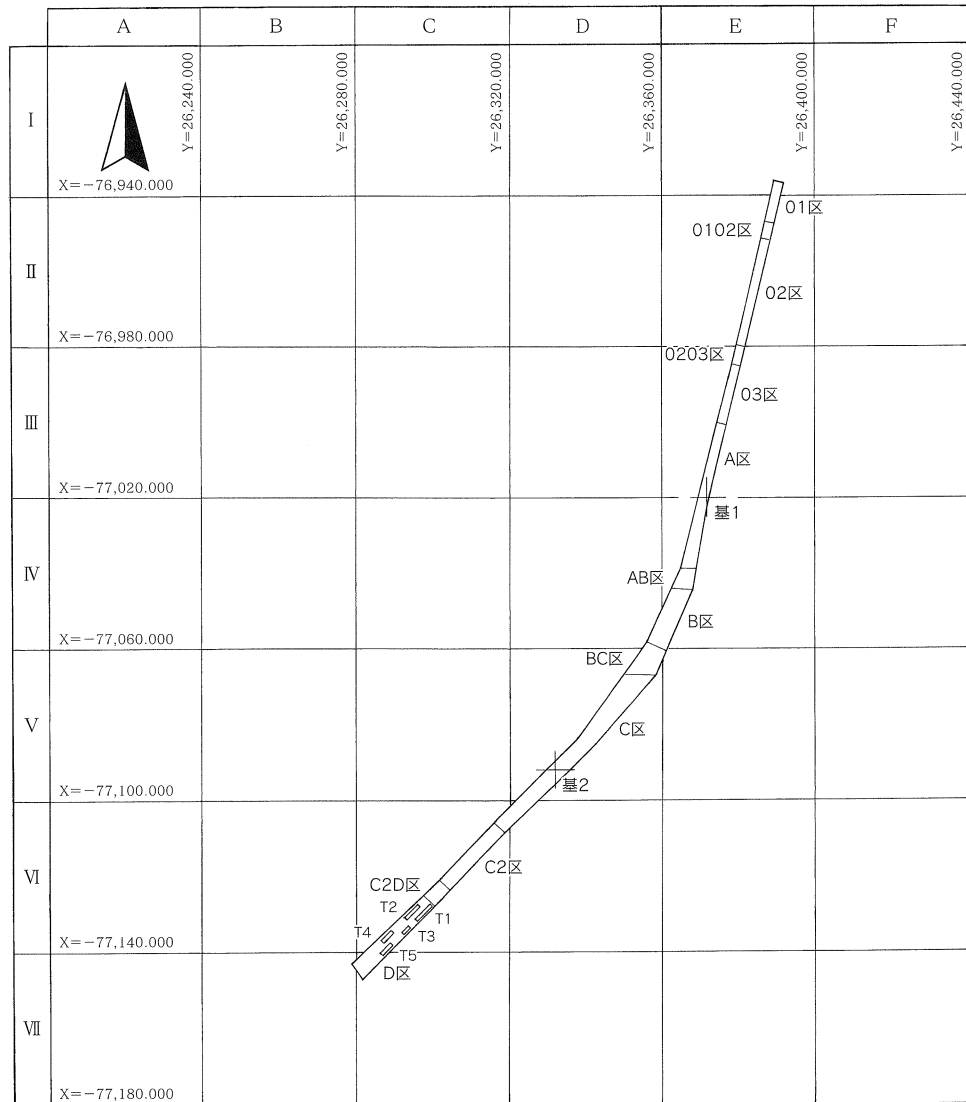
SI: 竪穴住居跡、SB: 掘立柱建物跡、SK: 土坑・陥し穴状遺構、SD: 溝跡、SF: 焼土遺構、SX: 不明遺構

**精査** 検出が終了し、遺構名を付したのから、移植ゴテを使用して掘削を行った。遺構埋土掘削は土坑等の小形の遺構には半割法、竪穴住居跡等の大形の遺構には四分法を基本的には用いて行ったが、調査区幅が最大でも約7mと狭いため、一部の大形の遺構では四分法を使用できず、半割法を用いたものもある。溝跡などの長大な遺構は適宜、土層観察用のベルトを数箇所残して掘削を行ったが、違いが見られない場合は最も堆積の良好な箇所を選んで記録を行った。掘削の際には、適宜サブレンチを設定し、堆積状況の把握を行っている。その後、極力上層から掘削を行ったが、単層と判断したものは底面まで掘削を行った。

**実測記録** 遺構の実測は簡易遣り方測量とトータル・ステーションを併用した平面図の作成、及び断面図の作成を行った。縮尺は1/20を基本とし、溝跡は1/40、1/50、1/100の縮尺、竪穴住居跡のカマド部分や焼土遺構は1/10を用いた。

**写真記録** 野外調査の写真撮影にあたっては、当初35mm判カメラ2台(モノクロームとカラーズライド)、中判カメラ1台(モノクローム)、メモ用にデジタルカメラ1台を使用していたが、後半以降、調査区が離れたため同じカメラのセットを1組追加して行っている。追加したカメラで撮影する場合

1 野外調査



		A									
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
I	1										
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										
	10										

名称	基1	基2
X 座標	-77,020.000	-77,092.000
Y 座標	26,372.000	26,332.000
H (m)	62.664	62.688

第7図 グリッド配置図

第2表 遺構名対応表

報告名	フィールド名	報告名	フィールド名	報告名	フィールド名
SI001	13号住	SD006	4号溝	P010	A区11号柱穴
SI002	14号住	SD007	5号溝	P011	A区25号柱穴
SI003	11号住	SD008	11号溝	P012	A区24号柱穴
SI004	2号住	SD009	13号溝	P013	A区23号柱穴
SI005	1号住	SD010	14号溝	P014	A区22号柱穴
SB001	1号掘立	SD011	19号溝	P015	A区29号柱穴
SK001	1号陥し穴	SD012	18号溝	P016	A区28号柱穴
SK002	3号土坑	SD013	17号溝	P017	A区27号柱穴
SK003	2号土坑	SD014	2号溝	P018	2号柱穴
SK004	12号住	SF001	101号焼土	P019	3号柱穴
	102号土坑	SF002	102号焼土	P020	4号柱穴
SK005	104号土坑	SX001	102号不明遺構	P021	5号柱穴
SK006	105号土坑	P001	101号柱穴	P022	6号柱穴
SK007	4号土坑	P002	102号柱穴	P023	7号柱穴
SK008	103号土坑	P003	A区19号柱穴	P024	1号柱穴
SK009	1号土坑	P004	A区20号柱穴	P025	8号柱穴
SD001	102号溝	P005	A区26号柱穴	P026	9号柱穴
SD002	101号溝	P006	A区17号柱穴	P027	12号柱穴
SD003	1号溝	P007	A区18号柱穴	P028	13号柱穴
SD004	12号溝	P008	A区14号柱穴	P029	10号柱穴
SD005	3号溝	P009	A区12号柱穴	P030	11号柱穴

には調査区名（B区・C区）に番号（1～）を付して行った。

## （2）調査経過

平成18年10月16日に器材を搬入し、調査を開始した。調査は本調査の範囲と岩手県教育委員会による試掘が行えないため、試掘の必要な範囲があり、本調査の範囲にはアルファベットを、試掘の範囲には算用数字を使用した区域名を与えた。また、調査区内には民家の進入路（4箇所）と市道（1箇所）が横断しており、調査区を分断している。その結果、調査区は試掘の範囲が01区、02区、03区、本調査の範囲がA区、B区、C区となっている。進入路や市道にも隣接する区域の名称を並列した名称（0102区、BC区等）を与えた。

10月17日に重機による表土掘削（C区）開始。10月18日に遺構検出開始。C区の電柱のまわりで竪穴住居跡1棟検出。以降調査区ほぼ全域で遺構が検出される。10月19日、A区の表土掘削開始。重機が入れず、人力による表土掘削を行う。10月23日、基準点打設。10月25日に01区～03区の試掘開始。A区と同様、幅が狭く民家に隣接しているため重機が使用できず、人力で行った。1×3mのトレンチを3箇所設定。MT1～MT3と名称を付した。MT1は02区北側（0102区寄り）に設定、MT2は02区南側に設定、MT3は03区北側（0203区寄り）に設定した。各トレンチで土師器を中心とす



## 2 室内整理

る遺物が出土する。MT1はⅢ層上面で南北に延びる溝を1条(SD002)検出。MT2では竪穴住居跡と思われるプラン(SI003)を確認した。また、重複して、南側にも黒色のプランが広がっており、遺構は南に広がっている。MT3では遺構は検出されなかった。これらの結果から、北側にも遺構がひろがっていることが判明し、本調査を行うこととなった。10月26日、A区で掘立柱建物跡(SB001)を検出。10月30日、C区の遺構精査開始。10月31日、B区の雑物の撤去が終了し、試掘を行い、竪穴住居跡と思われるプラン(SI004)を検出。B区は盛土及び表土層の堆積が非常に厚く、現地表面から80～90cm(他の区域の2～3倍)あることが判明した。11月13日、AB区(市道)の調査が必要となり、北上市役所江釣子庁舎道路維持課に道路使用申請書提出。11月14日、B区の表土除去実施。11月15日、前日の降雨でA区南端やB区が水没。以後B区は降雨の度に水没する。11月16日、北上警察署に道路使用許可申請書提出。11月17日、道路使用許可証発行。11月20日、AB区(市道)の調査開始。A区南端から延びている溝跡(SD003)は市道内の地下埋設物によって壊されており、消失していた。溝跡より南側は遺構が検出されなかったため、埋め戻し作業を行った。11月21日、前日の降雨によりA区からC2区まで冠水。排水作業に時間を要した。11月22日、市道の現状復旧作業実施。AB区の調査終了。11月28日、終了確認実施。11月29日、空撮実施。12月11日、B区の遺構の写真撮影・平面実測を行い、遺構の調査は終了した。12月12日、調査器材をセンターへ搬出し、野外調査を終了した。



## 2 室内整理

### (1) 整理作業の方法

**遺構** 遺構実測図は必要に応じて合成等の編集作業を行い、第2原図を作成した。その際に、堆積土の名称が複数の遺構をまたいで連番になっていたり、同一遺構の異なる断面で同じ番号が使用されていたりしたため、整理しなおして番号を変更している。遺物の観察表は変更後の名称を使用しているが、出土遺物には変更前の名称が使用されているので、対応表を第3表に示した。遺構図の縮尺は図版毎にスケールを付すと同時に縮尺を記載したので参照して頂きたい。遺構図に使用した記号・網掛け等は凡例を参照して頂きたい。遺構の計測は実測図、第2原図をもとに次の方法で行った。①主軸方向は基本的に長軸または長辺方向である。②長径は長軸方向の最大距離を、短径は長径に直行する軸で最大径を計測した。③深さは上端で最も高い部分と底面の比高差で計算した。④溝跡などの長大な遺構の長さはエリアカーブメータを使用し、遺構の中心線を3回計測した値の平均値を記載した。⑤溝跡の幅は長軸方向に直交する場所で計測し、最大幅と最小幅を記載した。

**遺物** 出土遺物は水洗、大別仕分け、出土地点の確認を行い、種類毎に次のとおりにした。遺物図



第3表 層名対応表

遺構名	報告名	フィールド名	遺構名	報告名	フィールド名	
SI001	SD002埋土	1層	SI005 カマド	4層	燃焼部WE3層	
	1層	2層		5層	燃焼部SN2層	
	2層	3層		6層	燃焼部SN3層	
	3層	4層		7層	煙道～煙出2層	
SI003	SD002埋土	1層		8層	煙道～煙出4層	
	1層	2層		9層	煙道～煙出5層	
	2層	3層		10層	燃焼部5層	
	3層	4層		11層	燃焼部6層	
	4層	5層		12層	燃焼部WE4層	
	5層	6層		13層	燃焼部WE13層	
	6層	7層		14層	燃焼部7層	
	7層	8層		15層	燃焼部8層	
SI005	II層	1層		16層	燃焼部WE16層	
	SD004 1層	2層		17層	18層	
	SD004 2層	3層		18層	燃焼部WE9層	
	SD004 3層	4層		19層	19層	
	SD004 4層	5層		SK004	SD002埋土	1層
	1層	6層			1層	2層
	2層	7層			2層	3層
	3層	8層	3層		4層	
	4層	9層	4層		5層	
	5層	10層	5層		6層	
	6層	11層	6層		7層	
	7層	12層	7層		8層	
	8層	13層	8層		9層	
	9層	14層	9層		10層	
	10層	15層	10層		11層	
	11層	16層	11層		12層	
	12層	17層	SD004 B-B'		II層	1層
	13層	18層			1層	2層
	14層	19層		2層	3層	
SI005 カマド	1層	煙道～煙出1層		3層	4層	
	2層	煙道～煙出3層		4層	5層	
	3層	燃焼部SN1層				

版に使用した表現方法及び網掛け等は凡例に示した。番号は選別時に種別毎に整理番号を付し、掲載遺物決定後に全遺物通しの掲載番号を付した。

＜土師器・須恵器＞ 土師器類は取り上げてきた袋毎に重量計測（g単位：少数第1位を四捨五入）を行い、台帳に記載した。その後、注記を行い、遺構単位での接合作業と資料の選択・登録作業を行った。なお、選択にあたっては全ての個体を登録・分類する時間的余裕がないため、次の選定基準を設定を行った。①少なくとも口径もしくは底径が算出できる資料、②胴部破片で反転実測が可能な資料、③破片で反転実測が困難な資料。坏類は基本的に①から、甕類は基本的に①・②の基準で選別を行った。なお、遺構内出土遺物については③からでも積極的に採用した。実測は選別を行った資料を更に選別して行っている。

## 2 室内整理

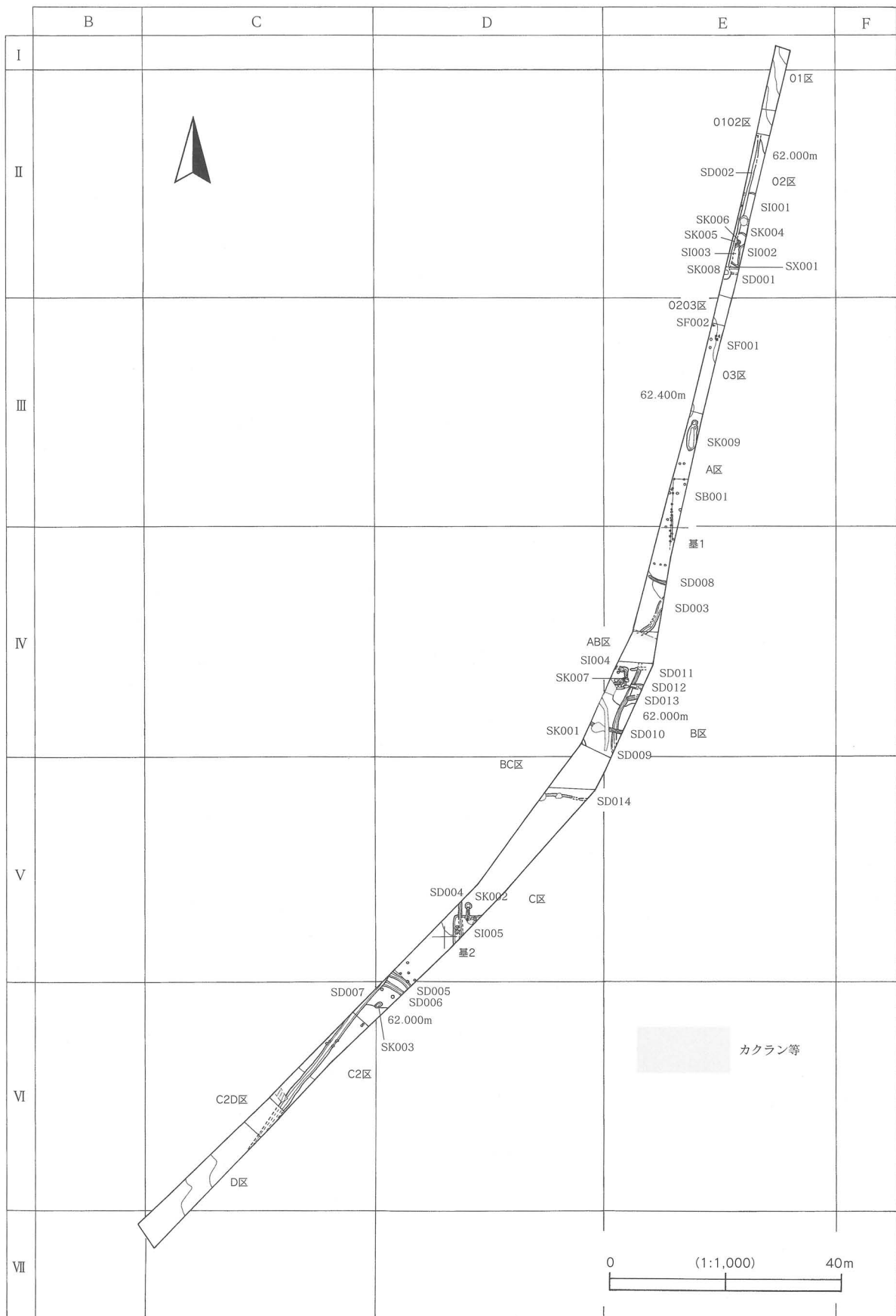
<陶磁器> 断片的な資料を除き登録を行い、口径もしくは底径の算出できる資料や代表的な資料を中心に実測し、それ以外の資料を極力写真掲載にした。

<土製品・石器・石製品・金属製品> 焼成粘土塊を除く遺物を登録し、掲載資料としている。

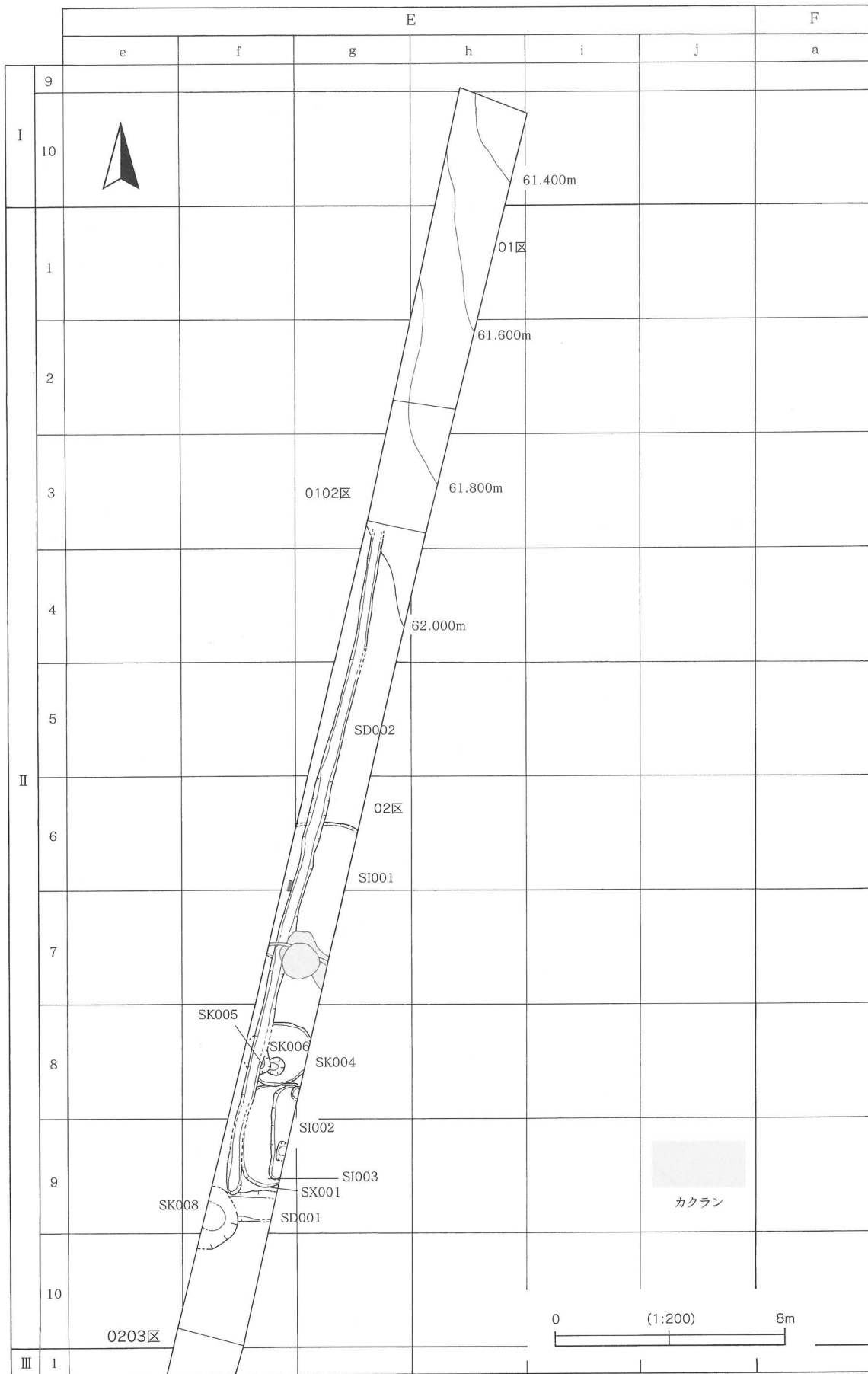
**写真** 野外調査時に撮影した遺構などの写真は、35mm判モノクロームとリバーサル、6×7判モノクロームの種類別にアルバムに整理し、台帳を作成した。これらの遺構写真、航空写真、室内整理時に撮影した遺物写真で図版を作成した。写真に掲載した遺物の掲載番号は本文、観察表及び図版の掲載番号と一致している。また、遺構の断面写真は基本的には図版の断面図と同じ方向から撮影したものである。

### (2) 作業経過

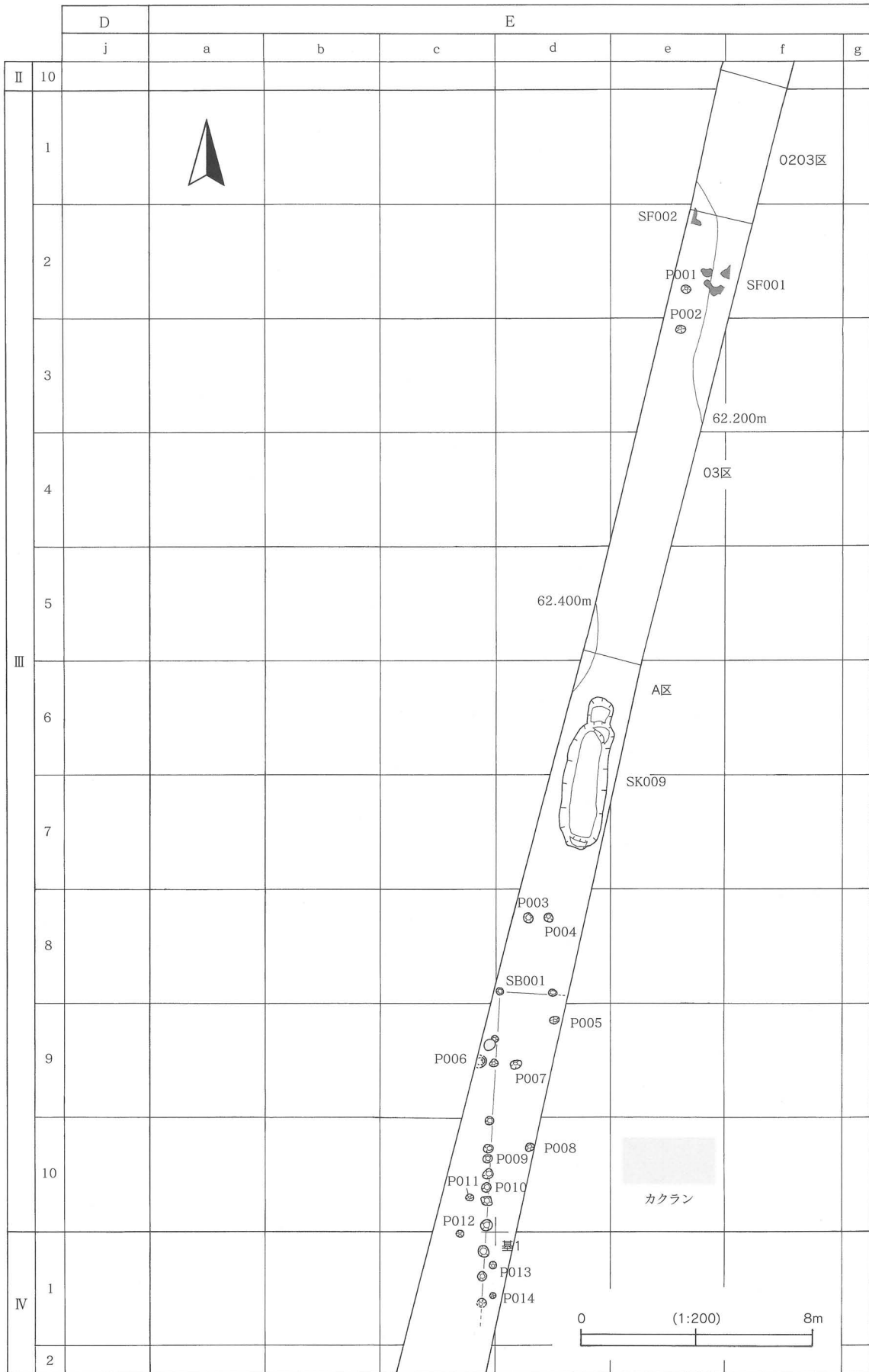
平成18年11月16日より作業員1名体制で整理作業を始め、12月15日に終了した。



第8図 遺構配置図 (全体)



第9図 遺構配置図 (01~02区)

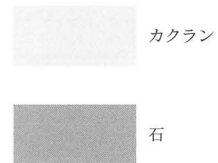
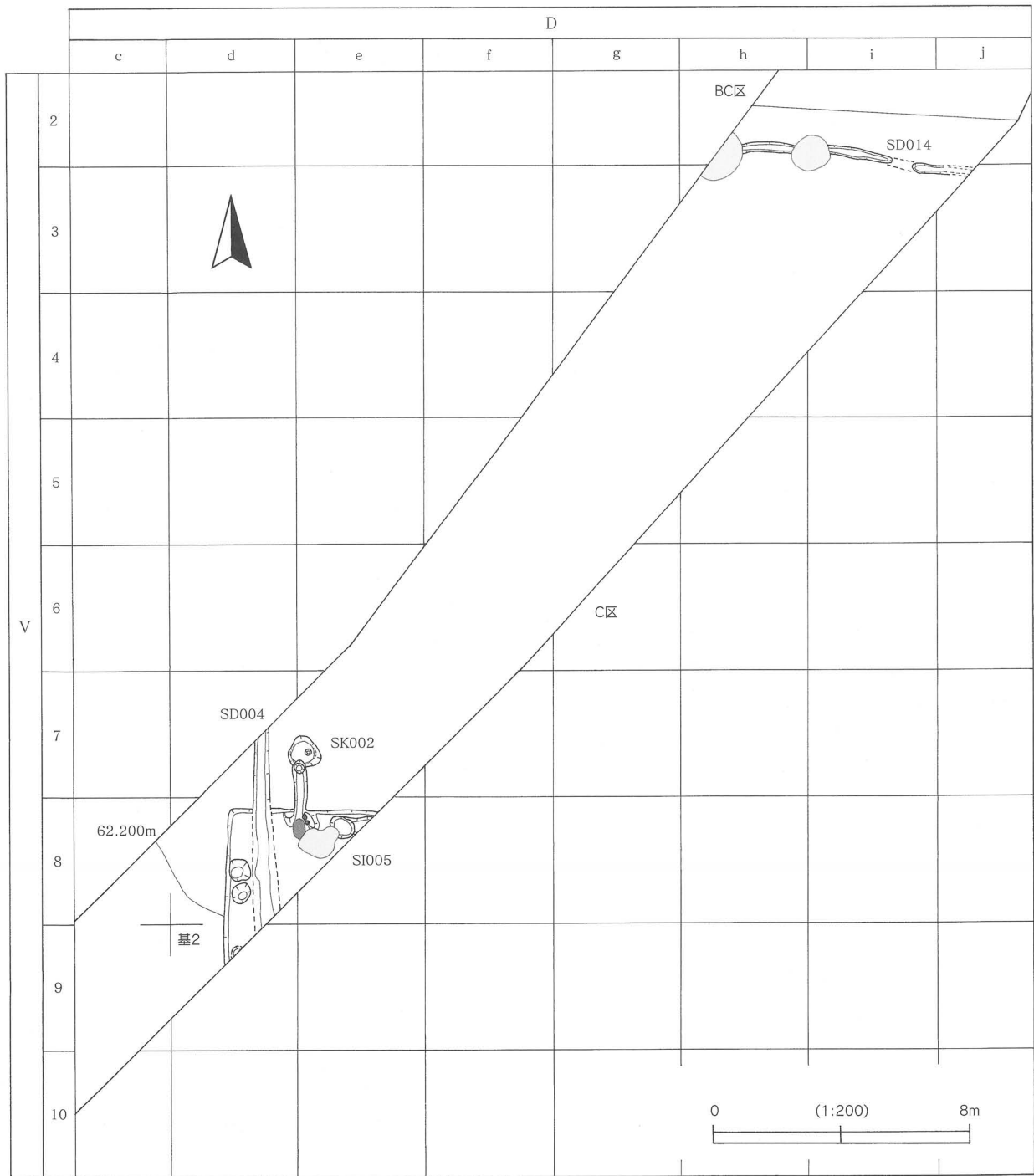


第10図 遺構配置図 (0203区~A区)

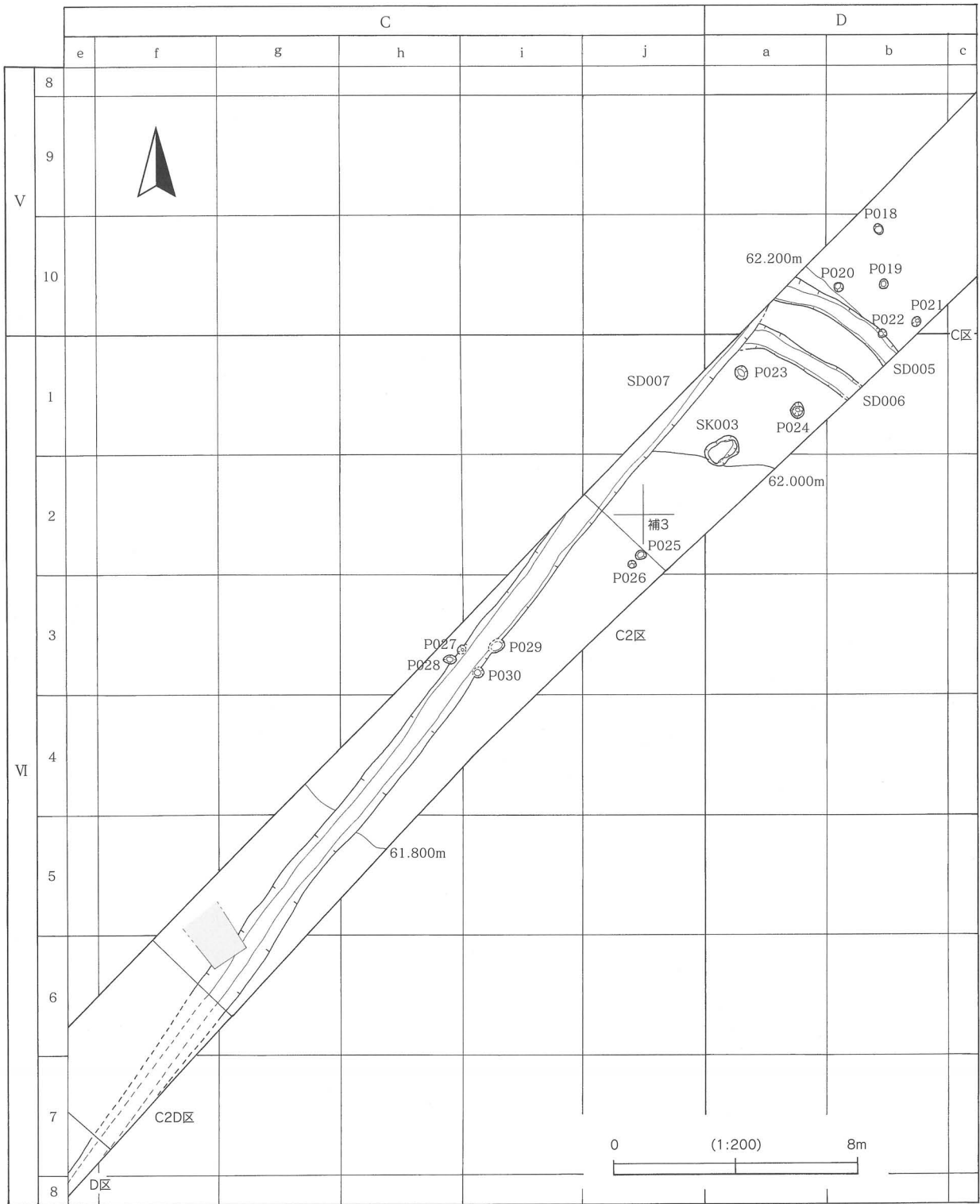




第11図 遺構配置図 (A区~C区)

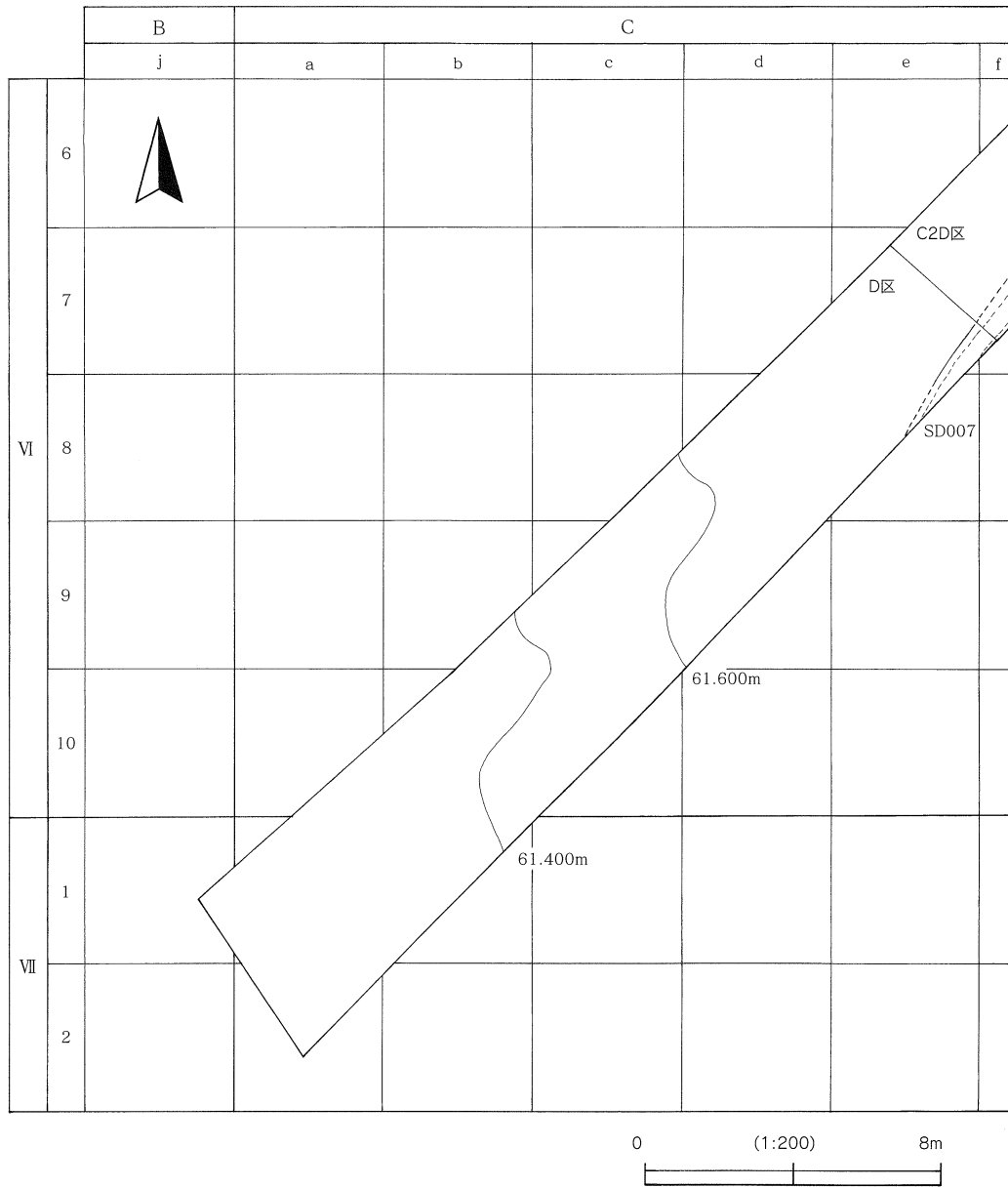


第12図 遺構配置図 (C区)



カクラン

第13図 遺構配置図 (C区~C2D区)



第14図 遺構配置図 (D区)

## IV 検出遺構と出土遺物

### 1 平安時代以前の遺構と遺物

平安時代以前に属する遺構は土坑3基、遺物は縄文土器2片と剥片1点である。今回の調査区全体の地形を概観すると、調査区内の03区からA区周辺とC区中央部が微高地状になっており、調査区の両端は調査区外に向かって傾斜している。また、B区周辺は低地部分となっている。そのなかで、当該期の遺構はC区中央～南側に楕円形基調の土坑が2基、B区の低地部分の周辺部で溝状の土坑1基が検出された。遺物は北側の微高地の北側に当たる02区で出土した。遺構の残存状態は他の遺構と比較すると良好な傾向が見られる。以下、個々の遺構・遺物について記述する。

#### (1) 土 坑

##### SK001土坑

**遺構** (第15図、写真図版5)

<位置>B区南西側のVD10jグリッドに位置する。北側は調査区外に延びており、南側は民家の進入路(BC区)に延びている。南側は部分的に遺構の有無を確認したが、後世の掘削の影響を受けており、確認できなかった。

<重複関係>なし。

<検出面>検出は表土(I層)直下のⅢ層上面で行い、溝状の黒色土の広がりとして確認した。しかし、本調査区は古代から近世の遺物を包含するⅡ層の堆積土が確認できないなど、後世の削平が著しく、本来の掘り込み面かどうかの判断はできない。

<規模・平面形>中央部のみ部分的な検出であるため、全体の形状は不明である。確認された規模は長軸92cm、短軸37cm、検出面からの深さは最大で69.5cmである。

<埋土>泥質の黒色土を主体とし、地山の混入具合や土質によって3層に分層した。炭化物や焼土、地山ブロック等の混入物が少なく、レンズ状もしくは三角形状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と判断できる。

<壁・底の状況>遺構の掘削はⅥ層まで及んでいる。底面はやや南に向かって傾斜しているが、概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<遺構の性格>一部のみ検出であるため、断定はできないが、確認された平面形や短軸と比べて、深さがあることから判断すると、陥し穴である可能性が非常に高い。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、遺構の形状から判断すると縄文時代中期以降と捉えられる。

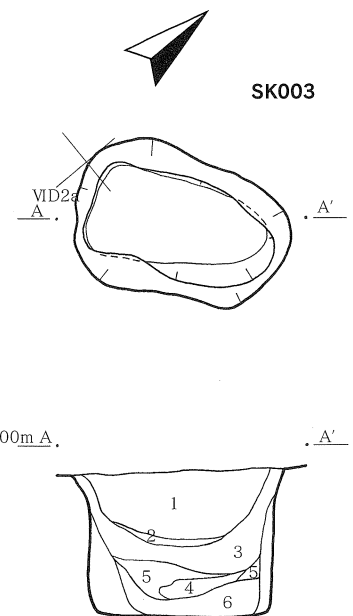
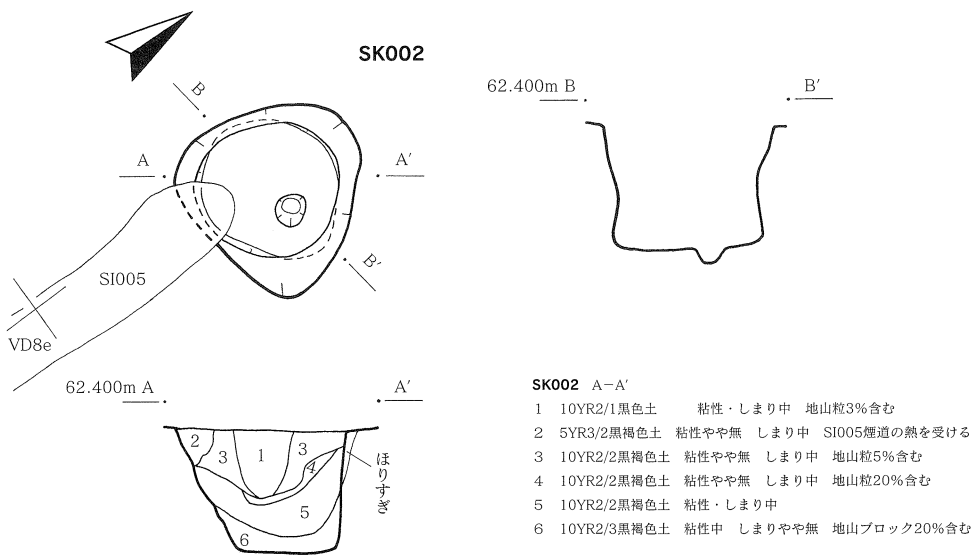
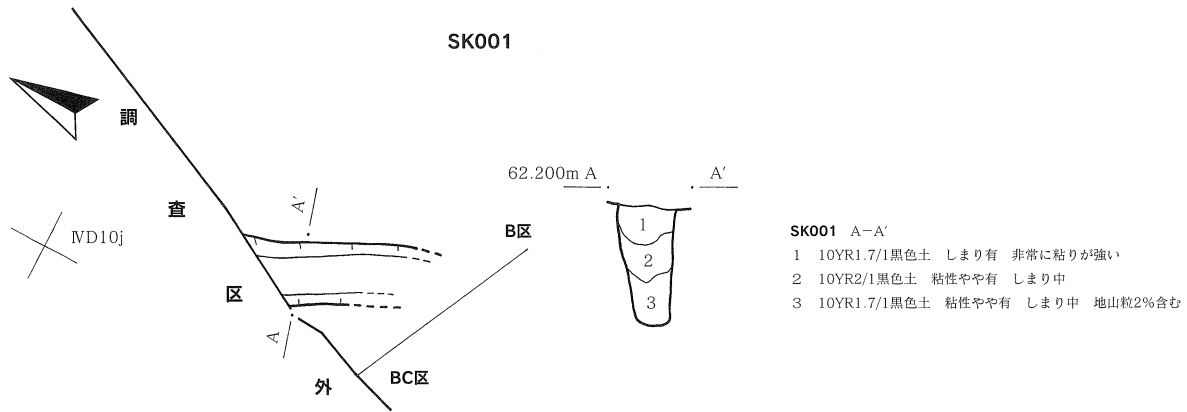
##### SK002土坑

**遺構** (第15図、写真図版5)

<位置>C区中央のVD7eグリッド周辺に位置する。

<重複関係>SI005の煙道部から煙出し部と重複しており、SI005の煙道部壁面の被熱部分が本遺構内にも明瞭に観察できることから、本遺構が切られていることは明白である。





0 (1:40) 2m

第15図 SK001~SK003

<検出面>検出面はⅡ層除去後のⅢ層上面で行い、円形状の黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>長軸101cm、短軸98cmで、平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは最大で67cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、地山の混入具合や土質、被熱具合によって6層に分層した。2層はSI005の煙出し部に非常に近く、煙の持つ熱によって赤化した部分である。最下層は地山ブロックの混入が顕著であるが、その他は夾雑物が少なく、三角形の堆積状況を呈していることから判断すると、自然堆積と捉えられる。

<壁・底の状況>遺構の掘削はⅥ層まで及んでいる。底面は概ね平坦であるが、中央東寄りに長軸18cm、短軸16cm、深さ7cmの副穴を持つ。壁は部分的に中央部がオーバーハングしており、上半は外傾しながら立ち上がる。

<遺構の性格>断面形状から判断すると、貯蔵穴の可能性が高い。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、平安時代以前であることや遺構の断面形状から判断すると、縄文時代に属すると考えたい。

### SK003土坑

**遺構** (第15図、写真図版5)

<位置>C区南側のVID1aグリッド周辺に位置する。

<重複関係>なし。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、楕円形状の暗褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>長軸114cm、短軸82cmで、平面形は楕円形基調である。検出面からの深さは最大で80cmである。

<埋土>黒褐色土から暗褐色土を主体とし、地山の混入具合によって6層に分層した。2～4層はⅢ層に起因する堆積土で、他の遺構では竪穴住居跡の貼床等のみで見られる堆積土である。全体的に夾雑物が少なく、レンズ状もしくは三角形の堆積状況を呈していることから判断すると、自然堆積と捉えられる。

<壁・底の状況>遺構の掘削はⅥ層まで及んでいる。底面は概ね平坦で、壁は開口部直前まで、ほぼ垂直に立ち上がり、開口部は外傾している。断面図には表れないが、北壁や南壁の一部で2・3cmオーバーハングしている。

<遺構の性格>遺構の性格を判断する資料に乏しく、特定できなかった。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、平安時代に属する遺構の埋土と異なり、基本層序Ⅲ層に起因する暗褐色土で埋没していることから判断すると、平安時代より古いことは確実であり、わずかながらでも、遺物が出土している縄文時代に属すると積極的に考えたい。

## (2) 遺構外出土遺物

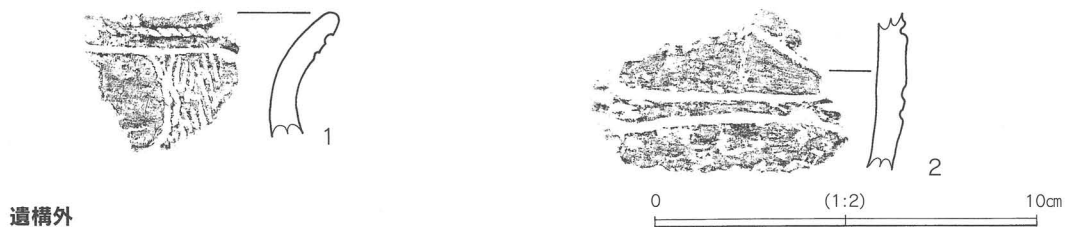
**縄文土器** (第16図、写真図版30)

縄文土器は2点とも02区のSK004の埋土中から出土したものである。出土数が少ないため、分類は行っていない。断片的な資料ではあるため、詳細な時期の特定は難しいが、文様などの特徴から縄文時代後期に属すると考えられる。

1は口縁部の断片的な資料である。口縁は波状を呈するが、小破片であるため、単位までは把握できない。口縁部文様帯は磨消手法によって施文されている。2は体部の断片的な資料で、幅2～3mmの沈線が観察される。

#### 石器 (写真図版41)

赤色頁岩製の剥片が表土中から1点出土した。長さと比較して厚さのある不定形の剥片である。明瞭な調整痕や使用痕跡が認められず、残滓の可能性が高い。



第16図 遺構外出土遺物 (平安以前)

## 2 平安時代の遺構と遺物

平安時代に属する遺構は竪穴住居跡5棟、土坑4基、溝跡1条、焼土遺構2基、不明遺構1基、遺物は土師器、須恵器、土製品、石器、鉄器である。当該期の遺構・遺物は北側の微高地縁辺の02区南側から03区北側に集中する傾向が見られる。この調査区ではⅡ層の堆積がほとんど確認できないか、全く確認できない部分が多く、Ⅲ層上面で検出を行った遺構の多くは本来の掘り込み面かどうかの判断はできなかった。以下、個々の遺構・遺物について記述する。

### (1) 竪穴住居跡

#### SI001竪穴住居跡

##### 遺構 (第17図、写真図版6・7)

〈位置〉02区北側のⅡE6g～7gグリッド付近に位置する。東西両端は調査区外に広がっているが、東側は県道の造成時に掘削を受け、消滅している。

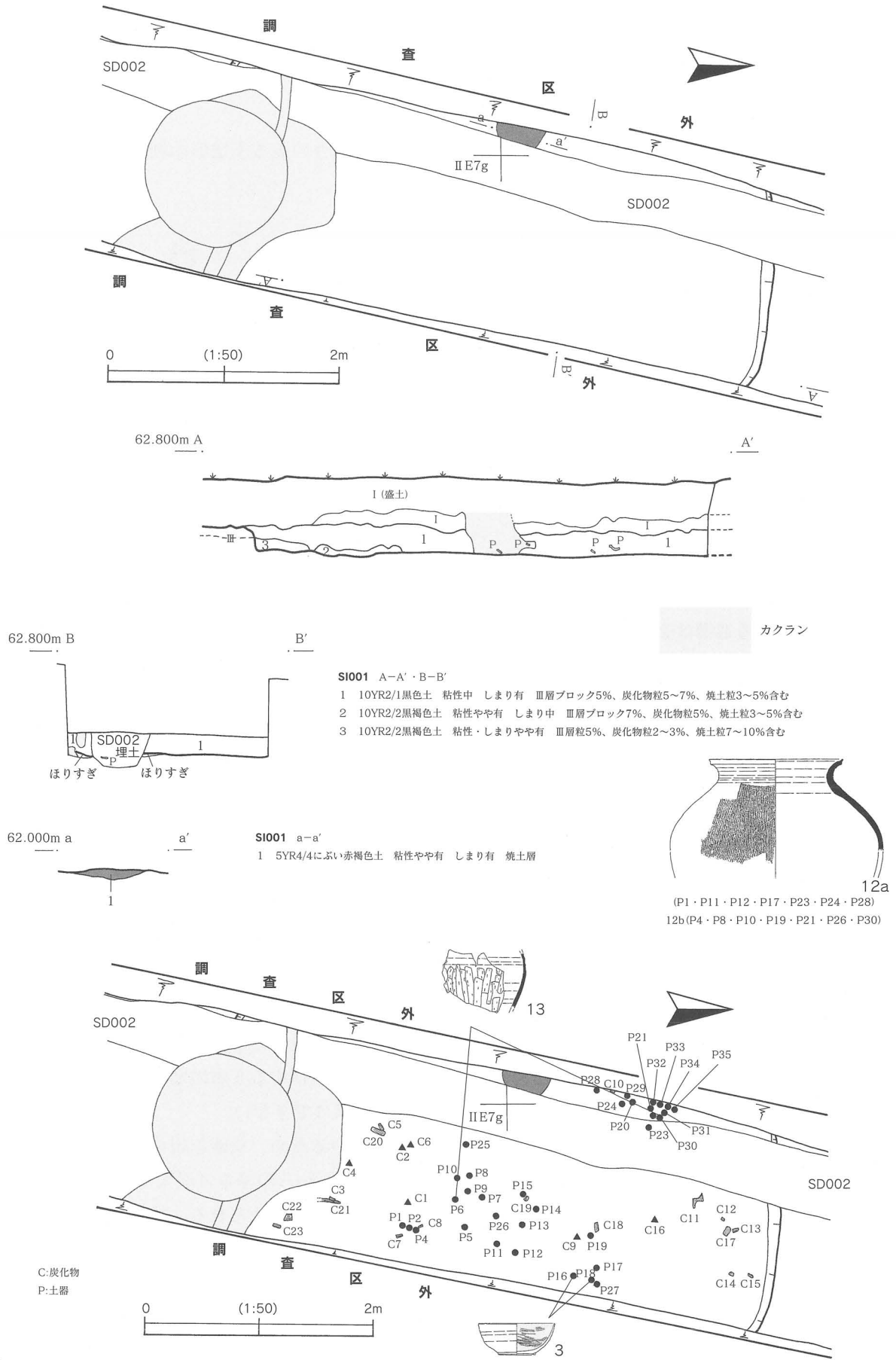
〈重複関係〉SD002が本遺構西側を縦断しており、本遺構が切られている。

〈検出面〉検出は攪乱層及び表土(Ⅰ層)直下のⅢ層上面で行い、炭化物や焼土粒を含む黒色土の広がりとして確認した。しかし、本調査区は古代から近世の遺物を包含するⅡ層の堆積土が確認できないなど、後世の削平が著しく、本来の掘り込み面かどうかの判断はできない。

〈規模・平面形・主軸方向〉東側と西側が調査区外に広がっているため、正確な規模や平面形は不明であるが、確認された規模は北壁1.52m、南壁0.04mで、検出面からの深さは最大で32cmである。検出された南北壁の幅は4.85mであることから、規模は一辺約5mと考えられる。検出された部分から推察すると、平面形は方形を基調としたものと考えられる。検出された北壁と南壁、焼土から判断すると、本遺構の主軸方向はN-82°-W付近となる。

〈埋土〉黒色土～黒褐色土を主体とし、混入物により3層に分層した。2層や3層は北側の一部のみに見られる。全体的には炭化物粒や焼土粒を混入する黒色土のみで埋没しており、人為堆積と判断し

2 平安時代の遺構と遺物



SI001 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1黒色土 粘性中 しまり有 Ⅲ層ブロック5%、炭化物粒5~7%、焼土粒3~5%含む
- 2 10YR2/2黒褐色土 粘性やや有 しまり中 Ⅲ層ブロック7%、炭化物粒5%、焼土粒3~5%含む
- 3 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや有 Ⅲ層粒5%、炭化物粒2~3%、焼土粒7~10%含む

SI001 a-a'

- 1 5YR4/4にふい赤褐色土 粘性やや有 しまり有 焼土層

第17図 SI001

た。黒色土層中には須恵器大甕の破片をはじめ、遺物が多く混入している。出土遺物の位置（床面直上や埋土上位等）に関係なく接合しており、本遺構が廃絶されて、あまり時間をおかずに埋没したものであると思われる。

＜壁・床の状況＞貼り床は敷設されておらず、Ⅲ層面を平坦に整地して、そのまま床面を構築している。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、上部でやや開きながら立ち上がっている。全体的に残存状態が悪い。

＜カマド＞検出できたのは焼土のみで、カマドの燃焼部と考えている。西側で検出されており、カマドは西壁に設置されるものと考えられる。焼土も東側はSD002に切れ、西側は調査区外に広がっているため、正確な規模は不明であるが、確認された範囲は長辺41cm、短辺16cmである。熱を受けてⅢ層が赤化している深さは最大で8cmである。

＜付属施設＞なし。

＜その他＞本遺構の床面直上や埋土下部には板状や棒状の炭化物が混入しており、主なものは、遺物とともに出土状況を図化している。その内、床面直上から出土した炭化物（C22）と2層から出土した炭化物（C1）について、本遺構の年代観を得るために年代測定を行っており、その結果は附編に収めている。

### 出土遺物

＜出土状況＞土師器、須恵器、土製品、焼成粘土塊、鉄器が出土し、出土量は土師器828.5g、須恵器10360.1g、土製品1点、焼成粘土塊1点（写真図版37）、鉄器2点で、土師器と須恵器が中心である。他の遺構と異なり、須恵器の大甕が出土しているため、見かけ上は須恵器の出土量が多いが、その個体を除くと、土師器の割合が高いのは他の竪穴住居跡と同様の傾向である。

床面直上及び1層中位から下位にかけて多量の土器片がほぼ全面で出土しており、主な遺物は番号を付して取り上げを行っている（第17図下）。また、この他にも小破片などは北側埋土や南側埋土として取り上げた遺物も多く、これらの遺物もほとんどが1層から出土したものである。そのため、前者の土器片と後者の土器片が接合し、3や12などの個体に復元されている。

＜土器＞（第28・29図、写真図版30～32）

3～10は土師器坏である。全体的に焼成が悪く、器面が摩滅しているものが多い。手にとると器面がはがれ、掌に褐色の粉がつくものが多い。口縁部から底部まで残存し、少なくとも復元実測できる資料は3・5・6の3点と少なく、多くは口縁部や底部のみの断片的な資料である。

3・4は内面に黒色処理が施されるものである。3は底部から内湾しながら立ち上がり、体部上半ではほぼ直立気味に立ち上がる。口縁部上端の回転ナデは体部のものより強く行われるためか、明瞭に残っている。黒色処理に先行して行われる内面のミガキ調整は内底面を磨いた後、体部をヨコ方向に磨いている。底部は断片的にしか残存していないが、切り離した後、底部外に三角形に粘土を貼り付けて、浅く高台状に作出している。4は断片的な資料のため、全体の器形は不明である。内面のミガキ調整は内底面から放射状に行っている。底部外面は切り離した後、無調整であるが、縁辺は摩滅して、糸切り痕が不明瞭になっている。

5は内面の調整が摩滅によって不明瞭になっているため、黒色処理が施されたか判断できないものである。内面の色調が灰色に近いことや外面の回転ナデの痕跡と比較するときれいな器面をしていることから判断すると、ミガキ調整が行われ、黒色処理が施された可能性が高いと考えられる。口径と比べて底径が小さく、また、口径に比べて器高が低く、底部から口縁部に向かって内湾気味に立ち上がる器形をしており、体部中段には弱い屈曲点を有する。底部外面は切り離した後、無調整である。口縁



部端部は丸みを帯び、緩く外反している。

6～10は内外面とも調整は回転ナデのみのものである。底部の残存する資料はすべて、底部外面は切り離し後、無調整である。6は底部から体部半ばにかけて外反気味に立ち上がり、体部上半は緩やかに内湾しながら立ち上がっている。口縁端部は丸みを帯び、外反気味を呈する。9と10は薄手のもので、口縁部の上端が外反気味になっている。内面は2点とも上部が赤化している。

11は土師器甕の口縁部の断片的な資料である。「く」の字状に屈曲しており、端部はナデにより平坦な面を形成している。

12は須恵器大甕である。床面直上や埋土中から多量の破片が出土しており、口縁部から体部上半の約1/3ずつの2点に復元され、a、bとした。また、I層中から同一個体の可能性が非常に高い口縁部片が出土し、cとして登録した。口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がり、端部で肥大化している。端部の断面形は布などで強くナデが施されるため、凹状を呈している。10cの外面には山波状のヘラ書が施されている。

13は須恵器の甕もしくは壺と考えられる資料の体部上半である。断片的な資料であるため、全体の器形は不明である。ロクロ整形後、タテ方向にヘラナデ状のケズリが施されている。

<土製品> (写真図版37)

断片的な資料であるため、器種を特定することができなかった土製品が埋土から1点出土している。

<鉄器> (第32図、写真図版38)

鉄器は刀子と鎌が1点ずつ出土している。

16は刀子で両端を欠損している。刀身部から茎部と茎部のみがあり、接合部が不明瞭であるため、前者をa、後者をbとして登録した。刀身部を大きく欠損しているため、器形は不明であるが、残存する部位から判断すると、長三角形を呈するものと考えられる。関部は両関であるが、刃関は不明瞭である。

17は鉄製の鎌で、刃部の断片的な資料である。そのため、基部側の形状は不明である。刃部は湾曲しており、曲刃鎌と考えられる。

**時期** 出土遺物から判断すると平安時代Ⅱ期（10世紀前葉～中葉）に属すると考えられる。

## SI002竪穴住居跡

**遺構** (第18図、写真図版8)

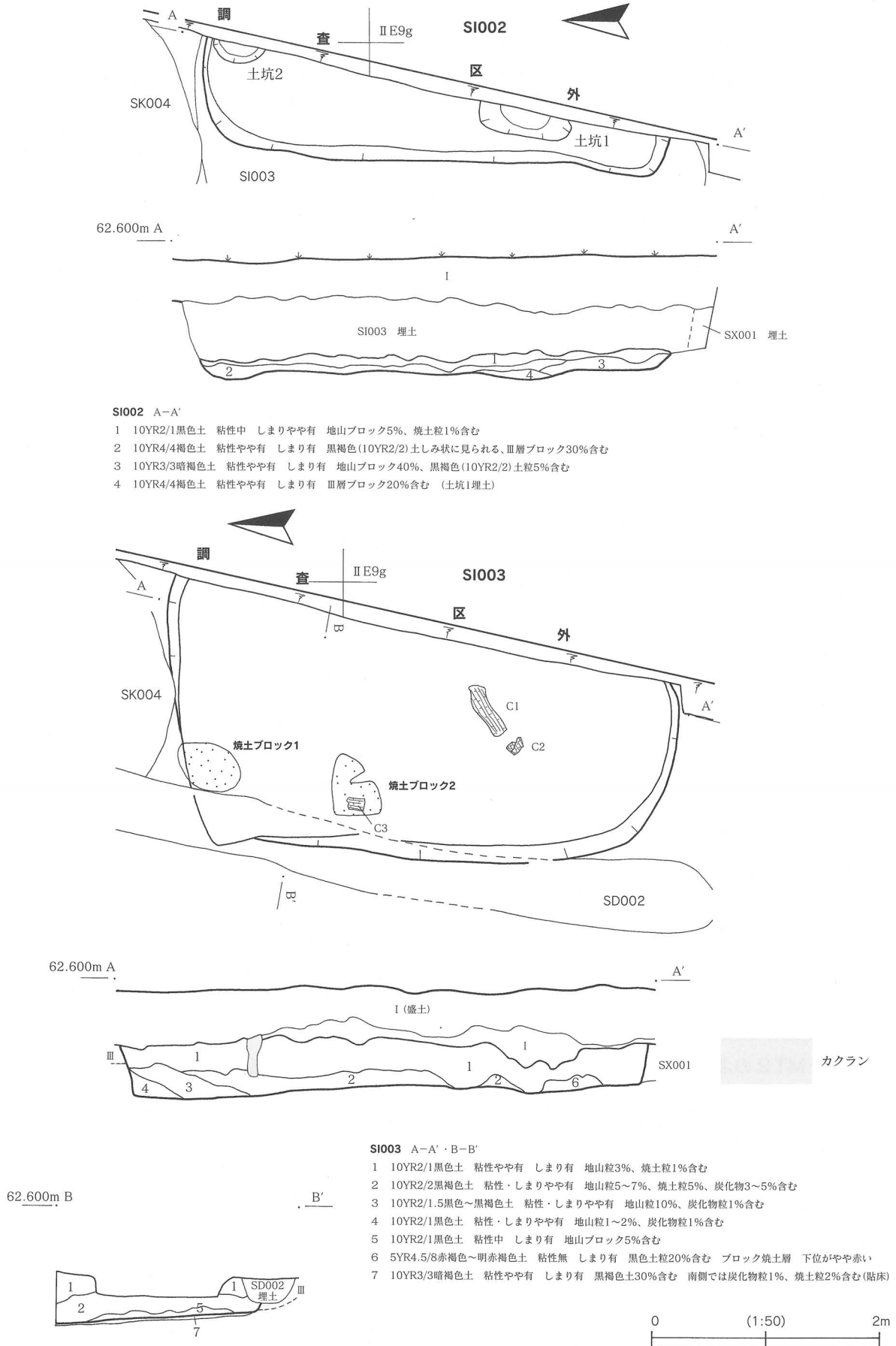
<位置>02区南側のⅡE8f～9fグリッド付近に位置する。東側は調査区外に広がっているが、県道の造成時に掘削を受け、消失している。

<重複関係>SI003と重複しており、本遺構が切られている。

<検出面>SI003の底面で黒色土の広がりとして確認した。

<平面形・規模・主軸方向>遺構の西側のみの検出であるため、正確な規模や形状は不明であるが、確認された規模は北壁0.8m、南壁0.3m、西壁3.25mである。SI003の構築によって上部は破壊されており、多少大きくなるのは確実であるが、残存する西壁から判断すると、規模は一辺3.5m前後と考えられる。検出面からの深さは最大で21cmである。検出された部分から推察すると、平面形は方形を基調したものと考えられる。遺構の主軸方向はカマドが検出されなかったため、確定できない。

<埋土>色調や混入物により3層に分層した。1層は地山ブロックや焼土粒が混入する黒色土で、全面に薄く見られる。2層はⅣ層に起因すると考えられる褐色土を主体とする堆積土で、黒褐色土やⅢ層ブロックが混入する。3層はⅢ層に起因すると考えられる暗褐色土を主体とする堆積土で、地山ブロックが多く混入する。南側のみに見られる。堆積土は全体的に混入物が多く、多少波打っているも



第18図 SI002・SI003

の、水平に堆積していることから、人為堆積と判断した。

<壁・床の状況>貼り床は敷設されておらず、Ⅳ層面を平坦に整地して、そのまま床面を構築している。底面からなだらかに立ち上がる壁が確認できるが、残存状態は悪い。

<カマド>調査した範囲では検出されなかったため、詳細は不明である。東側の断面を観察すると、SI003の構築時や道路造成によって消失している可能性が非常に高い。

<付属施設>土坑を2基検出した。土坑1は南西に位置する。東側は調査区外に広がっている。確認された規模は長軸67cm、短軸20cmで、深さは最大で7cmである。Ⅳ層に起因する褐色土で埋没しており、Ⅲ層ブロックが多く混入し、人為堆積と判断した。土坑2は北東に位置する。東側は土坑1と同様に、調査区外に広がっている。確認された規模は長軸38cm、短軸14cmで、深さは最大で6cmである。堆積土は住居の2層と同じで、分離することはできなかった。2基とも底面はほぼ平坦で、壁は底面からなだらかに立ち上がっている。全体的に断片的な検出であるため、これらの土坑がどのような性格を有するものか判断することはできなかった。

### 出土遺物

<出土状況>遺構の残存状態が悪いため、遺物の出土量は土師器84.2gと非常に少なく、口縁部から底部まで復元できた資料はない。

<土器> (第29図、写真図版32)

18・19は土師器坏である。18は内外面とも調整は回転ナデのみのものである。体部上半から口縁部の資料であるため、全体の器形は不明であるが、全体的に薄手の作りで、口縁部に向かって直線的に外傾しながら立ち上がっている。口縁端部は丸みを帯び、外反気味である。

19は内面に黒色処理が施されるものである。本調査区から出土した土師器のなかでは、厚手で底径が広いものである。黒色処理に先行して行われる内面のミガキ調整は内底面を放射状に磨いた後、体部をヨコ方向に磨いている。底部外面は切り離した後、無調整である。

**時期** 出土遺物が少ないため、断定はできないが、平安時代Ⅲ期（10世紀中葉）に属すると考えられる。

### SI003竪穴住居跡

**遺構** (第18図、写真図版9)

<位置>02区南側のⅡE8f～9fグリッド付近に位置する。東側は調査区外に広がっているが、県道の造成時に掘削を受け、消失している。

<重複関係>本遺構の西側をSD002が縦断しており、本遺構が切られている。その他にも北側ではSK004と、南側ではSX001と、プラン内ではSI002と重複しており、SI002、SX001を切っている。SK004との関係は重複する部分がごくわずかであるため、判断できなかった。

<検出面>MT2の北側で黒褐色土中にブロック焼土が検出され、竪穴住居跡ではないかと推定して広げたところ、Ⅲ層上面で黒色の方形基調のプランを確認したため、竪穴住居跡と確信した。結果論であるが、ブロック焼土が検出された面は堆積土の2層上面であり、掘り過ぎていた。

<平面形・規模・主軸方向>東側が調査区外に広がっているため、正確な規模や形状は不明であるが、確認された規模は北壁1.87m、南壁1.24m、西壁3.46mで、検出面からの深さは最大で42cmである。検出された南北壁の最大幅は3.58mであることから、規模は一辺4m前後と考えられる。検出された範囲から推察すると、平面形は方形基調のものと考えられる。遺構の主軸方向はカマドが検出されなかったため、確定できない。

<埋土>黒色土を主体とし、土質や混入物の違いにより6層に分層した。北東隅、西側中央、南側の

床面直上や堆積土下部で廃棄焼土のブロックが検出された。底面直上の堆積土は地山ブロックが少量混入し、マウント状の堆積状況を呈している。3層・4層は北壁周辺のみを確認される。地山粒の混入具合により容易に分層可能である。全体的には炭化物粒や地山粒の混入が確認できるものの、レンズ状・三角形の堆積状況を呈しており、自然堆積と考えられる。しかし、床面直上にはマウント状の堆積状況を示すものや廃棄焼土ブロックが堆積しており、埋没過程のごく初期段階では人為的な堆積をしていたものと考えられる。

〈壁・床の状況〉Ⅲ層まで掘り込み、黒褐色土が多く混入する暗褐色土の掘り方埋土を床材として平坦な床面を構築している。SD002の構築によって破壊されているため、必ずしも良好な状態で残存していないが、確認できる部分の壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈カマド〉調査した範囲では検出されなかった。東側の断面を観察すると、道路造成によって消失している可能性が非常に高い。

〈付属施設〉なし。

〈その他〉本遺構の床面直上からは比較的幅のある板状の炭化物が出土しており、出土状況を図化している。その内、床面直上から出土した炭化物（C2）の年代測定を行っており、その結果は附編に収めている。

### 出土遺物

〈出土状況〉出土した遺物は土師器、焼成粘土塊で、出土量は土師器815.2g、焼成粘土塊2点（内1点を写真図版37に掲載）である。遺構の年代観を直接的に示す資料は小破片しかなく、掲載に耐える資料は埋土から出土したものだけで、復元実測が可能な個体は20の1個体のみである。

〈土器〉（第29図、写真図版32）

20は土師器坏である。内外面とも回転ナデのみのものである。底部から口縁部に向かって直線的に開きながら立ち上がっており、口縁端部はそのままつまみ上げたような形状をしている。内面にはタール状の付着物が観察される。底部は穿孔されたような痕跡が観察されるが、内面は摩滅して不明瞭である。廃棄に伴う儀礼が想定される。底部外面にはスノコ状の圧痕が観察される。

21～24は土師器甕である。22と23は口縁部が短く、22はやや外反しながら、23は直線的に開きながら立ち上がる。22の外面には輪積みの痕跡が明瞭に観察でき、粗雑な印象を受ける。24は体部の断片的な資料である。厚手で、16と同様、粗雑な印象を受ける。21は底部のみの断片的な資料である。内底面にはとぐろ状の成形痕が明瞭に観察される。底部外面は切り離し後無調整である。

**時期** 出土遺物が少ないため、断定はできないが、平安時代Ⅲ期（10世紀中葉）に属すると考えられる。

### SI004竪穴住居跡

**遺構**（第19図、写真図版10・11）

〈位置〉B区北西のIVE7aグリッド付近に位置する。西側は調査区外に広がっている。また、部分的に後世の掘削の影響を受け、消失している。

〈重複関係〉SK007と重複しており、本遺構が切られている。

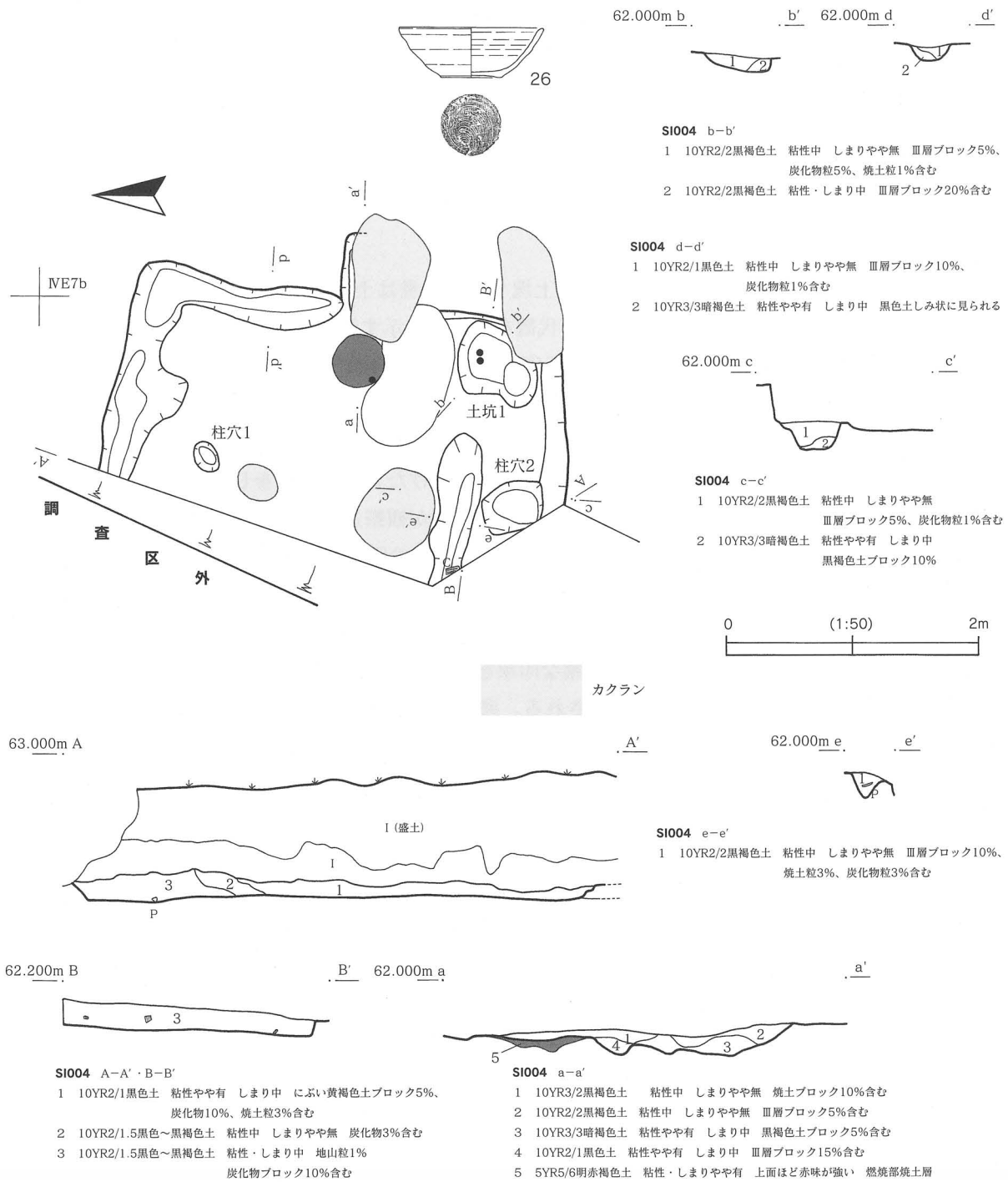
〈検出面〉検出はⅢ層上面で行い、黒色土の広がりとして確認した。

〈平面形・規模・主軸方向〉西側が調査区外に広がっているため、正確な規模や形状は不明であるが、確認された規模は北壁1.69m、南壁1.38m、東壁3.36mで、検出面からの深さは最大で25cmである。検出された南北壁の最大幅が3.7mであることから、規模は一辺4m前後と考えられる。検出された範囲から推察すると、平面形は方形基調のものと考えられる。遺構の主軸方向は検出された部分から

判断すると、N-95°-Eである。

<埋土>黒色土を主体とし、混入物の違いによって3層に分層した。全体的に炭化物粒や焼土粒の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

<壁・床の状況>貼り床は敷設されておらず、Ⅲ層面を平坦に整地して、そのまま床面を構築している。検出時点の床面は平坦であったが、度重なる降雨で水没し、排水作業を繰り返した結果、やや凸凹になってしまった。残存状態が悪く、壁の立ち上がりを確認できたのは南側だけで、底面からなかなか立ち上がる。北壁から煙道部より北側の東壁にかけて周溝を検出した。幅は最大で40cm、深さは最大16cmである。炭化物やⅢ層ブロックが混入する黒色土で埋没していた。周溝の底面付近には部



第19図 SI004

分的であるが、Ⅲ層に起因すると考えられる暗褐色土が堆積しており、壁の崩落土と判断した。

<カマド>東壁中央に設置され、煙道方向は主軸方向より北に6°振れる。袖をはじめ、構築物は残存しておらず、確認できたのは、燃焼部と煙道部の北側の一部である。燃焼部の南側はSK007と重複しており、消失している。確認された範囲は東西方向43cm、南北方向42cmで、焼土層の厚さは最大5cmである。煙道は後世の掘削によって大部分が消失しており、北側の一部が53cm確認された。煙道の堆積土は4層に分層したが、燃焼部直上の堆積土である1層以外には焼土の混入は見られず、熱を受けたことによる壁の赤化も確認できなかった。カマド周辺には袖の構築土と考えられる堆積土も見られず、明瞭なカマドを持たなかった可能性も考えられる。

<付属施設>上記以外に本遺構に付属する施設として土坑1基、柱穴2個、溝を検出した。土坑は南東隅に位置する。一部を後世の掘削によって壊されているが、確認された規模は長軸72cm、短軸57cm、床面からの深さは最大で27cmである。土坑の底面直上で26の土師器坏が出土していることやカマドの脇に位置することから考えると、貯蔵穴の可能性が高い。柱穴は北側で1個、南側際で1個を検出し、前者を柱穴1、後者を柱穴2とした。規模は柱穴1が長軸26cm、短軸19cm、深さは8cm、柱穴2が長軸52cm、短軸40cm、深さ28cmである。2個とも柱痕は検出されなかったため、柱の規模は不明である。規模から判断すると、柱穴2が主柱穴の可能性が高いが、調査区外にも遺構が広がるため、配置等の詳細は不明である。柱穴2の北側で南壁と併行する溝を検出した。検出された規模は長さ123cm、幅37cm、深さ23cmである。断面形はV字状を呈し、焼土粒や炭化物粒が混入する黒褐色土で埋没している。仕切り溝と判断したが、東側が調査区外に延びているため、どのような間取りになるか不明である。

<その他>本遺構の堆積土中には、比較的大きな板状の炭化物が出土しており、出土状況を図化している。その炭化物の年代測定を行っており、結果は附編に収めている。

### 出土遺物

<出土状況>出土した遺物は土師器、焼成粘土塊、鉄器で、出土量は土師器476.2g、焼成粘土塊1点、鉄器24点である。遺構の残存状態が悪いため、付属施設の土坑や住居内溝（間仕切り溝？）の埋土から出土した26・29～31を除くと、出土量は少ない。また、残存状態に影響しているためか、全体の器形がわかる資料は26の土師器坏しかない。

<土器>（第29図、写真図版32・33）

26・27は土師器坏である。2点とも内外面とも回転ナデのみのもので、底部外面は切り離し後、無調整である。26は底部から口縁部に向かってわずかに内湾しながら立ち上がっており、口縁端部はつまみ上げたような形状をしている。内底面には煤状の付着物が広範囲に確認できる。27は底部から直線的に外傾しながら立ち上がっているが、口縁部が欠損しているため、全体の器形は不明である。

28～31は土師器甕である。28は小形の甕で、全体的に薄手である。調整は内外面とも回転ナデのみである。底部から内湾気味に立ち上がるが、口縁部形状をはじめ、全体の器形は不明である。底部外面は切り離し後、縁辺に粘土を貼り付け、高台状に作出している。29・30は口縁部が短い甕の断片的な資料である。29は薄手のもので頸部から強く外反し、上端は直立気味になっている。端部の断面形は強くナデが施されるため、凹状を呈している。30は頸部のナデが強く施されるため、凹状を呈している。口縁上端は直立気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びている。31は体部の断片的な資料である。外面はタテ方向のケズリ、内面はヨコ方向のナデ調整が観察される。

<鉄器>（第32図、写真図版38・39）

鉄器は不明鉄製品1点と釘が23点出土している。



**時期** 出土遺物から判断すると、平安時代Ⅱ期（10世紀前葉～中葉）に属すると考えられる。

### SI005 竪穴住居跡

**遺構**（第20～22図、写真図版12～14）

<位置>C区中央のVD8dグリッド付近に位置する。南東側は調査区外（県道下）に広がっている。南東側の法面を観察すると、遺構検出面から現道まで深さがあるため、少なくとも、床面付近は残存するものと思われる。

<重複関係>SK002、SD004と重複しており、本遺構がSK002を切っており、SD004に切られている。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、黒色土の広がりとして確認した。

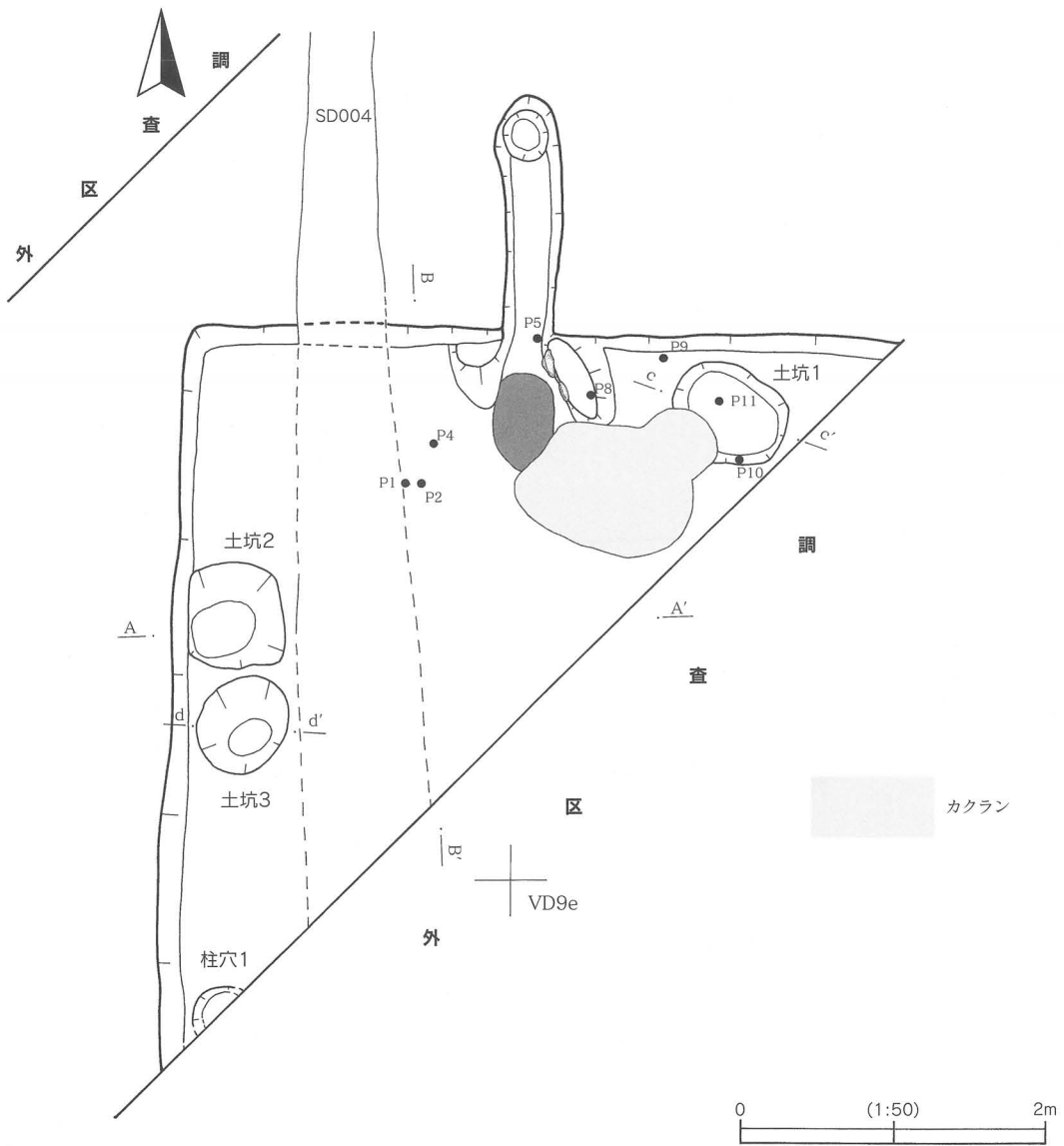
<平面形・規模・主軸方向>南東側が調査区外に広がっているため、正確な規模や形状は不明であるが、確認された規模は北壁4.64m、西壁4.95mで、検出面からの深さは最大で36cmである。検出された範囲から推察すると、平面形は方形を基調としたものと考えられる。遺構の主軸方向は、検出された西壁から判断すると、N-3°-Eであるが、東壁がまったく検出されなかったため、多少前後する可能性を含んでいる。

<埋土>黒色土～黒褐色土を主体とし、土質や混入物の違いにより11層に分層した。地山粒が多少混入するものの、全体的にレンズ状・三角形の堆積状況を呈しており、自然堆積と判断した。

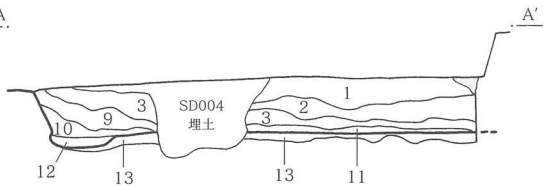
<壁・床の状況>Ⅳ層まで掘り込み、地山ブロックが混入する黒色～黒褐色土や地山ブロックが混入するⅢ層に起因する暗褐色土の掘り方埋土を床材として平坦な床面を構築している。壁は平坦な床面から直線的に開きながら立ち上がっている。今回の調査ではもっとも良く残存している遺構であった。

<カマド>北壁に設置される。本遺構の規模が少なくとも一辺5m以上であることから、中央より西寄りに設置されているものと推察される。煙道方向は主軸方向と同じである。今回の調査では唯一、袖が検出された竪穴住居跡であるが、残存状態はあまり良好とは言えない。カマドを構築する前段階にカマドを構築する場所周辺の床面を貼り床ごと浅く掘りくぼめ、黒褐色土の上にⅣ層に起因する褐色土を貼り付けて、床面を再構築している。カマドの袖は扁平な板状の河原石（北上山地産の安山岩）やブロック状の角礫（奥羽山脈産の安山岩）を芯材とし、地山を混ぜた黒褐色土で構築している。燃烧部も検出されたが、南東隅が後世の掘削によって破壊されている。確認された範囲は長軸64cm、短軸41cmで、焼土層の厚さは最大で9cmである。燃烧部ではロクロを使用した土師器甕の底部（58）や甕の体部片が出土しているが、支脚と断定できる資料は確認されていない。煙道の全長は160cmで、下降しながら先端の煙出し孔に向かって延びている。東西ともに煙出し孔から南の壁面が87～113cmの範囲にわたってスジ状に熱を受けて赤化している。煙道部の堆積土には天井部の崩落土と考えられるⅣ層に起因するにぶい黄褐色土が厚く堆積しており、煙道部は刳り貫き式であったと考えられる。この堆積土の下位が赤化しているのは天井部であったことを裏付けるものと思われる。煙出し孔の規模は長軸44cm、短軸30cmである。底面からは土師器甕（61）が出土した。カマドの構築方法をみると、検出されたカマドは新しく作り変えられたカマドであり、遺構外に広がっている東壁もしくは南壁に古い時期のカマドが少なくとも1基は存在するものと思われる。

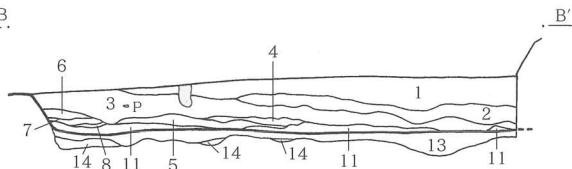
<付属施設>上記以外に本遺構に付属する施設として土坑3基、柱穴1個、周溝の一部を検出した。北東に位置するものを土坑1、西壁中央の北側から土坑2、土坑3とした。土坑1はカマドの東脇に位置し、貯蔵穴と考えられる。一部を後世の掘削によって消失しているが、確認された規模は長軸78cm、短軸62cmで、床面からの深さは最大で14cmである。土坑2は平面形が方形を呈するもので、長軸71cm、短軸63cmで、底面からの深さは最大で14cmである。土坑3は平面形が楕円形を呈するもので、



62.800m A.



62.800m B.

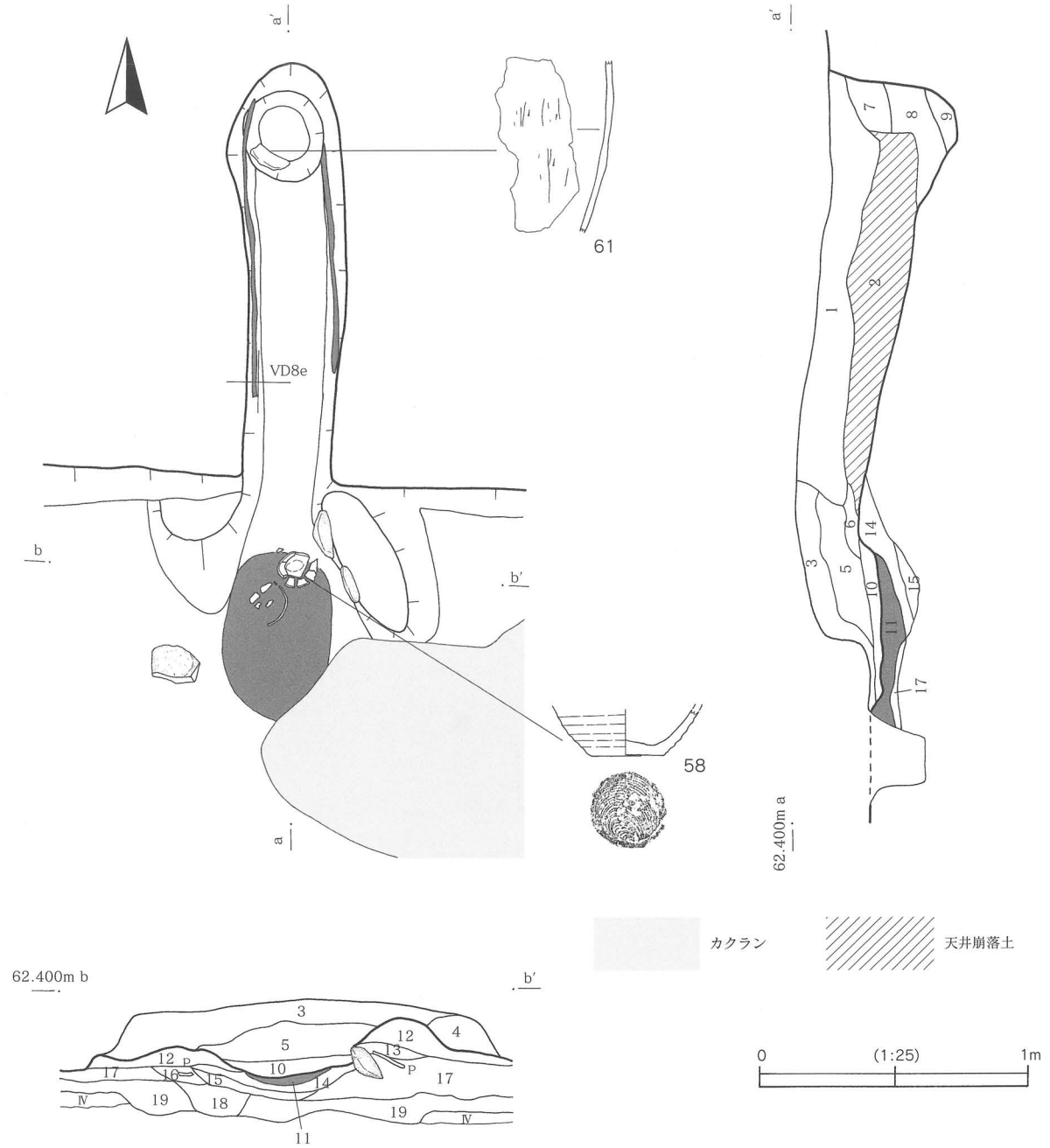


S1005 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまり有
- 2 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり中
- 3 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや有 地山粒1~2%含む
- 4 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり中 地山粒1%未満含む
- 5 10YR2.5/1.5黒褐色土 粘性中 しまり有 地山粒1~2%含む
- 6 10YR3/2黒褐色土 粘性中 しまり有
- 7 10YR2/1黒色土 粘性中 しまり有
- 8 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまり有 地山粒1%未満含む
- 9 10YR2/1.5黒色~黒褐色土 粘性中 しまりやや有 地山粒3%含む
- 10 10YR2/1.5黒色~黒褐色土 粘性中 しまりやや有 地山粒ブロック5%含む
- 11 10YR3/2.5黒褐色~暗褐色土 粘性・しまりやや有 鹿の子状に堆積している
- 12 10YR2/2黒褐色土 粘性やや有 しまり中 地山ブロック10%含む 炭化物粒5~7%含む (土坑2埋土)
- 13 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまりやや有 黒褐色土20%、地山ブロック20%含む (貼床)
- 14 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまり中 地山ブロック30%含む (貼床)

第20図 S1005 (1)

2 平安時代の遺構と遺物

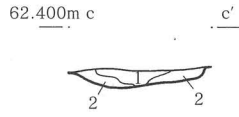


SI005 a-a'・b-b'

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり有 にぶい黄褐色土(φ10~15mm)1%含む
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性無 しまり有 層中~下位は焼土状になっている
- 3 10YR2/2黒褐色土 粘性やや有 しまり有 にぶい黄褐色土粒1%未満含む
- 4 10YR3/1黒褐色土 粘性やや有 しまり有 にぶい黄褐色土1~2%含む
- 5 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり有 にぶい黄褐色土5%含む
- 6 10YR4/2灰黄褐色土 粘性・しまり有
- 7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性無 しまりやや有 にぶい褐色焼土ブロック20%含む
- 8 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまりやや有 にぶい褐色焼土粒1%未満含む
- 9 10YR3/1黒褐色シルト 粘性有 しまり無 明黄褐色土10%混じる
- 10 10YR2/3黒褐色土 粘性中 しまりやや有 明赤褐色土ブロック10%、炭化物粒を10%含む

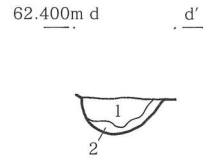
- 11 2.5YR4/6赤褐粘質土 粘性・しまり有 焼部焼土層
- 12 10YR3/1黒褐色土 粘性やや有 しまり有 にぶい黄褐色土10%含む (袖構築土)
- 13 10YR3/2黒褐色土 粘性中 しまりやや無 黒色土20%、焼土粒5%含む (袖構築土)
- 14 7.5YR4/4褐色粘質土 粘性やや有 しまり中 暗褐色土ブロック30%混入
- 15 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや無 地山粒10%、炭化物粒10%含む
- 16 10YR3/2黒褐色土 粘性・しまり中 炭化物粒20%、焼土粒5%含む
- 17 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまりやや有 10YR3/2黒褐色土20%、地山ブロック20%含む (貼床)
- 18 10YR3/2黒褐色土 粘性中・しまりやや無 地山粒20%、10YR2/2黒褐色土を10%含む
- 19 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまり中 地山ブロック30%含む (貼床)

第21図 SI005 (2)



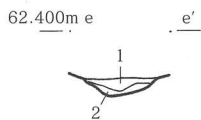
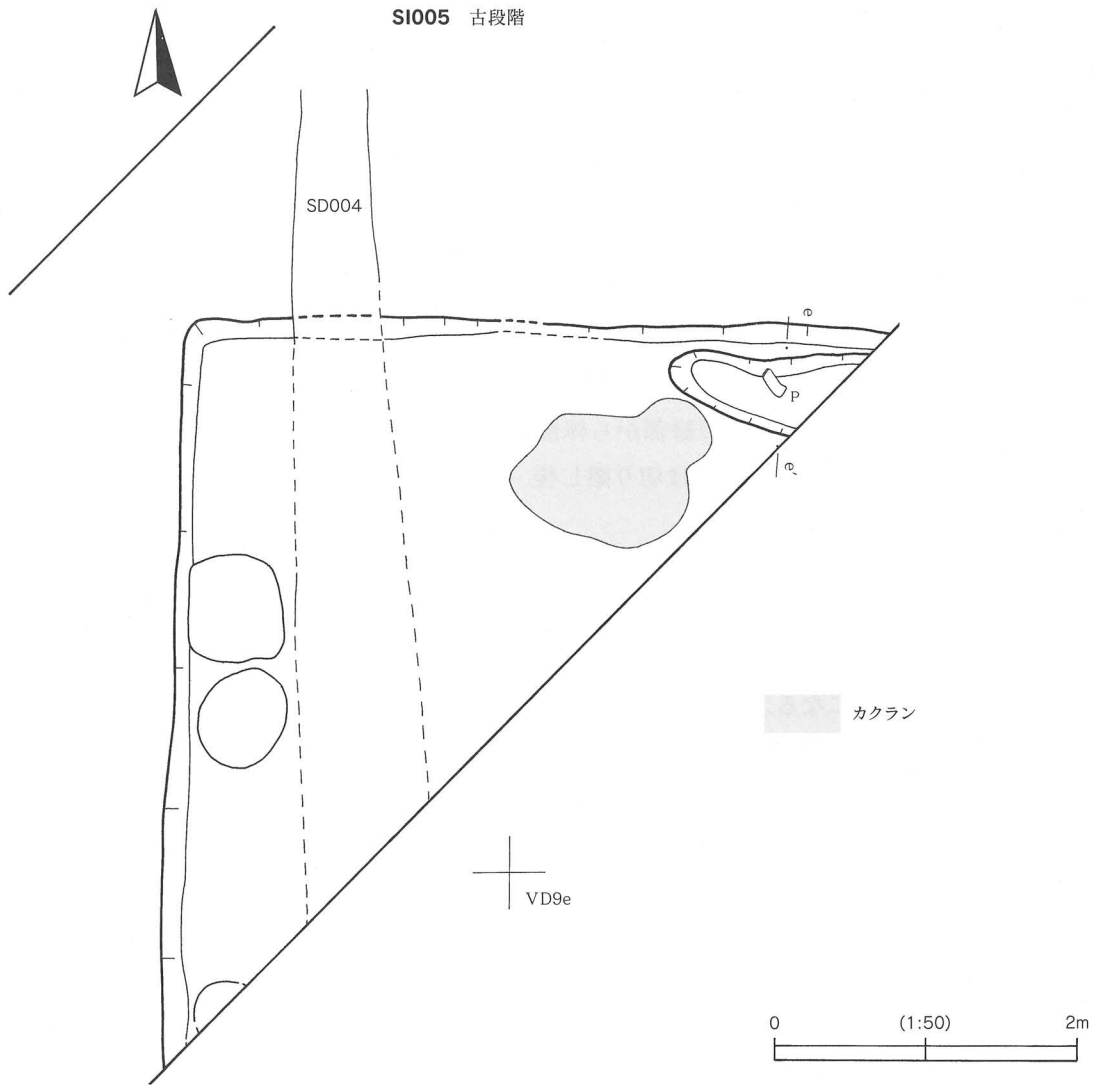
SI005 c-c'

- 1 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまり中 にぶい黄褐色土(φ2~3mm)5%含む
- 2 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや無 にぶい黄褐色土30%含む



SI005 d-d'

- 1 10YR2/1黒色土 粘性やや無 しまり中 地山ブロック20%含む
- 2 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや有 10YR4/4褐色土と6:4の割合で混合地山ブロック10%含む



SI005 e-e'

- 1 10YR2/1黒色土 粘性中 しまりやや無
- 2 10YR2/3黒褐色土 粘性・しまり中 褐色土粒40%、地山粒10%含む

第22図 SI005 (3)

長軸67cm、短軸56cmで、底面からの深さは最大で27cmである。柱穴は南西隅で検出した。南東側が調査区外に広がっており、規模や形状は不明である。周溝は北壁東側に沿って検出されたが、東側は調査区外に延びている。検出された規模は長さ130cm、幅55cmで、底面からの深さは最大で15cmである。周溝は土坑1の構築によって壊されている。

<その他>前述のとおり、本遺構はカマドの作り変えが行われていた可能性が高く、検出されたカマドを持つ時期のものを新段階、それ以前のものを古段階とした。古段階に伴うものは北壁東側に沿って検出された周溝である。

### 出土遺物

<出土状況>出土した遺物は土師器、須恵器、石器である。出土量は土師器1479.4g、須恵器13.3g、石器1点で、圧倒的に土師器の割合が高く、そのなかでも、甕類の割合が高いが、全体の器形がわかる資料は皆無である。

カマドやその周辺から出土した土師器片が多く、57～60・63等に復元された。

<土器> (第30図、写真図版33・34)

56・57は土師器坏である。56は内面に黒色処理が施されるものである。口縁部を欠損しているため、全体の器形は不明であるが、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がっている。黒色処理に先行して行われる内面のミガキ調整は内底面を磨いた後、体部をヨコ方向に磨いている。底部外面は切り離した後、再調整が行われている。

57は内外面とも回転ナデのみのものである。非常に薄手のもので、緩やかに内湾しながら立ち上がり、端部は外反気味になっている。口縁部の立ち上がりが直角に近いので、口径と底径の差が少ない器形を呈するものと捉えられる。

58～67は土師器甕である。58は口縁部から体部を大きく欠損しているため、全体の器形は不明である。ロクロ整形のもので、底部外面は切り離した後、無調整である。内底面は中央部がマウンド状に盛り上がっている。

59・64～66は口縁部の残存する資料で、すべて口縁部の短いものである。断片的な資料であるため、断定はできないが、ロクロ整形のものと考えられる。59・65・66の口縁部は「く」の字状に屈曲しているが、特に65と66は屈曲が強い。端部は基本的に平坦であるが、ナデが強く施されると、断面形が凹状を呈するようになる。64は頸部から外傾し、端部は上方につまみ出している。

60～62・67は体部の断片的な資料で、全体の器形や口縁部の特徴は不明である。調整は外面がタテ方向のケズリ、内面がヨコ方向のナデである。61と62は60や67と比較すると、硬質で、薄手である。63は底部の断片的な資料である。胎土などは61と類似しており、同一個体の底部片の可能性が高い。甕の底部資料が少ないため、写真のみ掲載した。

68は須恵器の体部の断片的な資料で、甕もしくは壺と考えられる。還元不足で、特に内面は赤味が強い。外面は器面が荒れており、調整を観察することができない。内面の調整は回転ナデのみである。

<石器> (第32図、写真図版41)

69は安山岩製の磨石である。子供の掌にも収まるほどの小さなもので、一面に使用による平滑な面が観察される。

**時期** 出土遺物から判断すると、平安時代I期（9世紀後半～10世紀初頭）に属すると考えられる。

## (2) 土 坑

### SK004土坑

遺構（第23図、写真図版16）

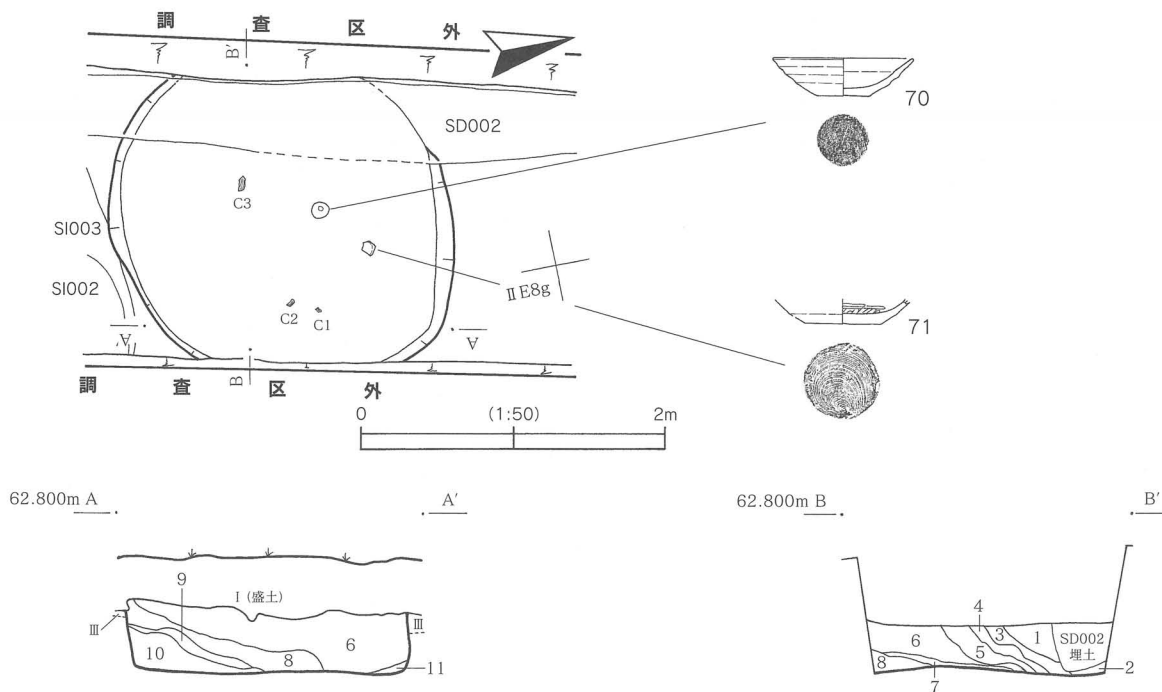
＜位置＞02区南側のⅡE8fグリッド付近に位置する。東西両端は調査区外に広がっているが、東側は県道の造成時に掘削を受け、消滅している。

＜重複関係＞SD002が本遺構西側を縦断しており、本遺構が切られている。また、SI003と重複しているが、重複部分がかくわずかであるため判断できなかった。さらに、底面でSK005とSK006を検出したため、本遺構が新しいと判断したが、SK005との関係は、底面から出土したものとSK005の1層から出土したものが接合していることやB-B'間の西側が東側を切るように埋没していることを考慮すると、SK005が新しい可能性が高い。

＜検出面＞検出は攪乱層及び表土（Ⅰ層）直下のⅢ層上面で行い、黒色土の広がりとして確認した。

＜規模・平面形＞完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は南北223cmで、検出面からの深さは最大で49cmである。検出された部分から判断すると平面形は円形もしくは楕円形を呈するものと考えられる。

＜埋土＞黒色土を主体とし、混入物や土質により11層に分層した。1～5層は本遺構の堆積土として捉えていたが、SI005と重複する遺構の西側にのみ認められ、SI005の堆積土の上部であった可能性が高い。炭化物やⅢ層・地山ブロック等の混入物があり、人為堆積の状況を呈する。6層以下も炭化物や地山ブロック等の混入物が見られ、人為堆積と捉えられる。堆積状況は北側から投げ込んだ状況を示している。



SK004 A-A' B-B'

- |  |  |
|--|--|
| 1 10YR2/1.5黒色～黒褐色土 粘性中 しまりやや有 Ⅲ層ブロック20%、炭化物粒1%含む | 7 10YR2/1黒色土 粘性やや無 しまり有 炭化物5%含む                          |
| 2 10YR2/1黒色土 粘性・しまりやや有 Ⅲ層ブロック50%含む               | 8 10YR2/1.5黒色～黒褐色土 粘性有 しまりやや無 地山粒3%、Ⅲ層ブロック10%、炭化物粒1～2%含む |
| 3 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり中 Ⅲ層粒5%、地山ブロック7%含む         | 9 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり中 地山粒1～2%含む                        |
| 4 10YR3/3暗褐色土 粘性やや有 しまり有 黒色土ブロック10%、地山ブロック7%含む   | 10 7.5YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや有 地山粒5%、Ⅲ層粒7%含む                 |
| 5 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり中 地山粒2～3%、炭化物粒1%含む         | 11 10YR2/2黒褐色土 粘性やや有 しまり中 地山粒1%含む                        |
| 6 10YR2/1黒色土 粘性・しまりやや有 地山ブロック5%、Ⅲ層ブロック15%含む      |  |

第23図 SK004

<壁・底の状況>底面はIV層で、概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

<遺構の性格>居住施設と考えるにはカマド等の付属施設がなく、平面形状が当該期のものとは異なること、貯蔵穴と考えるには遺物が少なく、開口部が広すぎることで、埋葬施設と考えるには埋葬痕跡がないことなどから特定するに至らなかった。

<その他>本遺構の堆積土には大小様々な板状や棒状の炭化物が混入しており、年代観を得るための試料として採取している。その内、底面直上から出土した炭化物(C3)と埋土から出土した炭化物(C2)の年代測定を行っており、その結果は附編に収めている。

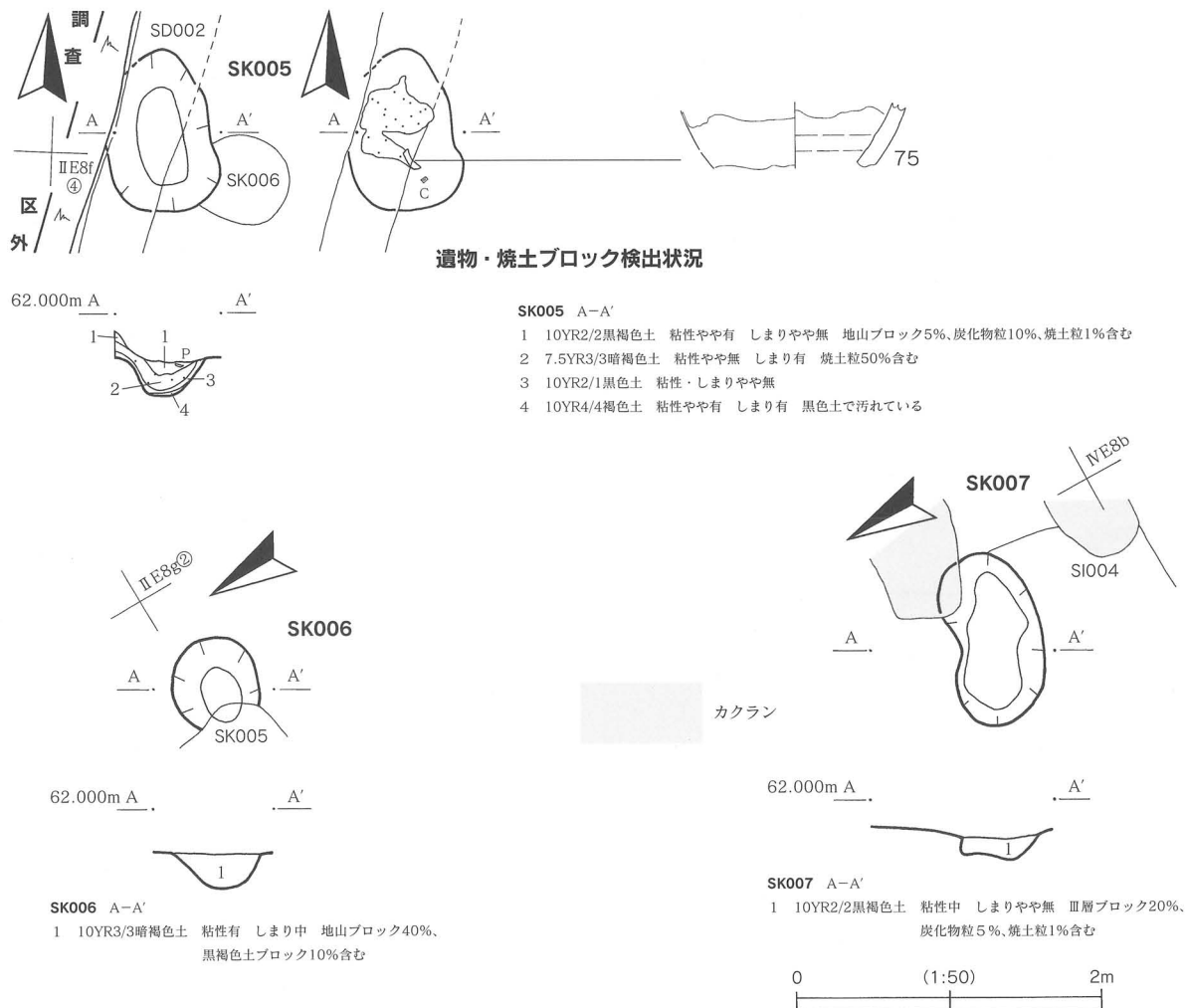
**出土遺物**

<出土状況>出土した遺物は土師器のみで、底面直上や各埋土等から合計601.9g出土した。そのうち坏3点と高台付坏1点を掲載した。70と71は個別に番号を付して取り上げを行った遺物である。72は底面直上から出土した破片とSK005の1層から出土した破片が接合したものである。

<土器> (第30・31図、写真図版34)

70・71・73は土師器坏である。70・73は内外面とも調整は回転ナデのみのものである。70は口径と比べて底径が小さく、また、口径に比べて器高が低く、底部から口縁部に向かって直線的に外傾しながら立ち上がっている。底部外面は切り離し後、無調整であるが、縁辺は摩滅して、糸切り痕が不明瞭になっている。73は全体的に焼成が良好で、底部外面の糸切り痕が明瞭に残っている。

71は内面に黒色処理の施されるものである。70や73と比較すると底径が大きく、底部の立ち上がり内湾気味である。黒色処理に先行して行われる内面のミガキ調整は内底面を放射状に磨いた後、体



第24図 SK005~SK007



部を横方向に磨いている。工具の幅は3～4mmである。底部外面は切り離し後、無調整である。  
72は土師器高台付坏である。底部のみの断片的な資料で、調整は内外面とも回転ナデのみである。底部は切り離し後高台が貼り付けられており、接合部は回転ナデによる入念な調整が行われている。全体的に厚ぼったい印象を受ける。

**時期** 出土遺物や重複関係から判断すると、平安時代Ⅱ期（10世紀前葉～中葉）に属すると考えられる。

### SK005土坑

**遺構**（第24図、写真図版16）

<位置>02区南側のⅡE8fグリッドに位置する。西側の一部が調査区外に広がっている。

<重複関係>本遺構はSK004の底面で検出したため、SK004に切られていると判断したが、SK004の本文で記載したとおり、本遺構が新しい可能性が高い。SK006とも重複しており、本遺構が切っている。

<検出面>SK004の底面で、焼土粒や炭化物粒の混入する黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>遺構の一部が調査区外に広がっているため、正確な規模は不明であるが、確認された規模は長軸108cm、短軸73cmで、検出面からの深さは最大で45cmである。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。

<埋土>土質や混入物の違いにより4層に分層した。底面にはⅣ層に起因する堆積土が確認でき、壁の崩落土と判断した。2層は廃棄焼土層で、炭化物粒が多く混入する1層と合わせて、人為堆積である。

<壁・底の状況>底面はⅣ層で、皿状を呈する。壁は底面から内湾しながら立ち上がる。

<遺構の性格>不明である。

<その他>本遺構の堆積土上部には炭化物が混入しており、年代観を得るための試料として採取している。そのなかで比較的残存状態の良好な炭化物（第24図のC）の年代測定を行っており、その結果は附編に収めている。

### 出土遺物

<出土状況>出土した遺物は土師器のみで、埋土の1層や2層から合計319.2g出土した。そのうち2点が復元され、2点とも掲載した。なお、75は1層から出土した破片とSK004の埋土から出土した破片が接合したものである。

<土器>（第31図、写真図版35）

74は土師器坏である。内外面とも調整は回転ナデのみのものである。焼成は本調査区出土の土師器のなかでは良好な部類に属し、底部外面の糸切り痕が明瞭に観察される。口径に比して器高が低く、底部から口縁部に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がっている。口縁端部は丸みを帯び、やや外反している。

75は底部直上のみの資料で、土師器甕と思われる。器面は内外面とも摩滅しており、調整の痕跡は内面の回転ナデのみがわずかに観察される。

**時期** 出土遺物や重複関係から、平安時代Ⅲ期（10世紀中葉）に属すると考えられる。

### SK006土坑

**遺構**（第24図、写真図版16）

<位置>02区南側のⅡE8fグリッドに位置する。

<重複関係>本遺構はSK004とSK005と重複しており、本遺構が切られている。

<検出面>SK004の底面で、暗褐色土の広がりとして確認した。

＜規模・平面形＞遺構の一部がSK005によって破壊されているため、正確な規模は不明であるが、確認された規模は長軸60cm、短軸58cmで、検出面からの深さは最大で26cmである。平面形は円形を呈するものと考えられる。

＜埋土＞地山ブロックが多量に混入する暗褐色土のみで埋没しており、人為堆積と判断した。

＜壁・底の状況＞底面はⅣ層で、概ね平坦である。壁は底面から内湾しながら立ち上がる。

＜遺構の性格＞不明である。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** SK004との重複関係から平安時代Ⅱ期以前であることは疑いないが、遺物が出土していないため、詳細は不明である。

### SK007土坑

**遺構** (第24図、写真図版16)

＜位置＞B区北側のⅣE7aグリッド付近に位置する。

＜重複関係＞SI004と重複しており、本遺構がSI004の燃焼部を破壊して構築されていることから、本遺構が新しい。

＜検出面＞検出はⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。

＜規模・平面形＞遺構の一部が後世の掘削によって破壊されているため、正確な規模は不明であるが、確認された規模は長軸116cm、短軸64cmで、検出面からの深さは最大で29cmである。平面形は楕円形を呈するものと考えられる。

＜埋土＞Ⅲ層ブロックや炭化物粒を混入する黒褐色土で埋没しており、人為堆積と判断した。

＜壁・底の状況＞底面はⅢ層で、やや中央がマウント状に盛り上がっている。壁は、北側の一部が直立気味に立ち上がるものの、他は底面からなだらかに立ち上がる。

＜遺構の性格＞不明である。

**出土遺物**

＜出土状況＞出土した遺物は土師器、鉄器で、出土量は土師器23.4g、鉄器2点である。土師器は埋土から出土したもので、小破片であるため、掲載していない。

＜鉄器＞(第32図、写真図版39)

釘が2点出土している。2点とも断面形が方形を呈する鉄釘で、先端を欠損している。

**時期** 出土遺物が少ないため、断定はできないが、SI004の燃焼部埋土と類似していることから判断すると、平安時代Ⅱ期(10世紀前葉～中葉)に収まるものと考えられる。

## (3) 溝 跡

### SD001溝跡

**遺構** (第25図、写真図版17)

＜位置＞02区南側のⅡE9fグリッドに位置する。東西両端は調査区外に延びているが、東側は県道の造成時に掘削を受け、消滅している。

＜重複関係＞SK008、SD002、SX001と重複しており、本遺構がSK008、SD002に切られ、SX001を切っている。

＜検出面＞検出はⅢ層上面で行い、帯状の黒色土の広がりとして確認した。

＜規模＞完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅107～

101cm、下幅76~64cm、長さ1.8m、検出面からの深さは最大で67cmである。

＜埋土＞黒色土～黒褐色土を主体とし、色調や混入物などの差異により4層に分層した。壁周辺にはⅢ層もしくはⅣ層に起因する堆積土を多く含む層が認められ、壁の崩落土と判断した。各堆積土には焼土粒や炭化物粒の混入が認められるものの、少量であり、レンズ状もしくは三角形の堆積状況を呈していることを考慮して、自然堆積と捉えた。

＜壁・底の状況＞Ⅳ層まで掘削して底面としており、西から東へ緩やかに傾斜している。底面には非常に細かい凹凸が認められるが、規則性はない。壁は底面から垂直気味に立ち上がり、上半で外傾して立ち上がる部分と底面から内湾気味に立ち上がる部分がある。

＜遺構の性格＞本遺構より北側に位置するSI001やSI002のプランと平行または直行しており、集落を区画する溝の可能性が想定される。

### 出土遺物

＜出土状況＞土師器のみ、底面直上や埋土から合計117.7g出土している。底面直上から出土した土師器はP1と番号を付して取り上げを行っており、78として報告している。

＜土器＞（第31図、写真図版35）

78は土師器坏である。内面に黒色処理の施されるもので、底部の資料である。底部から外傾しながら立ち上がるのは確認できるものの、口縁部を欠損しているため、全体の器形は不明である。黒色処理に先行して行われる内面のミガキ調整は内底面を放射状に磨いた後、体部を横方向に磨いている。工具の幅は2~4mmであるが、内底面のほうが幅広である。底部外面は切り離した後、無調整であるが、器面が摩滅しているため、糸切り痕が不明瞭になっている。

時期 出土遺物が少ないため、断定はできないが、平安時代（10世紀前半）に属すると考えられる。

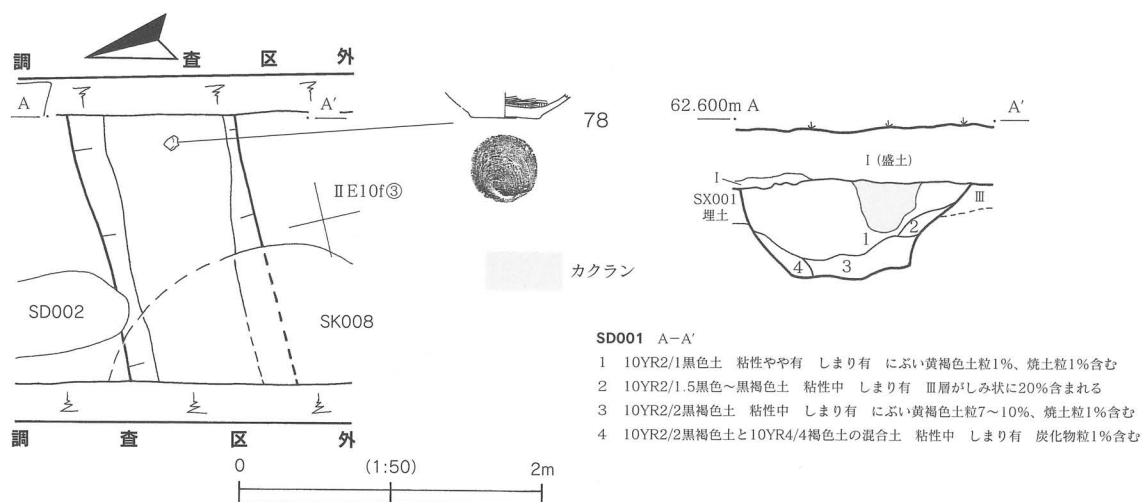
## （4）焼土遺構

### SF001焼土遺構

遺構（第26図、写真図版18）

＜位置＞03区北側のⅢE2eグリッド付近に位置する。東側は調査区外に広がっているが、県道の造成時に掘削を受け、消滅している。

＜重複関係＞なし。



第25図 SD001

<検出面> 検出はⅢ層上面で行い、赤褐色の焼土層の広がりとして確認した。

<規模・平面形> 植栽等の影響を受けており、燃烧面の範囲は断片的になっているが、確認できる最大範囲は、長辺116cm、短辺110cmである。

<埋土・焼土> 掘り込みは認められない。焼土層の厚さは最大でも3cmと非常に薄く、Ⅳ層まで及んでいない。

<遺構の性格> 本遺構周辺のⅡ層では土師器片が他の地区と比べると多く出土していることを加味すると、竪穴住居跡に伴う焼土の可能性が考えられるが、部分的な検出であることや明確な掘り込みが検出されていないことから、詳細は不明である。

**出土遺物**

<出土状況> 出土した遺物は土師器のみで、91.0gである。この出土量には、焼成面ではないが、ごく近い範囲で、同一レベルから出土した土器片（第26図左のP等）も、本遺構に係る遺物と考えて、含めている。

<土器> （第31図、写真図版35）

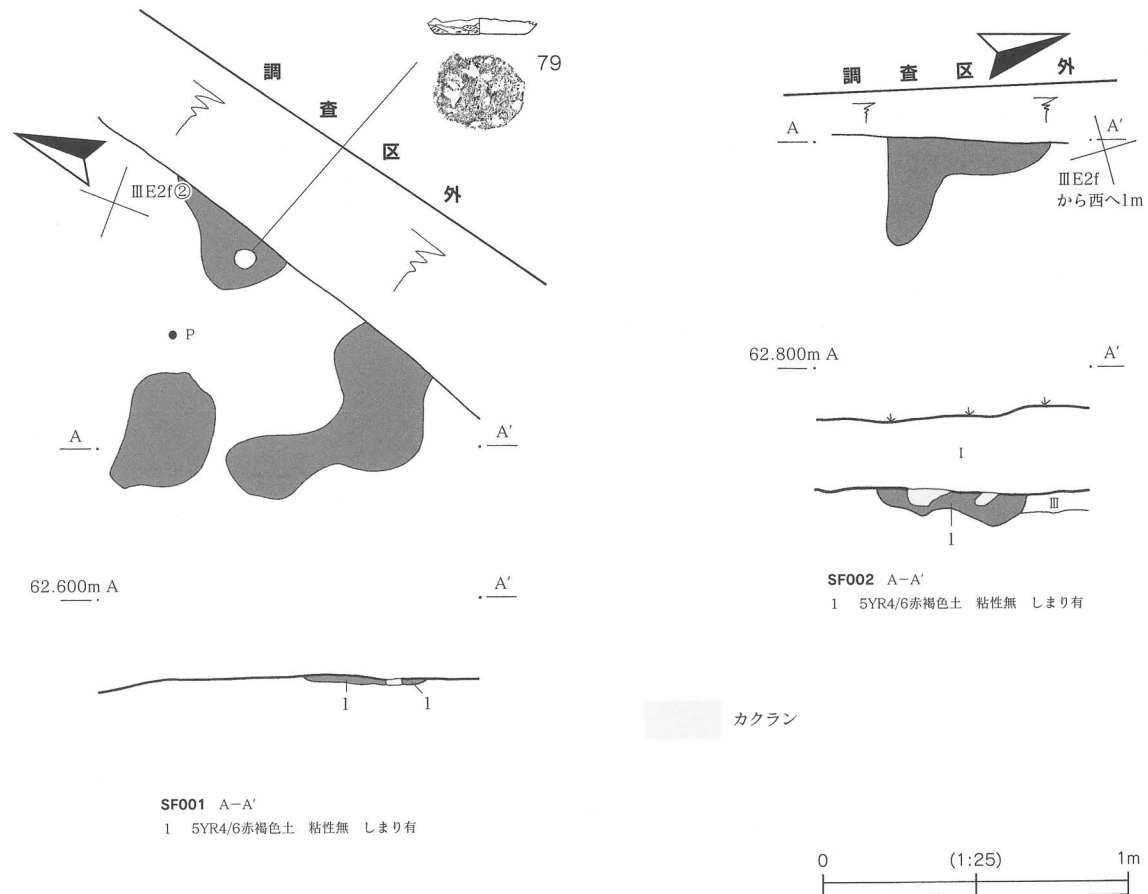
79は土師器の底部資料で、甕と考えられるものである。外面にはケズリ調整の痕跡が明瞭に観察される。

**時期** 出土遺物が少なく、詳細な時期を特定することはできないため、平安時代に属する遺構とするに止める。

**SF002焼土遺構**

**遺構**（第26図、写真図版18）

<位置> 0203区南西端から03区北西端のⅢE2eグリッドに位置し、西側は調査区外に広がっている。



第26図 SF001・SF002

<重複関係>なし。

<検出面>検出は古代から近世の遺物を包含するⅡ層上面で行い、赤褐色の焼土層の広がりとして確認した。

<規模・平面形>焼土層は平面的にはL字状に広がっており、確認できる最大の規模は長辺54cm、短辺36cmである。

<埋土・焼土>掘り込みは認められない。焼土層の厚さは最大で12cmで、その範囲はⅢ層上面まで及んでいる。

<遺構の性格>不明である。

### 出土遺物

<出土状況>出土した遺物は掲載した1個体のみで、出土量は111.0gである。

<土器> (第31図、写真図版35)

80は土師器の体部下半の断片的な資料で、甕もしくは甔の可能性が高い。非常に厚手で、粗雑な作りである。内外面とも器面は摩滅しており、ヘラナデの痕跡が部分的に観察できるに止まる。

**時期** Ⅱ層上面で検出した遺構であるが、焼成面から土師器が出土したため、平安時代に属する遺構と判断した。

## (5) 不明遺構

### SX001不明遺構

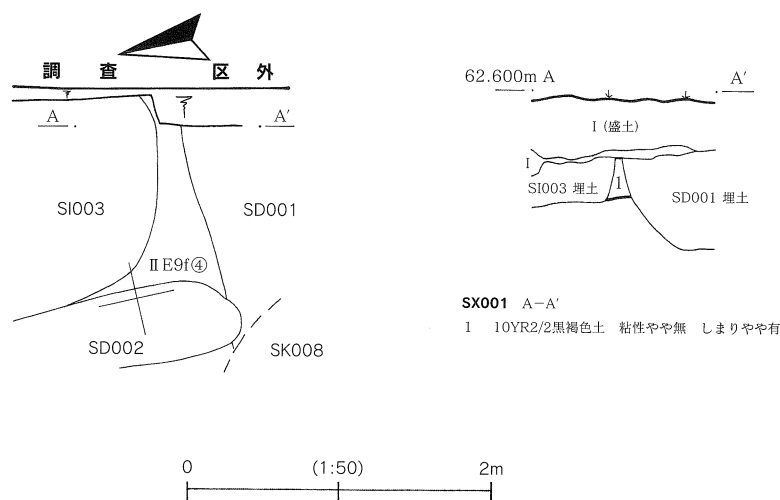
**遺構** (第27図、写真図版17)

<位置>02区南側のⅡE9fグリッドに位置する。東側は調査区外に広がっているが、県道の造成時に掘削を受け、消滅している。

<重複関係>本遺構の北側に位置するSI003、南側に位置するSD001、西側に位置するSD002と重複しており、すべての遺構に切られている。

<検出面>本遺構は周辺の遺構との重複が著しく、Ⅲ層上面で検出した際に、本遺構の存在は確認していなかった。しかし、周辺の遺構の精査が進むにつれ、本遺構部分のみが、Ⅲ層上面よりもレベルで約30cm低いことが判明し、何らかの遺構が存在するとして登録した。東側の調査区境の断面を観察すると、Ⅰ層直下のⅢ層上面が検出面であることが確認できた。

<規模・平面形>重複関係にある遺構によって破壊されているため、全体像は不明である。残存する



第27図 SX001

規模は南北115cm、東西145cm、検出面からの深さは最大で30cmである。

<埋土>黒褐色土の単層であり、自然堆積か人為堆積か判断できない。

<壁・底の状況>底面はⅢ層中であり、残存する部分は概ね平坦である。壁は残存していないため不明である。

<遺構の性格>遺構の性格を判断する資料に乏しく、特定できなかった。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** SD001との重複関係から平安時代Ⅱ期以前であることは間違いないが、遺物が出土していないため、詳細は不明である。

## (6) 遺構外出土遺物

**土師器・須恵器** (第33図、写真図版35～37)

土師器や須恵器は近世に属する遺構や時期の特定できなかった遺構(第3節)の埋土中からも出土しているが、当該期に属するものであるため、本項でまとめて報告する。

<Ⅱ層・Ⅲ層出土資料>

02区～B区で出土しており、当該期の遺構が集中する02区～03区の出土が多い。出土量は調査区全体で土師器1442.7g、須恵器59.6gである。そのうち、土師器坏3点、土師器高台付坏2点、土師器甕2点、須恵器坏2点、須恵器甕1点を掲載した。

81～83は土師器坏である。3点とも内外面とも回転ナデのみのもので、底部の残存する資料はすべて、外面は切り離し後無調整である。81・83は底部のみの断片的な資料であるため、全体の器形は不明である。82は口径と比べて底径が小さく、また、口径に比べて器高が低い器形をしている。底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、端部はやや丸みを帯びている。

84・85は土師器高台付坏である。2点とも底部のみの資料であるため、全体の器形は不明である。

84は内外面とも回転ナデのみのもので、全体的に厚手である。

85は内面に黒色処理の施されるものである。全体的に器面の摩滅が激しく、調整痕の観察は困難である。底部外面には高台貼付時の指オサエの痕跡が放射状に観察される。

86・87は土師器甕である。86は口縁部の断片的な資料である。口縁部の短いもので、「く」の字状に屈曲しており、頸部から外傾しながら立ち上がり端部は丸みを帯びている。内外面とも調整はナデで、外面がタテ方向、内面がヨコ方向である。器面には成形時の凹凸が残存し、粗雑な印象を受ける。

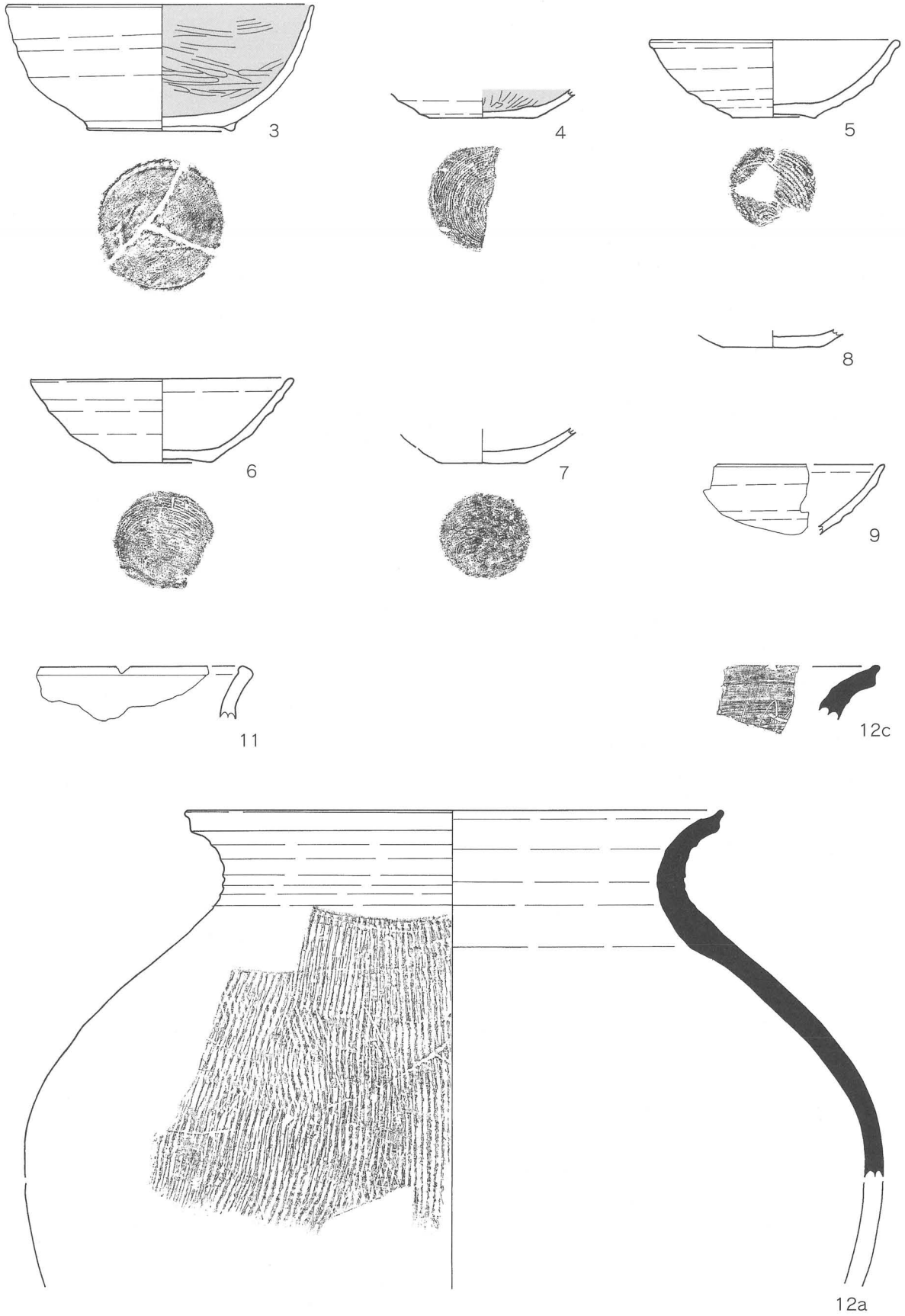
87は口縁部から体部上半の資料(a・b)と底部片の断片的な資料(c)がある。口縁部は短く、「く」字状に鋭く屈折している。調整は内外面とも回転ナデのみで、内外面ともその痕跡が明瞭に残存する。

88・89は須恵器坏である。本調査区では非常に希少な器種で、2個体のみ出土である。2点とも底部の断片的な資料で、内外面とも調整は回転ナデのみである。88の底部外面は切り離し後、無調整である。

90は須恵器甕の頸部の断片的な資料である。内外面とも調整は回転ナデである。外面には回転ナデに先行するタタキの痕跡が部分的に観察される。

<平安時代以降の遺構内出土資料>

SK008、SD002～SD004、SD007、SD009、SD010の埋土から土師器、須恵器が出土しており、その総量は1636.8g(土師器583.4g、須恵器1053.4g)である。SD002の埋土から出土した須恵器(1008.1g分)がSI001の重複箇所からであり、これらの遺物がSI001に帰属するものであることは、12と接合している状況を鑑みると、何の問題もなからう。これらの資料のうち、掲載資料の少ない器



SI001

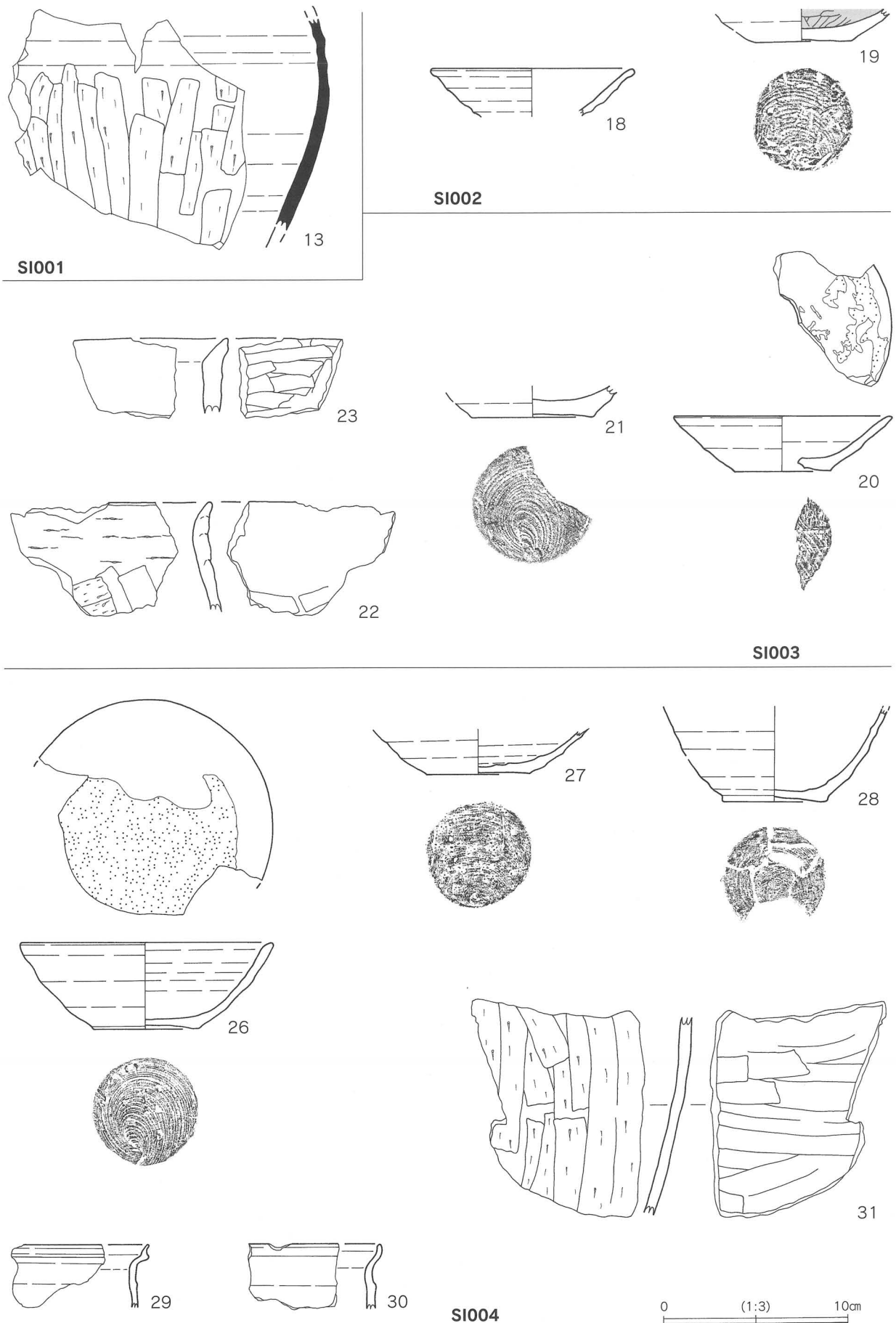
0 (1:3) 10cm

0 (1:4) 20cm  
12a · 12c

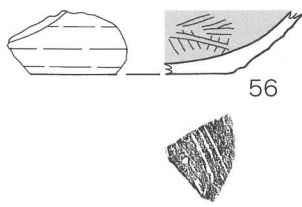
第28図 遺構内出土遺物 (平安：土器1)



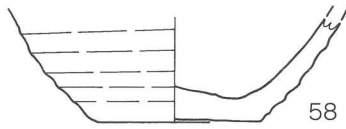
2 平安時代の遺構と遺物



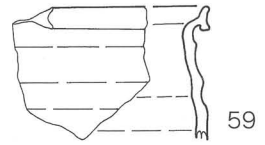
第29図 遺構内出土遺物（平安：土器2）



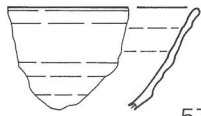
56



58



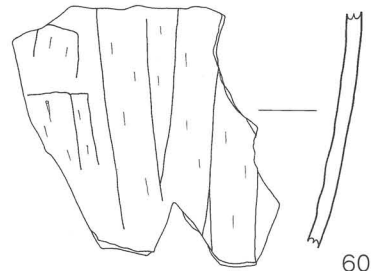
59



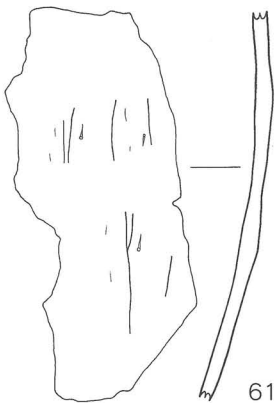
57



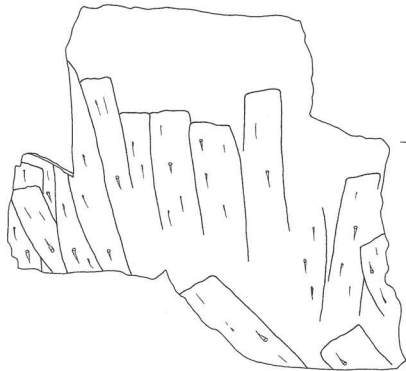
65



60



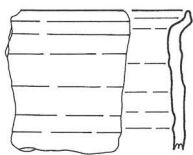
61



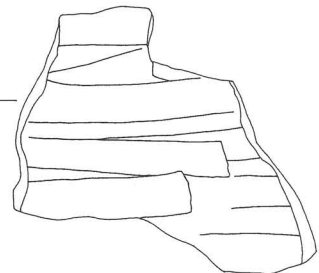
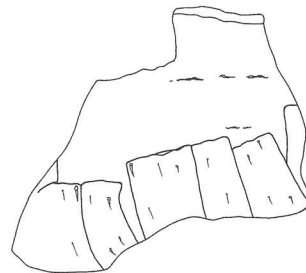
62



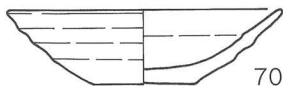
67



64



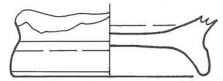
SI005



70



71



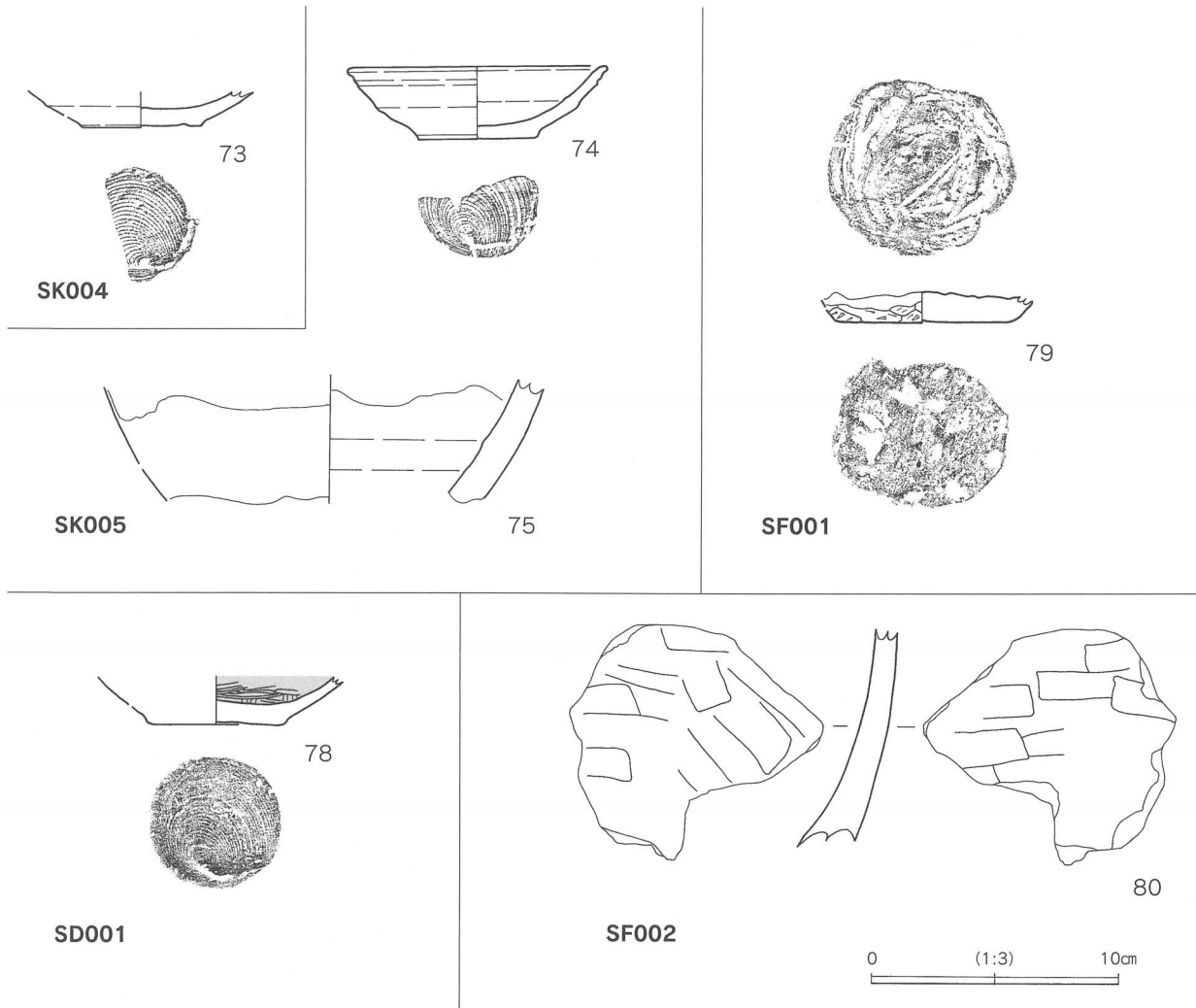
72



0 (1:3) 10cm

SK004

第30図 遺構内出土遺物 (平安：土器3)



第31図 遺構内出土遺物（平安：土器4）

種を中心に4点を掲載した。

91はSK008の埋土から出土した土師器高台付坏である。内外面とも黒色処理の施されるもので、底部のみの資料である。黒色処理に先行して行われるミガキ調整は、内面は中央から外側に向かって同心円状に全体的に行われるが、外面は高台の接合部に観察される横方向の調整以外は判然としない。

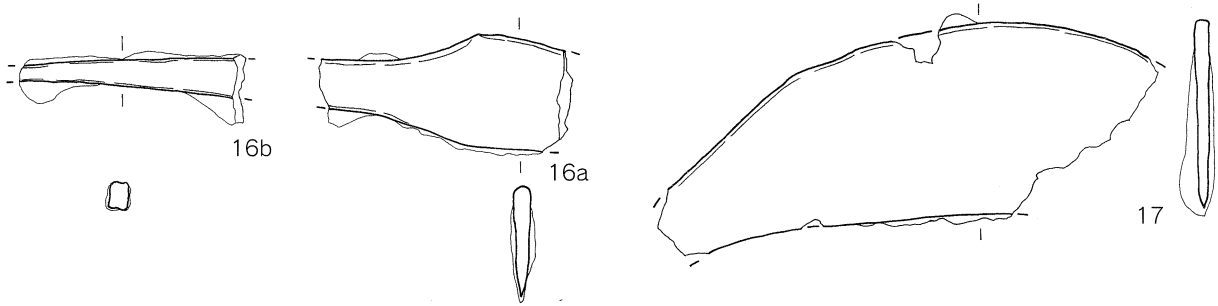
92はSD002の南側（02区南側）埋土から出土した土師器甕である。断片的な資料で、内外面とも調整は回転ナデのみである。底部外面は切り離し後、無調整である。

93・94はSD009の埋土から出土した須恵器甕である。93は頸部の断片的な資料である。外面にはタタキの痕跡が顕著であるが、内面には対応する当て具の痕跡は見られない。94は体部の断片的な資料である。93と比較すると薄手である。内面の調整は回転ナデのみで、外面の調整はケズリが施されている。

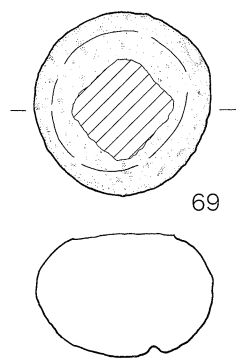
< I層出土・排土一括・攪乱出土資料 >

01区～C区で出土しているが、当該期の遺構が集中する02区～03区が多い。出土量は調査区全体で土師器609.8g、須恵器199.5gである。そのうち、03区から出土した土師器3点と須恵器1点を掲載した。

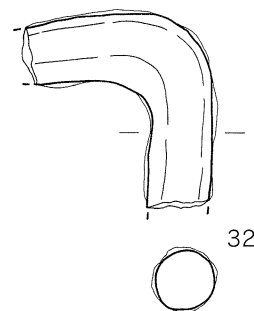
95～97は土師器坏である。3点とも内外面とも回転ナデのみのものである。底部外面は切り離し後、無調整である。95は口径に対して器高が低い器形をしており、底部から口縁部に向かって緩やかに内



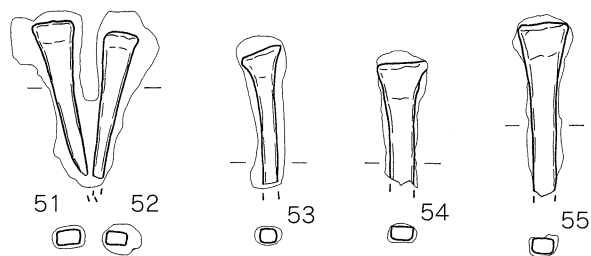
SI001



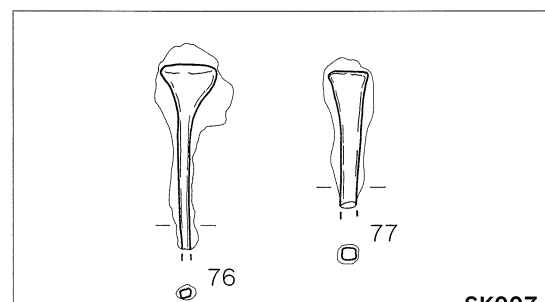
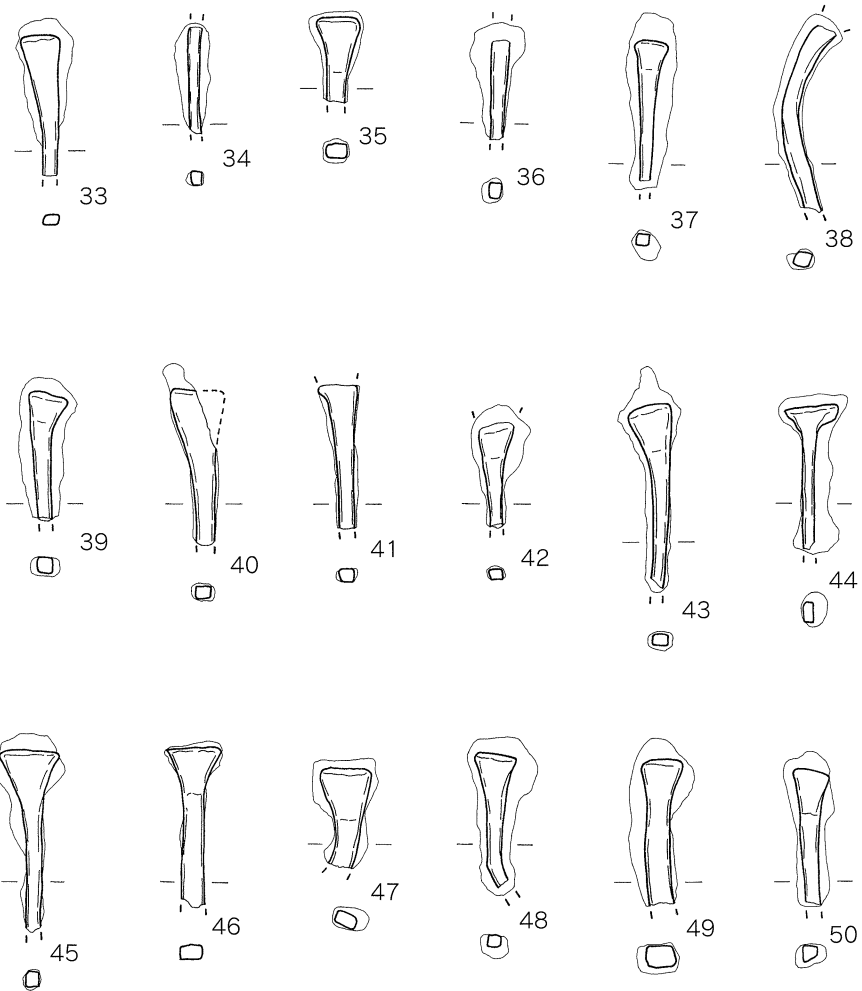
SI005



SI004



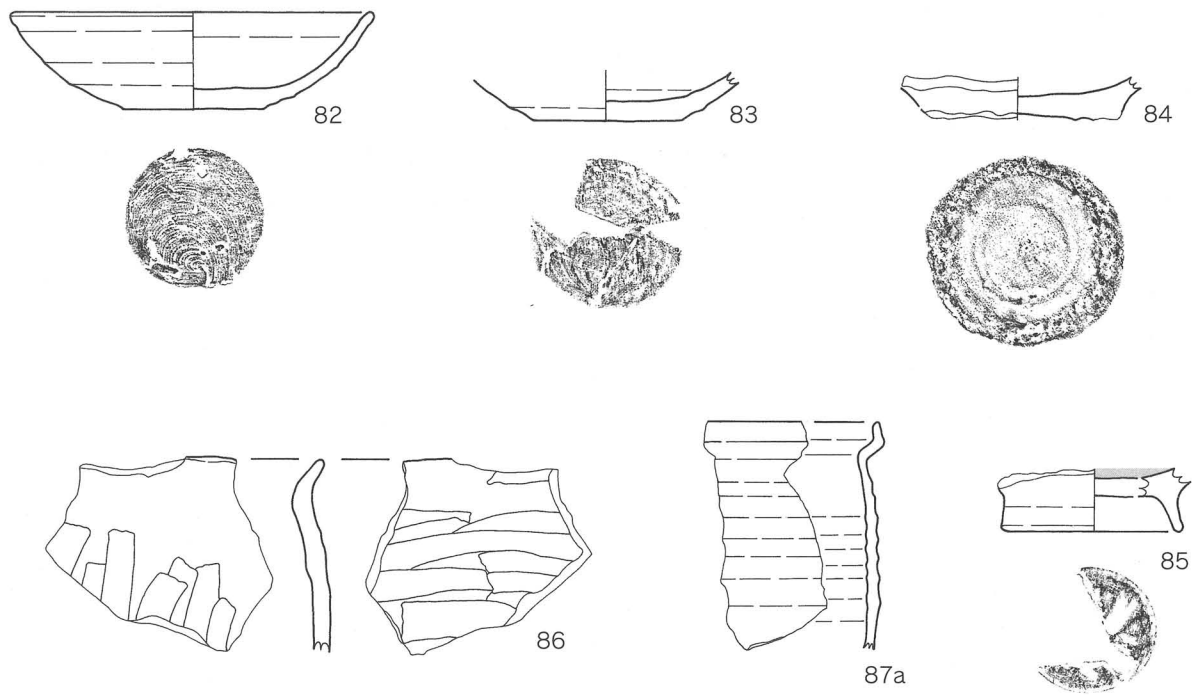
69 0 (1:2) 10cm



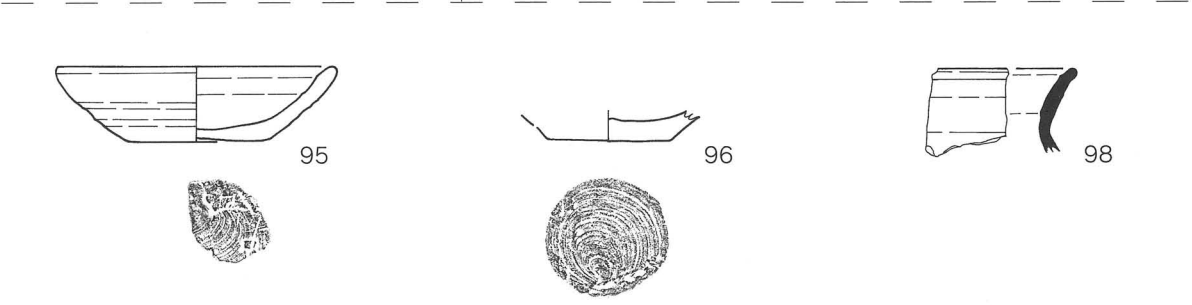
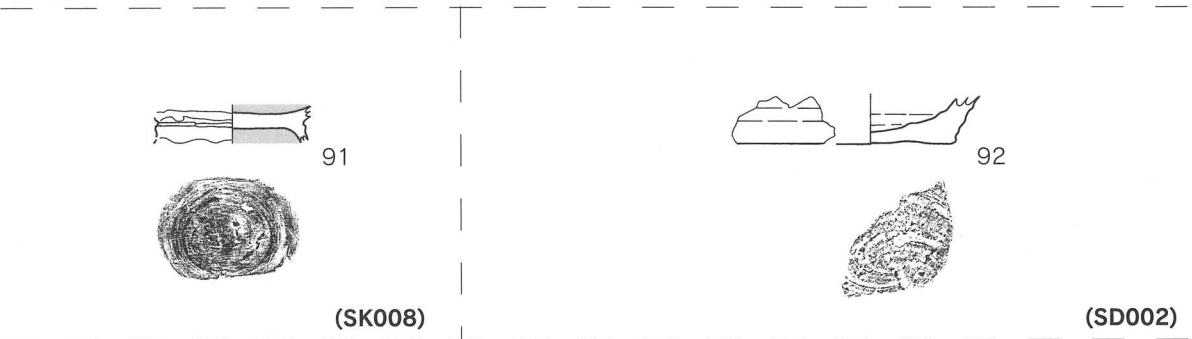
SK007

0 (2:3) 10cm

第32図 遺構内出土遺物 (平安：石器・鉄器)



II~III

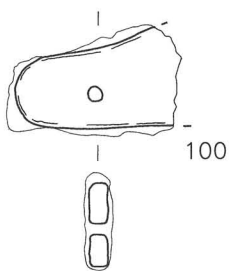


I

土師器・須恵器

0 (1:3) 10cm

II~III 鉄器



0 (2:3) 10cm

第33図 遺構外出土遺物（平安）

湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びている。口縁部は内面側がやや肥大している。内面には微量であるが、煤状の付着物が観察される。96・97は底部のみの断片的な資料である。96の底部外面の縁辺は摩滅しているため、糸切り痕が不明瞭になっている。

98は須恵器である。口縁部の断片的な資料で、壺と思われる。ゆるやかに外反しながら立ち上がり、端部でやや外側に屈曲している。

#### 土製品 (写真図版37)

02区北側のⅡ層から不明土製品が1点出土している。断片的な資料で、一部に穿孔された痕跡が観察される。全体の形状が不明であるため、帰属する時期も不明と言わざるをえないが、出土層位を重視して、当該期に含めた。

#### 鉄器 (第33図、写真図版39)

A区東側のⅢ層から刀子が1点出土している。茎部の断片的な資料であるため、詳細は不明である。

### 3 平安時代以降の遺構と遺物

平安時代以降に属する遺構は掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝跡13条、柱穴状土坑24個、遺物は磁器、陶器、土製品、石器、石製品、鉄器である。検出された遺構のほとんどが時期の特定できないものが多く、A区からC区北側に集中している。以下、個々の遺構・遺物について記述する。

#### (1) 掘立柱建物跡

##### SB001掘立柱建物跡

##### 遺構 (第34図、写真図版19～21)

<位置>A区中央部のⅢEグリッド南西部からⅣEグリッド北西部付近に位置する。東側から南東側にかけては調査区外に広がっているが、県道の造成時に削平を受け、消滅している可能性が高い。

<重複関係>なし。

<検出面>検出は、本調査前に行われた岩手県教育委員会による試掘調査の結果や調査期間の制約などから、遺構の存在の有無を明確に判断できるⅢ層上面で行い、各柱穴を黒色土もしくは黒褐色土の円形プランとして確認した。しかし、A区は最大で5cmと薄いながらも、Ⅱ層の堆積土が確認できるエリアであるので、Ⅱ層上面から掘り込まれていた可能性が高い。

<規模・構造・方向>前述のとおり、調査区外に広がっているため、正確な規模は不明であるが、残存する規模は桁行が1080cm (35.6尺：1尺≒30.3cm)、梁間が180cm (6尺) で、桁行が7間以上、梁間が1間以上の建物跡と考えられる。検出した柱穴から確認できる面積は19.44㎡ (5.9坪：1坪≒3.3㎡) である。桁行方向はN-4°-Eで、ほぼ正方位に沿っている。

<柱位置・柱間>建物跡を構成すると考えられる柱穴を12個検出した。柱間寸法は桁方向で90cm～200cm (3尺～6尺6寸)、梁方向で180cm (6尺) である。検出した部分のうち桁方向の北側では90cm (3尺)、160cm (5尺3寸)、200cm (6尺6寸) とまちまちであるのに対して、南側では90cm (3尺) 間で整然としている。梁方向が180cmであることを加味すると、180cmを1間とし、桁方向は半間の柱配置が想定される。P4やP5の東側には同一遺構と考えられる柱穴が検出されなかったため、総柱の建物跡の可能性は低い。

<掘り方・柱痕>各柱穴の平面形は概ね円形を基調とするもので、掘り方の大きさは直径20～40cm、確認面からの深さは5～17cmで、直径30cm前後、深さ10cm前後のものが多く、P11の底面はⅣ層ま

で及んでいるが、他の柱穴の底面はⅢ層である。柱痕はP5・P6・P8～P11で確認でき、柱痕の径はその痕跡から判断すると、20cm前後である。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、堆積土の状況から判断すると、近世に属すると考えられる。

## (2) 土 坑

### SK008土坑

**遺構** (第35図、写真図版22)

<位置>02区南側のⅡE9f～10fグリッドに位置する。西側は調査区外に広がっている。

<重複関係>SD001と重複しており、本遺構が切っている。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、環状を呈する黒色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>西側が調査区外に広がっているため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は長軸220cm、短軸94cmで、検出面からの深さは最大で58cmである。検出された部分から推察すると、平面形は円形もしくは隅丸方形を呈するものと考えられる。

<埋土>混入物や土質により4層に分層した。上部はⅢ層に起因すると考えられる堆積土のみで埋没している。Ⅰ層直下の堆積土で、土量にすると、かなりの量に上る。Ⅲ層が30cm以上掘削の影響を受けていれば、自然に堆積したと判断できなくもないが、周囲の状況を考えても、その可能性は低く、人為的な堆積と判断した。下部は黒色土～黒褐色土を主体とする。4層には他の遺構では見られない礫の混入が認められる。3層には水酸化鉄が斑状に見られ、一時期水の影響を受けたものと判断できる。下部の堆積土には炭化物粒が混入するもののその量は少なく、レンズ状・三角形の堆積状況を呈することから判断すると、自然堆積と考えられる。

<壁・底の状況>底面はⅣ層で、皿状を呈する。壁は底面から直線的に開きながら立ち上がる。

<遺構の性格>調査区外に広がっており、不明である。

### 出土遺物

<出土状況>出土した遺物は土師器161.5gと鉄器2点である。土師器は埋土から出土したもので、接合作業の結果91に復元されたが、平安時代の遺構外として報告している。

<鉄器> (第44図、写真図版39)

出土した鉄器は2点とも釘で、そのうち1点を掲載した。101は両端を欠損したもので、残存する部位の断面形は方形を呈する。

**時期** 出土遺物が少ないことや掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかった。

### SK009土坑

**遺構** (第35図、写真図版22)

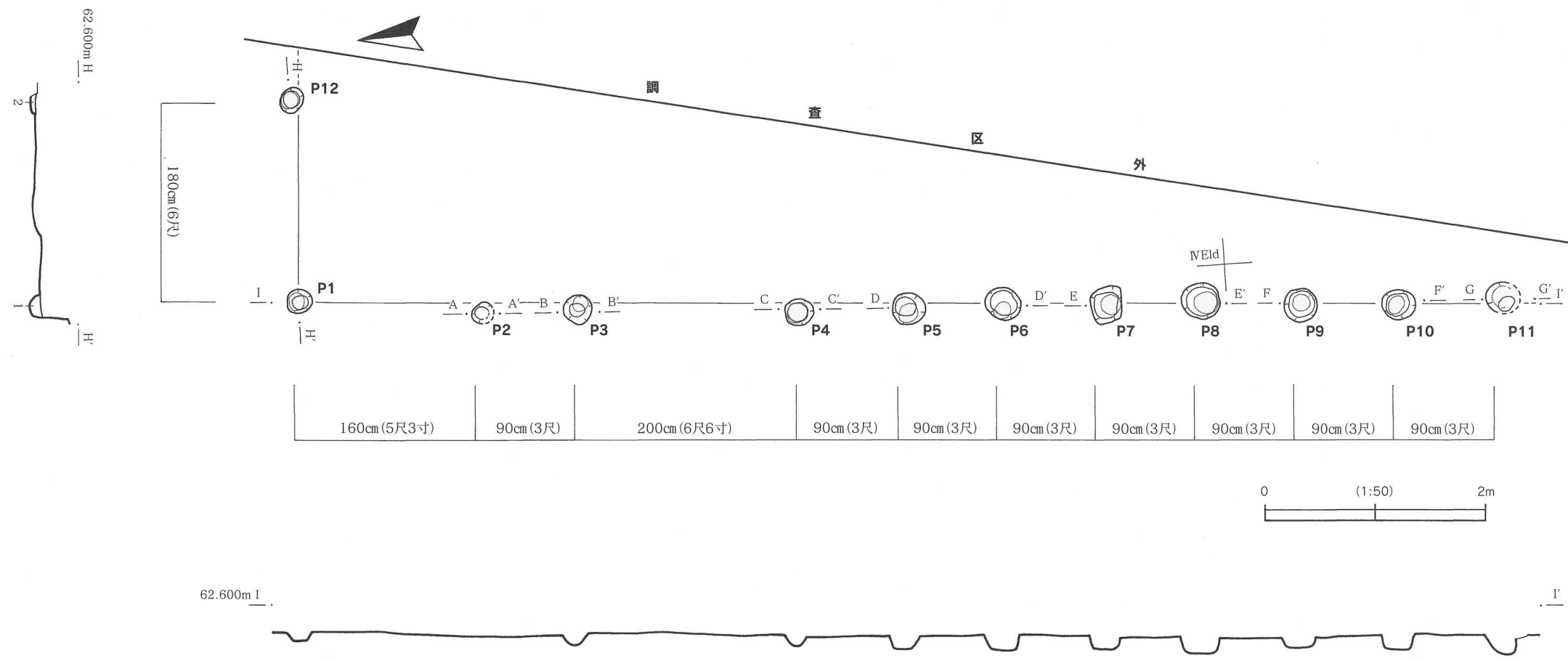
<位置>A区北側のⅢE6d～ⅢE7dグリッド付近に位置する。

<重複関係>なし。

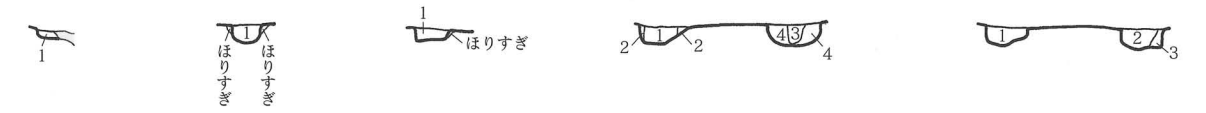
<検出面>岩手県教育委員会が事前に行った試掘トレンチと考えていたため、他の遺構のような検出を行っていないが、Ⅲ層上面で、地山ブロックの混入する黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>規模は長軸533cm、短軸155cmで、検出面からの最大の深さは57cmである。平面形は北側に円形の張り出しがつく長楕円形を呈する。

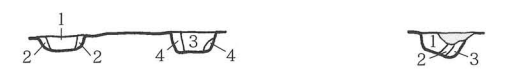




62.600m A . . . A' 62.600m B . . . B' 62.600m C . . . C' 62.600m D . . . D' 62.600m E . . . E'



62.600m F . . . F' 62.600m G . . . G'



- SB001 A-A'**
  - 1 10YR2/3黒褐色土 粘性やや有 しまり中 黒色土粒5%含む
- SB001 B-B'**
  - 1 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや有 Ⅲ層ブロック40%含む
- SB001 C-C'**
  - 1 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや有 Ⅲ層ブロック10%含む
- SB001 D-D'**
  - 1 10YR2/1黒色土 粘性中 しまりやや有 Ⅲ層ブロック20%含む
  - 2 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまり中 Ⅲ層ブロック5%含む
  - 3 10YR2/1黒色土 粘性やや無 しまり中 にぶい黄褐色土ブロック5%含む
  - 4 10YR2/2黒褐色土 粘性やや無 しまりやや有 にぶい黄褐色土ブロック20%含む
- SB001 E-E'**
  - 1 10YR2/2黒褐色土 粘性やや有 しまり無 Ⅲ層ブロック5%含む
  - 2 10YR2/2.5黒褐色土 粘性やや有 しまり中 Ⅲ層ブロック15%含む
  - 3 10YR3/3暗褐色土 粘性やや有 しまり中 黒褐色土ブロック20%含む
- SB001 F-F'**
  - 1 10YR2/2黒褐色土 粘性やや有 しまり無 Ⅲ層ブロック10%含む
  - 2 10YR2/1.5黒色～黒褐色土 粘性・しまりやや有
  - 3 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや有 地山粒2～3%含む
  - 4 10YR2/3黒褐色土 粘性中 しまりやや有 黒色土ブロック20%含む
- SB001 G-G'**
  - 1 10YR2/1.5黒色～黒褐色土 粘性・しまり無 Ⅲ層粒2%、炭化物粒1%含む
  - 2 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまりやや有
  - 3 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまり無 Ⅲ層ブロック3%含む
- SB001 H-H'**
  - 1 10YR2/1.5黒色～黒褐色土 粘性やや有 しまり中 Ⅲ層ブロック5%含む
  - 2 10YR2/2黒褐色土 粘性やや有 しまりやや無 Ⅲ層粒3%含む

第34図 SB001

＜埋土＞試掘トレンチと考えていたため、記録していない。

＜壁・底の状況＞掘削はVI層まで及んでおり、底面は概ね平坦である。壁は底面から直線的に開きながら立ち上がる。北側と南側の壁にはステップ状の段差が認められる。

＜遺構の性格＞全体的な遺構の形状から炭窯ではないかと考えたが、判断する材料に乏しく、詳細は不明である。

**出土遺物** 出土しなかった。

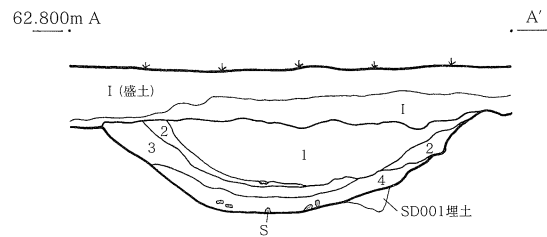
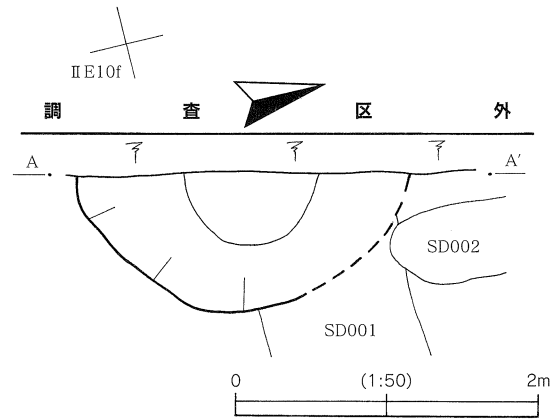
**時期** 遺物が出土していないことや掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかった。

### (3) 溝 跡

#### SD002溝跡

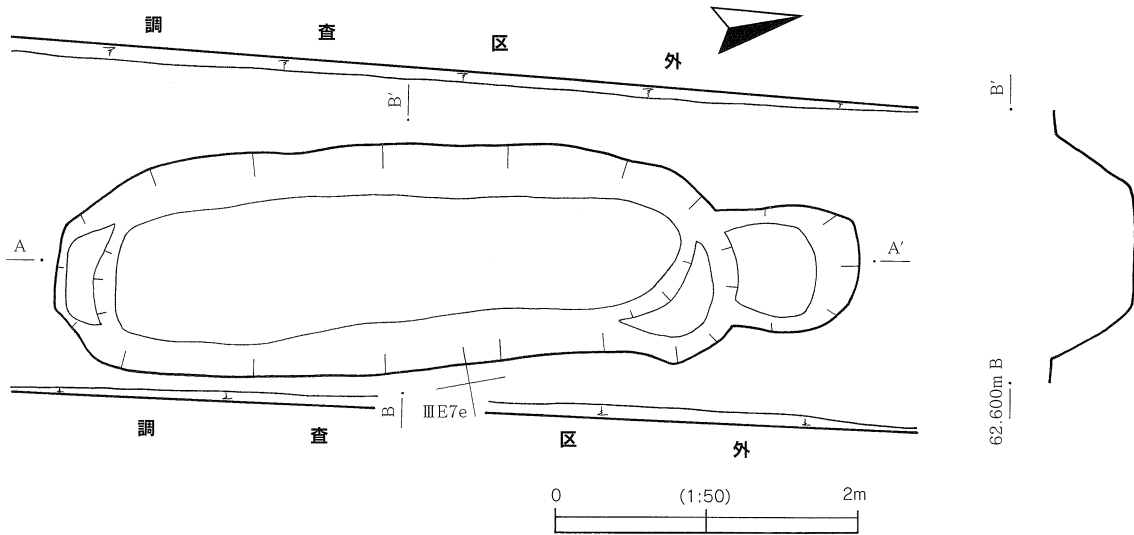
**遺構** (第36図、写真図版23)

＜位置＞02区の西側をほぼ調査区に沿うように縦断しており、II E 3g～9fグリッドに位置する。北側は民家の進入路(0102区)に伸びていると想定されるが、02区北端での深さが2cm程しか確認できず、北側の範囲を確認することはできな



#### SK008 A-A'

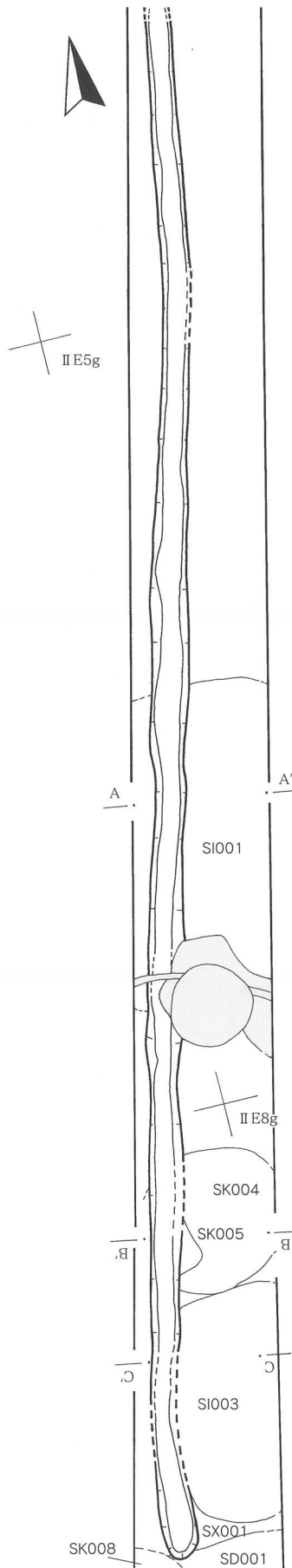
- 1 10YR3/2.5黒褐色～暗褐色土 粘性・しまり有 地山ブロック5%含む
- 2 10YR2/1黒色土 粘性・しまり中 炭化物粒5%含む
- 3 10YR3/1黒褐色土 粘性やや有 しまり有 にぶい黄褐色土粒3%、炭化物粒1%含む 水酸化鉄が斑状に見られる
- 4 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや無 φ5～10cmの河原石5%含む



62.600m A



第35図 SK008・SK009



かった。

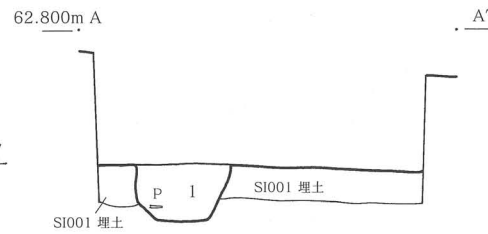
＜重複関係＞本遺構が02区の西側を縦断しているため、北側からSI001、SK004、SK005、SI003、SX001、SD001と多くの遺構と重複関係にあるが、すべての遺構を切っている。

＜検出面＞検出は攪乱層及び表土（I層）直下のⅢ層上面で行い、黒色土の広がりとして確認した。

＜規模＞調査区（県道）に沿って直線状に延びており、上幅52～36cm、下幅41～21cm、長さ23.94m、検出面からの深さは最大で33cmである。

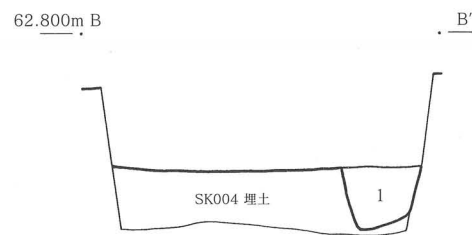
＜埋土＞黒色土の単層で、場所によって地山や炭化物粒等の混入物が異なるが、量は最大でも6%と少量である。地山の流入や夾雑物など少なく、壁の崩落土も観察されない。短期間に埋没しきつたと捉えられるが、後世の削平を受けており、人為堆積か自然堆積か判断できない。

＜壁・底の状況＞底面の一部はⅣ層まで及んでいるが、ほとんどがⅢ層である。北側の4gグリッドでは左右二列の工具痕らしき



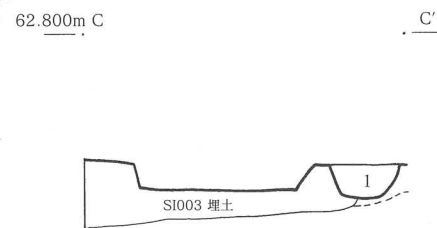
SD002 A-A'

1 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり有 Ⅲ層粒3～5%、焼土粒1% 土器片含む



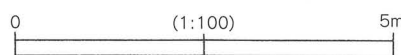
SD002 B-B'

1 10YR2/1黒色土 粘性・しまりやや有 Ⅲ層粒5%、炭化物粒1%含む



SD002 C-C'

1 10YR2/1黒色土 粘性やや有 しまり有 地山粒5%含む



第36図 SD002

浅いくぼみが観察されるが、他の部分は概ね平坦である。全体でみると、北から南へ緩やかに傾斜している。壁は底面から急斜度で立ち上がる。

<遺構の性格> 県道に平行していることを考慮すると、道路側溝である可能性が考えられる。なお、堆積土には水の影響を受けた痕跡が認められず、常に水の堆積している環境は想定できない。

**出土遺物** 出土した遺物は土師器と焼成粘土塊1点であるが、土師器については、第2節第6項で報告している。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかったが、県道に平行していることを考慮すると、古くても近世であると考えたい。

### SD003溝跡

**遺構** (第37図、写真図版23)

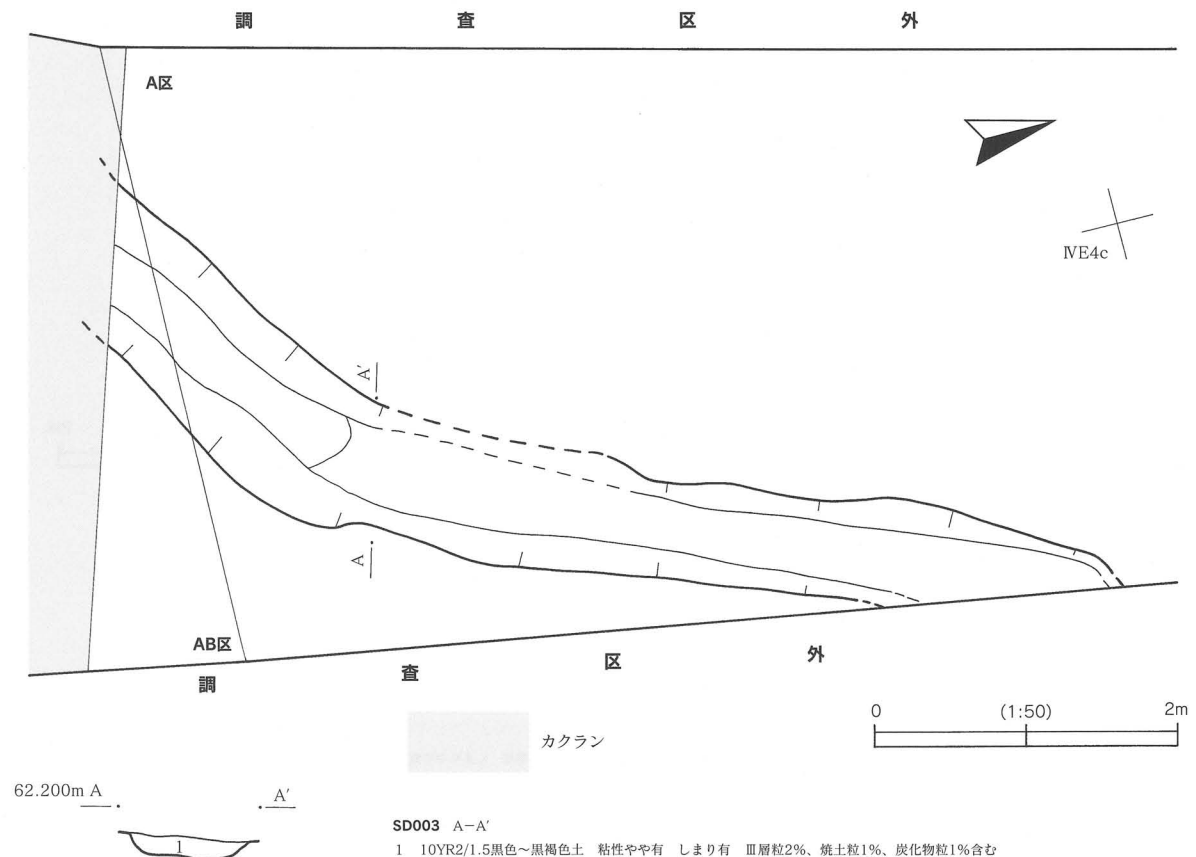
<位置> A区南側のVE4cグリッド～AB区北端のVE5bグリッド付近に位置する。東端は調査区外に伸びているが、県道の造成時に掘削を受け、消滅している。AB区内は市道造成及び地下埋設物によって破壊されており、確認できなかった。そのため、西に伸びるのか、南西に伸びるのか不明である。また、中央西側の一部は近年の掘削により消失している。

<重複関係> なし。

<検出面> 検出はⅢ層上面で行い、黒色～黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形> 完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅94～63cm、下幅52～28cm、長さ6.66mである。検出面からの深さは最大で56cmである。

<埋土> 堆積土を観察した部分は黒色土～黒褐色土の単層であったが、南端の攪乱との境界の堆積土



第37図 SD003

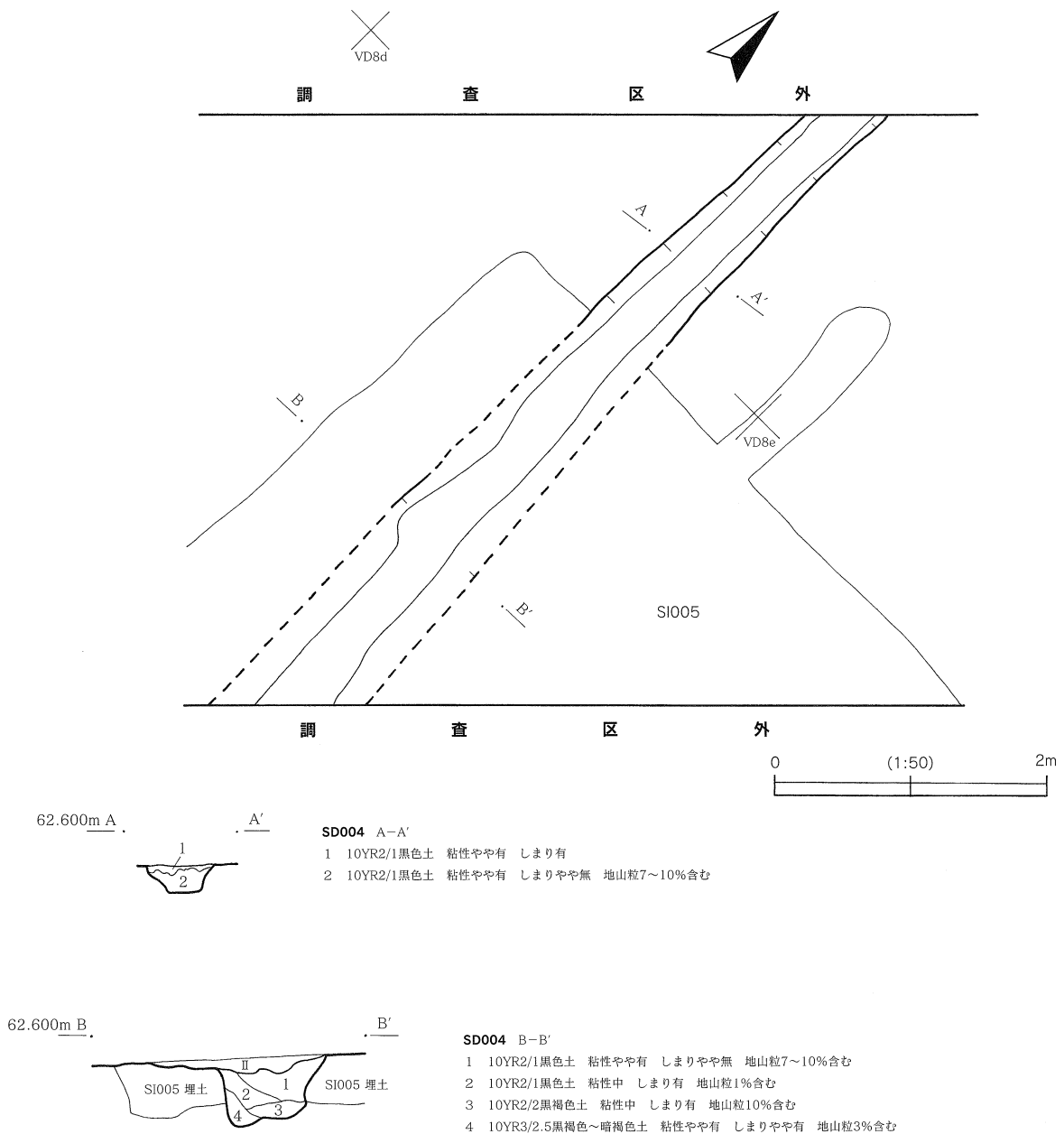
を観察すると、少なくとも2層に分層でき、下層は暗褐色土に近い色調をしている。堆積状況はレンズ状・三角形状を呈しており、自然堆積と捉えられる。

＜壁・底の状況＞底面はⅣ層で、概ね平坦であるが、南側は一段低くなっている。全体的には北東から南西へ緩やかに傾斜している。壁は南側では底面から急斜度で立ち上がり、北側では底面から緩やかに立ち上がる。

＜遺構の性格＞堆積土に水の影響を受けた痕跡が認められないことから、区画溝の可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 埋土から土師器片が出土しており、第2節第6項で報告している。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかった。



第38図 SD004

**SD004溝跡****遺構** (第38図、写真図版23・24)

〈位置〉C区中央のVD7dグリッド～9dグリッドに位置する。南北両端は調査区外に延びている。南側は県道の下に延びているが、南側の法面を観察すると、本調査区北側（02区等）とは異なり、遺構検出面まで、掘削が及んでいないため、保護されている可能性が非常に高い。

〈重複関係〉SI005と重複しており、本遺構が切っている。

〈検出面〉検出はⅢ層上面で行い、黒色土の広がりとして確認した。

〈規模・平面形〉完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅83～40cm、下幅45～25cm、長さ5.94mである。検出面からの深さは最大で54cmである。

〈埋土〉黒色土～黒褐色土を主体とし、混入物や色調により5層に分層した。A-A'間の2層とB-B'間の1層が同一層で、北側は南側の1層までしか確認できない。北側の堆積土は水平状態を呈しており、しまりがなくモソモソしていることや地山の流入や比較的多いことから判断すると、人為堆積の可能性が高いが、南側では三角形の堆積状況を呈しており、下部は自然堆積の可能性が高いと考えられる。

〈壁・底の状況〉底面はⅣ層で、南側ほど、左右二列の工具痕らしき浅いくぼみが観察される。全体的には北から南へ緩やかに傾斜している。壁は底面から急斜度で立ち上がるが、一部では上半が開いている。

〈遺構の性格〉堆積土に水の影響を受けた痕跡が認められないことから、区画溝の可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 埋土から土師器が出土しており、第2節第6項で報告している。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかったが、重複関係から平安時代以降であることは疑いない。

**SD005溝跡****遺構** (第39図、写真図版24)

〈位置〉C区南側のVD10a～VD11bグリッドに位置する。北西・南東両端は調査区外に延びている。南東側は県道の下に延びているが、東側の法面を観察すると、遺構検出面まで掘削が及んでいないため、本遺構が保護されている可能性が非常に高い。

〈重複関係〉SD007と直行する位置関係にあり、新旧関係もしくは同時存在の可能性はあるが、調査区の範囲ではその関係を捉えることはできなかった。

〈検出面〉検出はⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。

〈規模・平面形〉完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅98～62cm、下幅50～36cm、長さ4.37mである。検出面からの深さは最大で35cmである。

〈埋土〉堆積土の観察は南東側調査区境（A-A'）と遺構中央（B-B'）で行った。A-A'間の1層はB-B'間では観察されない、ごく初期の堆積土で黒色土を主体とする。2～4層（A-A'間の2層はB-B'間の1層と同4層は同2層と対応）は黒褐色土を主体とし、Ⅲ層や地山の混入具合により3層に分層した。全体的にレンズ状・三角形の堆積状況を呈しており、自然堆積と判断した。

〈壁・底の状況〉底面はⅣ層で、概ね平坦である。全体的には南東から北西へ緩やかに傾斜している。壁は底面からなだらかに立ち上がる。

〈遺構の性格〉堆積土に水の影響を受けた痕跡が認められないことから、区画溝の可能性が高いと考

えられる。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 遺物が出土していないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかった。なお、SD006とは併行していることや形状・堆積土が類似していることから判断するとあまり時間差があまりないものと推察される。

### SD006溝跡

**遺構** (第39図、写真図版24)

<位置>C区南側のVD10a～VID1bグリッドに位置する。北西・南東両端は調査区外に延びている。南東側は県道の下に延びているが、SD005と同様、遺構検出面まで掘削が及んでいないため、保護されている可能性が非常に高い。

<重複関係>SD007と重複しており、本遺構が切られている。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、VID1aグリッド付近で西もしくは南西に屈曲しているのが確認された。確認された規模は上幅126～57cm、下幅53～40cm、長さ3.98mである。検出面からの深さは最大で40cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とし、2層に分層した。南東側の調査区境でも堆積土の確認を試みたが、上部が後世の掘削の影響を受けており、無理であった。堆積土の状況はSD005と類似しており、観察可能であれば、同様の堆積土であったと推察される。

<壁・底の状況>底面や壁の状況もSD005と同様である。

<遺構の性格>堆積土に水の影響を受けた痕跡が認められないことから、区画溝の可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 遺物が出土していないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかったが、SD005と時間差のあまりないものと推察される。

### SD007溝跡

**遺構** (第39図、写真図版25)

<位置>C区南側のVD10aグリッド～D区北側のVIC8eグリッドに位置する。南北両端は調査区外に延びている。南側は県道の下に延びているが、SD005と同様、保護されている可能性が非常に高い。

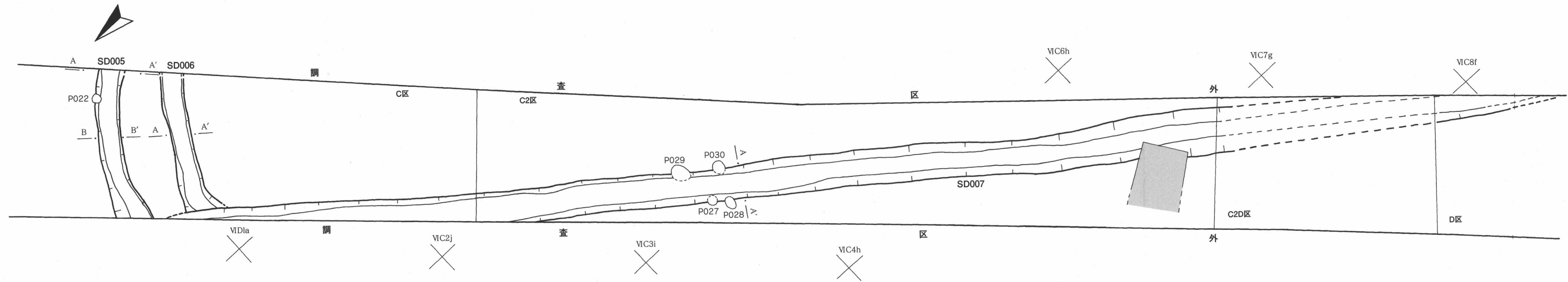
<重複関係>SD006と重複しており、本遺構が切っている。また、SD005とも直行する位置関係にあるが、調査区の範囲ではその関係を捉えることはできなかった。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。

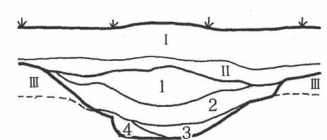
<規模・平面形>完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、北東から南西に向かって直線状に延びている。確認された規模は上幅136～92cm、下幅75～39cm、長さ32.94m、検出面からの深さは最大で56cmである。

<埋土>黒色土～黒褐色土を主体とし、土質や混入物の違いにより6層に分層した。全体的にレンズ状・三角形の堆積状況を呈しており、自然堆積と判断した。

<壁・底の状況>Ⅵ層まで掘削し、底面としている。遺構精査を行った時期に降雨が多かったことや湧水しやすい環境にあったことから底面の詳細な観察は不可能であったが、概ね平坦であった。全体



62.800m A A'



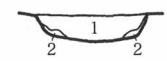
- SD005 A-A'**
- 1 10YR2/1黒色土 粘性やや無 しまり中 地山粒(20mm大)30%含む
  - 2 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや無
  - 3 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや無 地山ブロック10%含む
  - 4 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや無 Ⅲ層ブロック20%含む

62.400m A A'



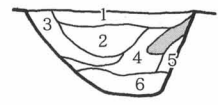
- SD006 A-A'**
- 1 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや無
  - 2 10YR2/3黒褐色土 粘性・しまりやや有 Ⅲ層ブロック20%含む

62.800m B B'



- SD005 B-B'**
- 1 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや無
  - 2 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや無 Ⅲ層ブロック20%含む

62.000m A A'



- SD007 A-A'**
- 1 10YR2/2黒褐色土 粘性・しまりやや無
  - 2 10YR2/2黒褐色土 粘性やや無 しまり中 10YR4/3にふい、黄褐色土10%含む
  - 3 10YR2/1黒色土 粘性・しまりやや無
  - 4 10YR2/1黒色土 粘性やや無 しまり中
  - 5 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや有 Ⅲ層ブロック40%含む
  - 6 10YR2/2黒褐色土 粘性中 しまりやや有 地山粒10%含む

第39図 SD005~SD007



的には北東から南西に向かって傾斜している。壁は底面から直線的に開いている。

＜遺構の性格＞堆積土に水の影響を受けた痕跡が認められないことから、区画溝の可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 埋土から土師器片が出土しており、第2節第6項で報告している。

**時期** 遺物が出土していないことや、掘り込み面を特定できないことから時期を特定するに至らなかった。

### SD008溝跡

**遺構** (第40図、写真図版25)

＜位置＞A区南側のIVE3cグリッド付近に位置する。東側は調査区外に延びているが、県道の造成時に掘削を受け、消滅している。

＜重複関係＞なし。

＜検出面＞検出はⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。

＜規模・平面形＞東側が調査区外に延びているため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅59～23cm、下幅34～11cm、長さ3.23m、検出面からの深さは最大で12cmである。

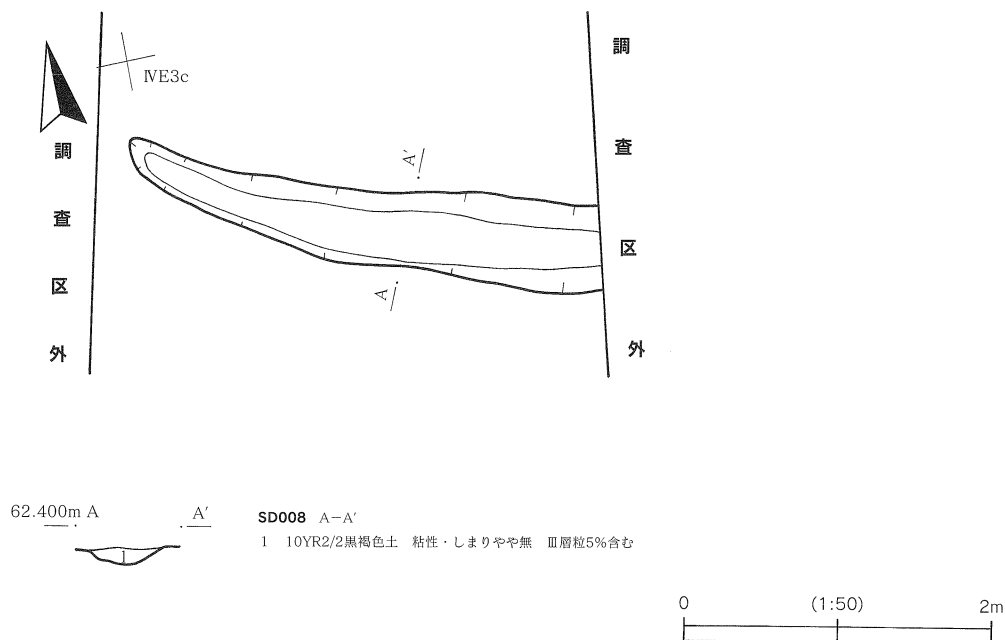
＜埋土＞黒褐色土の単層で、層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

＜壁・底の状況＞底面はⅢ層で、全体的に細かい凹凸が観察される。調査以前は畑地として利用されていたため、植栽の影響と考えられる。全体としては、東から西に向かって緩やかに傾斜している。壁はなだらかに立ち上がる。

＜遺構の性格＞不明である。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 遺物が出土していないことや、掘り込み面を特定できないことから時期を特定するに至らなかった。



第40図 SD008

### SD009溝跡

遺構（第41図、写真図版25）

〈位置〉B区のほぼ中央を縦断するように検出され、IVE7bグリッド～IVE10aグリッドに位置する。南北両端は調査区外に延びているが、北側は市道造成時の掘削によって消滅している。南側についても、県道との比高差がないため、造成時の掘削によって消滅している可能性が高い。B区北側は南側と比較すると、IV層に相当する部分まで後世の掘削が及んでいるため、本遺構の北側は底面付近しか確認できないほど残存状態が悪い。

〈重複関係〉SD010～SD013と重複しており、本遺構が切られている。

〈検出面〉検出はⅢ層上面で行い、黒色土の広がりとして確認した。

〈規模・平面形〉両端の検出を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、IVE9a・10aグリッドでゆるやかに曲がっているのが確認された。確認された規模は上幅75～41cm、下幅45～22cm、長さ16.4m、検出面からの深さは最大で31cmである。

〈埋土〉黒色土～黒褐色土を主体とし、3層に分層した。底面付近にはIV層に起因する堆積土が確認され、壁の崩落土と判断した。堆積土の境界はやや波打っているものの、レンズ状・三角形状の堆積状況を呈していることから、自然堆積と判断した。

〈壁・底の状況〉底面はIV層で、左右二列の工具痕らしき浅いくぼみが観察される。全体的には、南から北へ緩やかに傾斜している。残存状態の良い南側で観察すると、壁は底面から急傾斜で立ち上がる。

〈遺構の性格〉調査結果は堆積土に水の影響を受けた痕跡が認められないことから、区画溝的な性格の可能性を示しているが、地域住民からの聞き取り調査によると、道路側溝の可能性が考えられる。

**出土遺物** 埋土から土師器が出土しており、第2節第6項で報告している。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかった。なお、地域住民の方によると、本遺構に沿うような道路が約100年前にあったということを聞いているとのことであり、近代以降の可能性もある。

### SD010溝跡

遺構（第41図、写真図版26）

〈位置〉B区南側のIVD9jグリッド～IVE10aグリッドに位置する。東西両端は調査区外に延びている。東側は県道との比高差がないため、造成時の掘削によって消滅している可能性が高い。本遺構の西側は近年の掘削の影響を受けており、消失している。

〈重複関係〉SD010と重複しており、本遺構が切っている。

〈検出面〉検出はⅢ層上面で行い、黒色土の広がりとして確認した。

〈規模・平面形〉完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅56～47cm、下幅26～20cm、長さ6.07m、検出面からの深さは最大で40cmである。

〈埋土〉底面付近にIV層に起因する堆積土が確認され、壁の崩落土と判断した。堆積土のほとんどが同質の黒色土で埋没しており、人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

〈壁・底の状況〉底面はIV層で、左右二列の工具痕らしき浅いくぼみが観察される。全体的には西から東へ緩やかに傾斜している。壁は底面から急傾斜で立ち上がる。

〈遺構の性格〉不明である。

**出土遺物** 埋土から土師器片が出土しており、第2節第6項で報告している。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかったが、重複関係から判断すると、近代以降の可能性が高い。

### SD011溝跡

**遺構** (第41図、写真図版26)

<位置>B区北側のIVE 7bグリッド付近に位置する。東側に延びている可能性が高いが、遺構の残存状態が非常に悪く、詳細は不明である。

<重複関係>SD010と重複しており、本遺構が切っている。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。SD009の重複部分から東側は、遺構精査時期に天候不順が続いたことや湧水環境にあったことから水没することが多く、その度に排水作業と検出作業を繰り返したため、堆積土が消失してしまった。

<規模・平面形>部分的な検出であるため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅44～21cm、下幅26～10cm、長さ1.55m、検出面からの深さは最大で15cmである。

<埋土>上部は黒褐色土主体、下部は暗褐色土主体の堆積土であるが、全体的に残存状態が悪いため、人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

<壁・底の状況>湧水することが多く、底面の状況を観察することは困難であった。壁は底面からなだらかに立ち上がる。

<遺構の性格>水の溜まり易い場所に構築されており、排水のための溝の可能性が高いと思われる。

### 出土遺物

<出土状況>出土した遺物は埋土から出土した鉄器2点のみである。

<鉄器> (第44図、写真図版39)

不明鉄製品1点、釘1点の計2点出土している。103は断片的な資料であるため、器種を特定することができなかった。104は先端を欠損した鉄釘である。断面形は方形を呈する。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかったが、重複関係から判断すると、近代以降の可能性が高い。

### SD012溝跡

**遺構** (第41図、写真図版26)

<位置>B区北側のIVE 7b～8bグリッドに位置する。東側は調査区外に延びているが、県道との比高差がないため、造成時の掘削によって消滅している可能性が高い。

<重複関係>SD010と重複しており、本遺構が切っている。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、黒色土～黒褐色土の広がりとして確認した。

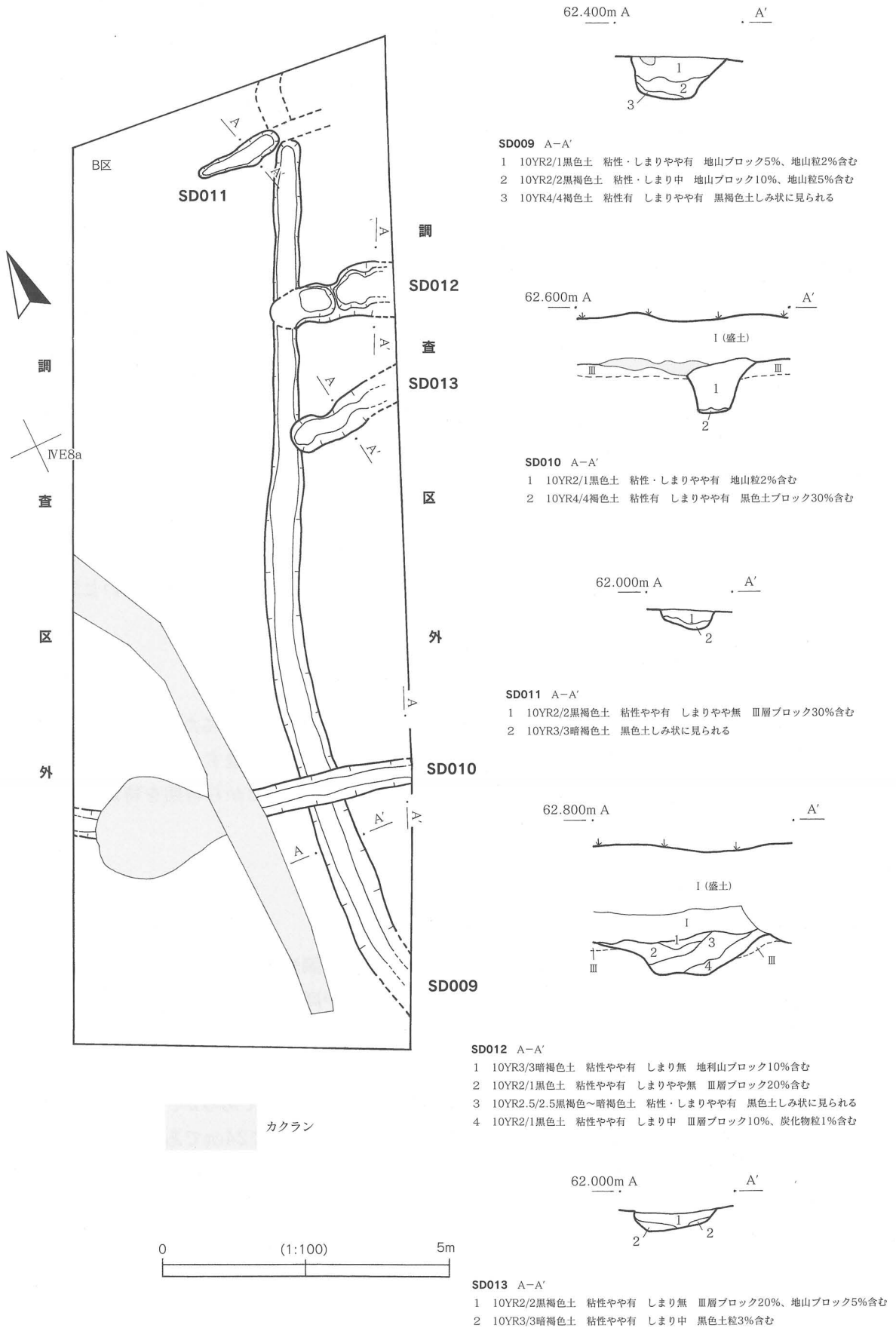
<規模・平面形>完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅97～60cm、下幅56～37cm、長さ2.2m、検出面からの深さは最大で24cmである。

<埋土>色調や混入物により4層に分層した。堆積土は南側の一方向から堆積した状況を呈しており、人為堆積の可能性が高いと判断した。

<壁・底の状況>底面はⅢ層で、様々な凹凸が観察され安定していない。全体的には東から西に緩やかに傾斜している。壁は底面からなだらかに立ち上がる。

<遺構の性格>水の溜まり易い場所に構築されており、排水に係る溝の可能性が高いと思われる。

### 出土遺物



第41図 SD009～SD013

<出土状況> 出土した遺物は埋土から出土した鉄器3点のみである。

<鉄器> (第44図、写真図版39)

釘が3点出土している。3点とも断面形が方形を呈する鉄釘で、径は3点とも4mm前後である。105・107は先端を、106は両端を欠損している。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかったが、重複関係から判断すると、近代以降の可能性が高い。

### SD013溝跡

**遺構** (第41図、写真図版27)

<位置> B区北側のVE8bグリッドに位置する。東側は県道の下に延びているが、東側の法面を観察すると、遺構検出面まで掘削が及んでいないため、保護されている可能性が高い。

<重複関係> SD010と重複しており、本遺構が切っている。

<検出面> 検出はⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形> 東側が調査区外に延びているため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅62~46cm、下幅26~12cm、長さ2.1m、検出面からの深さは最大で22cmである。

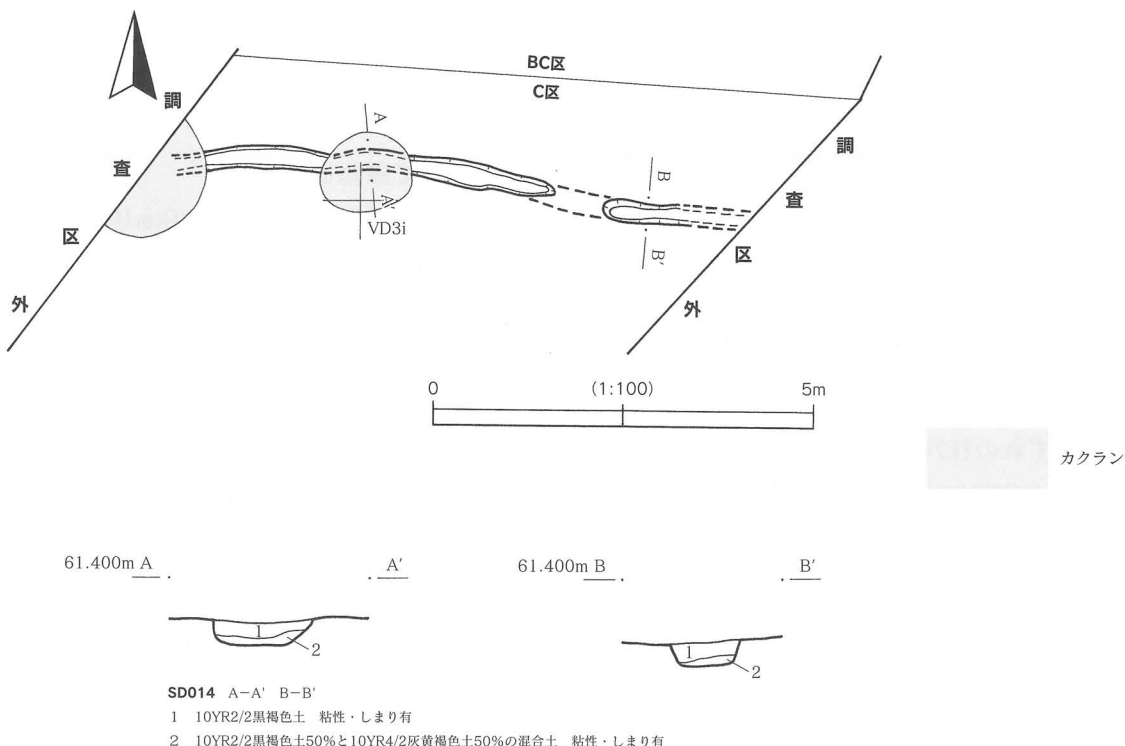
<埋土> 底面直上にはⅢ層に起因する堆積土が観察され、壁の崩落土と判断した。堆積土のほとんどが同質の黒褐色土で埋没しており、人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

<壁・底の状況> 底面はⅢ層で、様々な凹凸が観察され安定していない。全体的には東から西に緩やかに傾斜している。壁は底面からなだらかに立ち上がる。

<遺構の性格> 水の溜まり易い場所に構築されており、排水に係る溝の可能性が高いと思われる。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかった



第42図 SD014

たが、重複関係から判断すると、近代以降の可能性が高い。

#### SD014溝跡

**遺構** (第42図、写真図版27)

<位置>C区北側のVD2hグリッド～VD3jグリッド付近に位置する。東西両端は調査区外に延びている。東側は県道の下に延びているが、東側の法面を観察すると、遺構検出面まで掘削が及んでいないため、保護されている可能性が高い。本遺構は近年の植栽の影響を受けており、部分的に消失している。

<重複関係>なし。

<検出面>検出は表土（I層）直下のⅢ層上面で行い、黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>完掘を行っていないため、全体の規模や形状は不明であるが、確認された規模は上幅33～23cm、下幅24～15cm、長さ7.7m、検出面からの深さは最大で11cmである。

<埋土>混入物の有無により2層に分層した。上部は黒褐色土主体、下部は黒褐色土と灰黄褐色土の混合土である。全体的に層厚がなく、人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

<壁・底の状況>底面はⅢ層で、概ね平坦である。全体的には西から東に緩やかに傾斜している。壁は底面からなだらかに立ち上がる。

<遺構の性格>不明である。

**出土遺物** 出土しなかった。

**時期** 出土遺物が少ないことや、掘り込み面を特定できないことなどから時期を特定するに至らなかった。

#### (4) 柱穴状土坑

柱穴状土坑は03区、A区、C区南からC2区北にかけての3つのまとまりが見られる。そのため、それぞれのまとまりごとに記述する。

##### 03区柱穴状土坑

**遺構** (第43図、写真図版27)

<位置>北側のⅢE2e・3eグリッドで2個検出された。

<重複関係>なし。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、2個とも黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>平面形は2個とも円形である。検出面での規模は長軸24cm(P002)～29cm(P001)、短軸24cm(P002)～26cm(P001)、検出面からの深さは32.5cm(P002)～39.1cm(P001)である。あまり大きな差は見られない。

<埋土>2個とも炭化物粒がわずかに混入する黒褐色土で埋没している。柱の痕跡は見られなかった。

<性格>不明である。

**出土遺物** いずれの柱穴状土坑からも出土しなかった。

**時期** SF001やSF002に隣接しているため、関連性があると思われるが、時期を特定する資料に乏しいため、不明とした。

##### A区柱穴状土坑

**遺構** (第43図、写真図版28・29)

<位置>ⅢE8d～ⅣE2cグリッドで15個検出された。



<重複関係>個々の柱穴状土坑が直接重複する遺構はない。しかし、P009やP010はSB001のプラン内に位置するため、新旧関係があることは確実であるが、直接重複しているわけではないので不明である。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、黒色土もしくは黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>平面形は円形もしくは楕円形である。検出面での規模は長軸18cm (P014) ~35cm (P007)、短軸17cm (P014) ~34cm (P007)、検出面からの深さは7.6cm (P012) ~18.7cm (P007) である。規模は長軸30cm前後のものと20cm前後のものが多く、深さは規模に関係なく10cm前後のものが多く、長軸30cm前後のものはSB001を構成する柱穴の規模と類似しており、関連があるかもしれない。

<埋土>P017を除くと、単層である。全体的にⅢ層ブロックが混入するものが多い。P017も堆積土の主体は黒褐色土であるが、掘り方の堆積土には地山ブロックの混入やしまりがあるなどの違いが観察される。

<性格>P015~P017は80cm間隔で一直線に配置されており、柵列等を構成する柱穴の可能性はあるが、今回の調査では判断できなかった。その他の柱穴には分布を見る限り、配置に規則性は認められないが、東西の調査区外にも柱穴が広がることが想定されるため、建物等の遺構の柱穴である可能性を含んでいる。

**出土遺物** いずれの柱穴状土坑からも出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しておらず、時期を特定するに至らなかったが、SB001と時間差のあまりないものと推察される。

### C区~C2区柱穴状土坑

**遺構** (第43図、写真図版29)

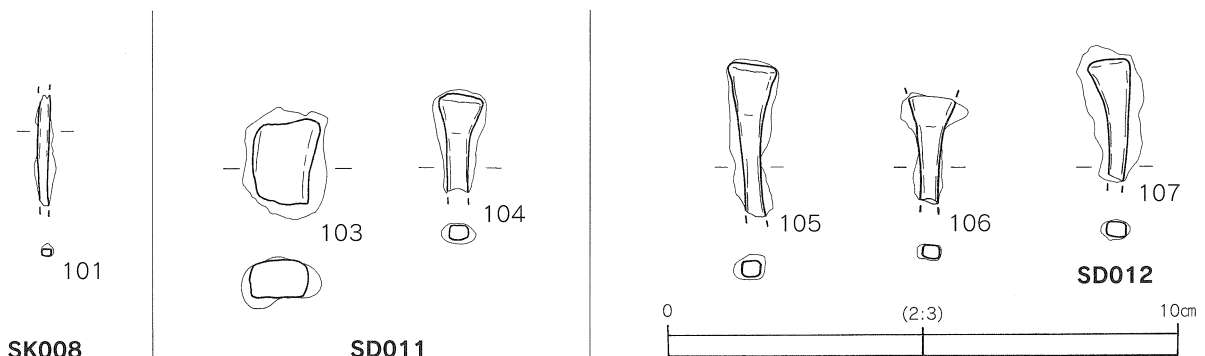
<位置>C区南側のVD10bグリッドからC2区北側のVIC3iグリッドで13個検出された。

<重複関係>P022がS D005と、P027~P030がS D007と重複しており、いずれの場合も柱穴状土坑が溝の一部を壊しており、新しいと判断できる。

<検出面>検出はⅢ層上面で行い、黒色土もしくは黒褐色土の広がりとして確認した。

<規模・平面形>平面形はP028とP029を除いて、円形もしくは楕円形である。検出面での規模は長軸26cm (P026) ~56cm (P029)、短軸23cm (P021) ~44cm (P024)、検出面からの深さは7.5cm (P023) ~43.3cm (P024) である。規模は長軸30cm前後のものが多く、深さはまちまちである。

<埋土>黒色土もしくは黒褐色土を主体とする。柱の痕跡が確認できたのはP020、P027~P030である。



第44図 遺構内出土遺物(平安以降)



<性格>分布を見る限り、配置に規則性は認められないが、北西、南東の調査区外にも柱穴が広がることが想定されるため、建物等の遺構の柱穴である可能性を含んでいる。

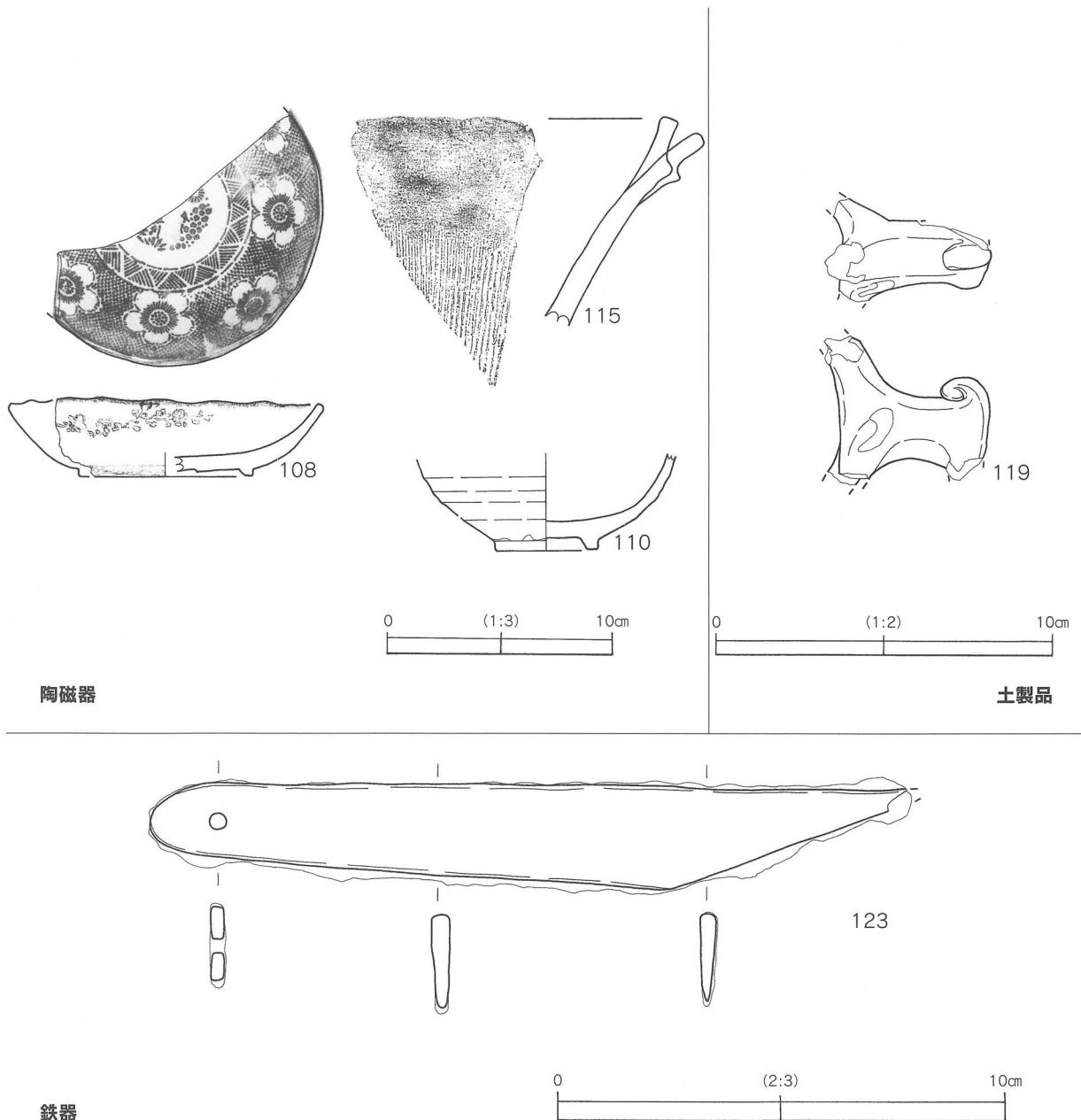
**出土遺物** いずれの柱穴状土坑からも出土しなかった。

**時期** SD005やSD007より新しいものがあるのは確実であるが、いずれの柱穴からも遺物が出土しておらず、時期を特定するに至らなかった。

(5) 遺構外出土遺物

**磁器** (第45図、写真図版40)

01区からB区で出土しており、総量790.2gである。SB001の検出されたA区や近年のゴミ穴があった01区・02区の出土量が多い。ほとんどが工業コバルトで染付けされたもので、明治時代以降のものである。産地を特定できる資料はなかった。



第45図 遺構外出土遺物 (平安以降)

108は型紙で染付を行う皿である。体部は内湾気味に立ち上がる。高台は蛇ノ目で、外面は釉剥ぎが行われている。体部外面には梅が、内面には松竹梅文が描かれる。

**陶器** (第45図、写真図版40)

南側 (C2区～D区) を除き、量は少ないながらも出土している。総量は625.6gである。盛土の堆積が厚く、近年のゴミ穴があった02区の出土量が377.9gと多い。器種は碗・皿・鉢・甕・壺 (小壺) ・花入れがあり、産地は相馬、不明 (在地産、東北地方を含む) に分けられる。

109・110・118は相馬産で、109が花入れ、110が碗、118が鉢である。109・118は口縁部付近の断片的な資料である。110は底部から内湾気味に立ち上がるが、口縁部は欠損しているため、不明である。釉薬は高台を除いて藁灰釉が施される。

111～117は産地の特定できなかったものである。111は小壺、112・113は皿、114・117は鉢、115は播鉢、116は甕である。胎土は灰色 (111・113・116) と褐色系 (112・114・115・117) に分けられる。胎土が灰色のものは釉薬が施されるものが多いが、褐色系のものは素焼のものが多い。文様が観察できるのは113の1点のみである。

**土製品** (第45図、写真図版37)

土製品は03区から出土した土人形1点である。なお、製品ではないが、帰属時期不明の粘土塊が2点出土しているが、掲載はしていない。

119は犬形の土人形である。前後の脚、頭部が欠損している。

**石製品** (写真図版41)

石製品には硯と砥石があり、02区から硯が、03区からは砥石が1点ずつ出土した。

121は粘板岩製の硯である。断片的なもので、全体の器形は不明である。

122は頁岩製の砥石である。断片的なものであるため、全体の器形は不明であるが、残存する部分から判断すると、扁平な板状の仕上砥と考えられる。表裏面と一側面に使用痕跡が観察でき、少なくとも3面は使用していたことがわかる。

**鉄器** (第45図、写真図版39)

A区南東端のI層から刀子が1点出土している。刀身部の先端部をわずかに欠損している。茎部から刀身部まで棟は一直線状になっており、関を持たないものである。茎部は丸尻でやや深い。X線写真を観察すると、茎部に目釘穴があるのが確認できる。

第4表 柱穴状土坑一覧

遺構名	区域	位置		埋土	重複関係	規模 (cm)			備考
						長軸	短軸	深さ	
P001	03区	ⅢE	2e	黒褐色土の単層 C1～2%	なし	29	26	39.1	
P002	03区	ⅢE	3e	黒褐色土の単層 C1～2%	なし	24	24	32.5	
P003	A区	ⅢE	8d	黒褐色土の単層 Ⅲ層B15%	なし	34	31	13.3	
P004	A区	ⅢE	8d	黒褐色土の単層 Ⅲ層B40%	なし	32	28	11.3	
P005	A区	ⅢE	9de	黒色土の単層	なし	28	25	13.6	
P006	A区	ⅢE	9c	黒色土主体	なし	(41)	[21]	25.5	
P007	A区	ⅢE	9d	黒褐色土の単層 Ⅲ層B5%	なし	35	34	18.7	
P008	A区	ⅢE	10d	黒色～黒褐色土の単層 Ⅲ層粒5%・C粒2%	なし	29	25	9.8	
P009	A区	ⅢE	10c	黒褐色土の単層 地山B5%	なし	29	25	14.4	
P010	A区	ⅢE	10c	黒褐色土の単層 Ⅲ層B10%	なし	28	26	12.4	
P011	A区	ⅢE	10c	黒色～黒褐色土の単層 地山B15%	なし	23	20	14.3	
P012	A区	ⅣE	1c	黒色土の単層 Ⅲ層B10%	なし	20	19	7.6	
P013	A区	ⅣE	1c	黒褐色土の単層 地山粒1%・Ⅲ層B5%	なし	21	17	9.0	
P014	A区	ⅣE	1c	黒色土の単層 Ⅲ層B10%	なし	18	17	12.0	
P015	A区	ⅣE	2c	黒褐色土の単層 Ⅲ層B20%	なし	30	28	11.1	
P016	A区	ⅣE	2c	黒褐色土の単層 地山粒2%	なし	28	26	10.9	
P017	A区	ⅣE	2c	柱痕 黒褐色土主体 8cm 掘り方 黒褐色土主体 地山B5%	なし	31	30	17.9	柱痕あり
P018	C区	VD	10b	黒褐色土主体	なし	33	28	21.0	
P019	C区	VD	10b	黒褐色土主体	なし	28	26	13.5	
P020	C区	VD	10b	注記参照	なし	28	28	24.4	柱痕あり P022・P024と 関連か
P021	C区	VD	10b	黒褐色土主体	なし	31	23	18.8	
P022	C区	VD	10b	黒褐色土主体	SD005 を切る	27	26	16.1	P020・P024と 関連か
P023	C区	VID	1a	黒褐色土主体	なし	44	36	7.5	
P024	C区	VID	1a	注記参照	なし	50	44	43.3	P020・P022と 関連か
P025	C2区	VIC	2j	黒色土の単層	なし	32	30	10.6	
P026	C2区	VIC	2j	黒色土の単層	なし	26	24	9.7	
P027	C2区	VIC	3hi	柱痕 黒色土主体 掘り方 黒褐色土主体	SD007 を切る	(27)	(26)	31.5	柱痕あり
P028	C2区	VIC	3h	柱痕 黒色土主体 掘り方 黒褐色土主体	SD007 を切る	(37)	(26)	17.6	柱痕あり
P029	C2区	VIC	3i	柱痕 黒色土主体 掘り方 黒褐色土主体	SD007 を切る	(56)	(43)	18.0	柱痕あり
P030	C2区	VIC	3i	柱痕 黒色土主体 掘り方 黒褐色土主体	SD007 を切る	(33)	33	20.8	柱痕あり

埋土のCは炭化物粒、Bはブロックを表す。  
規模の( )は推定値、[ ]は残存値を表す。

第5表 土師器・須恵器観察表（1）

掲載No.	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率	法量	口径	調整	外 面
							底径		内 面
							器高		底 面
3	SI001	1層（16・18）・ 北側埋土・ 南側埋土	土師	坏	70		(15.5)		回転ナデ
							(7.4)		ミガキ
							6.5		回転糸切り→ナデ
4	SI001	埋土下位	土師	坏	20		—		回転ナデ
							(5.2)		ミガキ
							[1.5]		回転糸切り
5	SI001	北側埋土	土師	坏	60		(12.6)		回転ナデ
							4.3		ミガキ？
							4.0		回転糸切り
6	SI001	北側埋土	土師	坏	30		(13.4)		回転ナデ
							5.1		回転ナデ
							4.3		回転糸切り
7	SI001	北側埋土	土師	坏	25		—		回転ナデ
							4.6		回転ナデ
							[1.8]		回転糸切り
8	SI001	北側埋土	土師	坏	20		—		回転ナデ
							5.0		回転ナデ
							[0.9]		回転糸切り
9	SI001	北側埋土	土師	坏	5		—		回転ナデ
							—		回転ナデ
							[3.6]		—
10	SI001	北側埋土	土師	坏	～5		—		回転ナデ
							—		回転ナデ
							[3.3]		—
11	SI001	南側埋土	土師	甕	～5		—		ヨコナデ
							—		ヨコナデ
							[2.9]		—
12	SI001	床直・埋土下位・1層・ 南北埋土・北側床直・ SD002埋土・ 02区北 I層	須恵	大甕	15		(37.0)		タタキ→回転ナデ
							—		回転ナデ、ヘラナデ？→ナデ
							[33.0]		—
13	SI001	1層・南側埋土	須恵	甕 or 壺	5		—		回転ナデ→ヘラケズリ（ナデ状）
							—		回転ナデ
							[13.2]		—
18	SI002	埋土下位	土師	坏	5		(10.8)		回転ナデ
							—		回転ナデ
							[2.6]		—
19	SI002	埋土	土師	坏	25		—		回転ナデ
							5.5		ミガキ
							[1.8]		回転糸切り
20	SI003	埋土上位	土師	坏	15		(11.6)		回転ナデ
							(5.2)		回転ナデ
							3.0		静止糸切り？→スノコ状圧痕

色調	外 面	備考	図版No.	写図No.
	内 面			
	断 面			
	10YR7/2にぶい黄橙、(口)部分的に10YR1・7/1黒	底部高台状	28	30
	N1.5/0黒			
	10YR5/1褐灰			
	10YR7/3にぶい黄橙		28	30
	2.5GY2/1黒			
	外側は10YR7/3にぶい黄橙、内側は5YR6/1灰			
	2.5Y8/3浅黄	内面やや摩滅	28	30
	10YR6/3 にぶい黄橙、部分的にN6/0灰			
	10YR6/3 にぶい黄橙、部分的にN6/0灰			
	10YR8/2灰白		28	30
	10YR8/3浅黄橙			
	10YR8/3浅黄橙			
	2.5Y5/3黄褐	器面摩滅	28	30
	2.5Y7/4浅黄			
	2.5Y7/4浅黄			
	10YR7/3にぶい黄橙	器面摩滅	28	30
	10YR7/2にぶい黄橙			
	10YR7/2にぶい黄橙			
	2.5Y5/2暗灰黄	内面上部赤化 器面摩滅	28	30
	2.5Y6/3にぶい黄、端部側は2.5YR6/6橙			
	2.5Y6/3にぶい黄			
	2.5Y7/4浅黄	内面上部赤化 器面摩滅 9と同一個体か	-	30
	2.5Y7/3浅黄、端部側は2.5YR6/6橙			
	2.5Y7/3浅黄、芯は10YR5/1褐灰			
	7.5YR7/6橙	器面摩滅	28	30
	7.5YR7/6橙			
	7.5YR8/6浅黄橙			
	5YR5/4にぶい赤褐	abcの同一個体 残存率 b:10%、c:~5% cの頸部に山形状のへら書有り	28	31
	5YR5/4にぶい赤褐			
	5YR5/4にぶい赤褐			
	7.5Y5/1灰、部分的に2.5Y5/3黄褐		29	32
	2.5Y4/1黄灰			
	2.5Y5/1黄灰、中央部は2.5Y5/3黄褐			
	10YR8/3浅黄橙	器面摩滅	29	32
	10YR8/3浅黄橙			
	10YR8/3浅黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙、部分的に2.5GY黒の斑		29	32
	N1.5/0黒			
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR6/3にぶい黄橙	内面にタール状の付着物 底部穿孔か	29	32
	7.5YR5/4にぶい褐			
	10YR6/3にぶい黄橙			

第5表 土師器・須恵器観察表(2)

掲載No.	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率	法量	口径	調整	外 面
							底径		内 面
							器高		底 面
21	SI003	埋土上位	土師	甕	~5		—		回転ナデ
							6.6		回転ナデ
							[1.7]		回転糸切り
22	SI003	東側南1層	土師	甕	~5		—		ヨコナデ→ヘラナデ→ヘラケズリ
							—		ヨコナデ、ヘラナデ
							[6.2]		—
23	SI003	南側埋土	土師	甕	~5		—		ヨコナデ
							—		ヨコナデ
							[4.3]		—
24	SI003	埋土上位	土師	甕	~5		—		ヘラケズリ・ナデ
							—		ナデ
							[5.7]		—
26	SI004	土坑1 埋土下位(1)・ 土坑1 底面直上(2)・ 床面	土師	坏	55		(13.6)		回転ナデ
							5.8		回転ナデ
							4.7		回転糸切り
27	SI004	攪乱	土師	坏	20		—		回転ナデ
							5.6		回転ナデ
							[2.5]		回転糸切り
28	SI004	床面直上・床面・ 北側埋土	土師	甕	5		—		回転ナデ
							5.5		回転ナデ
							[5.2]		回転糸切り→ナデ
29	SI004	土坑1 北側埋土	土師	甕	~5		—		回転ナデ?
							—		回転ナデ?
							[3.4]		—
30	SI004	住居内溝 埋土	土師	甕	~5		—		回転ナデ?
							—		回転ナデ?
							[3.5]		—
31	SI004	住居内溝 埋土	土師	甕	~5		—		ヘラケズリ
							—		ヘラナデ
							[10.8]		—
56	SI005	床面直上(No.4)	土師	坏	5		—		回転ナデ
							—		ミガキ
							[2.5]		回転糸切り→ヘラケズリ?
57	SI005	カマド左ソデ 12層	土師	坏	~5		—		回転ナデ
							—		回転ナデ
							[4.1]		—
58	SI005	燃烧部(No.6)	土師	甕	5		—		回転ナデ
							7.0		回転ナデ?
							[4.6]		回転糸切り
59	SI005	燃烧部	土師	甕	~5		—		回転ナデ
							—		回転ナデ
							[5.2]		—

色調	外 面	備考	図版No.	写図No.
	内 面			
	断 面			
	10YR6/3にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙		29	32
	10YR6/4にぶい黄橙			
	2.5Y7/2灰黄			
	10YR7/3にぶい黄橙	器面摩滅	29	32
	2.5Y8/2灰白			
	10YR4/3にぶい黄褐			
	10YR5/4にぶい黄褐	器面摩滅 ロクロ使用か	29	32
	10YR6/3にぶい黄橙			
	2.5Y7/2灰黄			
	10YR7/4にぶい黄橙	器面摩滅	-	32
	10YR8/4浅黄橙			
	10YR6/3にぶい黄橙			
	7.5YR7/6橙	内面に煤状の付着物	29	32
	10YR7/6明黄褐			
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙	器面摩滅	29	32
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR7/6明黄褐	底部高台状 器面摩滅	29	33
	10YR8/4浅黄橙			
	10YR5/4にぶい黄褐			
	10YR6/3にぶい黄橙	器面摩滅	29	33
	10YR6/3にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR7/6明黄褐	器面摩滅	29	33
	10YR7/6明黄褐			
	10YR7/6明黄褐			
	7.5YR7/6橙	器面摩滅	29	33
	10YR7/6明黄褐			
	10YR7/4にぶい黄橙			
	N1.5/0黒	器面摩滅	30	33
	2.5Y4/2暗灰黄			
	10YR6/4にぶい黄橙、上半は10YR6/6明黄褐			
	10YR6/6明黄褐	器面摩滅	30	33
	10YR6/6明黄褐			
	10YR7/3にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙	器面摩滅	30	33
	10YR7/3にぶい黄橙			
	10YR4/3にぶい黄褐			
	10YR6/4にぶい黄橙	器面摩滅	30	33
	10YR5/4にぶい黄褐			

第5表 土師器・須恵器観察表（3）

掲載No.	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率	法量	口径	調整	外 面
							底径		内 面
							器高		底 面
60	SI005	カマド右ソデ 19層	土師	甕	～5	-	-	-	ヘラケズリ
							-		ナデ?
							[10.3]		-
61	SI005	煙出し 底面	土師	甕	～5	-	-	-	ヘラケズリ
							-		ナデ
							[14.7]		-
62	SI005	周溝 1層 土坑1 2層 (No.11)	土師	甕	～5	-	-	-	ヘラケズリ・ナデ
							-		ナデ
							[14.5]		-
63	SI005	燃烧部 3層	土師	甕	～5	-	-	-	-
							-		ナデ
							[0.8]		無調整
64	SI005	Q3埋土下位	土師	甕	～5	-	-	-	回転ナデ
							-		回転ナデ
							[5.5]		-
65	SI005	南ベルト埋土	土師	甕	～5	-	-	-	ヨコナデ
							-		ヨコナデ
							[3.5]		-
66	SI005	Q2埋土上位	土師	甕	～5	-	-	-	回転ナデ?
							-		回転ナデ?
							[3.7]		-
67	SI005	2層 (No.9)	土師	甕	～5	-	-	-	ヘラケズリ・ナデ
							-		ヘラナデ
							[10.5]		-
68	SI005	Q3埋土上位	須恵	甕 or 壺	～5	-	-	-	不明
							-		回転ナデ
							[5.0]		-
70	SK004	P1 8層下部	土師	坏	95	-	10.8	-	回転ナデ
							3.0		回転ナデ
							3.0		回転糸切り
71	SK004	P2 10層	土師	坏	20	-	-	-	回転ナデ
							6.0		ミガキ
							[2.0]		回転糸切り
72	SK004	底面直上 SK005 1層	土師	高台 付坏	20	-	-	-	回転ナデ
							7.8		回転ナデ
							[2.6]		回転糸切り→回転ナデ
73	SK004	北側埋土	土師	坏	10	-	-	-	回転ナデ
							4.8		回転ナデ
							[1.5]		回転糸切り
74	SK005	南側埋土・ ブロック焼土層	土師	坏	10	-	(10.2)	-	回転ナデ
							4.8		回転ナデ
							2.9		回転糸切り



色調	外 面	備考	図版No.	写図No.
	内 面			
	断 面			
	7.5YR5/4にぶい褐	器面摩滅	30	34
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙	内面にコゲ状の付着物 器面摩滅	30	34
	10YR6/3にぶい黄橙			
	10YR6/3にぶい黄橙			
	10YR6/2灰黄褐、部分的に10YR6/1褐灰	器面摩滅	30	34
	2.5Y8/3淡黄			
	2.5Y8/3淡黄			
	10YR7/4にぶい黄橙		-	33
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙			
	7.5YR5/4にぶい褐、上半は10YR6/4にぶい黄橙	器面摩滅	30	33
	10YR6/4にぶい黄橙			
	(外) 7.5YR5/4にぶい褐、(内) 10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR8/2灰白	器面摩滅	30	34
	10YR8/2灰白			
	10YR8/2灰白			
	10YR7/3にぶい黄橙	器面摩滅	-	34
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙	器面摩滅	30	34
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙			
	2.5Y6/3にぶい黄		-	34
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR5/1褐灰			
	10YR7/3にぶい黄橙	器面摩滅	30	34
	10YR8/3浅黄橙			
	10YR7/3にぶい黄橙			
	10YR6/3にぶい黄橙		30	34
	10YR1.7/1黒			
	10YR7/3にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙	器面摩滅 SK005 1層出土破片と接合	30	34
	2.5Y7/3浅黄			
	2.5Y7/3浅黄			
	10YR6/4にぶい黄橙、底部は10YR5/3にぶい黄褐		31	34
	10YR6/3にぶい黄橙			
	7.5YR5/4にぶい褐			
	2.5Y7/4浅黄		31	35
	2.5Y7/4浅黄			
	10YR7/4にぶい黄橙			

第5表 土師器・須恵器観察表（4）

掲載No.	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率	法量	調整	
							口径 底径 器高	外 面 内 面 底 面
75	SK005	1層 SK004埋土	土師	甕?	~5	— — [5.1]	ナデ?	
							回転ナデ?	
							—	
78	SD001	P1 底面直上	土師	坏	20	— 5.4 [2.0]	回転ナデ	
							ミガキ	
							回転糸切り	
79	SF001	焼成面	土師	甕?	~5	— 7.0 [1.3]	ヘラケズリ	
							—	
							無調整	
80	SF002	焼成面	土師	甕?	~5	— — [8.9]	ヘラナデ?	
							ヘラナデ?	
							—	
81	02区	II層	土師	坏	5	— (5.0) [1.2]	回転ナデ	
							回転ナデ	
							回転糸切り	
82	03区	II層	土師	坏	90	14.0 5.6 3.9	回転ナデ	
							回転ナデ	
							回転糸切り	
83	03区	II層	土師	坏	10	— 5.8 [2.0]	回転ナデ	
							回転ナデ	
							回転糸切り	
84	IIE9f	II層	土師	高台付坏	10	— — [1.8]	回転ナデ	
							回転ナデ	
							回転糸切り→指オサエ→回転ナデ	
85	03区	II層	土師	高台付坏	5	— 7.0 [2.5]	回転ナデ	
							ミガキ	
							→指オサエ→回転ナデ	
86	02区	II層	土師	甕	5	— — [7.8]	ヘラナデ、ヨコナデ	
							ヘラナデ、ヨコナデ	
							—	
87	IVE5c	III層	土師	甕	~5	— — [9.1]	回転ナデ	
							回転ナデ	
							回転糸切り?	
88	02区	II層	須恵	坏	5	— — [1.0]	回転ナデ	
							回転ナデ	
							回転糸切り	
89	03区	II層	須恵	坏	~5	— — [2.0]	回転ナデ	
							回転ナデ	
							—	
90	03区	II層	須恵	甕	~5	— — [4.2]	タタキ→回転ナデ	
							回転ナデ	
							—	

色調	外 面	備考	図版No.	写図No.
	内 面			
	断 面			
	10YR7/3にぶい黄橙	器面摩滅	31	35
	10YR5/1褐灰			
	10YR8/4浅黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙	器面摩滅	31	35
	2.5GY2/1黒			
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR7/6明黄褐	器面摩滅	31	35
	10YR7/4にぶい黄橙			
	外側は7.5YR7/6橙、内側は10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR5/3にぶい黄褐	甌の可能性有り 器面摩滅	31	35
	7.5YR6/6橙			
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙	-	-	35
	10YR7/4にぶい黄橙			
	(外) 10YR7/4にぶい黄橙、(内) 10YR7/2にぶい黄橙			
	7.5YR7/4にぶい橙	34	35	
	7.5YR7/6橙			
	7.5YR7/4にぶい橙			
	5YR6/6橙	器面摩滅	34	35
	10YR7/4にぶい黄橙			
	外側は5YR6/6橙、内側は10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙	器面摩滅	34	35
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR8/2灰白	器面摩滅	34	36
	10YR3/1黒褐、広範囲で2.5Y7/2黄灰			
	2.5Y8/2灰白			
	10YR6/4にぶい黄橙	34	36	
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR5/3にぶい黄褐	abc有り、 部位 b:口縁部 c:底部 残存率 b・c:~5%	34	36
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR5/3にぶい黄褐			
	2.5Y7/2灰黄	-	-	36
	2.5Y7/2灰黄			
	2.5Y7/2灰黄			
	5Y6/1灰	-	-	36
	5Y5/1灰			
	5Y6/1灰			
	2.5Y6/2灰黄	-	-	36
	5Y6/1灰			
	2.5Y6/2灰黄、内側は5Y6/1灰			

第5表 土師器・須恵器観察表（5）

掲載No.	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率	法量		
						口径	調整	外 面
						底径		内 面
						器高	底 面	
91	02区	SK008 北側埋土	土師	高台 付坏	10	—		ミガキ
						—		ミガキ
						[1.5]		回転糸切り→回転ナデ→?
92	02区	SD002 南端埋土	土師	甕	～5	—		回転ナデ
						—		回転ナデ
						[2.0]		回転糸切り
93	B区	SD009 埋土上位	須恵	甕	～5	—		タタキ→ヨコナデ
						—		当て具痕
						[4.6]		—
94	B区	SD009 埋土上位	須恵	甕	～5	—		ヘラケズリ
						—		回転ナデ
						[4.3]		—
95	03区	I層	土師	坏	20	(11.2)		回転ナデ
						(5.6)		回転ナデ
						3.0		回転糸切り
96	03区	I層	土師	坏	10	—		回転ナデ
						4.9		回転ナデ
						[1.2]		回転糸切り
97	03区	I層	土師	坏	10	—		回転ナデ
						5.4		回転ナデ
						[1.0]		回転糸切り
98	03区	I層	須恵	壺?	～5	—		回転ナデ
						—		回転ナデ
						[3.5]		—

種別の土師は土師器、須恵は須恵器である。  
 残存率の単位は%、法量の単位はcmである。  
 法量の（ ）は推定値、[ ]は残存値を表す。

色調	外 面	備考	図版No.	写図No.
	内 面			
	断 面			
	2.5GY2/1黒			
	2.5GY2/1黒		34	36
	10YR7/4にぶい黄橙			
	10YR5/3にぶい黄褐			
	10YR7/4にぶい黄橙		34	36
	10YR6/4にぶい黄橙			
	2.5Y6/2灰黄			
	2.5Y6/2灰黄		-	37
	2.5Y6/2灰黄			
	2.5Y6/1黄灰			
	2.5Y6/1黄灰		-	37
	2.5Y6/1黄灰、中央部は10YR6/3にぶい黄橙			
	10YR6/4にぶい黄橙			
	7.5YR7/4にぶい橙	内面に煤状の付着物（微量）有り	34	37
	10YR6/4にぶい黄橙、部分的に10YR6/1褐灰			
	7.5YR6/4にぶい橙			
	10YR6/4にぶい黄橙		34	37
	10YR6/4にぶい黄橙			
	10YR8/6黄橙			
	7.5YR7/6橙		-	37
	10YR8/6黄橙			
	5Y6/1灰			
	5Y6/1灰		34	37
	5YR5/1灰			

第6表 縄文土器観察表

掲載No.	出土地点	層位	器種	法量	口径	文様の特徴	備考	図版No.	写図No.
					底径				
1	ⅡE8g	SK004 7層	深鉢	—	—	口縁：波状 口縁端部：原体圧痕(L) 縄文：Lタテ 線描：沈線 手法：磨消	残存部位：口縁部 後期？	16	30
				—	—				
				[4.0]	—				
2	ⅡE8f	SK004 北側埋土	深鉢	—	—	沈線	残存部位：体部 後期？	16	30
				—	—				
				[4.2]	—				

法量の単位はcm、[ ]は残存値を表す

第7表 陶磁器類観察表

掲載No.	出土地点	層位	種別	器種	残存率	法量	口径	胎土	製作地	備考	図版No.	写図No.
							底径	釉薬・絵付	製作年代			
108	B区	攪乱	磁器	皿	50	(14.0)	灰白色	不明	型紙 輪花皿	45	40	
						7.8	染付	19C後以降				
						3.5						
109	02区	I層	陶器	花入れ	~5	—	灰色	相馬	—	—	40	
						—	灰釉	19C代				
						[5.4]						
110	ⅣE4aB ・5aB	I層	陶器	碗	20	—	灰色	相馬	45	40		
						4.6	薬灰釉	19C以降				
						[4.3]						
111	ⅡE8g	I層	陶器	小壺	5	—	灰色	不明	—	—	40	
						(2.5)	白色の釉	不明				
						[2.8]						
112	01区	I層	陶器	皿	5	—	褐色	不明	焼成不良	—	40	
						—	素焼	不明				
						[1.6]						
113	02区北	I層	陶器	皿	~5	—	灰色	東北産	草花文系	—	40	
						—	灰釉	19C以降				
						[1.7]						
114	ⅡE7g	攪乱	陶器	鉢	~5	—	褐色	東北産	—	—	40	
						—	薬灰釉	19C以降				
						[4.0]						
115	02区南	Ⅱ層	陶器	播鉢	~5	—	赤褐色	在地産？	45	40		
						—	素焼	19C以降				
						[9.2]						
116	ⅡE8f・ 9f	Ⅱ層	陶器	甕	~5	—	灰色	不明	外面に タタキ痕 須恵系か	—	40	
						—	素焼	不明				
						[3.5]						
117	ⅣE4aB ・5aB	Ⅱ層	陶器	鉢	~5	—	赤褐色	不明	—	—	40	
						—	素焼	19C以降				
						[6.1]						
118	C区	粗掘	陶器	鉢	~5	—	灰色	相馬	—	—	40	
						—	白色の釉	19C代				
						[4.0]						

残存率の単位は%、法量の単位はcmである。  
法量の( )は推定値、[ ]は残存値を表す。

第8表 石器・石製品観察表

掲載No.	器種	出土地点	層位	石質	法量			重量	備考	図版No.	写図No.
					長さ	幅	厚さ				
69	磨石	SI005	Q3埋土 下位	安山岩	4.90	4.65	3.25	50.7	産地：奥羽山脈 (新生代新第四紀)	32	41
120	剥片	02区	I層	赤色頁岩	1.96	1.99	1.24	3.9		—	41
121	硯	02区	I層	粘板岩	(6.6)	(6.0)	(0.6)	27.2		—	41
122	砥石	03区	I層	頁岩	(6.1)	(4.2)	(1.1)	30.8		—	41

法量の単位はcm、重量の単位はgである。

第9表 鉄器観察表

掲載No.	器種	出土地点	出土層位	法量			備考	金属 種類	図版No.	写図No.
				長さ	幅	厚さ				
16	刀子	SI001	床直	(5.0+ 4.5)	2.4	0.5		鉄	32	38
17	鎌	SI001	北側埋土	(10.0)	(4.5)	(0.3)		鉄	32	38
32	不明	SI004	北側埋土	(3.85)	(3.7)	(1.2)		鉄	32	38
33	釘	SI004	南側埋土	(2.8)	0.75	—		鉄	32	38
34	釘	SI004	南側埋土	(2.1)	(0.2)	(0.3)		鉄	32	38
35	釘	SI004	南側埋土	(1.7)	0.85	0.5		鉄	32	38
36	釘	SI004	南側埋土	(1.9)	(0.35)	(0.3)		鉄	32	38
37	釘	SI004	南側埋土	(2.75)	0.7	—		鉄	32	38
38	釘	SI004	南側埋土	(3.7)	(0.55)	(0.3)		鉄	32	38
39	釘	SI004	南側埋土	(2.5)	0.75	—		鉄	32	38
40	釘	SI004	南側埋土	(3.1)	(0.9)	(0.25)		鉄	32	38
41	釘	SI004	南側埋土	(2.85)	(0.75)	(0.5)		鉄	32	38
42	釘	SI004	南側埋土	(2.0)	0.7	—		鉄	32	38
43	釘	SI004	南側埋土	(3.65)	0.8	—		鉄	32	38
44	釘	SI004	南側埋土	(2.85)	1.05	—		鉄	32	38
45	釘	SI004	埋土	(3.6)	1.2	—		鉄	32	38
46	釘	SI004	埋土	(3.15)	1.05	0.5		鉄	32	38
47	釘	SI004	埋土	(2.0)	1.0	0.5		鉄	32	38
48	釘	SI004	埋土	(2.6)	0.8	—		鉄	32	38
49	釘	SI004	埋土	(2.9)	0.8	(0.45)		鉄	32	38
50	釘	SI004	埋土	(2.75)	0.7	—		鉄	32	39
51	釘	SI004	柱穴2埋土	(3.1)	0.8	—		鉄	32	39
52	釘	SI004	柱穴2埋土	(2.9)	0.65	—		鉄	32	39
53	釘	SI004	柱穴2埋土	(2.75)	0.8	—		鉄	32	39
54	釘	SI004	柱穴2埋土	(2.5)	(1.0)	—		鉄	32	39
55	釘	SI004	柱穴2埋土	(3.45)	1.0	—		鉄	32	39
76	釘	SK007	南側埋土	(3.7)	1.1	—		鉄	32	39
77	釘	SK007	南側埋土	(2.75)	0.75	—		鉄	32	39
100	刀子?	IVE8a	Ⅲ層	(3.3)	(2.05)	(0.4)		鉄	33	39
101	釘	SK008	北側埋土	(2.2)	(0.2)	(0.2)		鉄	44	39
102	釘	SK008	南側埋土上位	(5.2)	(0.8)	(0.7)	丸釘?	鉄	—	39
103	不明	SD011	東側埋土	(1.7)	(1.3)	(0.7)		鉄	44	39
104	釘	SD011	東側埋土	(1.95)	0.85	—		鉄	44	39
105	釘	SD012	埋土	(3.1)	0.95	—		鉄	44	39
106	釘	SD012	埋土	(2.1)	(0.9)	(0.55)		鉄	44	39
107	釘	SD012	埋土	(2.45)	0.8	—		鉄	44	39
123	刀子	IVE4・5b	I層	(16.85)	2.4	0.4		鉄	45	39

法量の単位はcmである。

第10表 土製品・焼成粘土塊観察表

掲載No.	種類	出土地点	出土層位	法量			重量	備考	図版No.	写図No.
				長さ	幅	高さ 厚さ				
14	焼成粘土塊	SI001	南側埋土	—	—	—	37.7		—	37
15	不明土製品	SI001	埋土下位	[3.4]	[4.2]	[1.5]	7.0	一面が <sup>s</sup> 平滑	—	37
25	焼成粘土塊	SI003	北側埋土	—	—	—	4.5		—	37
99	不明土製品	02区	Ⅱ層	[1.7]	[1.6]	[1.4]	3.0	貫通孔?	—	37
119	土人形	03区	I層	[4.9]	[3.1]	[4.5]	28.0	犬形	45	37

法量の単位はcm、重量の単位はgである。  
 法量の [ ] は残存値を表す。



## V ま と め

### 1 遺 物

#### (1) 分 類

当該期の遺物は土師器、須恵器、土製品、石器、鉄器であるが、竪穴住居跡をはじめとする遺構の年代的位置づけを行うための資料とするため、ここでは、土師器と須恵器について記述する。

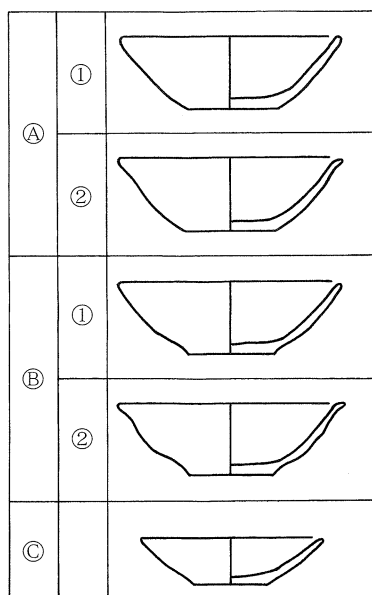
〈土師器〉甕の一部を除くと、基本的にロクロを使用している。器種は坏、高台付坏、甕があり、調整方法により、坏には内面黒色処理（以下内黒と記述）、内外面非黒色処理（以下非内黒と記述）のもの、高台付坏には内面黒色処理、内外面黒色処理（以下両黒と記述）、内外面非黒色処理のものがある。

#### 土師器坏

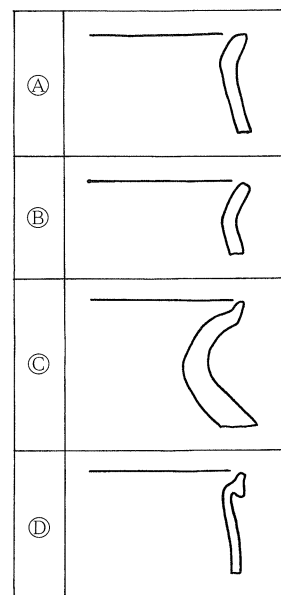
A類 体部が内湾しながら立ち上がるもの。「碗形」を呈するものも含んでいる。内湾する度合いは様々である。口縁部が外反しないもの(1)と外反するもの(2)がある。

B類 底部側縁で一度屈曲し、その後内湾しながら立ち上がるもの。そのため、底部は浅い高台状を呈する。A類同様、内湾する度合いは様々である。口縁部が外反しないもの(1)と外反するもの(2)がある。

C類 体部が直線もしくは直線状に開くもの。開く角度が45°前後である。



第46図 土師器坏分類図



第47図 土師器甕分類図

C類に含まれるものは2点しかなく、口径に比べて器高が低く、「皿」状に近いものである。

#### 土師器甕

A類 調整にロクロを使用しないもので、口縁部が外反するもの。断面形が「く」の字状を呈するもの。

B類 調整にロクロを使用するもので、口縁部が外反するもの。断面形が「く」の字状を呈するもの。

C類 口縁部は外反しながら立ち上がり、端部が上方に引き出されるもの。

D類 口縁部が外反しながら立ち上がり、端部が上下に肥厚するもの。

〈須恵器〉出土数が少ないため器種分類のみである。坏、大甕、甕、壺がある。

#### (2) 組 成 と 特 徴

各遺構の土器組成は次のとおりである。調査範囲が狭いため本来の組成を示しているとは断言でき

ないが、おおよその傾向として提示する。

<SI001>内黒土師器坏、非内黒土師器坏、土師器甕、須恵器で構成され、土師器坏が主体である。内黒土師器坏と非内黒土師器坏の割合はやや非内黒土師器坏が多い傾向を示す。内黒土師器坏A類・B類、非内黒土師器坏A・B類、土師器甕C類がある。土師器坏の口縁部は1類・2類ともに見られ、差は見られない。口径がわかるものが少ないが、13~14cm前後が中心と思われる。

特徴的な土師器として3が挙げられる。非常に器高のあるもので、類似した資料が宮城県多賀城市の多賀城跡の7層出土土器群や盛岡市大新町遺跡RE701竪穴状遺構に見られる。

<SI002>内黒土師器坏、非内黒土師器坏で構成され、内黒と非内黒は同数である。器形全体の様相を判断できる資料がないため、詳細は不明と言わざるをえない。

<SI003>非内黒土師器坏、土師器甕で構成される。非内黒土師器坏C類、土師器甕A・B類がある。土師器坏には、口径は12cm前後のものが見られる。

<SI004>非内黒土師器坏、土師器甕で構成され、個体数の差をみると、やや甕の割合が高い。非内黒土師器坏B類、土師器甕C類がある。土師器坏の口縁部形態は1類が認められる。口径は14cm前後のものが見られる。

<SI005>内黒土師器坏、非内黒土師器坏、土師器甕、須恵器で構成され、土師器甕が主体である。内黒土師器坏と非内黒土師器坏は同数である。内黒土師器坏A類、土師器甕C・D類がある。土師器坏の口縁部形状は2類が認められる。口径がわかるものは皆無である。

<SK004>内黒土師器坏、非内黒土師器坏、非内黒土師器高台付坏で構成される。内黒土師器坏と非内黒土師器坏の割合はやや非内黒土師器坏が多い。内黒土師器坏A類、非内黒土師器坏B・C類がある。口径は11cm前後のものが見られる。

<SK005>非内黒土師器坏、土師器甕?で構成される。非内黒土師器坏B2類がある。口径は10cm前後のものが見られる。

以上から内黒土師器の有無によって2グループに分けられる。

<第1グループ>内黒土師器坏、非内黒土師器坏、非内黒土師器高台付坏、土師器甕、須恵器で構成される。内黒土師器坏と非内黒土師器坏の割合により、ほぼ同率のものと非内黒が多いものとに細分可能である。内黒土師器坏は圧倒的にA類が多い。土師器坏はSI005のようにA類のみで構成されるもの(判別できるもののみ)とSI001やSK004のようにB類が一定量構成されるのが見られ、細分が可能と考えられる。内面のミガキ調整は、判別できないものも多いが、SI001の4のように放射状に施されるものも見られる。底部外面は回転糸切りで無調整である。非内黒土師器坏は器形による分類が不可能なものが多く、傾向を把握しきれないが、ややA類が多いよう見受けられる。底部外面は内黒と同様、回転糸切りで無調整である。土師器甕は出土しない遺構もあるため、傾向を把握しきれないが、A・B類は含まないようである。

<第2グループ>内黒土師器坏が組成されない一群である。このグループの遺構からは須恵器の出土は確認されていない。部分的な調査であるため、内黒土師器坏と須恵器が全く組成されなくなるかは不明であるが、もし、組成されているのであれば、小破片であっても出土すると思われるので、大きな差がでるとは考えていない。土師器坏はA類を組成せず、B類のみのものと、C類を含むものに分かれる。底部外面は回転糸切りで無調整である。土師器甕はA類・B類が出現する。甕A類・B類は非内黒坏B類・C類と甕C類・D類は非内黒坏A類と対応して組成している。

土師器坏の組成によりⅢ期に区分した。

＜平安時代Ⅰ期＞土師器坏がA類のみで占められる時期である。内黒土師器坏、非内黒土師器坏、非内黒土師器高台付坏、土師器甕、須恵器で構成される。該当するのはSI005のみである。

＜平安時代Ⅱ期＞土師器坏A類とB類が混在する時期である。基本的には内黒土師器坏、非内黒土師器坏、非内黒土師器高台付坏、土師器甕、須恵器で構成されるが、内黒土師器を組成しない一群も存在する。SI001、SI004、SK004が該当する。

＜平安時代Ⅲ期＞土師器坏にA類を構成しない時期で、内黒土師器坏は組成されない。非内黒土師器坏、土師器甕で構成される。SI003、SK005が該当する。

### (3) 年 代

当該期の遺構を土師器坏の組成により3時期に分けたが、これまでの年代観に照らし合わせると、平安時代Ⅰ期は9世紀後半～10世紀初頭、平安時代Ⅱ期が10世紀前葉～中葉、平安時代Ⅲ期が10世紀中葉に比定されると考えられる。

井上雅孝氏は2006年11月に行われた古代末期土器検討会の資料中で10世紀中葉の指標の一つとして坏の法量分化(口径10cm前後と11～14cm前後)が確立することを挙げられているが、本調査区の出土資料でも点数は少ないながらも同様の傾向が見られる。

## 2 遺 構

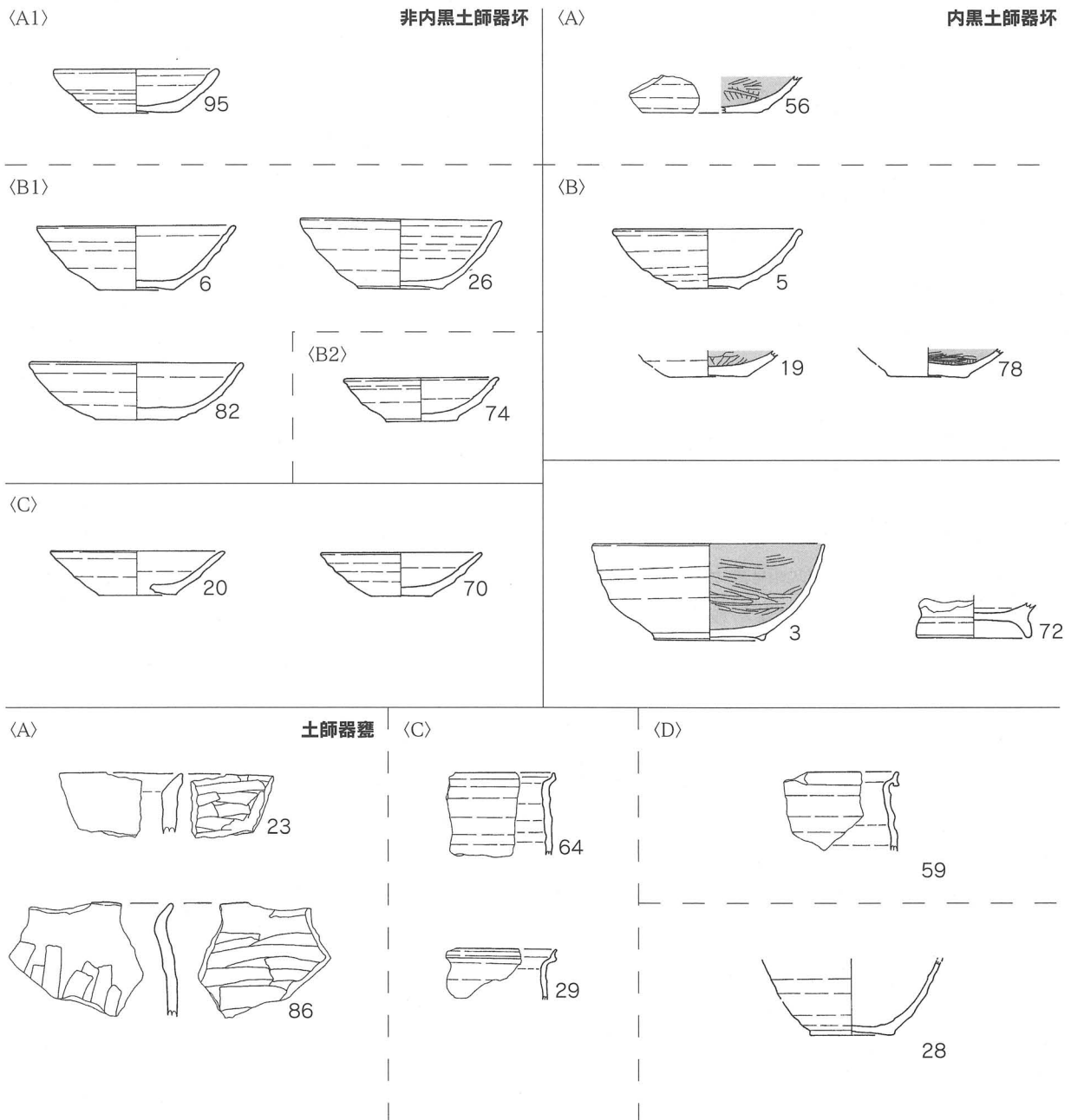
今回の調査で検出された遺構は平安時代以前(縄文時代か)の土坑3基、平安時代の竪穴住居跡5棟、土坑4基、溝跡1条、焼土遺構2基、不明遺構1基、平安時代以降(近世が中心)の掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝跡13条、柱穴状土坑24個である。

### (1) 平安時代以前

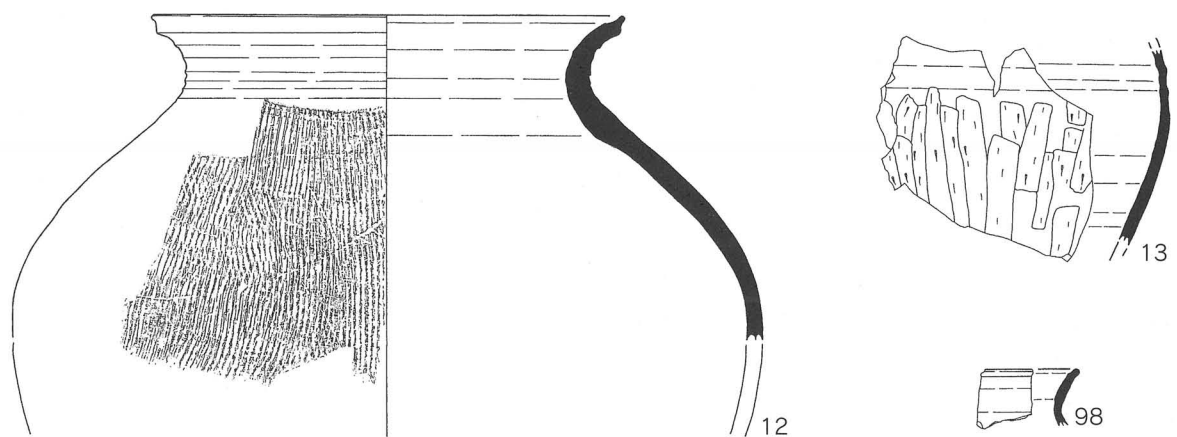
平安時代以前の遺構は陥し穴と考えられる溝状の土坑がC区中央の微高地からB区の低地に向かう緩斜面上に検出され、B区の低地(現在でも降雨などの後には水が溜まる場所)周辺に水を求めて集まる動物を対象としたものと考えられる。C区中央周辺の微高地では貯蔵穴と考えられる土坑が検出されており、周囲のなかでも水が付きにくい場所を選んで利用していたものと思われる。

### (2) 平 安 時 代

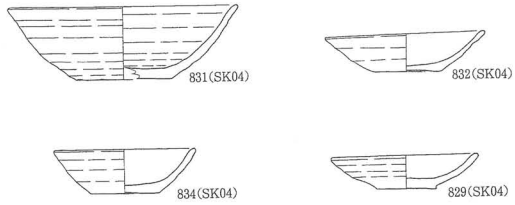
今回の調査では当該期の遺構が中心である。出土遺物から9世紀後半から10世紀中葉までの遺構があり、時期によって占地に違いが見られる。第50図に示したが、9世紀後半から10世紀初頭の遺構は南側の微高地であるC区中央付近に位置し、10世紀代の遺構は北側の微高地から低地に向かう緩斜面上に位置している。このことがそのまま本遺跡の傾向とするならば、時期が新しくなるにつれ、集落が北側に移動していることを示しているものと考えられる。県道に沿った細長い調査区であり、各遺構全体の精査を行っていないため、竪穴住居跡の規模等の詳細は不明と言わざるをえないが、9世紀後半から10世紀初頭の竪穴住居跡のカマドは北側、10世紀前葉から中葉の竪穴住居跡のカマドは西側もしくは東側に設置されており、北向きカマド→西向きカマド・東向きカマドへの変遷している傾向が見られる。



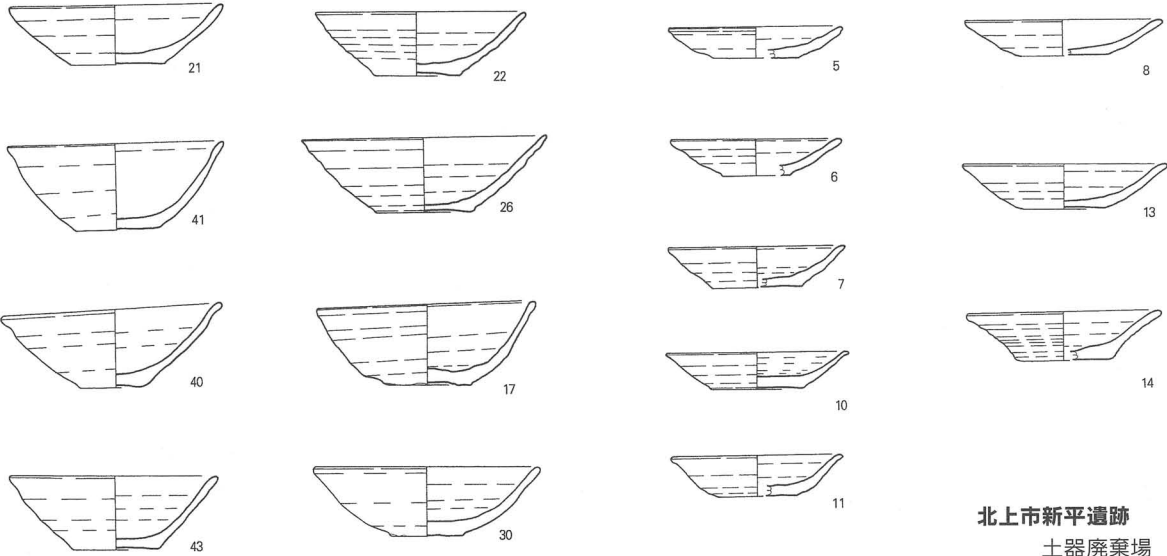
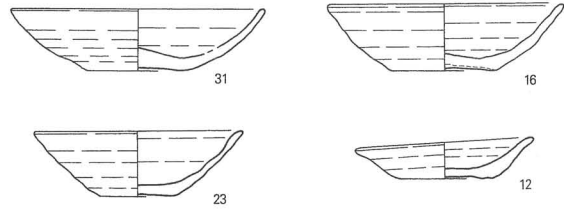
須恵器



第48図 集成図

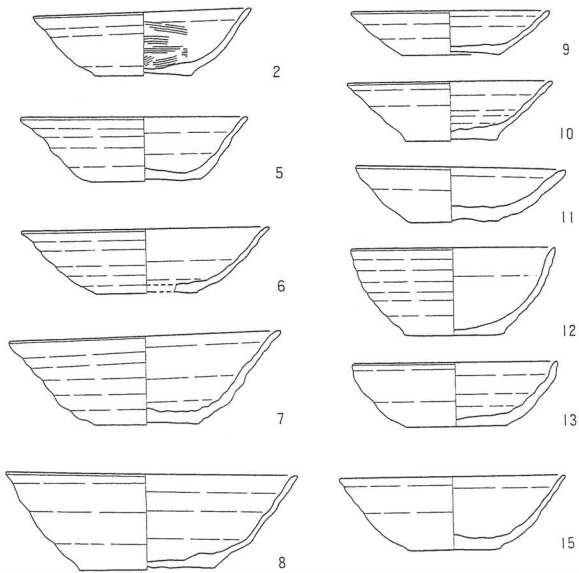


北上市堰向Ⅱ遺跡 SK04



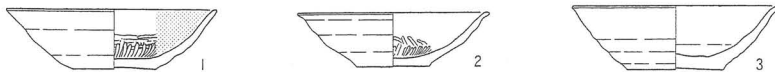
北上市新平遺跡  
土器廃棄場

縮尺不同

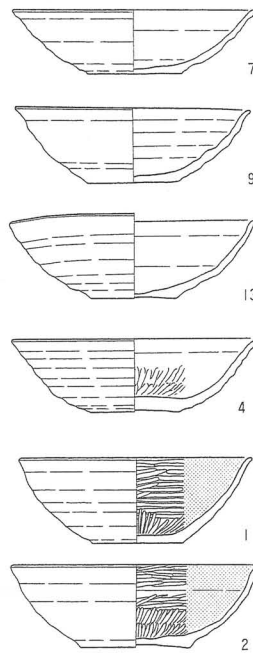


D009a 竪穴住居跡

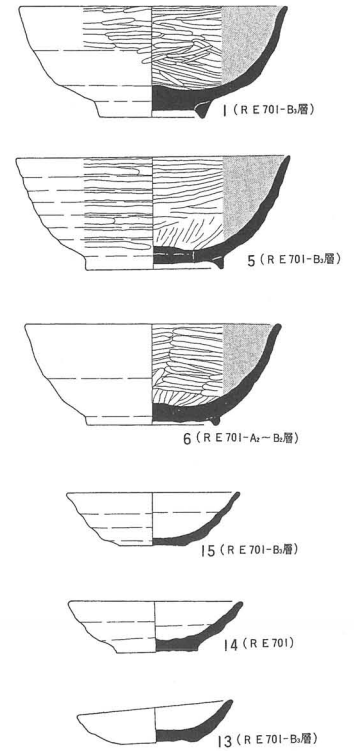
北上市南部工業団地内遺跡



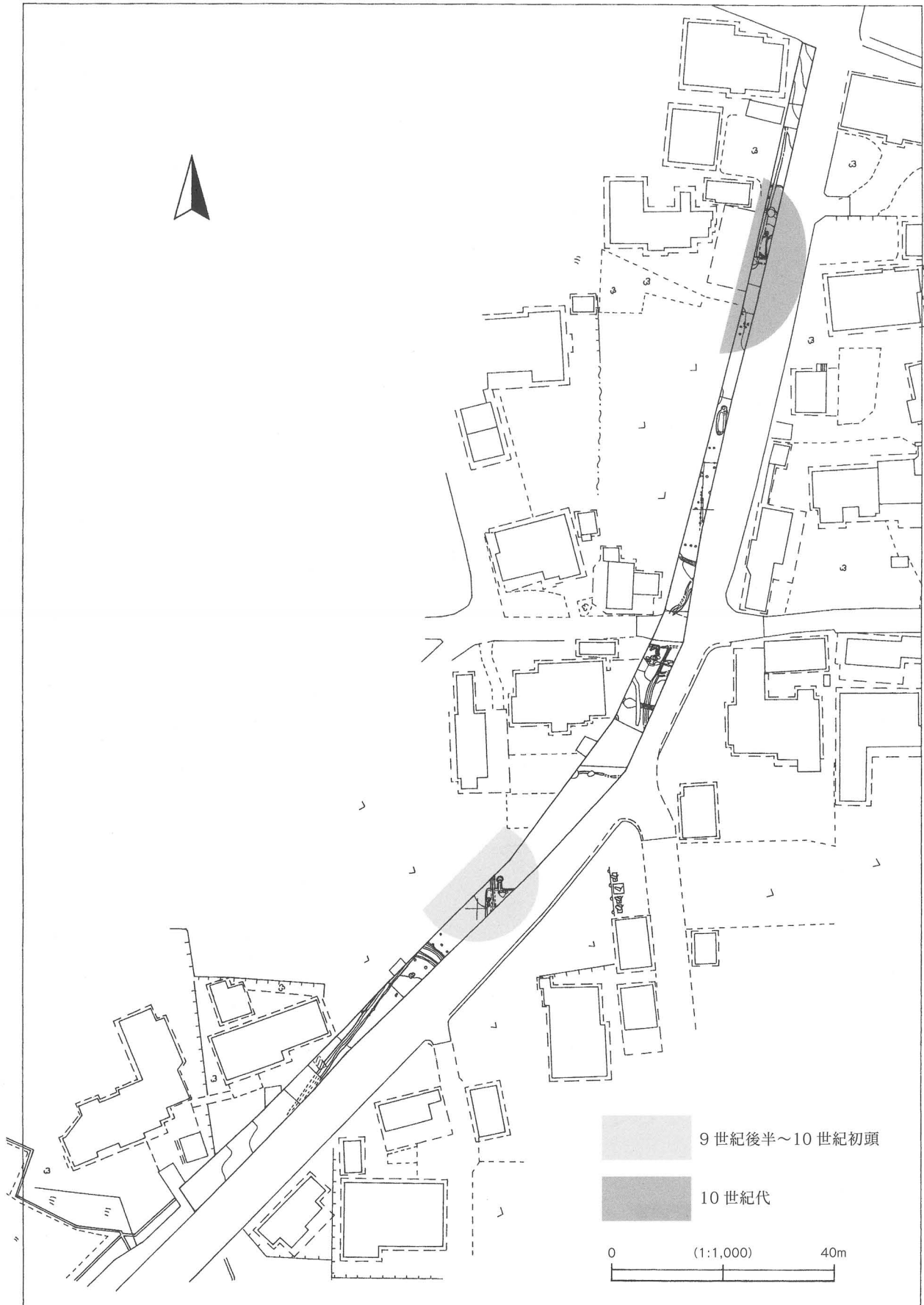
D052a 竪穴住居跡



D009b 竪穴住居跡



盛岡市大新町遺跡  
RE701



第50図 平安時代の遺構配置

### (3) 平安時代以降

平安時代以降の遺構はA区からC区の北側に集中しているが、掘立柱建物跡や柱穴状土坑などは北側の微高地に近い緩斜面に位置し、溝跡などの遺構は低地及びその周辺の緩斜面に位置するなど遺構の種別によって構築される場所に違いが見られる。掘立柱建物跡については、調査区外に遺構が広がっているため、間取り等の詳細は不明である。

## 3 総括

以上、遺物と遺構について概要を述べたが、時代毎に展望と今後の課題を記述して総括とする。

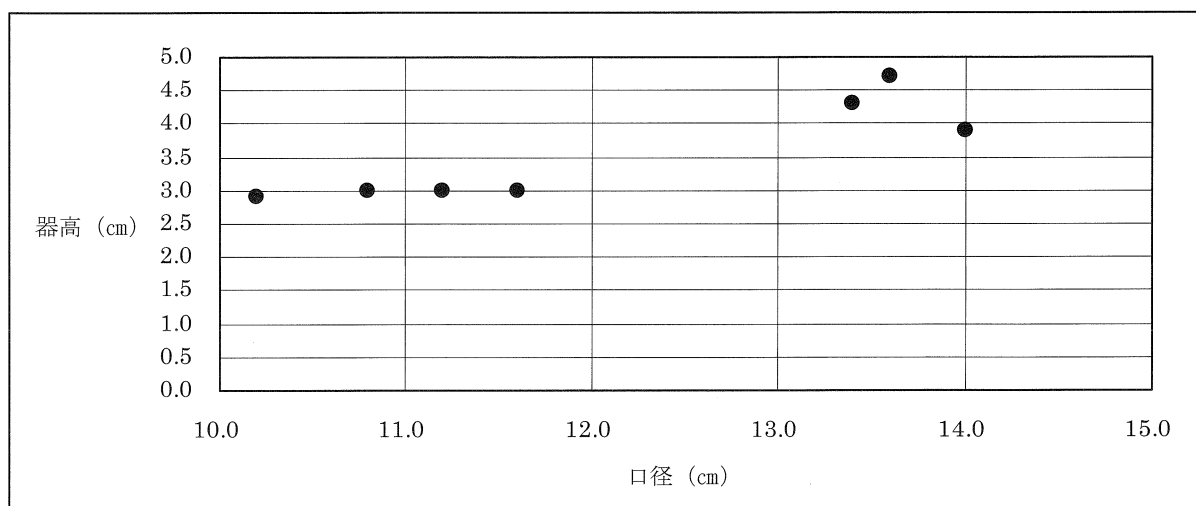
### 平安時代以前

縄文土器などの遺物や貯蔵穴と考えられる土坑が検出され、人類活動の痕跡が確認できたものの、集落の中心となる居住域が検出されず、調査区外に居住域が広がる可能性が高い。東側は北上川に向かって傾斜していることを考えると、調査区西側に広がる可能性が高い。

### 平安時代

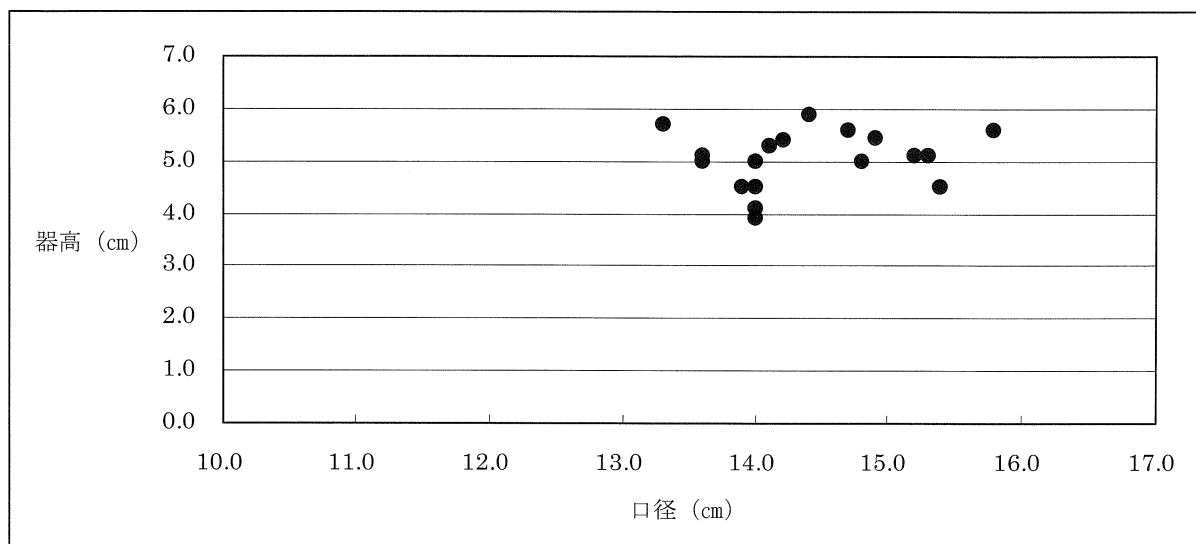
本調査区の中心となった時期は10世紀前葉～中葉である。遺構数は少ないものの、居住域として利用されていたことは疑いない。当該期においても縄文時代と同様、竪穴住居跡などの遺構は調査区の西側に広がる可能性が非常に高い。ただし、東北新幹線の高架下周辺には旧河道が存在するとの周辺住民の話もあり、現在も居住域として利用されている範囲が当該期の居住域である可能性が高いと考えられる。なお、詳細な検討は当該期の調査成果の増加を待ちたい。

遺物である程度、数量が出土したのは、土師器坏（非内黒）である。そこで、本調査区出土の非内黒土師器坏と著者が以前担当した盛岡市向中野館遺跡出土の9世紀中葉から10世紀初頭の非内黒土師器坏の法量を比較したものが第51図・第52図である。これによると、法量が分化していることや、器高が低くなっていることが見て取れる。ただし、本調査区の出土資料数が圧倒的に少ないため、同時期の資料も合わせた検討が今後の課題である。



北上市野田 I 遺跡

第51図 非内黒土師器坏法量分布図 (1)



盛岡市向中野館遺跡

第52図 非内黒土師器坏法量分布図(2)

### 平安時代以降

平安時代以降についても人類活動の痕跡が確認できたものの、遺構全体を精査できたものがないため、詳細は不明と言わざるをえない。建物跡の一部が検出されているため、調査区外に広がることは確実であるが、当該期の各遺構の配置などの検討は、周辺の発掘調査が行われることを期待して、今後の課題としたい。

### おわりに

県道沿いの細長い調査区であるため、各時代の遺構の精査は部分的なものとなっており、全体像は不明であると言わざるをえないが、平安時代の資料は量的には少ないながらも、北上川中流域の様相を解明する上で貴重な資料を提供できたものと思われる。しかし、時間的な制限があり、十分な検討を行えず、今後の課題としたい。



## 引用・参考文献（編著者姓の五十音順）

- 伊藤博幸 1996 「岩手県の10世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣  
1998 「北上盆地南部」『東北地方の古代集落』第3分冊 第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料集
- 井上雅孝 1997 「陸奥における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号  
2006 「総論—11世紀の土器研究に関する諸問題—」『清原のかわらけ—大鳥井柵跡を中心として—』古代末期土器検討会資料集 横手市教育委員会・後三年合戦（役）史跡検討会
- 岩手県企画開発室 1975 『北上川系開発地域土地分類基本調査 一北上—』
- 岩手県教育委員会 1979 「野田Ⅰ遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅱ—』岩手県文化財調査報告書第34集  
1979 「野田Ⅱ遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅱ—』岩手県文化財調査報告書第34集  
1979 「堀ノ内遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅱ—』岩手県文化財調査報告書第34集  
1982 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—XVII—（北上地区）』  
岩手県文化財調査報告書第72集
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
1989 『坊館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第145集  
（以下、岩手埋文報告書第 集と略す）  
1990 『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第157集  
2000 『中居俵Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第362集  
2005 『滝の沢地区遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第456集  
2005 『西川目・堰向Ⅱ遺跡掘調査報告書』岩手埋文報告書第464集  
2006 『大橋遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第481集  
2007 『新平遺跡・芦萱遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第498集  
2007 『向中野館遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第503集
- 北上市教育委員会 1977 『二子城跡坊館遺跡調査報告書』北上市文化財調査報告第21集  
1989 『くつわ清水遺跡』北上市文化財調査報告第51集  
1991 『二子地区遺跡詳細分布調査報告書』北上市文化財調査報告第65集  
1993 『南部工業団地内遺跡Ⅰ（1988・1989年度）第1分冊 本文・実測図版』北上市埋蔵文化財調査報告第9集
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報7』  
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報9』
- 中川久夫ほか 1963 「北上川上流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』69 pp. 163~171
- 野上建紀 2000 「磁器の編年」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 盛岡市教育委員会 1983 『大館遺跡群—昭和五七年度発掘調査概報—』
- 八木光則ほか 1998 「馬淵川流域」『東北地方の古代集落』第1分冊 第24回古代城柵官衙遺跡検討会シンポジウム資料集  
八木光則 2006 「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『防御性集落と激動の時代』同成社

## 附編 野田 I 遺跡の自然科学分析

(株)加速器分析研究所

### 放射性炭素年代測定

#### (1) 遺跡の位置と立地

野田 I 遺跡は、岩手県北上市二子町才の羽々61番地 1 ほか (北緯 $39^{\circ} 18' 20''$ 、東経 $141^{\circ} 08' 20''$ ) に位置する。北上川支流の大堰川右岸に形成された自然堤防上に立地する。

#### (2) 測定 の 意 義

遺構の年代を決定し、他の遺構との前後関係を明らかにしたい。

#### (3) 測定対象試料

測定対象試料は、SI001 (現場遺構名：13号住) の床面直上から出土した木炭 (No. 1 : IAAA-62478)、SI001の埋土2層から出土した木炭 (No. 2 : IAAA-62479)、SI003 (11号住) 床面直上から出土した木炭 (No. 3 : IAAA-62480)、SI004 (2号住) ベルト内埋土3層から出土した木炭 (No. 4 : IAAA-62481)、SK004 (12号住) 底面直上から出土した木炭 (No. 5 : IAAA-62482)、SK004埋土から出土した木炭 (No. 6 : IAAA-62483)、SK005 (104号土坑) 埋土上位から出土した木炭 (No. 7 : IAAA-62484)、合計7点である。

#### (4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。  
最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅 1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

#### (5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュ

ウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も同時に行う。

## (6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。  
複数回の測定値について、X<sup>2</sup>検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。  
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$  : 試料炭素の<sup>14</sup>C濃度 : (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>S</sub>または(<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C)<sub>S</sub>

${}^{14}\text{A}_R$  : 標準現代炭素の<sup>14</sup>C濃度 : (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>R</sub>または(<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C)<sub>R</sub>

$\delta^{13}\text{C}$  は、質量分析計を用いて試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 ( ${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ) を測定し、PDB (白亜紀のベレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$  (‰) であるとしたときの<sup>14</sup>C濃度 ( ${}^{14}\text{A}_N$ ) に換算した上で計算した値である。(1) 式の<sup>14</sup>C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))_2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

<sup>14</sup>C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age ; yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## (7) 測定結果

SI001の床面直上から出土した木炭 (No. 1 : IAAA-62478) が $1160 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI001の埋土2層から出土した木炭 (No. 2 : IAAA-62479) が $1160 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI003から出土した木炭 (No. 3 : IAAA-62480) が $1200 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI004から出土した木炭 (No. 4 : IAAA-62481) が $1290 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK004底面直上から出土した木炭 (No. 5 : IAAA-62482) が $1190 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK004埋土から出土した木炭 (No. 6 : IAAA-62483) が $1230 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK005から出土した木炭 (No. 7 : IAAA-62484) が $1150 \pm 30\text{yrBP}$ の $^{14}\text{C}$ 年代である。暦年較正年代 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) では、SI001から出土した試料2点は、780AD ~ 950ADに含まれ、奈良時代末から平安時代前期に対応する。SI003出土試料は、775AD ~ 795AD (10.4%)・800AD ~ 880AD (57.8%) であり、奈良時代末から平安時代前期前半に相当する。SI004出土試料は、670AD ~ 720AD (42.8%)・740AD ~ 770AD (25.4%) であり、飛鳥時代末から奈良時代後半に相当する。SK004の底面出土試料は、780AD ~ 890ADであり、奈良時代末から平安時代前期前半に相当する。同遺構の埋土出土試料は、710AD ~ 750AD (16.4%)・760AD ~ 870AD (51.8%) であり、底面出土試料に比べて僅かに古い。SK005出土試料は、860AD ~ 970ADであり、平安時代前期後半に相当する。各遺構は奈良時代から平安時代前期に含まれるが、時期差が認められ、集落の継続期間を推定できる。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

## 参考文献

- Stuiver, M. and Polash, H.A. (1977) Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data. *Radiocarbon*, 19: 355-363
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363
- Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389
- Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-62478  #1605-1	試料採取場所：岩手県北上市二子町才の羽々 61番地1ほか 野田I遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 1	Libby Age (yrBP) : 1,160 ± 30 δ 13C(‰)、(加速器) = -26.03 ± 0.71 Δ 14C(‰) = -134.3 ± 3.4 pMC(%) = 86.57 ± 0.34
	(参考) δ 13C の補正無し	δ 14C(‰) = -136.1 ± 3.2 pMC(%) = 86.39 ± 0.32 Age (yrBP) : 1,180 ± 30
IAAA-62479  #1605-2	試料採取場所：岩手県北上市二子町才の羽々 61番地1ほか 野田I遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 2	Libby Age (yrBP) : 1,160 ± 30 δ 13C(‰)、(加速器) = -23.39 ± 0.63 Δ 14C(‰) = -134.6 ± 3.4 pMC(%) = 86.54 ± 0.34
	(参考) δ 13C の補正無し	δ 14C(‰) = -131.7 ± 3.2 pMC(%) = 86.83 ± 0.32 Age (yrBP) : 1,130 ± 30
IAAA-62480  #1605-3	試料採取場所：岩手県北上市二子町才の羽々 61番地1ほか 野田I遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 3	Libby Age (yrBP) : 1,200 ± 30 δ 13C(‰)、(加速器) = -23.95 ± 0.7 Δ 14C(‰) = -138.5 ± 3.4 pMC(%) = 86.15 ± 0.34
	(参考) δ 13C の補正無し	δ 14C(‰) = -136.7 ± 3.2 pMC(%) = 86.33 ± 0.32 Age (yrBP) : 1,180 ± 30
IAAA-62481  #1605-4	試料採取場所：岩手県北上市二子町才の羽々 61番地1ほか 野田I遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 4	Libby Age (yrBP) : 1,290 ± 30 δ 13C(‰)、(加速器) = -24.89 ± 0.67 Δ 14C(‰) = -148.4 ± 3.4 pMC(%) = 85.16 ± 0.34
	(参考) δ 13C の補正無し	δ 14C(‰) = -148.2 ± 3.2 pMC(%) = 85.18 ± 0.32 Age (yrBP) : 1,290 ± 30
IAAA-62482  #1605-5	試料採取場所：岩手県北上市二子町才の羽々 61番地1ほか 野田I遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 5	Libby Age (yrBP) : 1,190 ± 30 δ 13C(‰)、(加速器) = -26.03 ± 0.64 Δ 14C(‰) = -137.7 ± 3.1 pMC(%) = 86.23 ± 0.31
	(参考) δ 13C の補正無し	δ 14C(‰) = -139.6 ± 2.9 pMC(%) = 86.04 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,210 ± 30

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-62483  #1605-6	試料採取場所：岩手県北上市二子町才の羽々 61番地1ほか 野田I遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 6	Libby Age (yrBP) : 1,230 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -22.95 ± 0.63 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -141.8 ± 3.1 pMC(%) = 85.82 ± 0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -138.2 ± 2.9 pMC(%) = 86.18 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,190 ± 30
IAAA-62484  #1605-7	試料採取場所：岩手県北上市二子町才の羽々 61番地1ほか 野田I遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：No. 7	Libby Age (yrBP) : 1,150 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -29.10 ± 0.62 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -132.9 ± 3.1 pMC(%) = 86.71 ± 0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -140.2 ± 2.9 pMC(%) = 85.98 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,210 ± 30

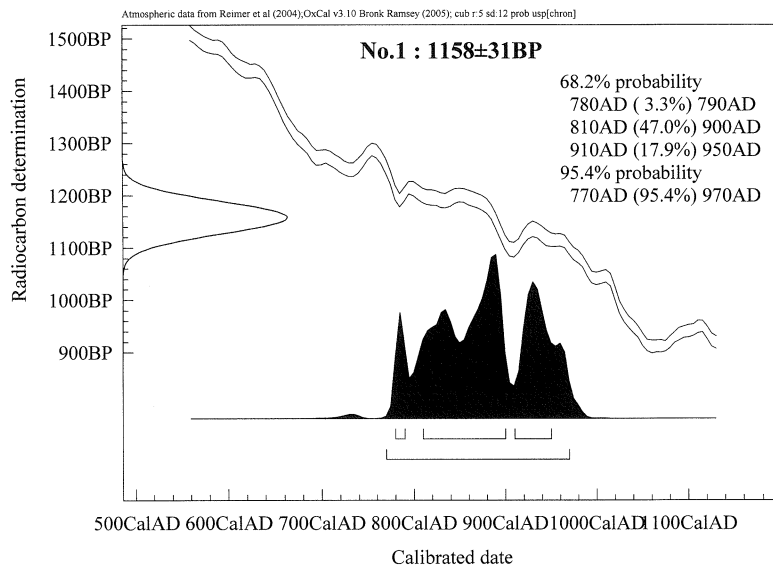
IAA

## 参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-62478	No. 1	1158 ± 31
IAAA-62479	No. 2	1160 ± 31
IAAA-62480	No. 3	1197 ± 31
IAAA-62481	No. 4	1290 ± 32
IAAA-62482	No. 5	1190 ± 29
IAAA-62483	No. 6	1228 ± 29
IAAA-62484	No. 7	1145 ± 28

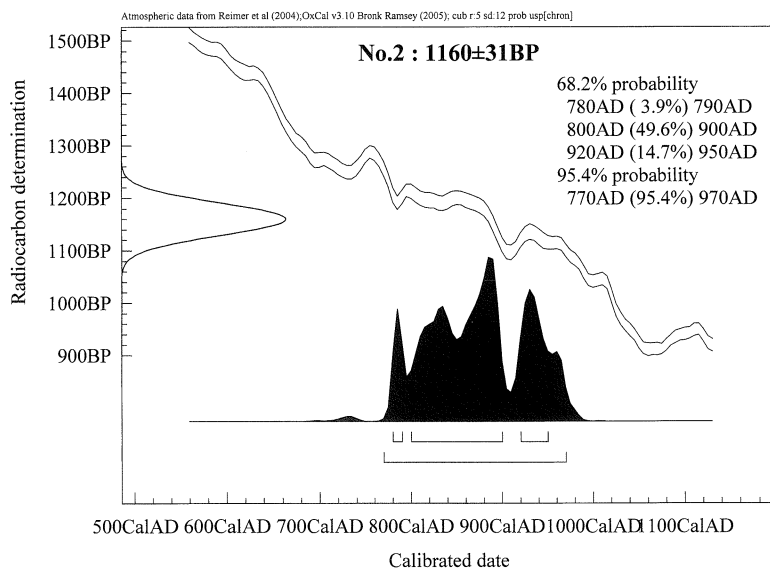
ここに記載するLibby Age(年代値)と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



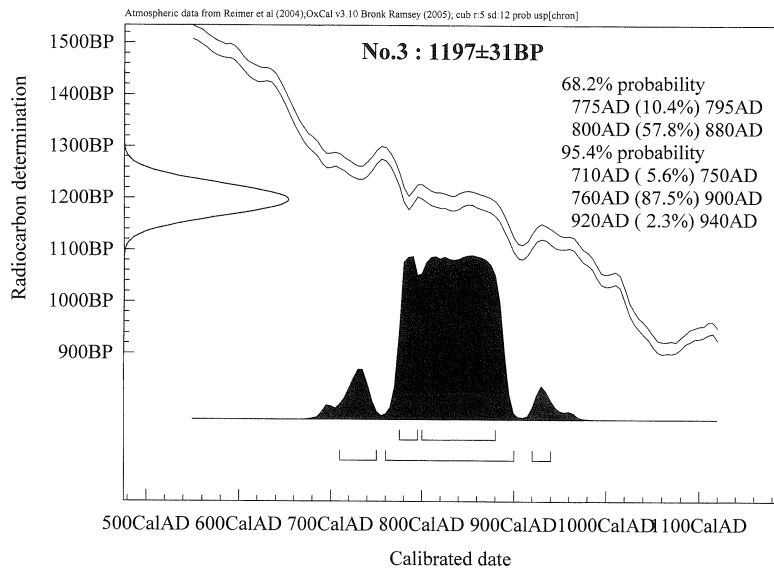
使用プログラム・OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



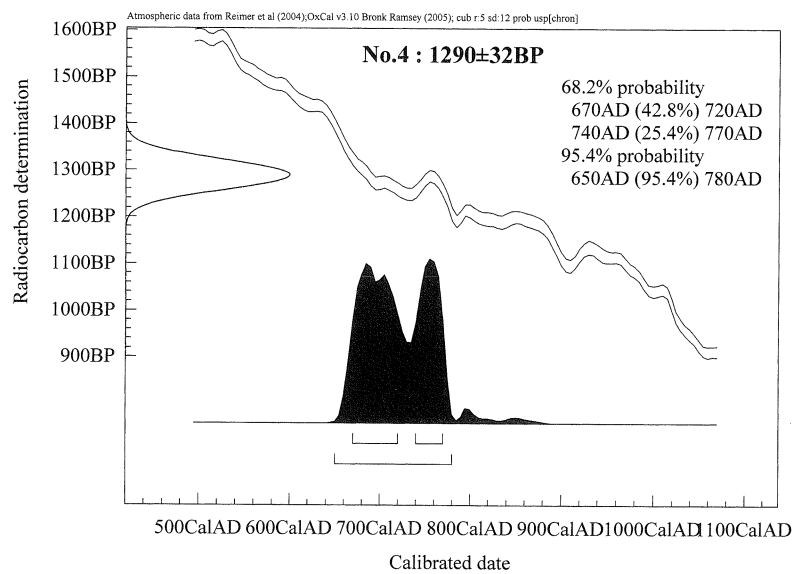
使用プログラム・OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

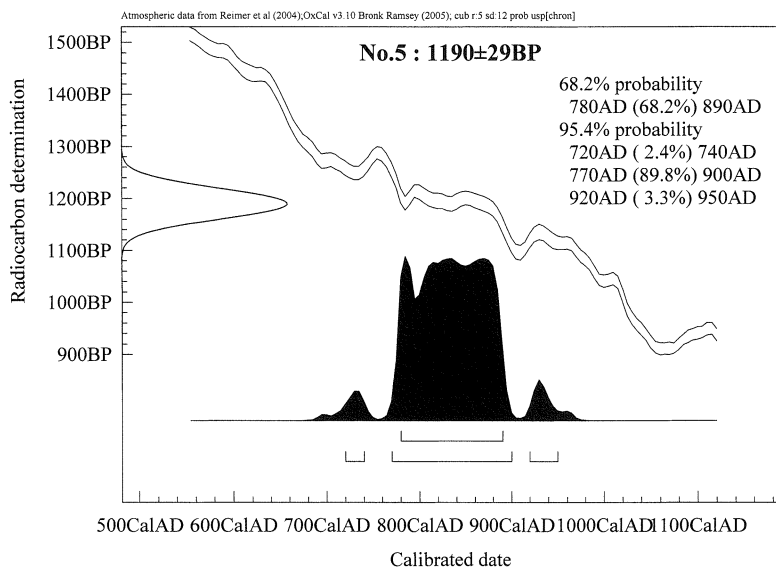
【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

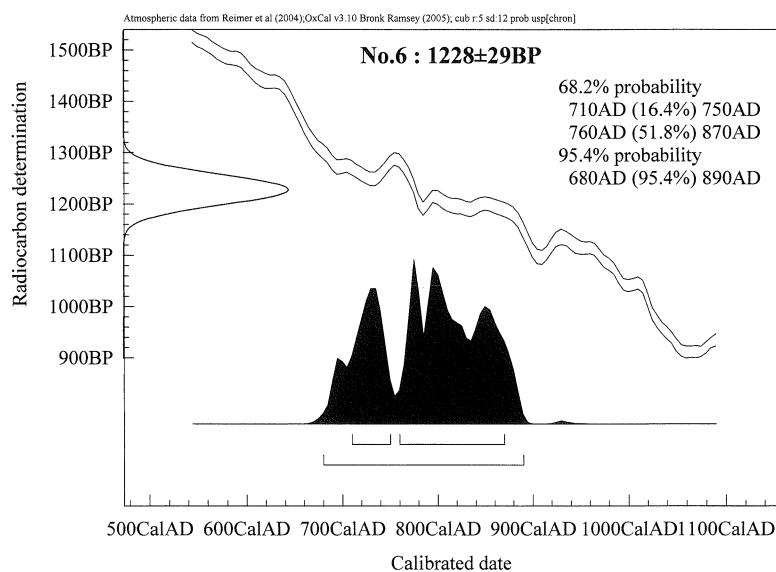


【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



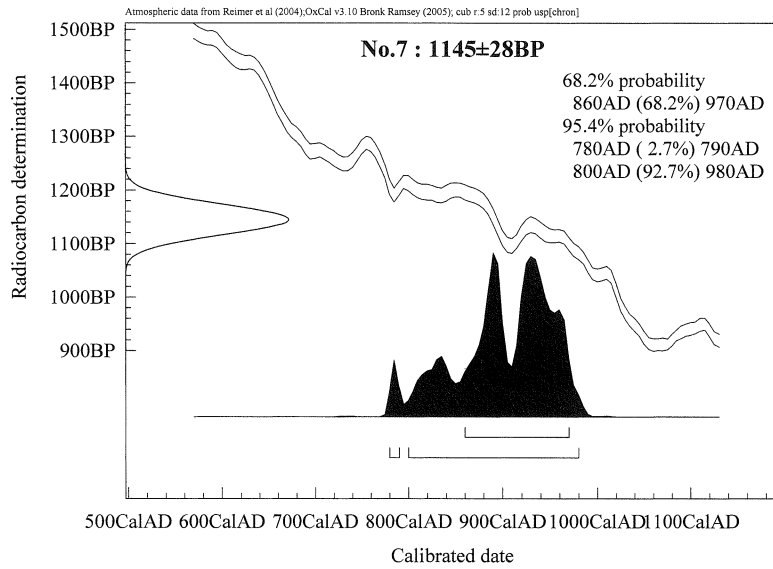
使用プログラム・OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

# 写 真 图 版



遺跡遠景（南西から）



遺跡遠景（北東から）

写真図版1 空撮（1）



調査区全景（南から）

写真図版2 空撮（2）



A区現況（南から）



B区現況（南西から）



C区現況（北東から）





A区基本層序（東から）



C区基本層序（南東から）





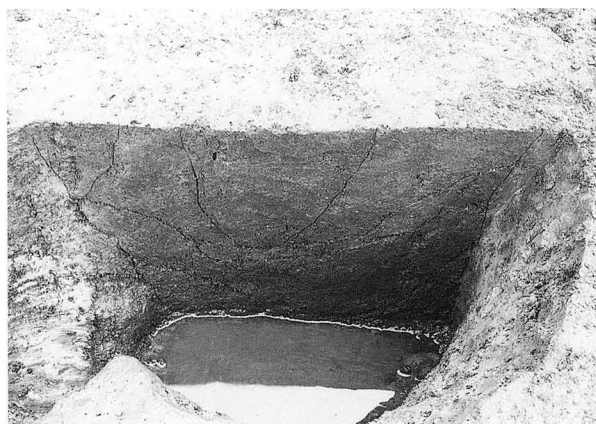
SK001 完掘 (南から)



SK001 断面 (南から)



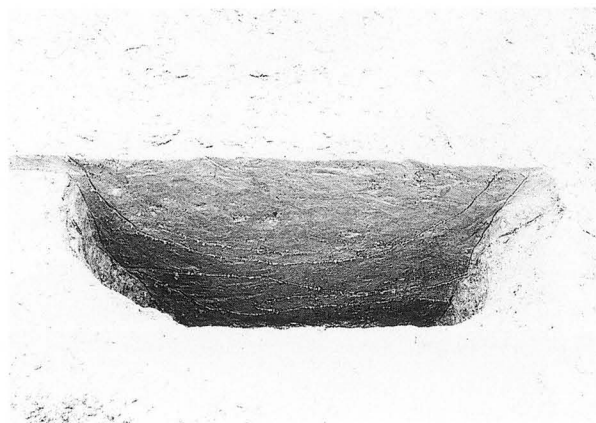
SK002 完掘 (南西から)



SK002 断面 (北東から)



SK003 完掘 (東から)



SK003 断面 (東から)





SI001 完掘 (北から)



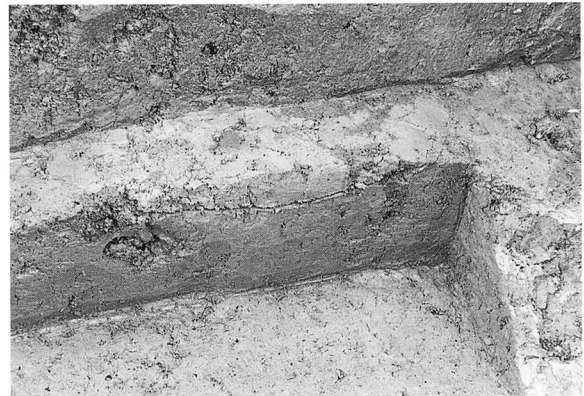
SI001 断面 (南西から)



SI001 断面 (南から)



SI001 燃烧部検出状況 (東から)



SI001 燃烧部断面 (東から)



SI001 遺物出土状況 (北から)





SI002完掘（南西から）



SI002断面（西から）

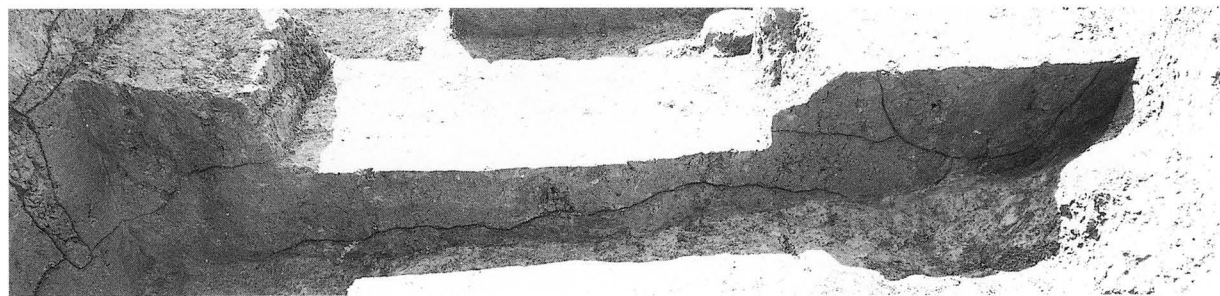
写真図版8 SI002



SI003完掘（北から）



SI003断面（西から）



SI003断面（北から）

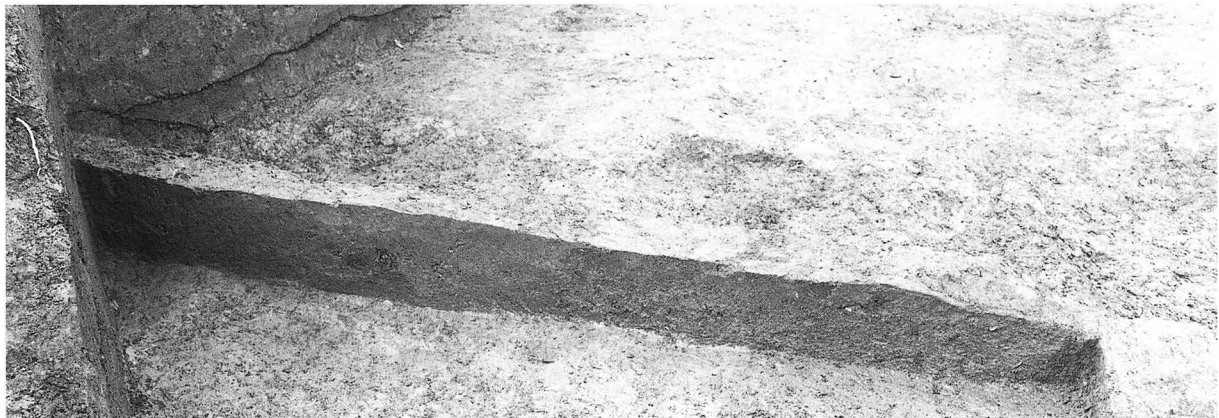




SI004完掘（西から）



SI004断面（東から）



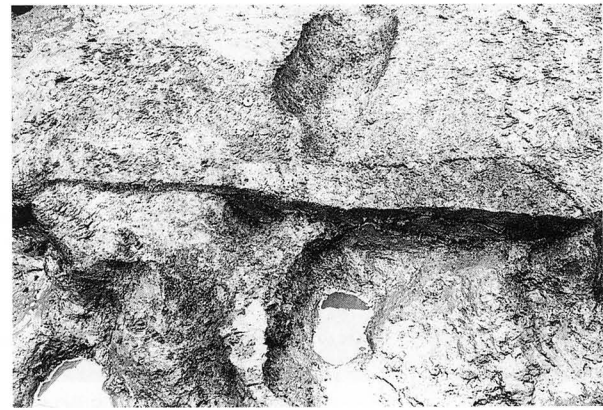
SI004断面（南から）



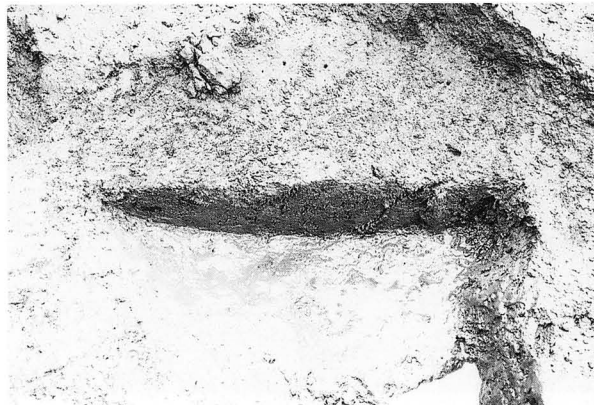
SI004 カマド完掘 (西から)



SI004 燃烧部断面 (南から)



SI004 煙道部断面 (南から)



SI004 土坑1 断面 (南西から)



SI004 柱穴2 断面 (東から)



SI004 周溝断面 (北から)

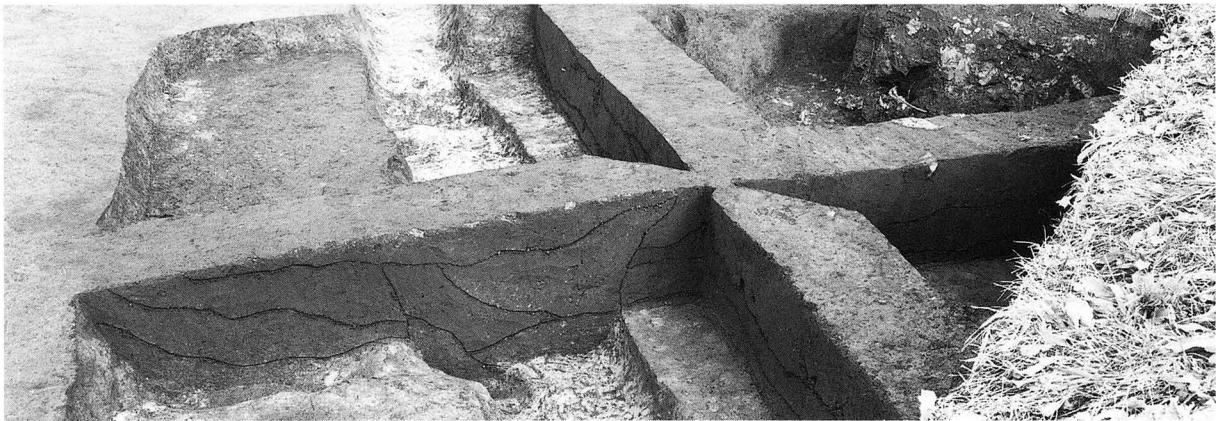


SI004 仕切り溝断面 (東から)





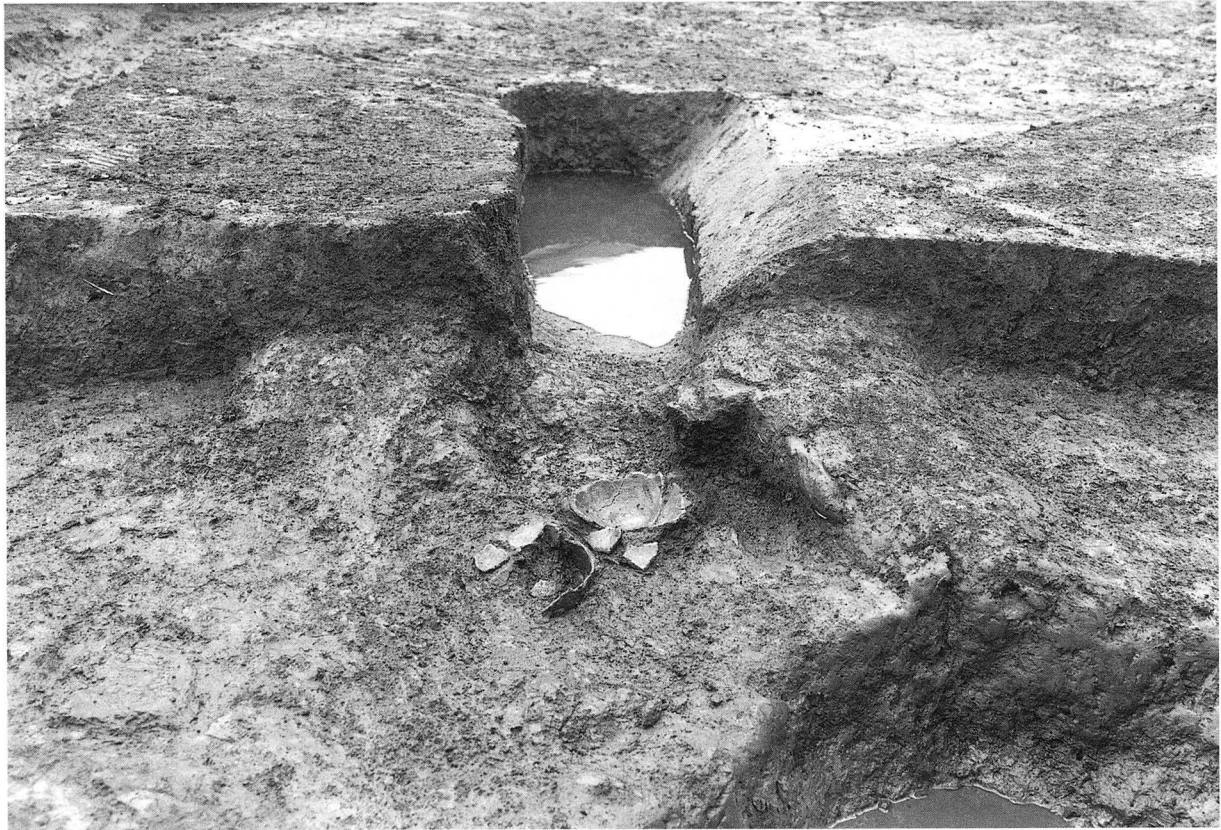
SI005完掘（南西から）



SI005断面（西から）



SI005断面（南から）



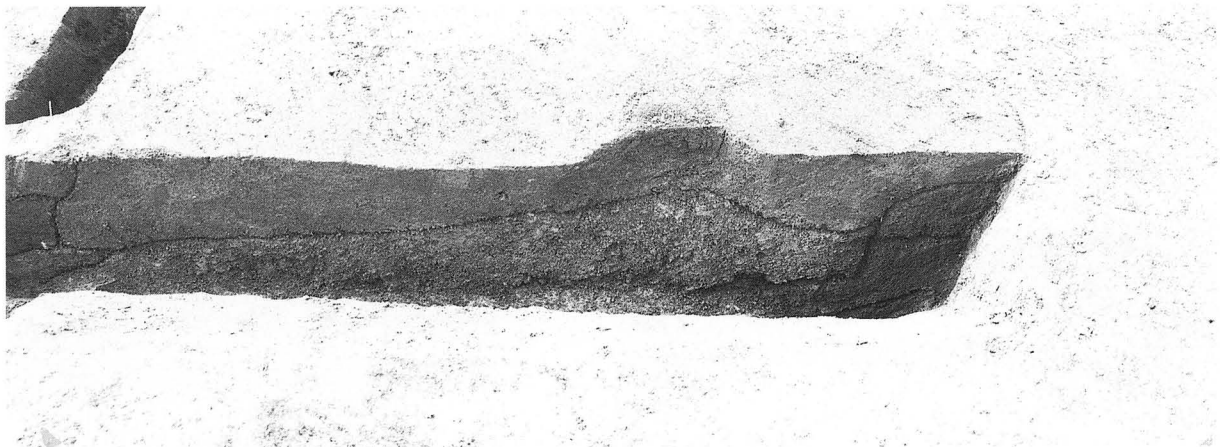
SI005カマド完掘（南から）



SI005カマド断面（南から）



SI005カマド断面（東から）



SI005煙道部・煙出部断面（東から）





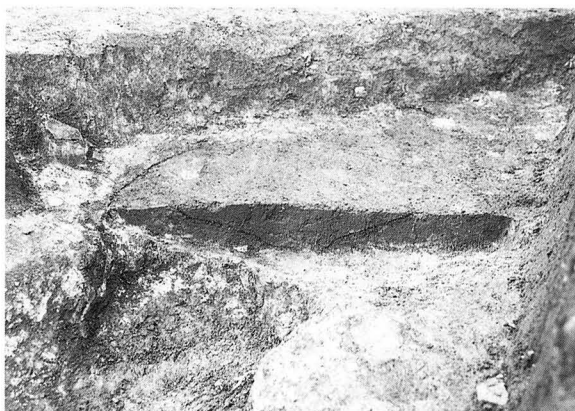
SI005カマド袖断面（南から）



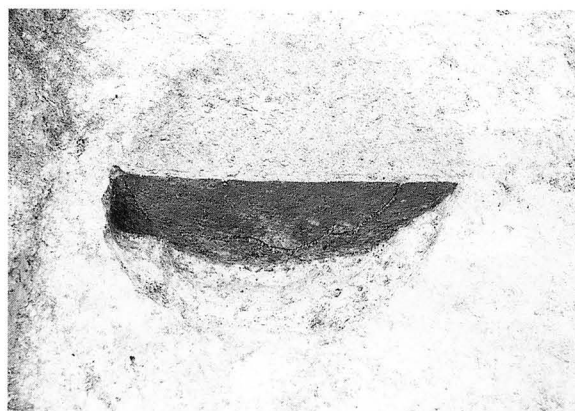
SI005 燃烧部断面（東から）



SI005カマド遺物出土状況（南から）



SI005土坑1断面（南から）



SI005土坑3断面（南から）



SK004完掘（北から）



SK004断面（西から）



SK004断面（北から）

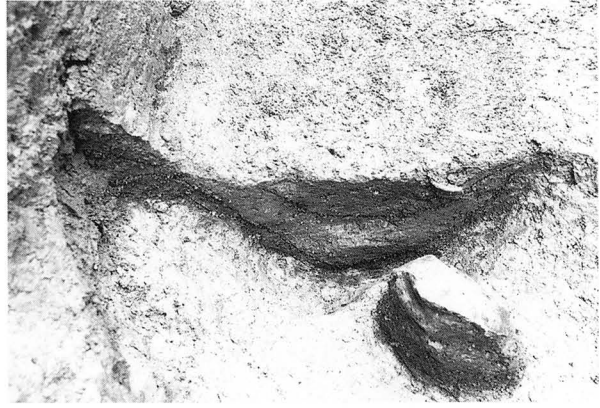


SK004遺物出土状況（西から）





SK005 完掘 (西から)



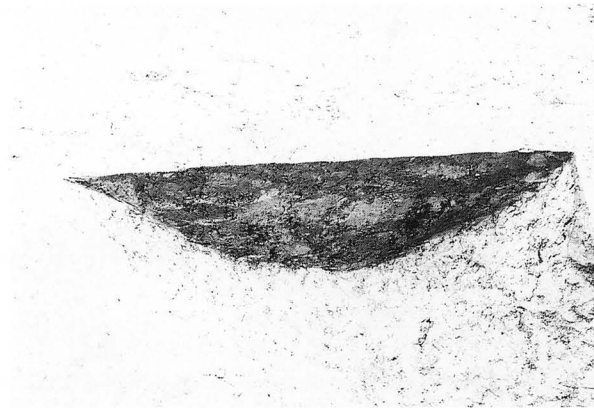
SK005 断面 (南から)



SK005 焼土・遺物出土状況 (西から)



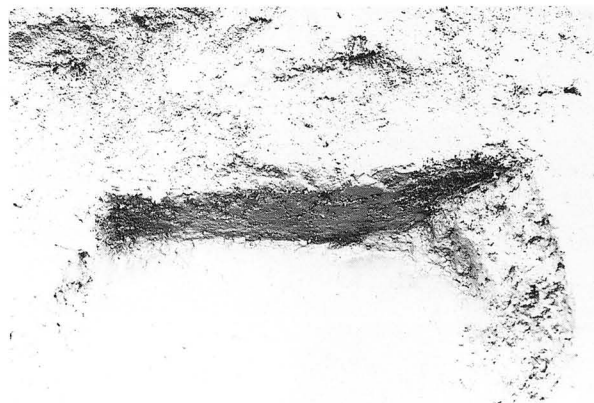
SK006 完掘 (西から)



SK006 断面 (西から)



SK007 完掘 (西から)



SK007 断面 (西から)



SD001・SX001 完掘 (西から)



SD001 断面 (西から)

写真図版 17 SD001・SX001





SF001 検出 (西から)



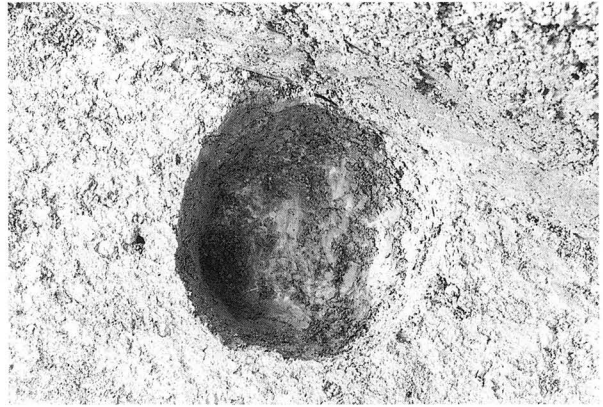
SF002 検出 (南西から)



SF002 断面 (東から)



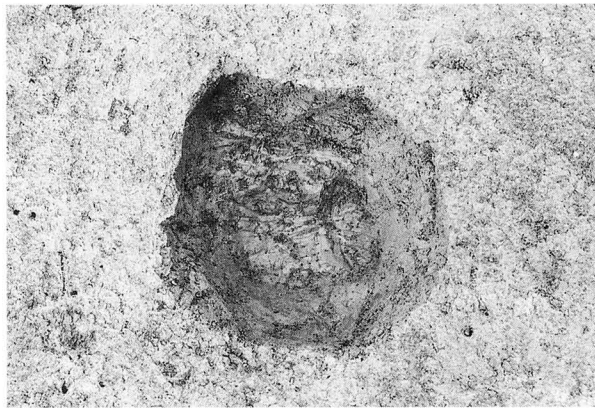
SB001 完掘



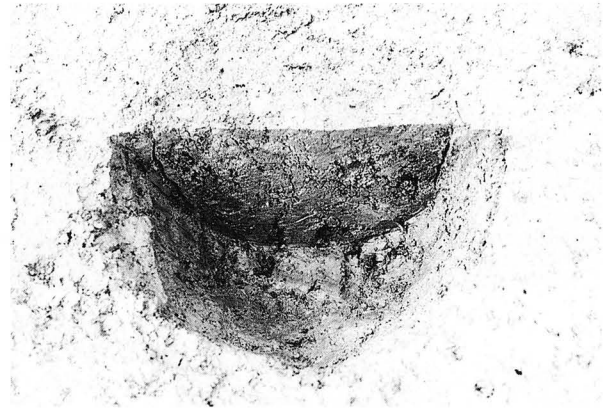
SB001 P1 完掘 (東から)



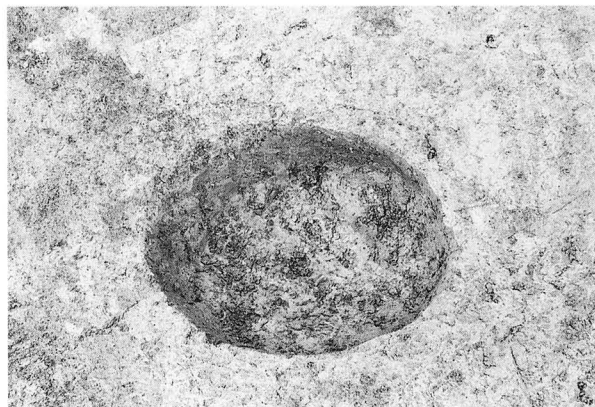
SB001 P1 断面 (南から)



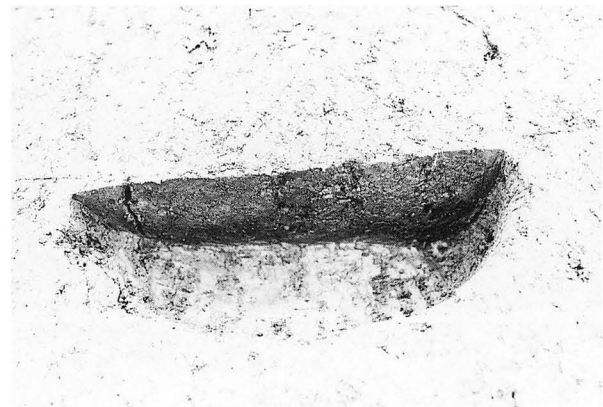
SB001 P3 完掘 (東から)



SB001 P3 断面 (東から)



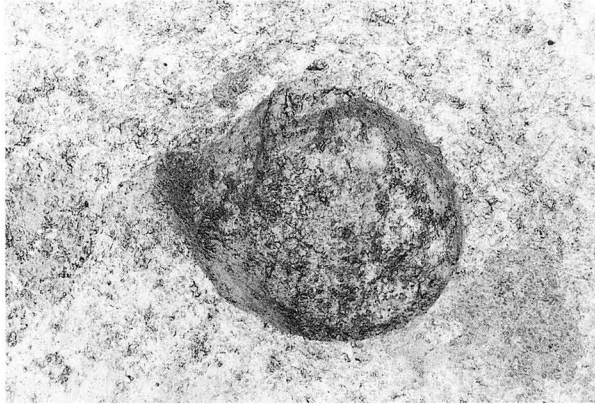
SB001 P4 完掘 (東から)



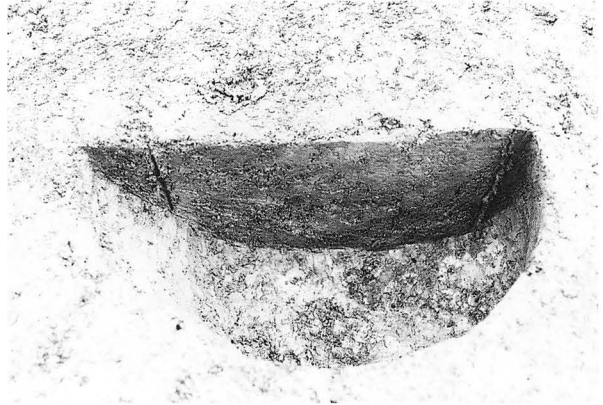
SB001 P4 断面 (東から)

写真図版 19 SB001 (1)





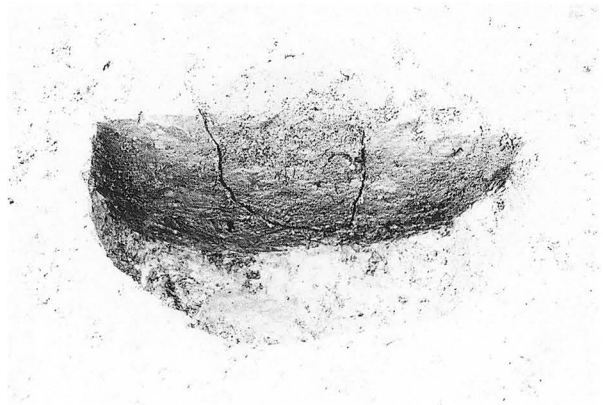
SB001 P5完掘 (東から)



SB001 P5断面 (東から)



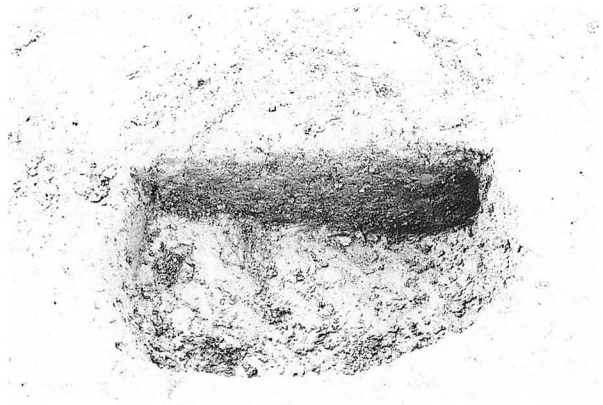
SB001 P6完掘 (西から)



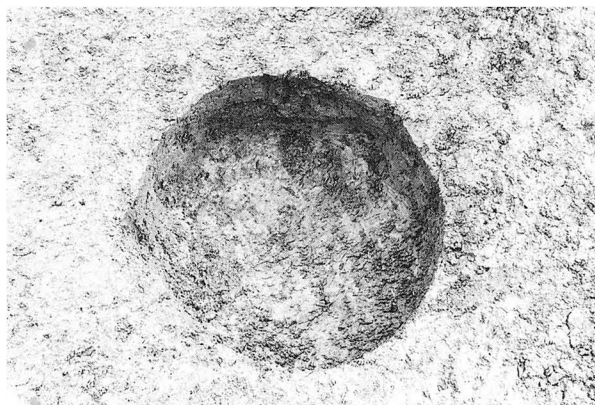
SB001 P6断面 (東から)



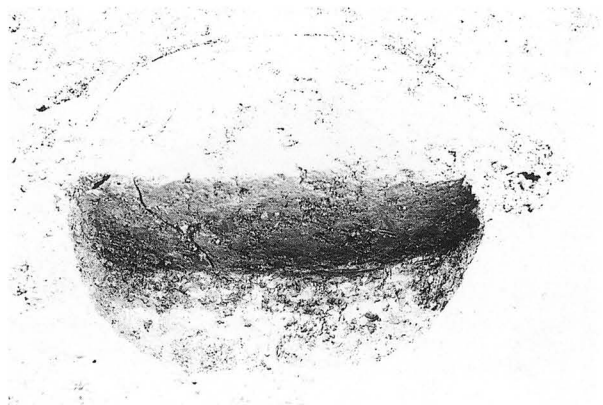
SB001 P7完掘 (西から)



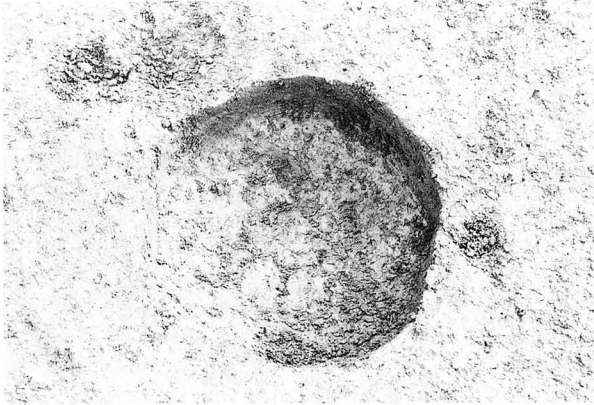
SB001 P7断面 (東から)



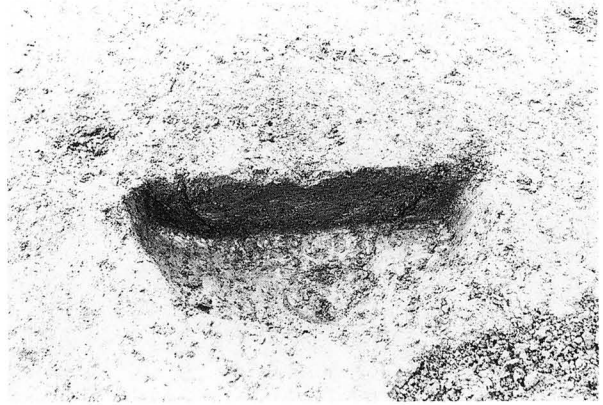
SB001 P8完掘 (西から)



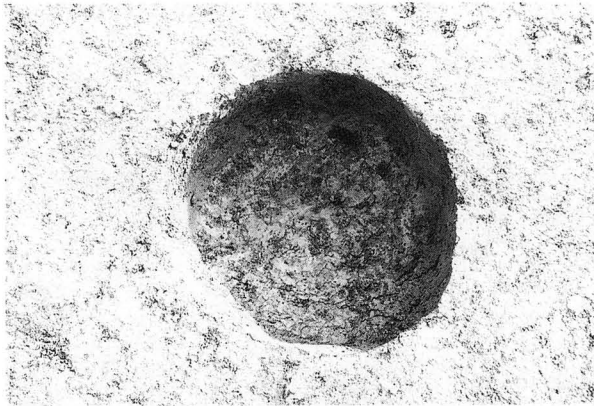
SB001 P8断面 (東から)



SB001 P9完掘 (西から)



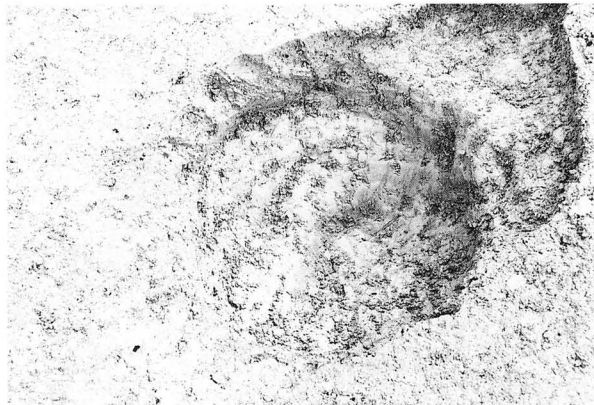
SB001 P9断面 (東から)



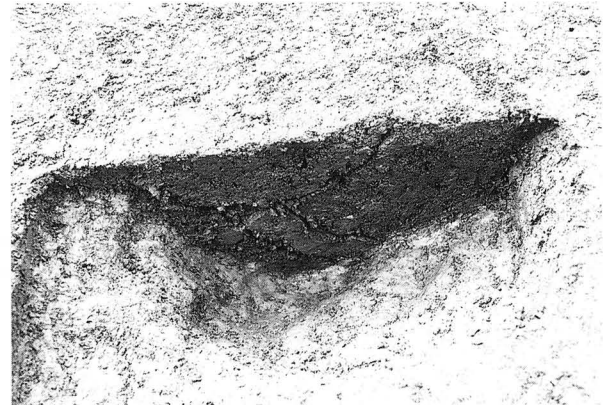
SB001 P10完掘 (西から)



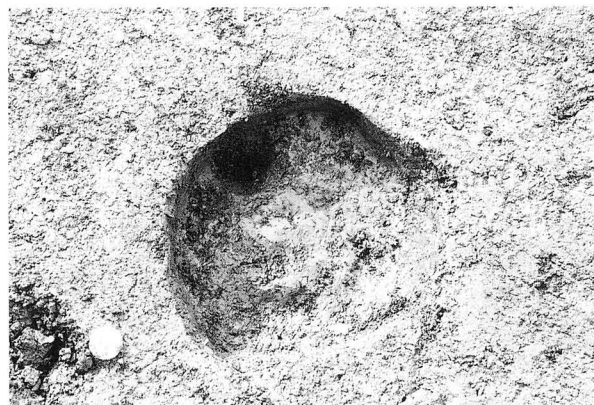
SB001 P10断面 (東から)



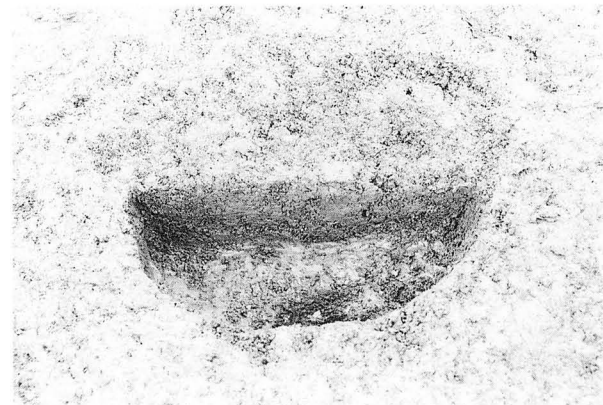
SB001 P11完掘 (西から)



SB001 P11断面 (東から)



SB001 P12完掘 (東から)



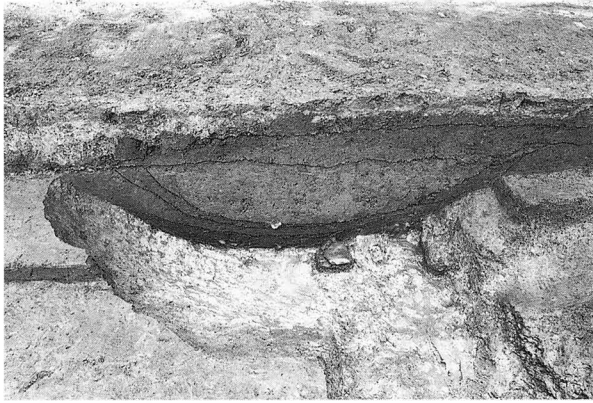
SB001 P12断面 (南から)

写真図版21 SB001 (3)

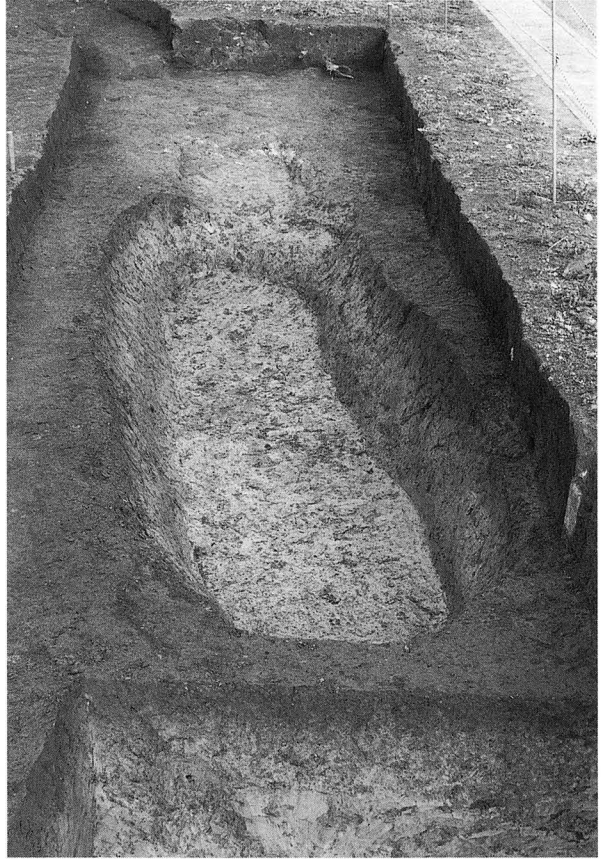




SK008完掘（東から）



SK008断面（東から）



SK009完掘（南西から）



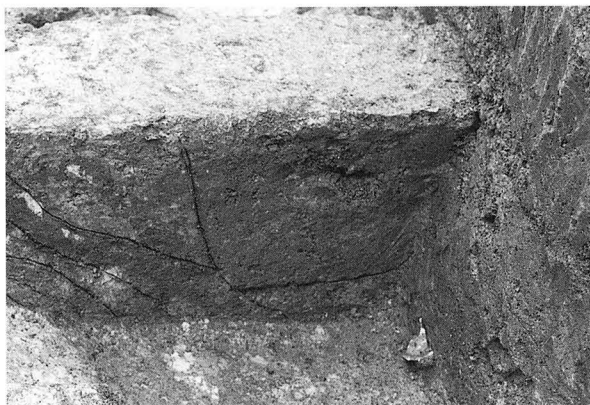
SD002 02区北側完掘（北から）



SD002 02区南側完掘（北から）



SD002断面（南西から）



SD002断面（北から）



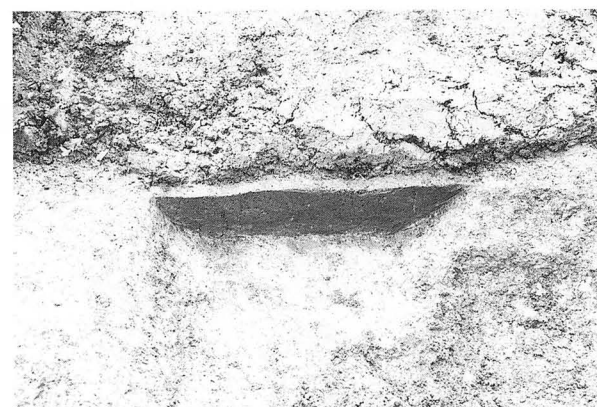
SD002断面（北から）



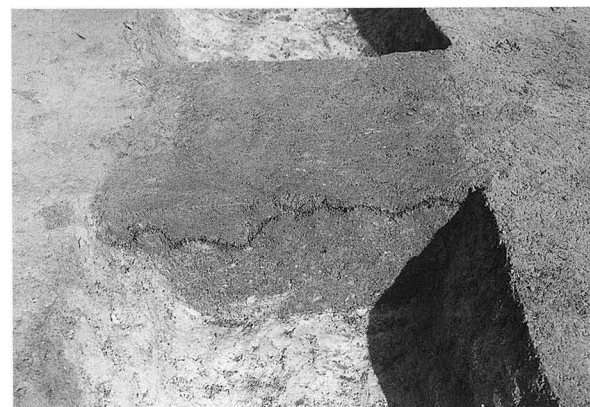
SD003 A区完掘（南から）



SD003 AB区完掘（東から）



SD003断面（北東から）

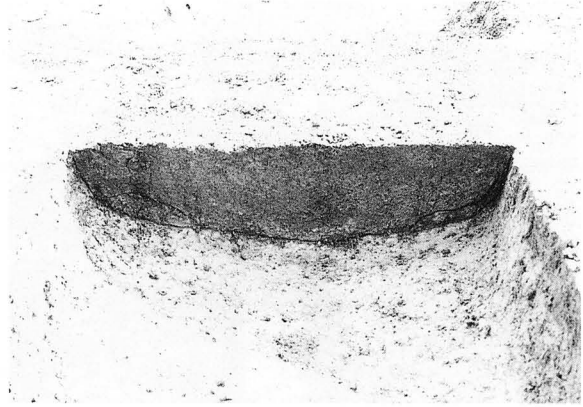


SD004断面（南から）

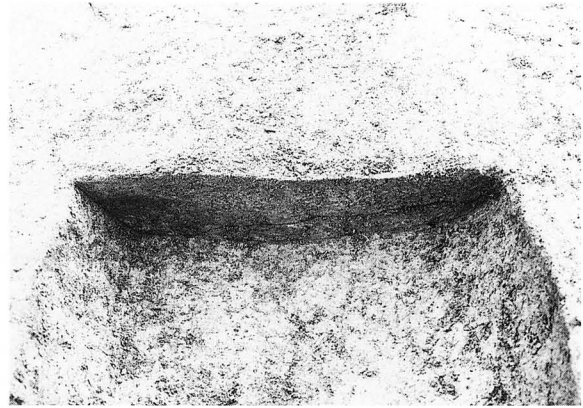




SD004完掘（南から）



SD005断面（西から）



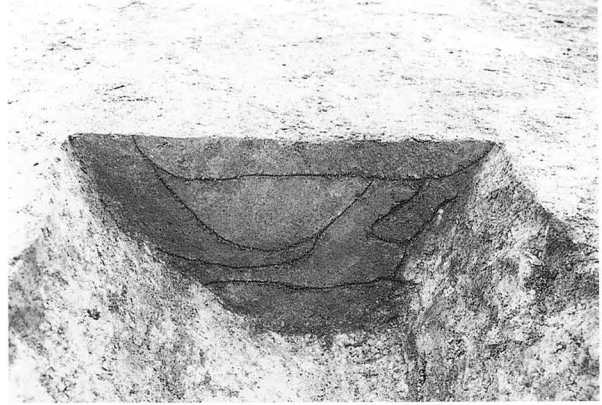
SD006断面（西から）



SD005・SD006完掘（東から）



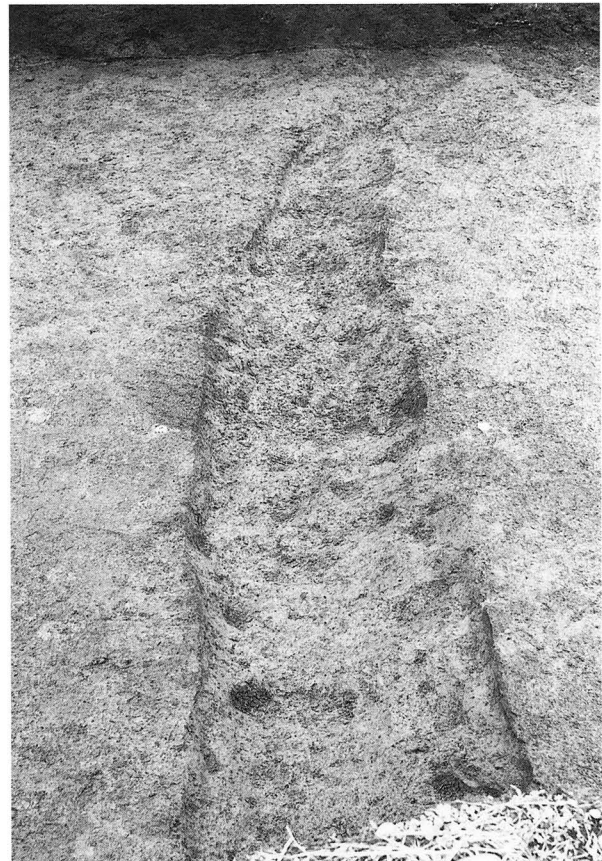
SD007完掘 (北から)



SD007断面 (北から)



SD009完掘 (南から)



SD008完掘 (南東から)

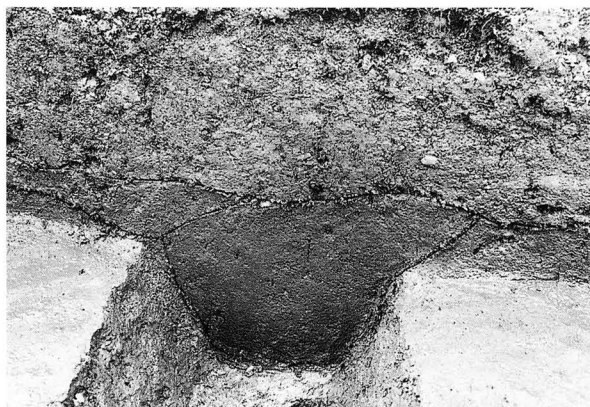


SD009断面 (南から)





SD010完掘（東から）



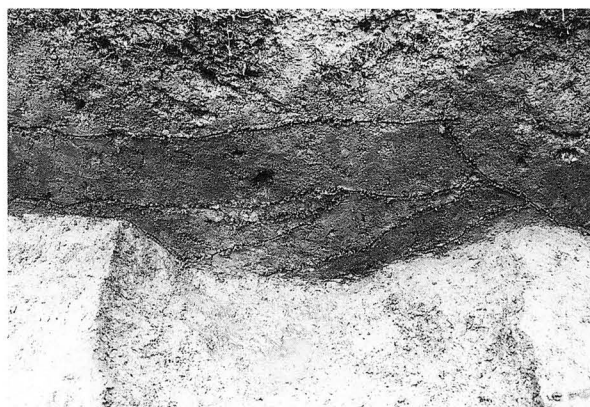
SD010断面（北から）



SD011完掘（西から）



SD012完掘（南東から）



SD012断面（西から）



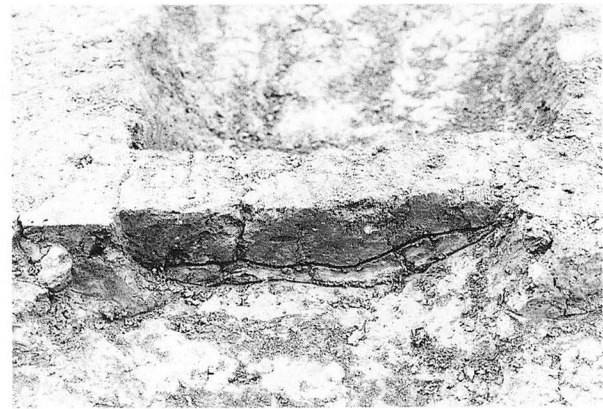
SD013完掘（東から）



SD014完掘（東から）



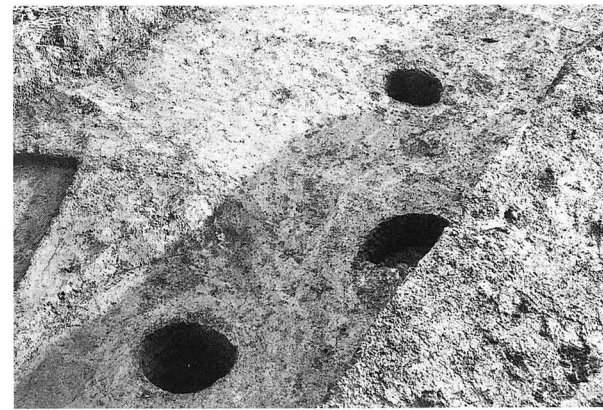
SD013断面（西から）



SD014断面（西から）



SD014断面（西から）



P001・P002完掘（北から）

写真図版 27 SD013・SD014・柱穴状土坑（1）





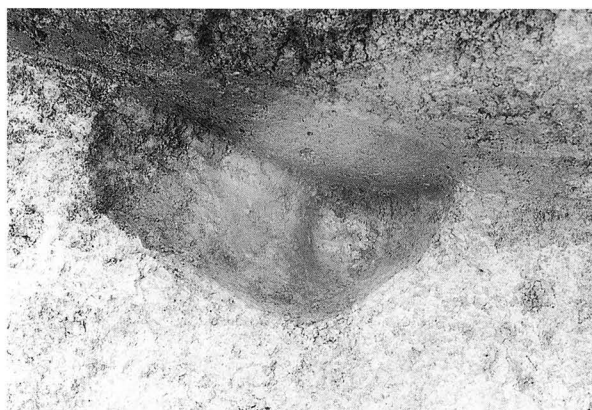
P003 完掘 (北から)



P004 完掘 (北から)



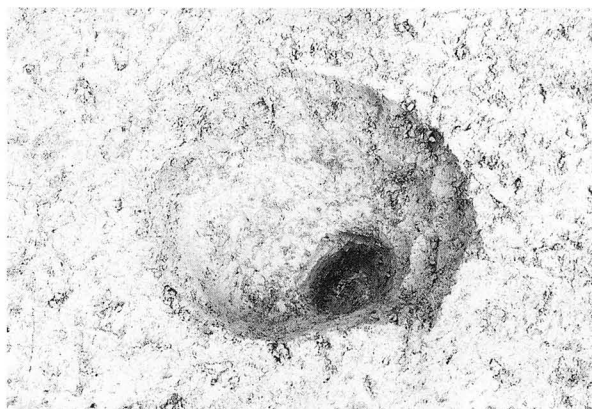
P005 完掘 (北から)



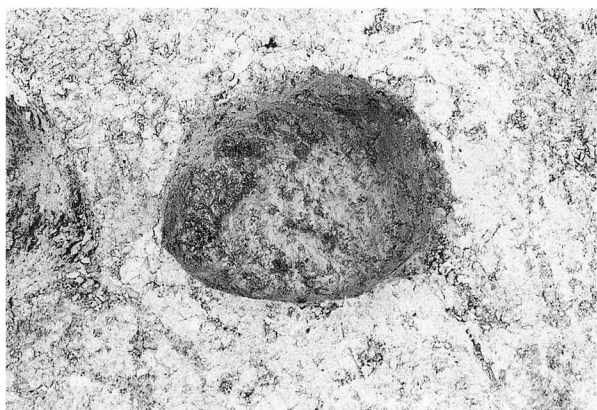
P006 完掘 (北東から)



P007 完掘 (北東から)



P008 完掘 (西から)



P009 完掘 (西から)



P010 完掘 (西から)





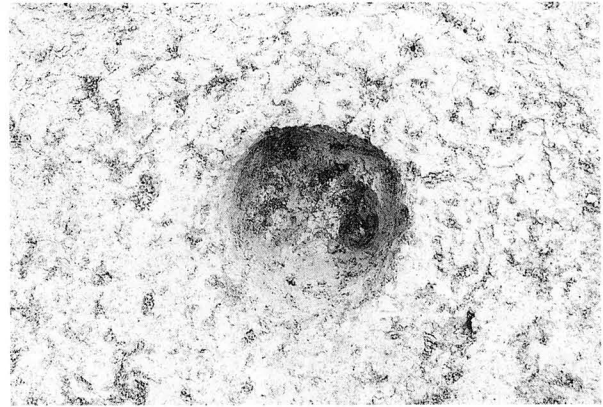
P013完掘（北西から）



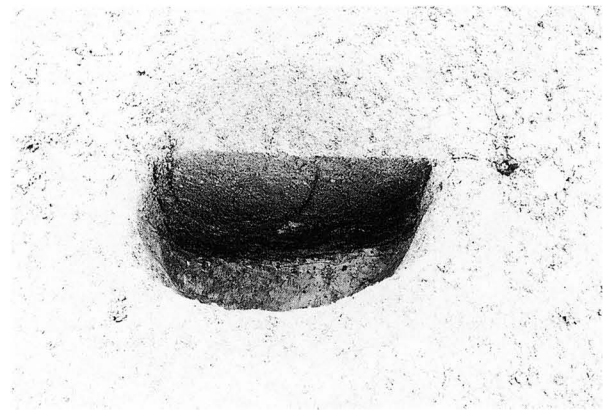
P014完掘（北西から）



P015~P017完掘（東から）



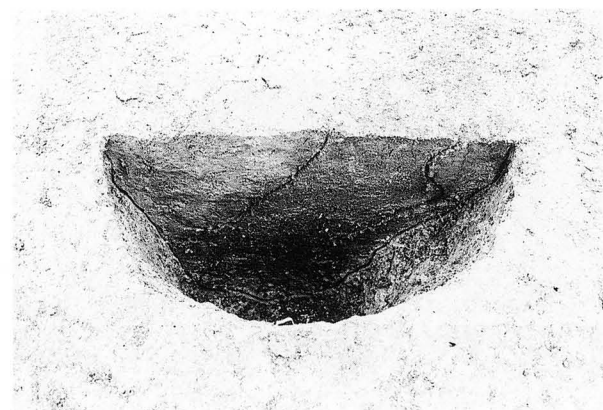
P018完掘（北から）



P020断面（南東から）



P024完掘（南から）

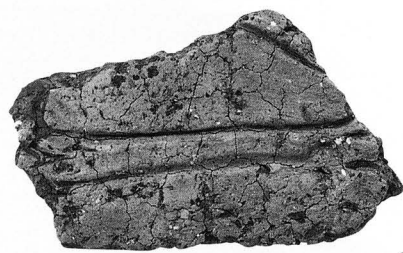


P024断面（南から）

写真図版29 柱穴状土坑（3）



1



2

縄文土器

遺構外



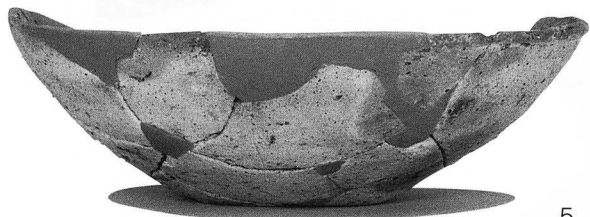
3



4



7



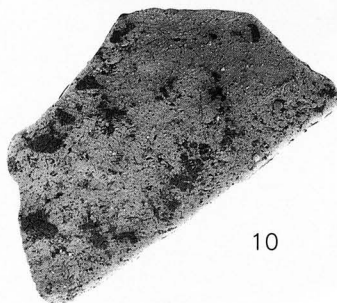
5



9



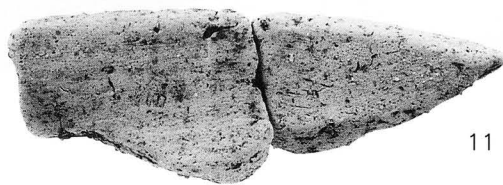
6



10



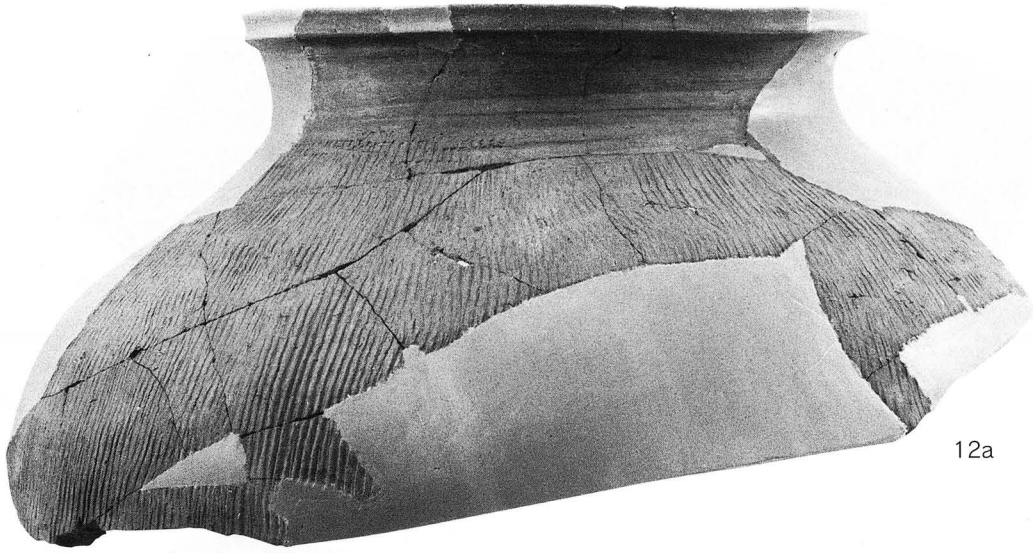
8



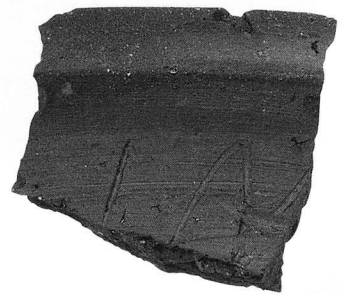
11

SI001

写真図版30 出土土器 (1)



12a



12c



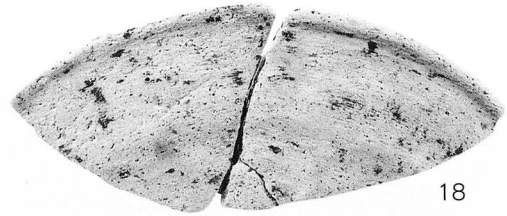
12b

SI001



13

SI001



18



19

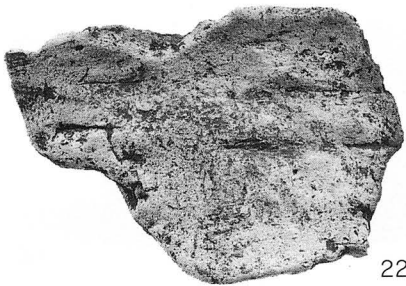
SI002



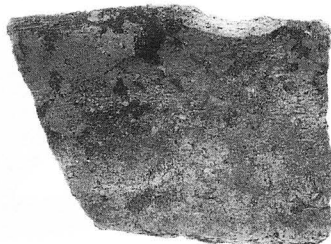
20



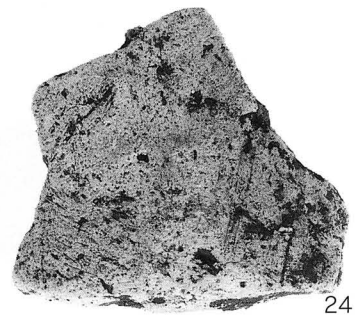
21



22



23



24

SI003



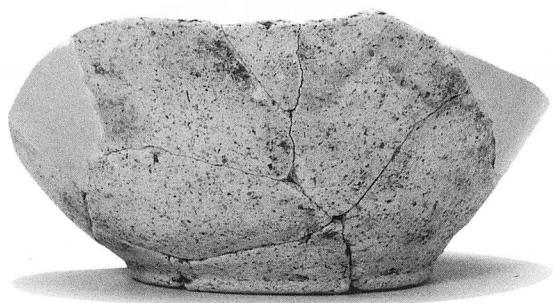
26



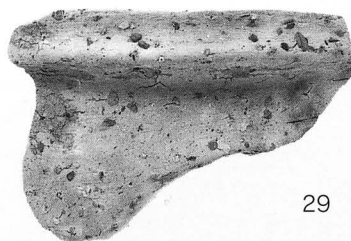
27

SI004





28



29



30



31

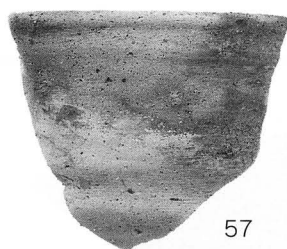
SI004



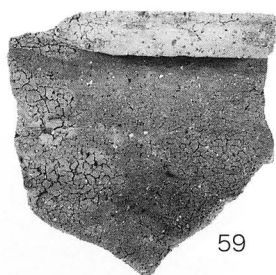
56



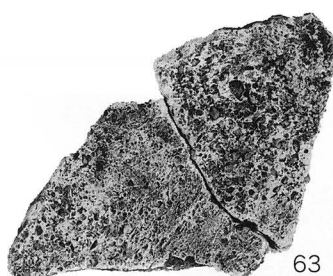
58



57



59



63



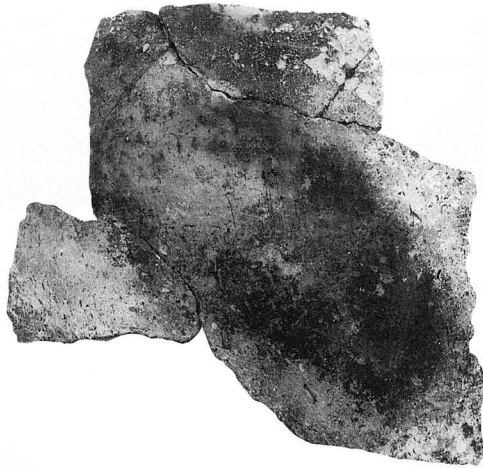
64

SI005

写真図版33 出土土器(4)



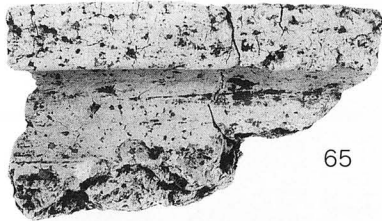
60



62



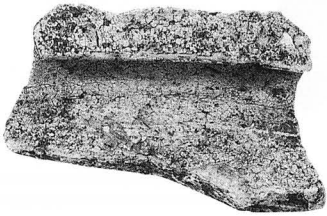
61



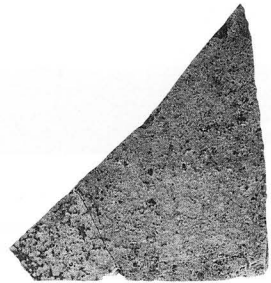
65



67

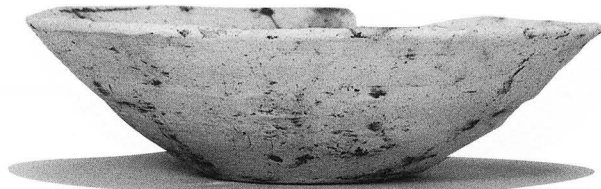


66

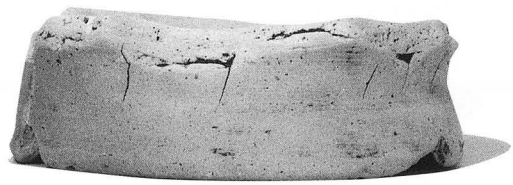


68

SI005



70



72



71

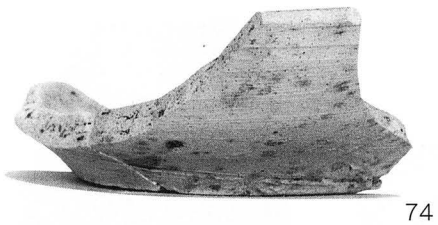


73

SK004

写真図版34 出土土器 (5)



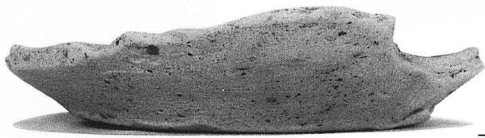


74



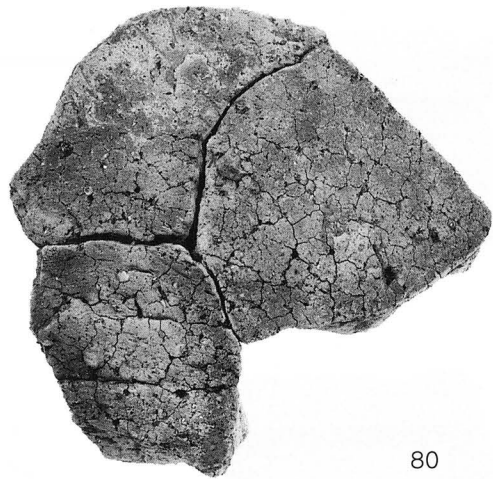
75

SK005



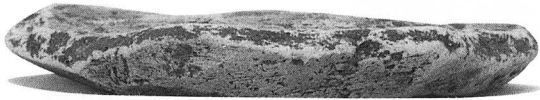
78

SD001



80

SF002



79

SF001



81



82



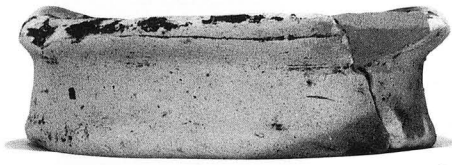
83



84

遺構外(Ⅱ-Ⅲ)

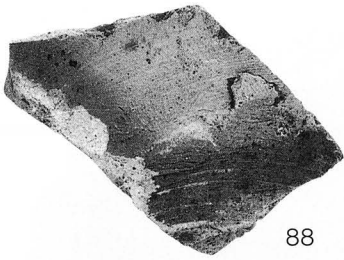
写真図版35 出土土器(6)



85



86



88



89



87a



87b



90



87c

遺構外 (Ⅱ-Ⅲ)



91

(SK008)

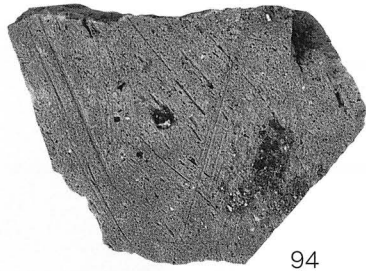


92

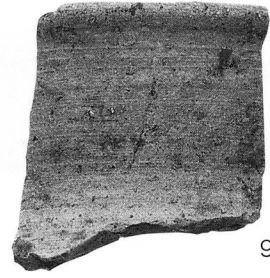
(SD002)



93

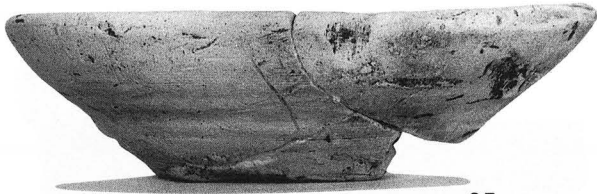


94



98

(SD009)



95



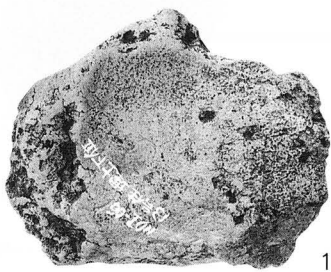
97



96

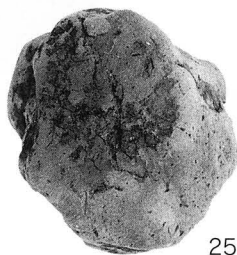
土師器・須恵器

遺構外 (I)



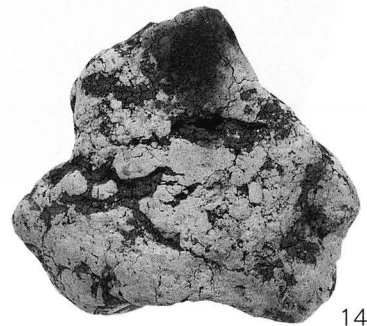
15

SI001



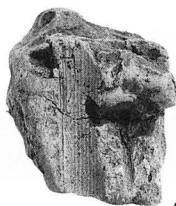
25

SI003



14

SI001  
焼成粘土塊



99

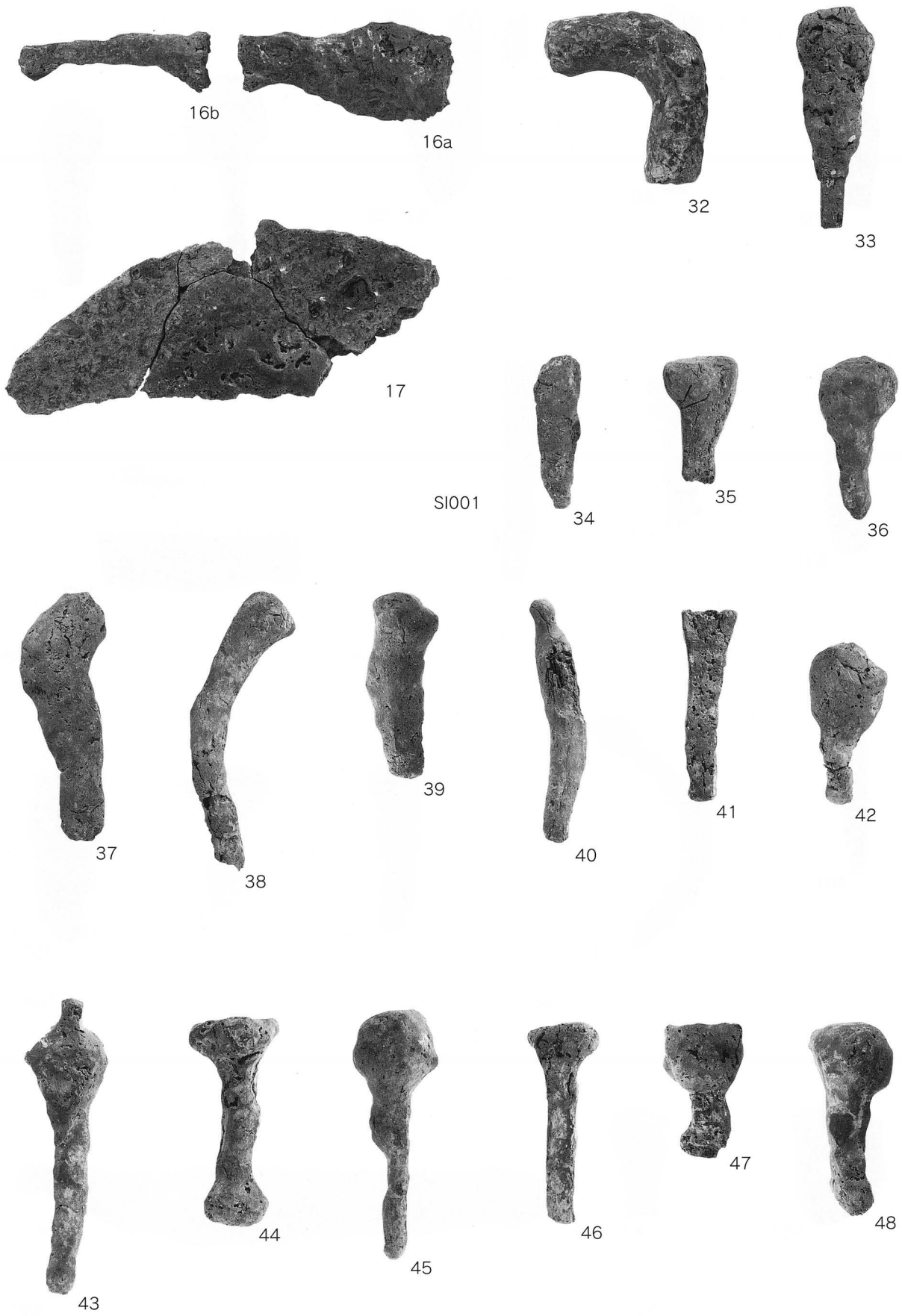


119

遺構外

土製品

写真図版37 出土土器 (8)・土製品・焼成粘土塊



写真図版38 出土鉄製品(1)

SI004



49



50



51・52



76



77

SK007



53



54



55



100

SI004

遺構外



101



102

SK008



105



106



107

SD012



103



104

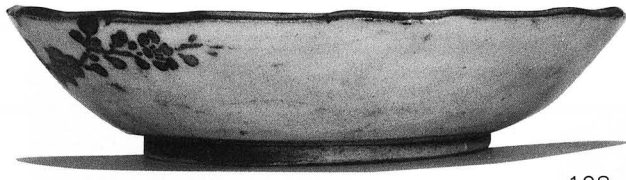
SD011



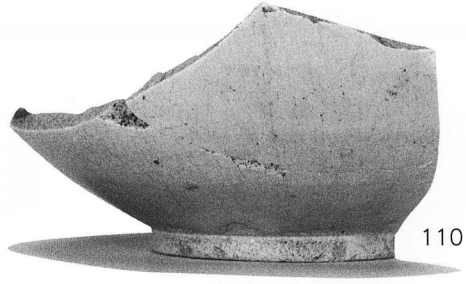
123

遺構外

写真図版39 出土鉄製品(2)



108



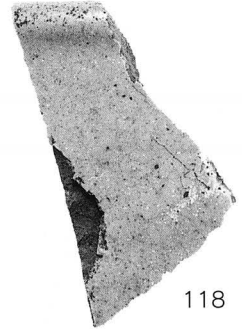
110



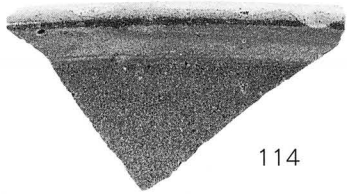
111



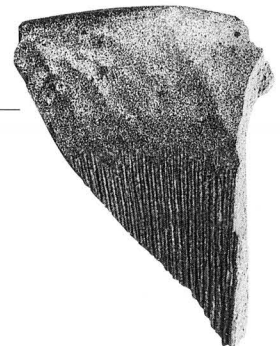
109



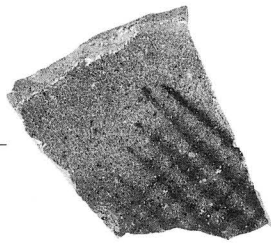
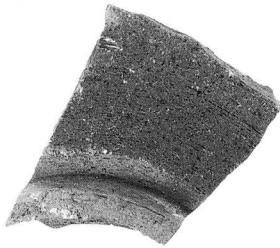
118



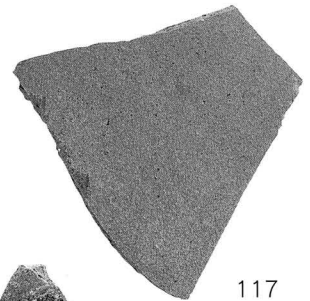
114



115



113



117

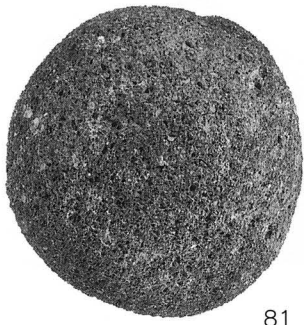


112



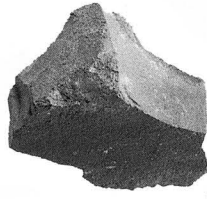
116



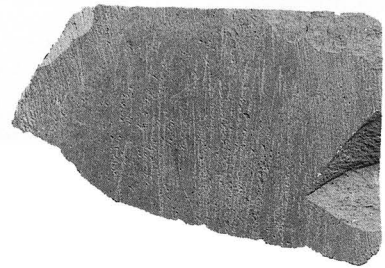


81

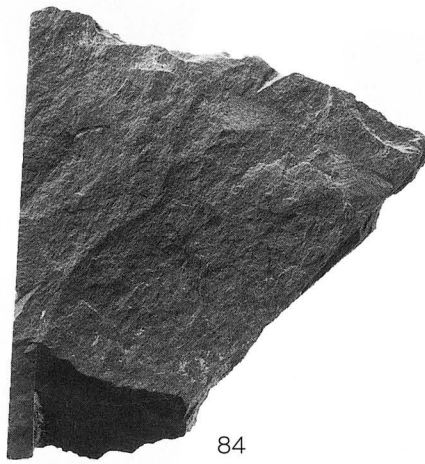
SI005



82



83



84

遺構外

# 報告書抄録

ふりがな	のだいちいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	野田 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名	地域道路整備事業才の羽々地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第506集							
編著者名	北村忠昭							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 Tel (019) 638-9001							
発行年月日	2007年11月2日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
の 野 田 I 遺 跡	いわてけんきたかみし 岩手県北上市 ふたごちようさい ほぼ 二子町才の羽々 61-1 ほか	03206	ME56- 2213	39度 18分 20秒	141度 08分 20秒	2006.10.16 ~ 2006.12.12	955㎡	地域道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野田 I 遺跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構 1 基	縄文土器 2 片、剥片 1 点				
	集落跡	平安時代以前	土坑 2 基					
		平安時代	竪穴住居跡 5 棟 土坑 4 基 溝跡 1 条 焼土遺構 2 基 不明遺構 1 基	土師器・須恵器中コンテナ (30×40×20cm) 3.5箱 土製品、焼成粘土塊 石器 刀子 1・鎌 1 点・釘 25 点・不明 鉄製品		10世紀代の集落跡を検出		
		近世	掘立柱建物跡 1 棟 柱穴状土坑 15 個	陶磁器小コンテナ (30×40×10) 1.5箱				
		時期不明	土坑 2 基 溝跡 13 条 柱穴状土坑 9 個	刀子、釘、土製品、硯、砥石				
要約	<p>北上川支流の大堰川右岸に形成された自然堤防上に立地する。昭和51年に発掘調査が行われた地点の南西約200~300mに位置し、縄文時代に属すると考えられる陥し穴状遺構から近世の掘立柱建物までの遺構や縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器などが出土した。主要地方道北上東和線才の羽々地区の道路改良工事に伴うもので、道路に沿った細長い調査区となっている。調査区のほぼ中央に低地が確認でき、その北側と南側に微高地が広がっている。</p> <p>縄文時代・平安時代以前の遺構は低地の南側から南側の微高地上に構築され、主に、狩猟の場として利用されていたことが判明した。</p> <p>平安時代には集落が形成されており、出土した土師器により大きく3時期に分かれることが判明した。9世紀後半から10世紀初頭は南側の微高地上に、10世紀代には北側の微高地上にひろがり、時期が新しくなるにつれ、北側に移っていく傾向が見られた。</p> <p>近世の掘立柱建物跡も検出され、近世まで断続的に利用されていたことが判明した。</p>							

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第506集

**野田 I 遺跡発掘調査報告書**

地域道路整備事業才の羽々地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成19年10月29日

発 行 平成19年11月 2日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019) 638-9001  
FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 内 海 印 刷  
〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4  
電話 (0193) 23-5511



